

# 亀ヶ岡文化遺物実測図集(2)



弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告 4)

# 亀ヶ岡文化遺物実測図集(2)

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告 4)



## 序 文

昨秋は、人文学部附属の亀ヶ岡文化研究センターを設立し、研究センター設立記念のミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」を開催した。おかげで教員も学生も目茶苦茶忙しい目にあったが、過ぎ去れば、楽しい思い出ばかりである。

ミニ特別展は優秀な資料が集まり、展示できたので、一カ月弱の会期に1600人の入場者があった。日本考古学ゼミの学部学生・大学院生は、展示資料の借用・展示作業・パネル製作などの準備を行い、会期中は受付・入場者への解説、展示ケースの掃除などを積極的に行ってくれた。卒業生も駆けつけ、なかには休日を利用して、入場者に展示品の解説をしてくれた者もいた。みんなの協力ありがとう。

学部4年生は8人。就職活動が忙しく、卒論の取り組みに遅れたものもいたが、ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」に集まった優秀な遺物や大勢の見学者に刺激を受けたためか、全員が卒論に真っ正面から取り組み、だいたい悩んだり、苦労したりしたようであるが、全員が無事卒論を提出した。あんなに悩み・苦労したのに「卒論をやってよかった、面白かった」と全員が口を揃えて云ってくれた時は、嬉しかった。

この『亀ヶ岡文化遺物実測集(2)』（弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4）は、8人の卒論の成果の一部に手を加えて刊行したもので、すべて亀ヶ岡式土器に関するものである。これは、単なる卒業記念品ではない。亀ヶ岡文化研究を志す多くの研究者の基礎資料として役立つことを願って製作したものである。勿論、卒業生も在校生もこれら研究報告を利用して、亀ヶ岡文化に関するたくさんの論文を書いてほしい。これは、私の切なる願いである。

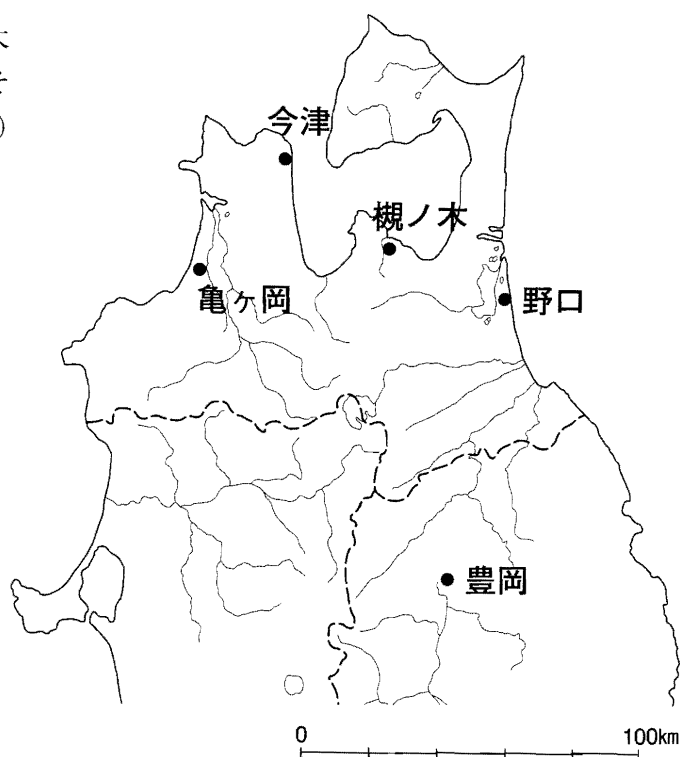
なお、今回の資料集に収録した縄文晩期の土器は、三沢市歴史民俗資料館所有の野口貝塚出土品、青森県埋蔵文化財調査センター所有の今津遺跡出土品、岩手県立博物館所有の豊岡遺跡出土品、田中忠三郎氏所有の槻ノ木遺跡出土品、弘前大学人文学部日本考古学研究室所蔵の亀ヶ岡遺跡出土品が中心である。いつもご指導いただいている先生方やお世話になった関係機関・個人のお名前を以下に記して（敬称省略）、感謝の意を表したいと思う。なお芹沢長介先生は今年の3月16日に急逝された、ここにご冥福をお祈りする。

芹沢長介・村越 潔・小林達雄・渡辺 誠・須藤 隆・三沢市教育委員会・三沢市歴史民俗資料館・長尾正義・青森県立郷土館・福田友之・木村 高・青森県埋蔵文化財調査センター・三浦圭介・白鳥文雄・工藤 大・永島 豊・岩手県立博物館・高木 晃・田中忠三郎・つがる市縄文住居展示資料館・鳴海則明。

平成18年3月  
藤沼 邦彦

## 凡 例

1. 弘前大学人文学部日本考古学ゼミナールでは、弘前大学が亀ヶ岡文化の遺跡や遺物に恵まれている地域に立地するという立場を利用して、亀ヶ岡文化の研究を大きな課題として取り上げている。したがって、昨春秋に設立した人文学部附属亀ヶ岡文化研究センターとも連携しながら活動をしている。本書は、日本考古学ゼミナールで作成した実測図・拓本・文様展開模式図の集成であるが、亀ヶ岡文化研究センターの活動の成果でもある。
2. 本書の実測図の作成には、日本考古学ゼミナールの4年生8名（秋山真吾・澤田恭平・安保里美・鈴木春菜・板橋秋穂・松田元生・境沢宏美・山口朋美）が中心になり、藤沼邦彦も拓本と文様展開図の作成にかかわった。このほかに、日本考古学ゼミナールの3年生の磯前和己・山田敏子、2年生の赤坂朋美、弘前大学人文社会科学部研究科学生の小向 良・深見 嶺・横山寛剛、修了生の葛川貴祥、卒業生の木下梨恵が深くかかわった。また日本考古学実習に参加した石崎かおり・佐々木恵美・佐藤信人・田高味香・千葉 光・槻木孝則・松田佳奈子・宮本明日香・佐藤雄生・伊藤幸司・丸川優多・長谷川瞳・須藤真由美・金 慈暎などの実測図・拓本などの成果も一部に含めた。編集は藤沼邦彦・横山寛剛・秋山真吾で行い、関根達人先生の指導を得た。
3. 遺物の実測図と破片の拓本図の縮尺は3分の1に統一したが、一部に2分の1のものがある。
4. 土器の文様について、その構成・単位・描く手順などを考えるために、文様の展開図をできるだけ作成した。展開図の一部は、小川忠博氏の展開写真を利用したが、大部分は展開拓本図を利用して作成した模式図である。文様の展開拓本図や展開模式図の縮尺は不同である。
5. 土器の実測図を作成するときは、(株)スカイサーベイのマイブンスコープのⅠ型とⅡ型を活用した。
6. 本書の刊行に際し、平成17年度弘前大学学長重点研究「亀ヶ岡文化の研究とそれに基づく展示活動（ミニ博物館活動）の運営・研究」費の一部をあてた。



実測図でとりあげた遺跡の分布図

# 目 次

序文	
I. 三沢市野口貝塚の縄文晩期の土器（野口コレクション）について……………	2 頁
本文	
土器の実測図・文様模式図など	
土器観察表	
II. 青森県外ヶ浜町今津遺跡の縄文晩期の土器について……………	58 頁
本文	
土器の実測図・文様模式図など	
土器観察表	
III. 岩手県岩手町豊岡遺跡の縄文晩期の土器（高橋昭治コレクション）について……………	70 頁
本文	
土器の実測図・文様模式図など	
土器観察表	
IV. 青森県平内町槻ノ木遺跡の縄文晩期の土器について……………	96 頁
本文	
土器の実測図・文様模式図など	
土器観察表	
V. つがる市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の土器について……………	112 頁
本文	
土器の実測図・文様模式図など	
土器観察表	
VI. 主な参考文献……………	131 頁

# I．三沢市野口貝塚の縄文晩期の土器 (野口コレクション) について

藤沼邦彦・長尾正義・秋山真吾・澤田恭平

# I. 三沢市野口貝塚の縄文晩期の土器(野口コレクション)について

藤沼邦彦・長尾正義・秋山真吾・澤田恭平

## 1. 三沢市野口貝塚

### (1) 立地・周辺の環境(8頁を参照)

野口貝塚は青森県三沢市大字三沢字早稲田298番地に所在し、小川原湖から約100m離れた東岸の標高12~20mの丘陵斜面に立地している。貝層が形成されているのは縄文早期後半~前期初頭であり、縄文晩期には貝層を伴っていない。

三沢市は青森県の東南部に位置し、東は太平洋を臨み、西は小川原湖を隔てて東北町、北は高瀬川を境として六ヶ所村、南はおいらせ町に隣接しており、太平洋沿岸と小川原湖の間に挟まれた縦長の平坦地となっている。

小川原湖は南北に長く、長さ約14km、東西幅は約4kmで、湖南部が西側へ張り出し、長靴のような形をしている。小川原湖はその北西部には内沼、東南部には姉沼を連ねており、六ヶ所村の鷹架沼、尾駮沼などを合わせて周辺一帯を湖沼群としている(青森県史編さん自然部会2003)。

### (2) 野口貝塚の発掘

#### ①野口和三郎氏の発掘

1961(昭和36)年、三沢市在住の野口和三郎氏が自宅の畑を発掘した。発掘した経緯・状況などは不明であるが、この際に採集した資料が野口コレクションと呼ばれるものである。現在、野口コレクションは三沢市指定文化財として三沢市歴史民俗資料館に保存・管理され、常設展示として公開されている。

#### ②立教大学の発掘調査

1962(昭和37)年、立教大学博物館学講座(担当者、中川成夫)が発掘調査を行った。純貝層・混土貝層から縄文早期末~前期初頭の遺物が、その上の黒褐色砂層から縄文後・晩期の遺物が出土した。晩期の遺物については公表されていないが、大洞C1式を中心としている(岡本1963)。

## 2. 野口コレクションの晩期の土器

### (1) 野口コレクションを資料化するきっかけ

三沢市教育委員会から出されている『野口貝塚出土品図録』を見たところ、良好な大洞C1式の土器が多数掲載されていた。そこで三沢市教育委員会の長尾正義氏に依頼・相談し、三沢市歴史民俗資料館で野口コレクションを見せていただくと同時に、説明をして頂いた。概観するとやはり大洞C1式を中心とする一括遺物である可能性が高いと思われ、日本考古学ゼミナールで資料化を進めている十和田市明戸遺跡の土器の比較資料になると考えた。野口コレクションは写真図録として公表されているが、実測図・拓本などがなかったため、土器の形態や文様を詳しく分析する上で不便であった。そのため三沢市教育委員会の長尾正義氏の指導と協力のもとに、亀ヶ岡文化研究の一環として、晩期の土器の資料化を行った。

### (2) 器種・器形分類と各器種の特徴

器種分類には、長谷部言人の「正方形九等分法」を大まかな基準として用いた。その後、頸部のすばまり(頸部の細くなる度合い)や、器高/口径の値などから器種を分類した。その結果、野口コレクションの晩期の土器は深鉢・鉢(台付を含む)・皿(台付を含む)・壺・注口土器・ミニチュア土器

に分類された。注口土器は注口部をもつもの、ミニチュア土器は法量が他の土器に比べて著しく小さいものである。香炉形土器はない。なお器種分類には、完形土器、口縁部破片、文様付体部破片を用いた。器形分類には、完形土器と口縁部破片を用いたが、壺ではそれに加えて文様付体部破片も利用した。

また、器種組成を出すために個体数を出した。その基準は、個体識別が可能である完形土器や口縁部破片を中心にしたが、文様付体部破片も用いた。

#### ①深鉢（9頁を参照）

器高／口径の値が1.0より上のものを深鉢とした。全体形を確認できるものが少ないので、口縁部の傾きや肥厚の度合いから5つに大分類（Ⅰ～Ⅴ類）し、それらを口縁形態でさらに2つに小分類（A・B類）した。

##### ・大分類（器形）

Ⅰ類：口縁部がやや内湾し、口縁部内面が肥厚しないもの（図1～6）。

Ⅱ類：口縁部がやや内湾し、口縁部内面が肥厚するもの（図7）。

Ⅲ類：口縁部が直立ぎみに立ち上がり、頸部に沈線がめぐるもの（図8）。

Ⅳ類：口縁部が外反するもの（図9～13）。

Ⅴ類：口縁部がくの字形に外反し、頸部に沈線がめぐるもの（図14・15）。

##### ・小分類（口縁形態）

A類：平縁のもの。なかには突起をもつものもある。

B類：小波状を呈するもの。なかには突起をもつものもある。

#### 深鉢の特徴

深鉢は、口縁部に平行沈線が巡るものもあるが、縄文のみのものが圧倒的に多い。また、縄文のみの深鉢は、後期のものとの区別が困難であるため、後期のものが若干含まれている可能性がある。なお深鉢は炭化物が内・外面に付着しているものが多い。

#### ②鉢（9頁を参照）

器高／口径の値が0.4～1.0のものを鉢とした。鉢は、台部の有無と、口縁部の傾きから10に大分類（Ⅰ～Ⅹ類）し、それらを口縁形態でさらに3つに小分類（A～C類）した。口縁部破片で台部を欠くものでも、台部を伴う可能性があるものは台付に、そうでないものと不明のものは台部のないものに分類した。文様付体部破片は器形分類から除外した。

##### ・大分類（器形）

##### 台部を伴わないもの

Ⅰ類：口縁部がやや内湾するもの（図16・17・112～116・118～122・124・125・127・129）。

Ⅱ類：口縁部が内湾するもの（図18）。

Ⅲ類：口縁部が外反するもの（図19～31・91～93・95・132）。

Ⅳ類：Ⅰ～Ⅲ類に当てはまらないもの（図32～35・117・126・128・131・133～139）。

##### 台部を伴うもの

Ⅴ類：幅の広い頸部を持ち、口縁部が外反するもの。2つに細分する。

Ⅴ1類：頸部に文様が施されるもの（図36～39）。

Ⅴ2類：頸部に文様が施されないもの（図40～65・81・86・88・89）。

Ⅵ類：口縁部がくの字形に外反するもの（図66～68・97・101・103）。

Ⅶ類：口縁部が外反するもの（図69・70・82～85・96・104・105）。

Ⅷ類：肩部がやや張り出して、口縁部がくの字形に外反するもの（図71～74・87・94・98・99・106・107・109・110・111）。

Ⅸ類：口縁部がやや内湾するもの（図75～78・100・102・108・123・130）。

X類：口縁部が直立ぎみのもの（図79・80）。

#### ・小分類（口縁形態）

A類：平縁のもの。なかには突起をもつものもある。

B類：小波状を呈するもの。なかには突起をもつものもある。

C類：彫り込みによって連続した突起が施されているもの。

#### 鉢の特徴

鉢は、台付と台部がないものがある。体部に文様が施されるものは、台部を伴うものに多いが、中でも幅の広い頸部を持ち口縁部が外反するもの（Ⅴ類）、口縁部がくの字形に外反するもの（Ⅵ類）などにみられる。台部がないものでも体部に文様が施されるものもあるが、数は少ない（Ⅱ類など）。なお鉢は、台部の有無、文様の有無にかかわらず炭化物が付着しているものが多い。また、小型のものにも炭化物が付着しているものが多いことが注目される。

#### ③皿（10頁を参照）

器高／口径の値が0.4未満のものを皿とした（通常は0.3以下のものを皿、0.3～0.5のものを浅鉢とするが、浅鉢の個体数が少なかったため合せて皿とした）。皿は、台部の有無と、体部から口縁部にかけたの傾きで5つに大分類（Ⅰ～Ⅴ類）し、それらを口縁形態でさらに2つに小分類（A・B類）した。口縁部破片で台部を欠くものでも、台部を伴う可能性があるものは台付に、そうでないものと不明のものは台部のないものに分類した。文様付体部破片は器形分類から除外した。

#### ・大分類（器形）

##### 台部を伴わないもの

Ⅰ類：体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外に開くもの（図141～153）。

Ⅱ類：体部から口縁部にかけて、緩やかに内湾しながら外に開くもの（図154・165～173）。

Ⅲ類：体部から口縁部にかけて、内湾しているもの（図155～162）。

##### 台部を伴うもの

Ⅳ類：体部から口縁部にかけて、緩やかに内湾しながら外に開くもの（図163・164・174）。

Ⅴ類：体部が緩やかに内湾しながら外に開き、頸部から口縁部にかけて外反するもの（図175・176）。

#### ・小分類（口縁形態）

A類：平縁のもの。なかには突起をもつものもある。

B類：彫り込みによって連続した突起が施されているもの。

#### 皿の特徴

皿は台部の有無に関わらず、ほとんどのものに文様が施されている。また台付には赤彩されているものが多い。皿には炭化物が付着しているものがない。

#### ④壺（10頁を参照）

頸部最小径（あるいは口径）／体部最大径の値（頸部の細くなる度合い）が0.75未満のものを壺とした。図189・190は0.75をわずかに上回るが、赤彩されていること、器面がよく磨かれていることなどの特徴が、精製土器の壺と共通するため、あえて広口の壺とした。

壺は、体部の扁平度で大分類（Ⅰ～Ⅲ類）し、それらを頸部の長さ・傾き、体部最大径の位置でさらに小分類（A～E類）した。壺は、他の器種と分類の仕方が異なり、大分類と小分類の組み合わせを

考慮して器形の分類を行った。破片のため体部の扁平度を推定できないものは器形分類から除外した。

・大分類（体部の扁平度）

I 類：体部が横長になるもの。

II 類：体部が縦長と横長の間間的になるもの。

III 類：体部が縦長になるもの。

・小分類（頸部の長さ・傾き、体部最大径の位置）

A 類：頸部が短く、内傾するもの。体部最大径が体部の中央付近にあるもの。

B 類：頸部が短く、内傾するもの。体部最大径が底部付近にあるもの。

C 類：頸部が短く、外傾するもの。体部最大径が体部の中央付近にあるもの。

D 類：頸部が長く、内傾するもの。体部最大径が体部の中央付近にあるもの。

E 類：頸部が長く、直線的に立ち上がるもの。体部最大径が体部の中央付近にあるもの。

大分類と小分類を組み合わせた結果、壺は I 類が I A 類（図180～187）・I C 類（図188～191）・I D 類（図192・193）の 3 つ、II 類が II A 類（図195～197）・II C 類（図198・199）・II D 類（図194）・II E 類（図200）の 4 つ、III 類が III B 類（図205～207）・III C 類（図201～204）の 2 つ、合計 9 つに分類された。

壺の特徴

壺は、深鉢・鉢と比べると装飾されたものが多数である。赤彩されているもの、器面がよく磨かれた無文のものが目立つ。なお壺には炭化物が付着しているものがない。

⑤注口土器

注口土器はわずかに10個体である。全てに文様が施されており、他の器種に比べて装飾的である（図217～226）。

⑥ミニチュア土器

法量が他の土器に比べて著しく小さく、器高と器幅が7 cm以下のものをミニチュア土器とした。4個体である（図227～230）。

（3）器種組成について（8頁を参照）

今回取り扱った野口コレクションの晩期の土器の個体数は、937点であった。器種ごとに割合の多い順にみると、鉢440点、深鉢284点、皿128点、壺71点、注口土器10点、ミニチュア土器4点であった。深鉢と鉢を合せると約80%を占めるのは、この2つの器種は煮沸に使用することが多く、消耗が激しかったためであろう。

（4）地文について（8頁を参照）

個体識別に用いた土器937点のうち、地文が観察できたものは819点である。地文は、いわゆる文様（例えば雲形文など）を除いたもので、その種類は縄文・条痕・無文が見られた。縄文は単節 LR が660点、単節 RL が101点、無節 L が2点、単節 RL と無節 L が混在したものが1点ある。条痕は5点、単節 RL と条痕が混在したものが1点ある。無文は49点ある。縄文単節 LR は深鉢・鉢・皿に多い。無文は他の器種と比べて壺に多い。条痕を持つ土器は個体数が少なく、鉢にのみ確認できた。



## 器種ごとの地文組成

	縄文 LR	縄文 RL	縄文 L	条痕	縄文 RL と L	縄文 RL と条痕	無文	不明	合計
深鉢	241	25	1	0	1	0	0	16	284
鉢	283	69	1	5	0	1	5	76	440
皿	104	2	0	0	0	0	12	10	128
壺	24	4	0	0	0	0	29	14	71
注口	7	1	0	0	0	0	0	2	10
ミニチュア	1	0	0	0	0	0	3	0	4
合計	660(80.6%)	101(12.3%)	2(0.2%)	5(0.6%)	1(0.1%)	1(0.2%)	49(6.0%)	118	937

### (5) 文様について(11頁を参照)

今回扱った土器は雲形文が多く、ほぼ大洞 C 1 式の一括資料とみることができる(山内1930、高橋1981、村越1983)。文様の分類は、雲形文を描く際に文様帯を割り付ける働きをする区画文や配置文を基準に行った。区画文・配置文の定義や、分類基準については「亀ヶ岡式土器の文様の描き方」(藤沼1989)、『亀ヶ岡文化遺物実測図集』(藤沼ほか2004)などに則って行った。区画文・配置文は、基本的に沈線で囲まれた磨消部となるが、沈線あるいは彫り込み部として表現されるものもある。注口土器217・218の体部下半に施される文様や壺192の体部文様については、文様帯の範囲が上下の沈線によって定まっていなかったため、その他として扱った。いわゆる羊歯状文がみられるもの(図18・77・216ほか)もあるが、その多くは大洞 C 1 式に含めてよいと思われる。

その他に大洞 C 2 式のいわゆる渦巻き文(図138)、大洞 A 式の工字文(図139)、大洞 A' 式の変形工字文(図140)が施されるものも若干ある。

### 区画文

区画文は、文様帯を区画して単位文様を生み出すもので、モチーフの違いにより4つに分類した。

区画文Ⅰ：点対称の弧線の組み合わせによって構成されるもの。

区画文Ⅱ：C 字形のモチーフが点対称に組み合い、文様帯の上・下線に接続するもの。

区画文Ⅲ：S 字形の上下に付加的な文様を施し、文様帯の上・下線に接続するもの。

区画文Ⅳ：S 字形の両端が、文様帯の上・下線に接続するもの。

### 配置文

配置文は、文様帯の中に埋め込まれるか、あるいは文様帯の上線・下線のいずれか一方にのみ接続し、連続した文様を構成する。モチーフの違いにより7つに分類した。

配置文Ⅰ：C 字形の一端を、文様帯の上線・下線のいずれか一方にのみ接続させたもの。配置は、点対称に連続して施される。彫り込み部として表現されている。

配置文Ⅱ：C 字形を、文様帯の上線・下線のいずれか一方にのみ接続させたもの。

配置文Ⅲ：C 字形の一端を、文様帯の上線にのみ接続させたもの。

配置文Ⅳ：C 字形に、さらに付加的な文様を施したもの。点対称的に連続して施されている。

配置文Ⅴ：C 字形に、切り込みや付加的な文様を加え、変化に富んだ形状を成すもの。

配置文Ⅵ：C 字形を点対称に配置し、端部を結合させたもの。

配置文Ⅶ：S 字形を基本形にしたもの。

### (6) 炭化物と赤彩されている土器について(46～48頁を参照)

どんな土器が煮炊きに使われ、どんな土器が飾られたのかを視覚的に捉えるために、すでに作成し

た実測図を利用して、炭化物が付着しているもの、赤彩されているものを調べた。図面の青色は炭化物がみられた範囲を、赤色は赤彩がみられた範囲を示している。炭化物と赤彩の有無については、全体形がわかるものを利用し、明らかに付着していると分かるものは破片も利用した。

土器に付着している炭化物は、煮炊きに使用された際に内容物や煮こぼれたものが焦げついたもので、深鉢・鉢に多くみられ、皿・壺・注口土器・ミニチュア土器にはなかった。深鉢・鉢では、小型の土器にも炭化物が付着しているものが多数あったことが注目された。同じことは、外ヶ浜町今津遺跡でも注意された（工藤2002、藤沼ほか2005）。なお底部・台部が加熱によって赤く変色しているものも多い。鉢では文様が施されているものでも炭化物がみられた。煮沸用土器と非煮沸用土器の違いは、装飾の有無ではなく、器種によって決定されているようである。

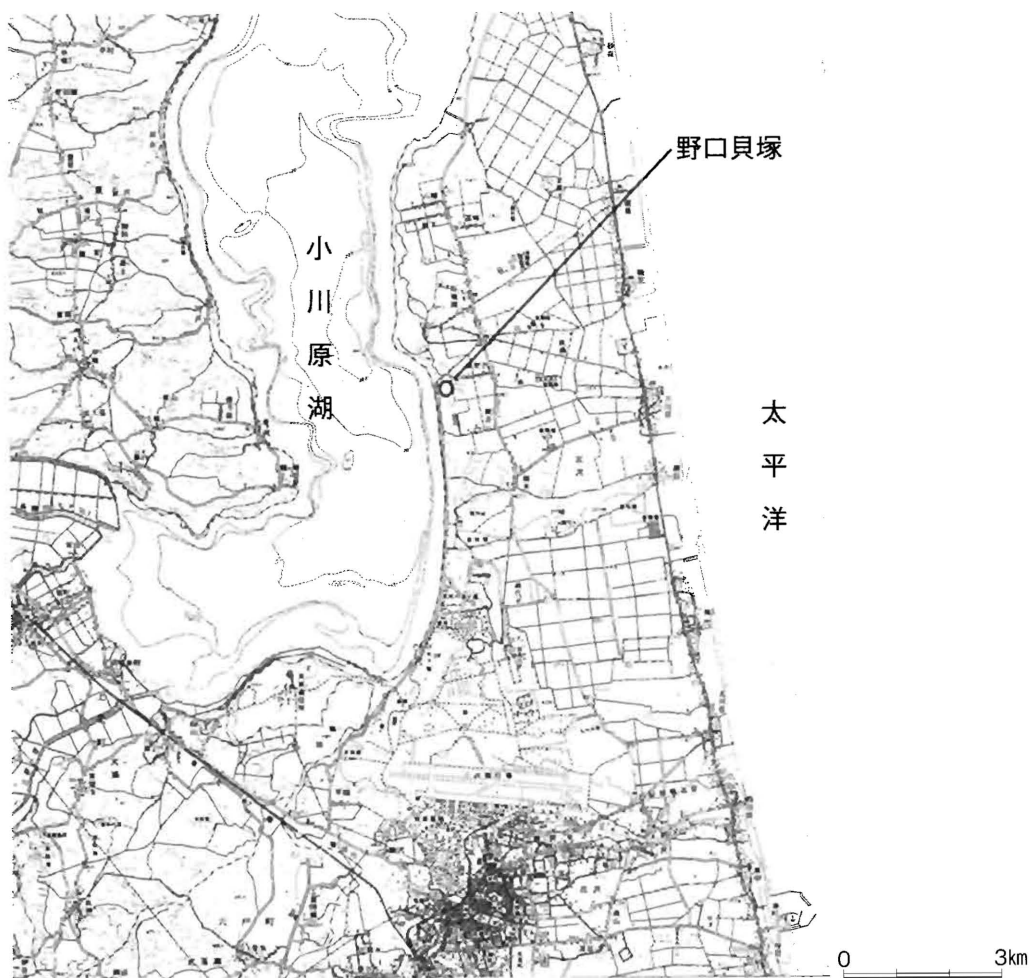
赤彩は、皿・壺・注口土器・ミニチュア土器にみられ、深鉢・鉢にはなかった。赤彩されている土器は、口縁部が装飾的であるもの・文様が施されているもの・器面がよく磨かれているものなどに多い。赤彩されている土器に炭化物が付着しているものはない。

### （7）まとめ

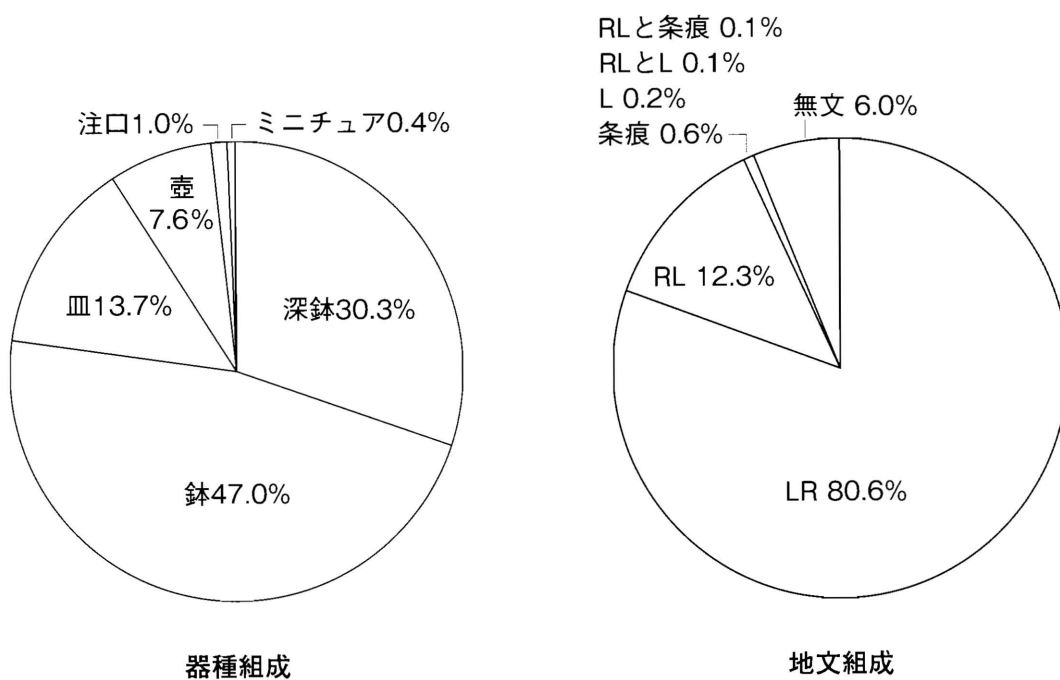
野口コレクションの縄文晩期の土器は、全体的にみると大洞C1式の特徴とほぼ一致しており、大洞C1式の土器を中心とする土器群の形態・文様・施文工程などを具体的に知ることができた。これらを十和田市の明戸遺跡、青森市の細野遺跡、五所川原市の観音林遺跡、北秋田市の向様田A・D遺跡、秋田市の戸平川遺跡などの土器と比較すると、若干の地域差も見られるが、むしろ共通性の方が多いと思われる。今回得た結果をもとに各地の同時期の土器群と比較し、型式の細分や地域差の設定などについて詳細に調べていきたい。

#### 〈野口貝塚に関する基本文献〉

- 1963年 岡本勇・加藤晋平 「青森県野口貝塚の発掘」『MUSEION』9（『野口貝塚出土品図録』に所収）
- 1964年 中道等編 「三沢市の形象」『三沢市史』上巻 三沢市教育委員会
- 1967年 岡本勇 「青森県三沢市野口貝塚」『日本考古学年報』15（『野口貝塚出土品図録』に所収）
- 1982年 鈴木克彦編 『野口貝塚出土品図録』 三沢市教育委員会
- 2003年 青森県史編さん自然部会編 「小川原湖とその周辺の湖沼群」『青森県史 自然編 生物』  
青森県

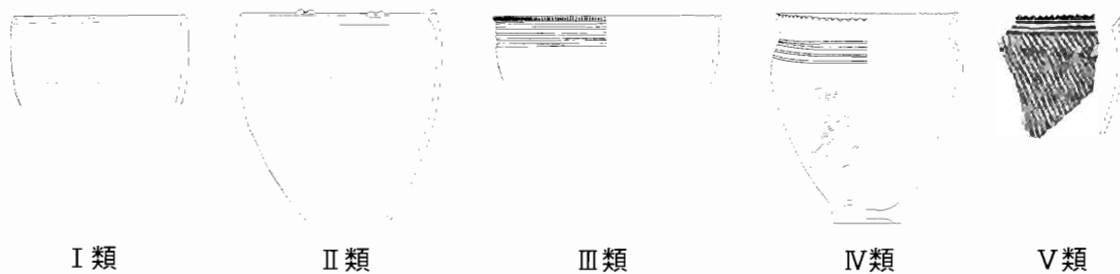


遺跡周辺地図（国土地理院 1：50,000三沢より作成）



## 1. 深鉢分類模式圖

### ・大分類（器形）

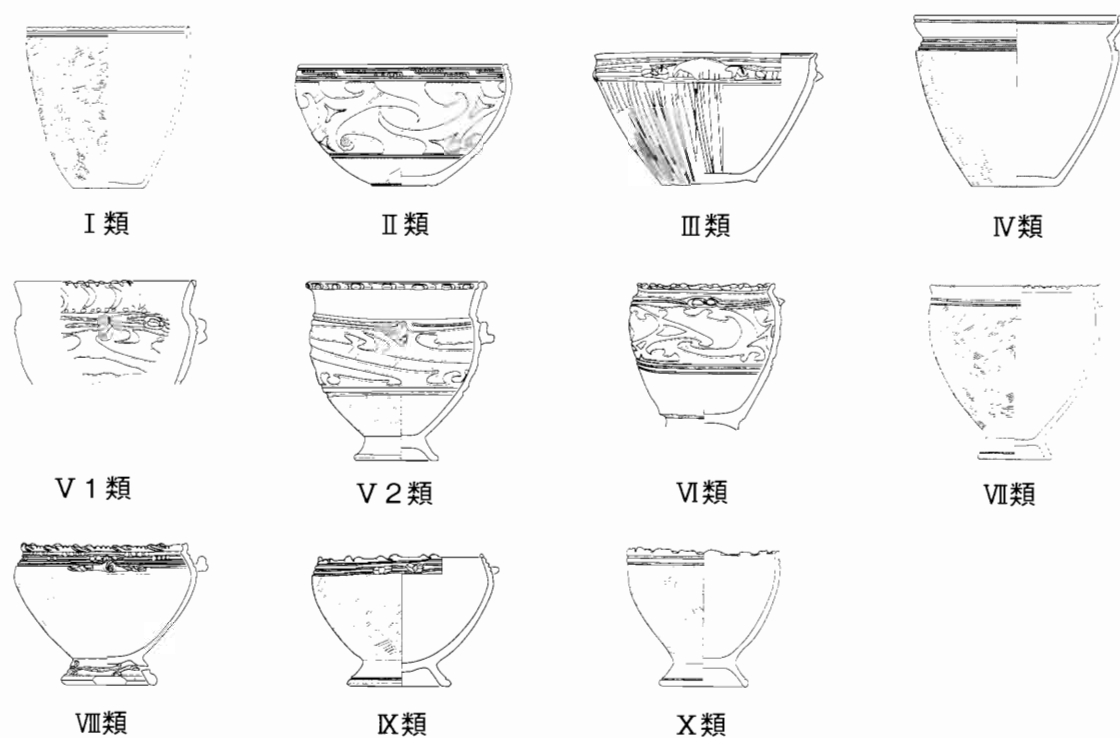


### ・小分類（口緣形態）



## 2. 鉢分類模式圖

### ・大分類（器形）



### ・小分類（口緣形態）



### 3. 皿分類模式図

#### ・大分類（器形）



I類



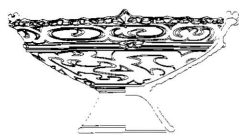
II類



III類



IV類



V類

#### ・小分類（口縁形態）

A類



B類

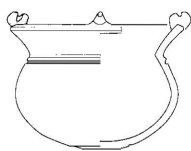


### 4. 壺分類模式図

#### I類



I A類



I C類

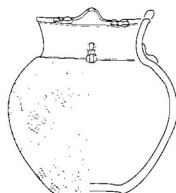


I D類

#### II類



II A類



II C類

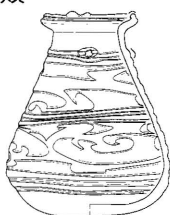


II D類

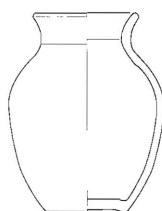


II E類

#### III類

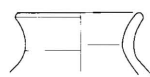


III B類

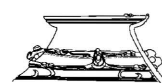


III C類

#### ・頸部の傾きの分類



外傾



内傾

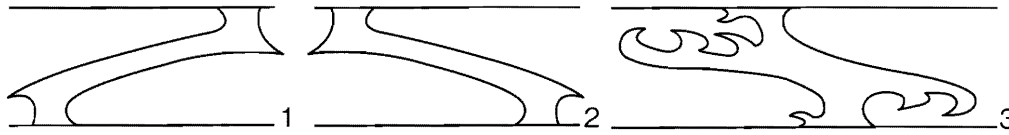









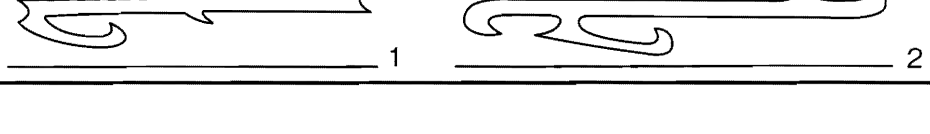


直線的

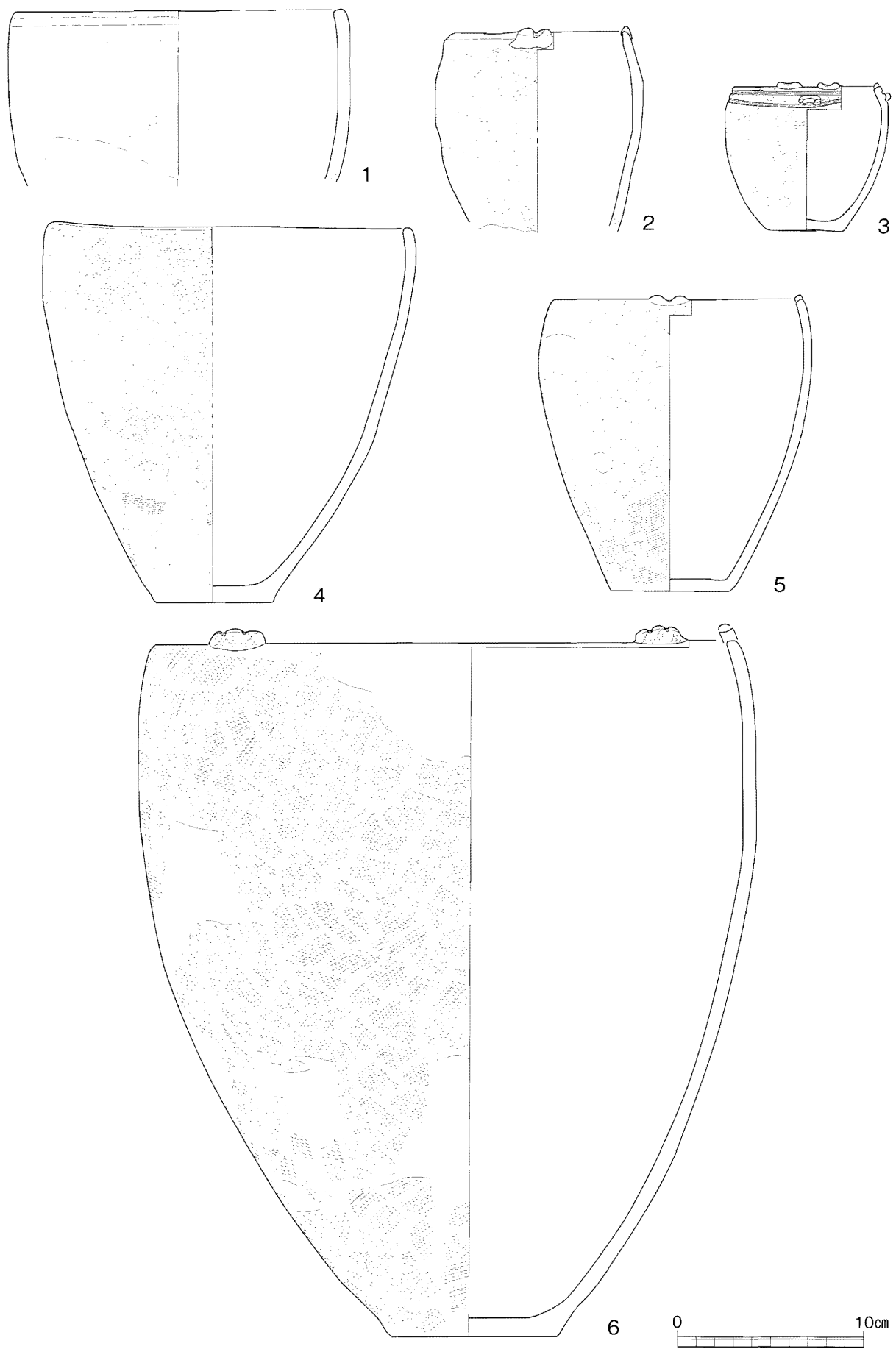
### 5. 器種・器形ごとの個体数

深鉢							鉢																
	I類	II類	III類	IV類	V類	計		I類	II類	III類	IV類	V1類	V2類	VI類	VII類	VIII類	IX類	X類	文様付体部	計			
A類	174	41	1	15	0	231	A類	37	1	31	24	0	2	0	2	1	2	1	0	101			
B類	31	4	0	16	2	53	B類	8	0	34	12	0	0	0	1	15	9	0	0	79			
計	205	45	1	31	2	284	C類	0	0	11	4	5	71	7	22	6	6	1	0	133			
							文様付体部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	127	127			
							計	45	1	76	40	5	73	7	25	22	17	2	127	440			

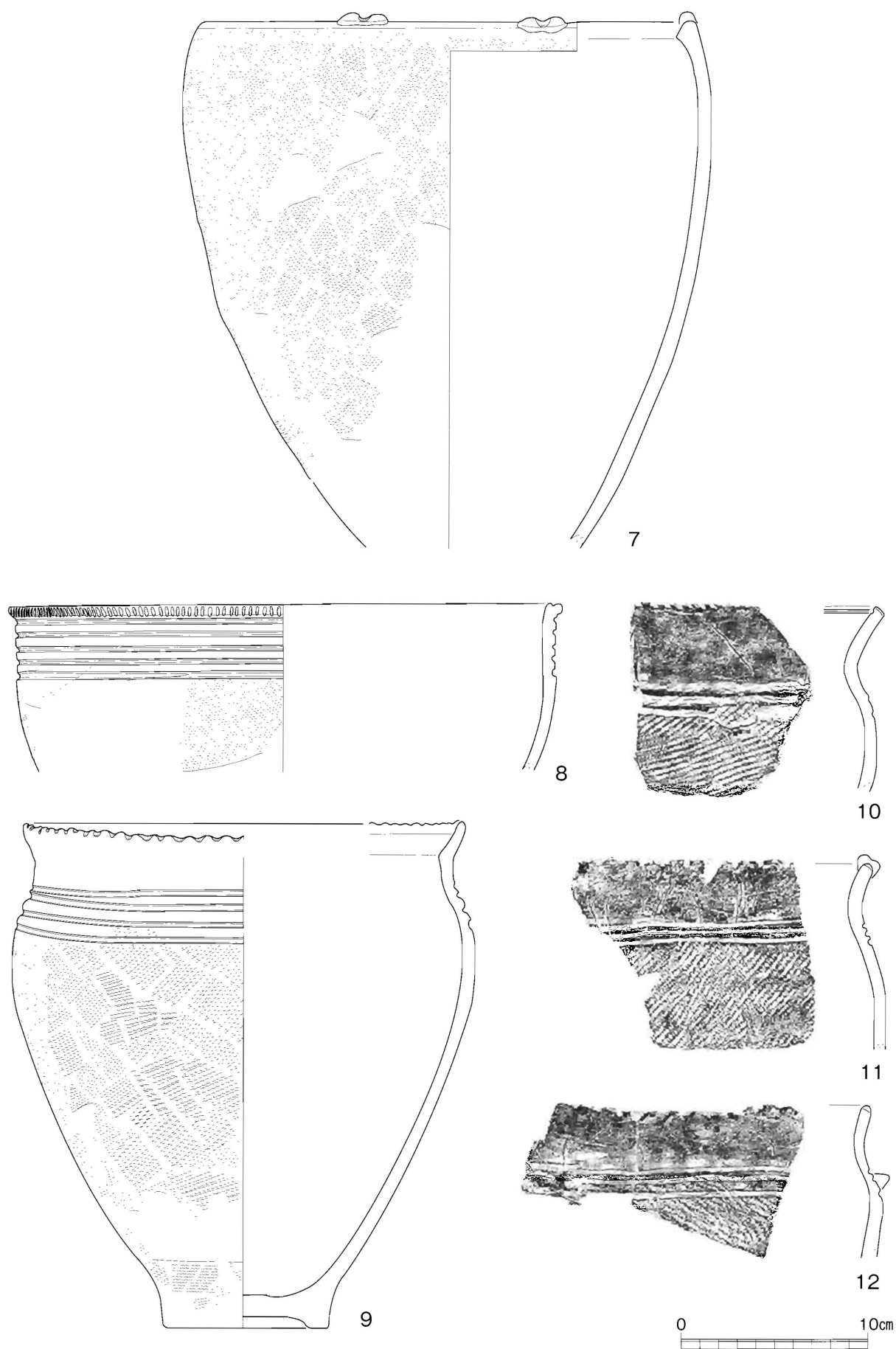
皿								壺					注口		
	I類	II類	III類	IV類	V類	文様付体部	計		I類	II類	III類	破片	計	完形	ミニチュア
A類	7	6	16	0	1	0	30	A類	8	3	0	0	11	4	4
B類	18	5	0	3	1	0	27	B類	0	0	3	0	3	6	0
文様付体部	0	0	0	0	0	71	71	C類	4	2	4	0	10	計	10
計	25	11	16	3	2	71	128	D類	2	1	0	0	3		4
								E類	0	1	0	0	1		
								破片	0	0	0	43	43		
								計	14	7	7	43	71		

区画文Ⅰ	
区画文Ⅱ	
区画文Ⅲ	
区画文Ⅳ	
配置文Ⅰ	
配置文Ⅱ	
配置文Ⅲ	
配置文Ⅳ	
配置文Ⅴ	
配置文Ⅵ	
配置文Ⅶ	

文様模式図

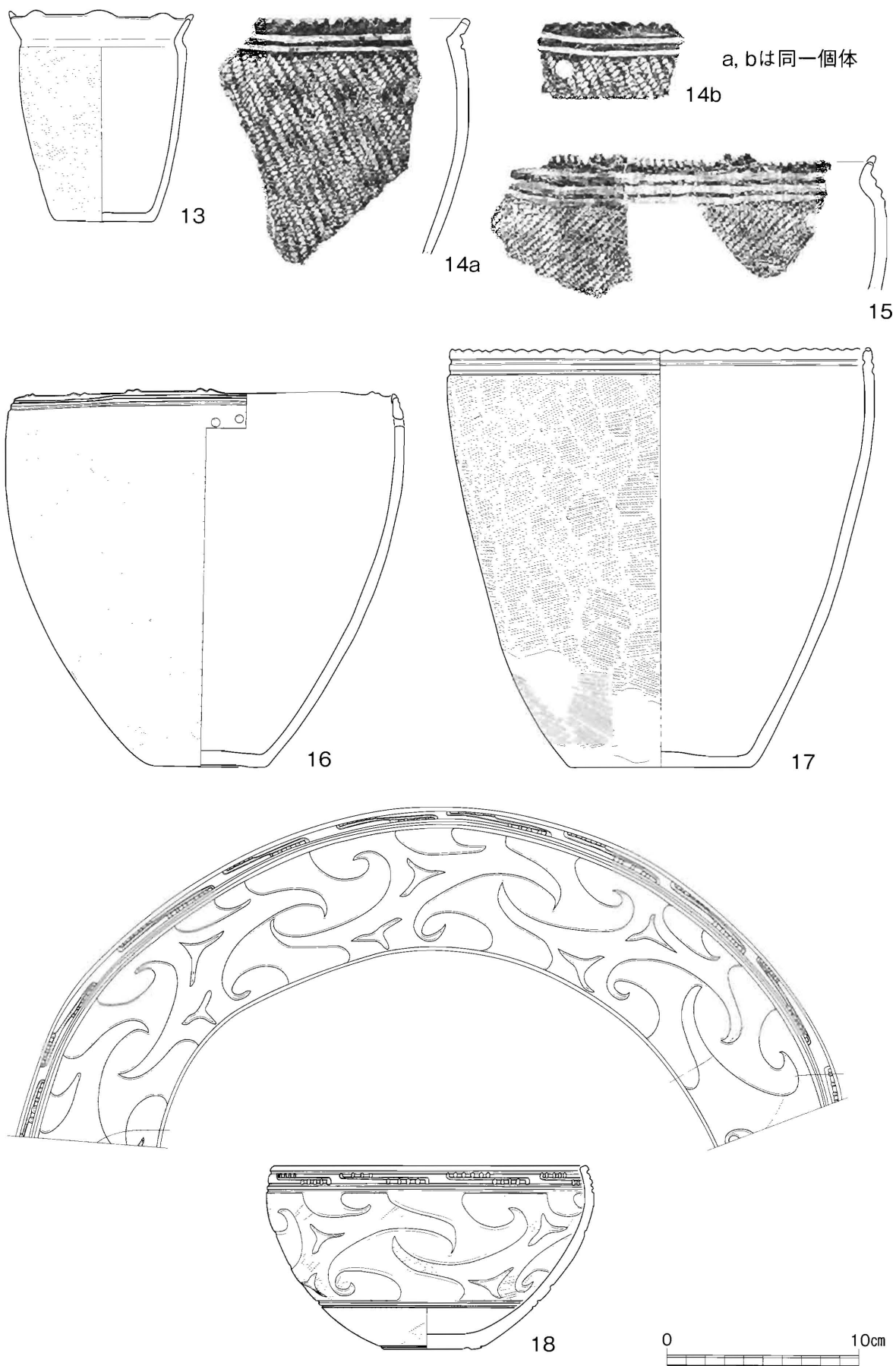


第1図 野口貝塚出土土器 深鉢（1～6）

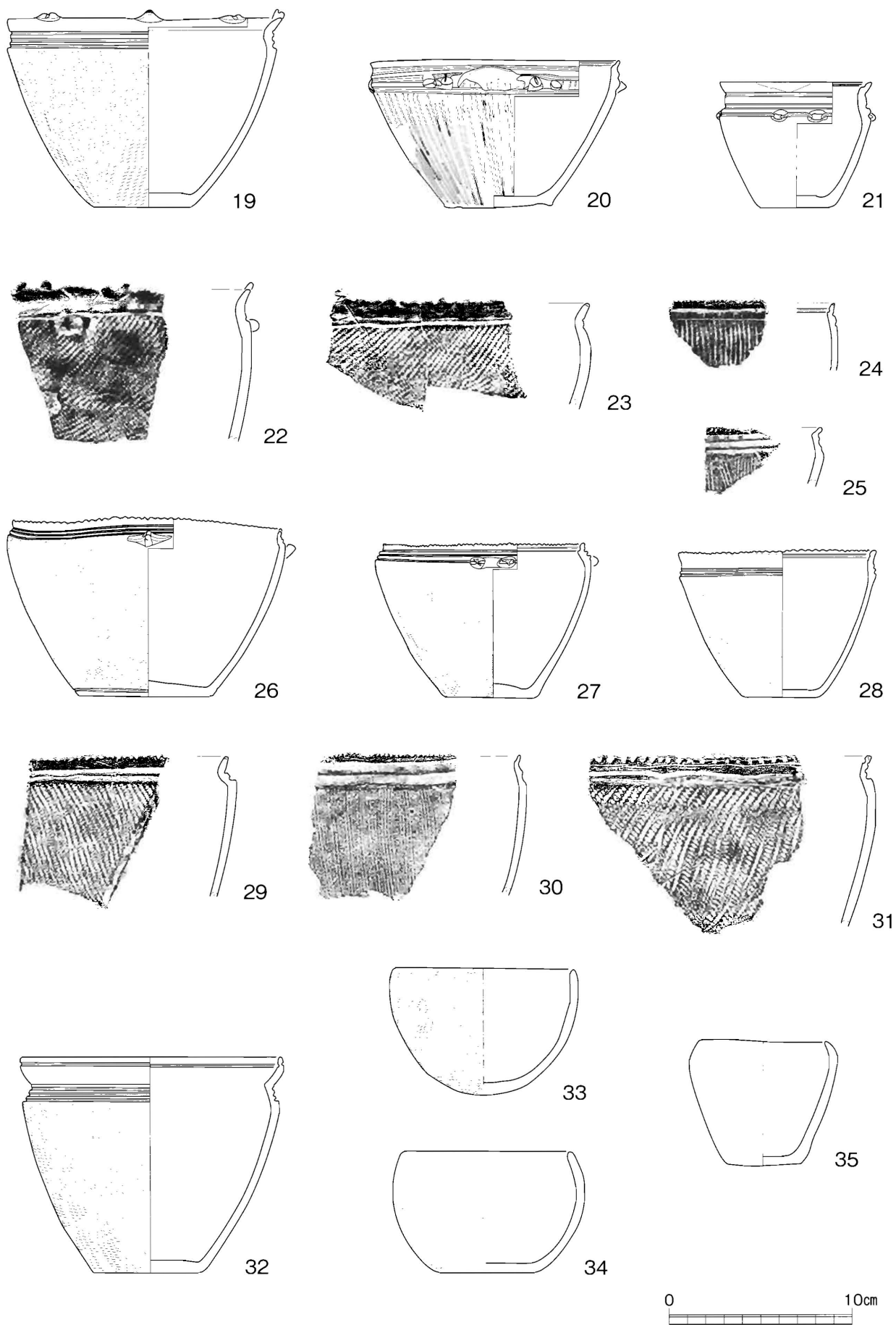


第2図 野口貝塚出土土器 深鉢（7～12）

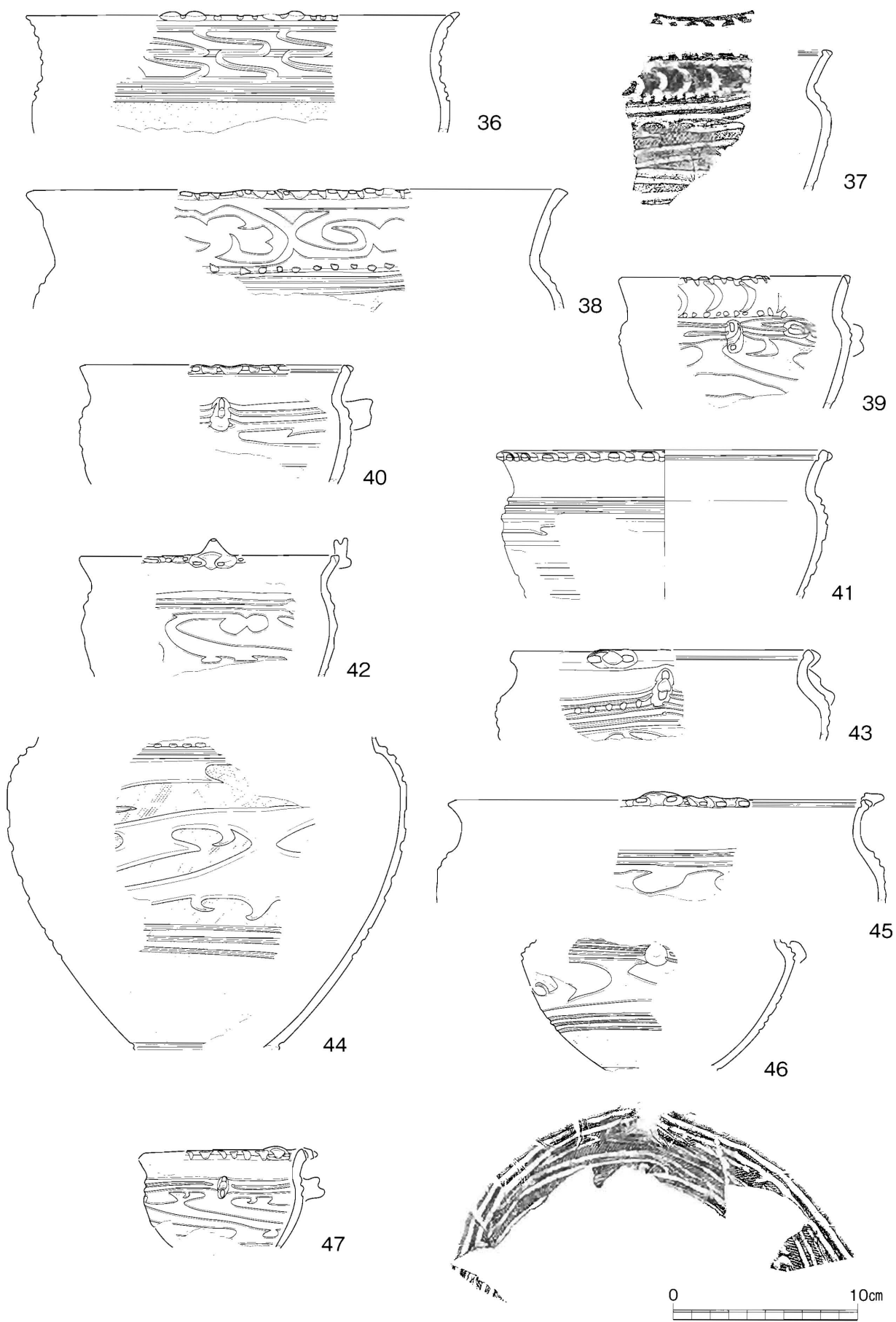




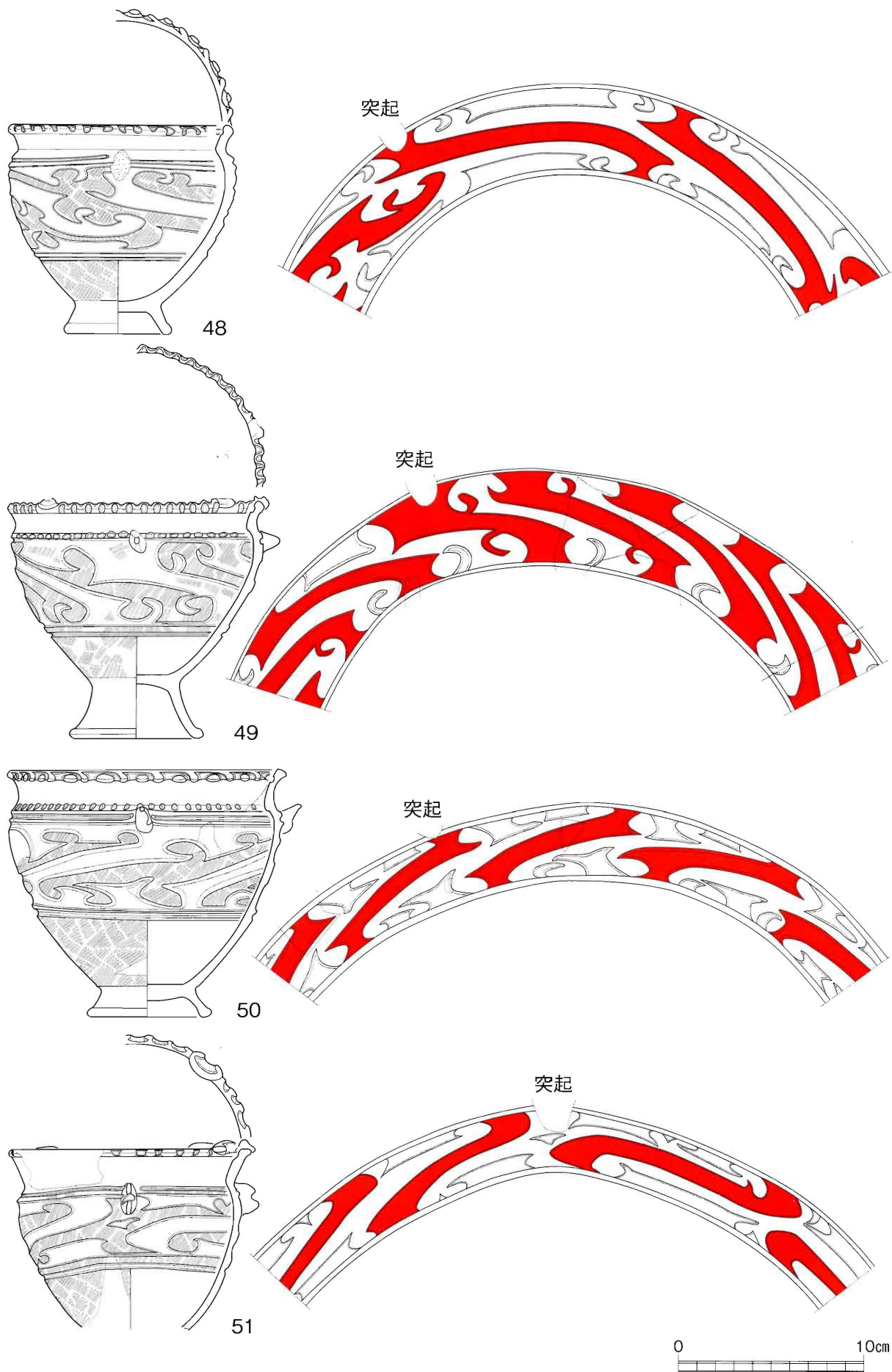
第3図 野口貝塚出土土器 深鉢・鉢 (13~18)



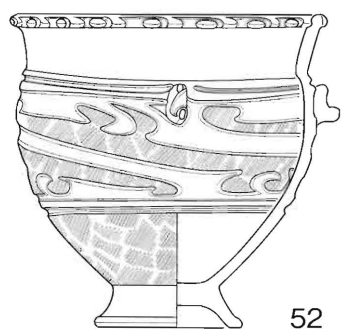
第4図 野口貝塚出土土器 鉢 (19~35)



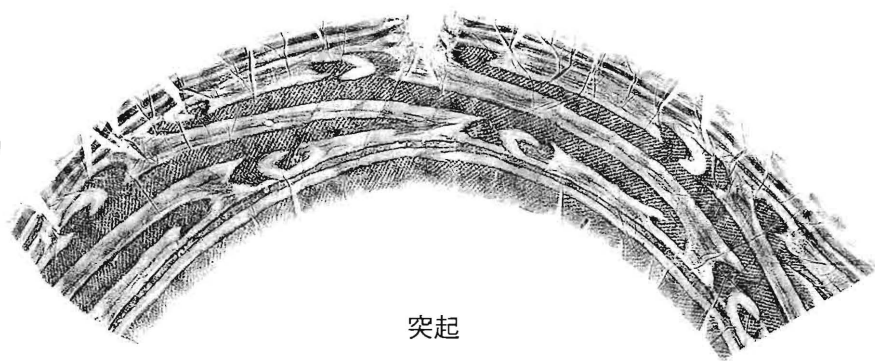
第5図 野口貝塚出土土器 鉢 (36~47)



第6図 野口貝塚出土土器 鉢 (48~51)

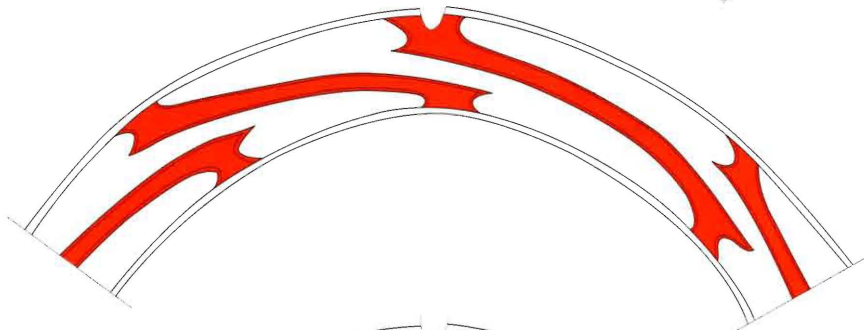


52

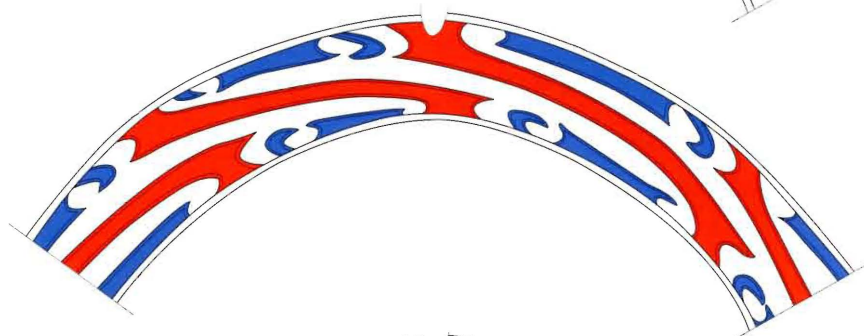


突起

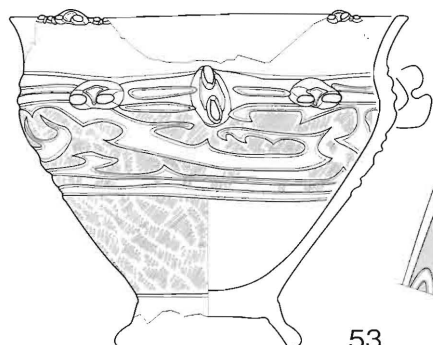
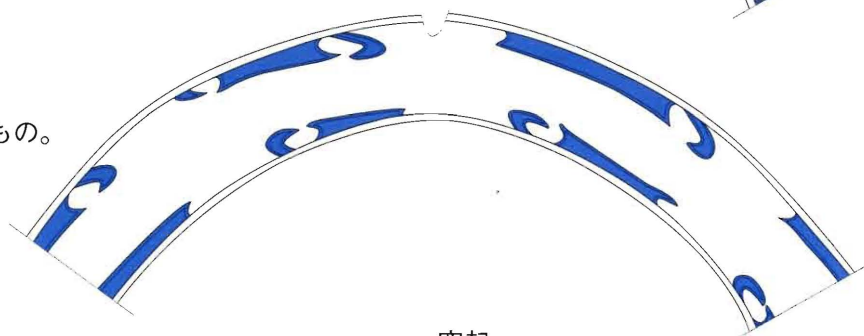
①区画文I2を3単位施す。



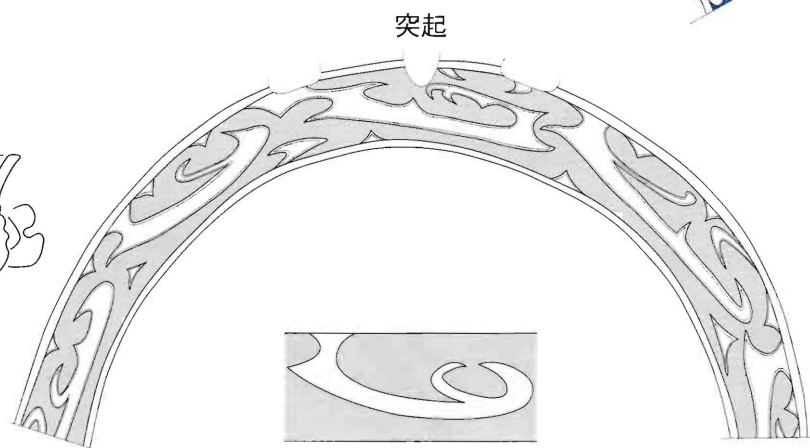
②充填文をうめる。



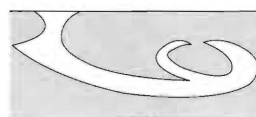
③充填文のみをとりだしたもの。



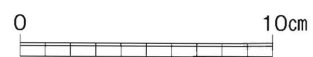
53



突起

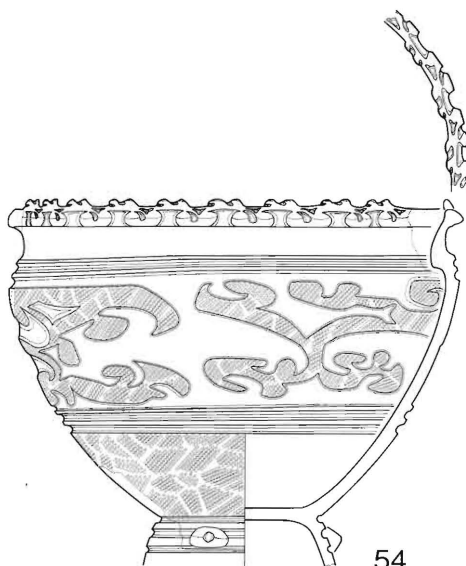


53に見られる配置文

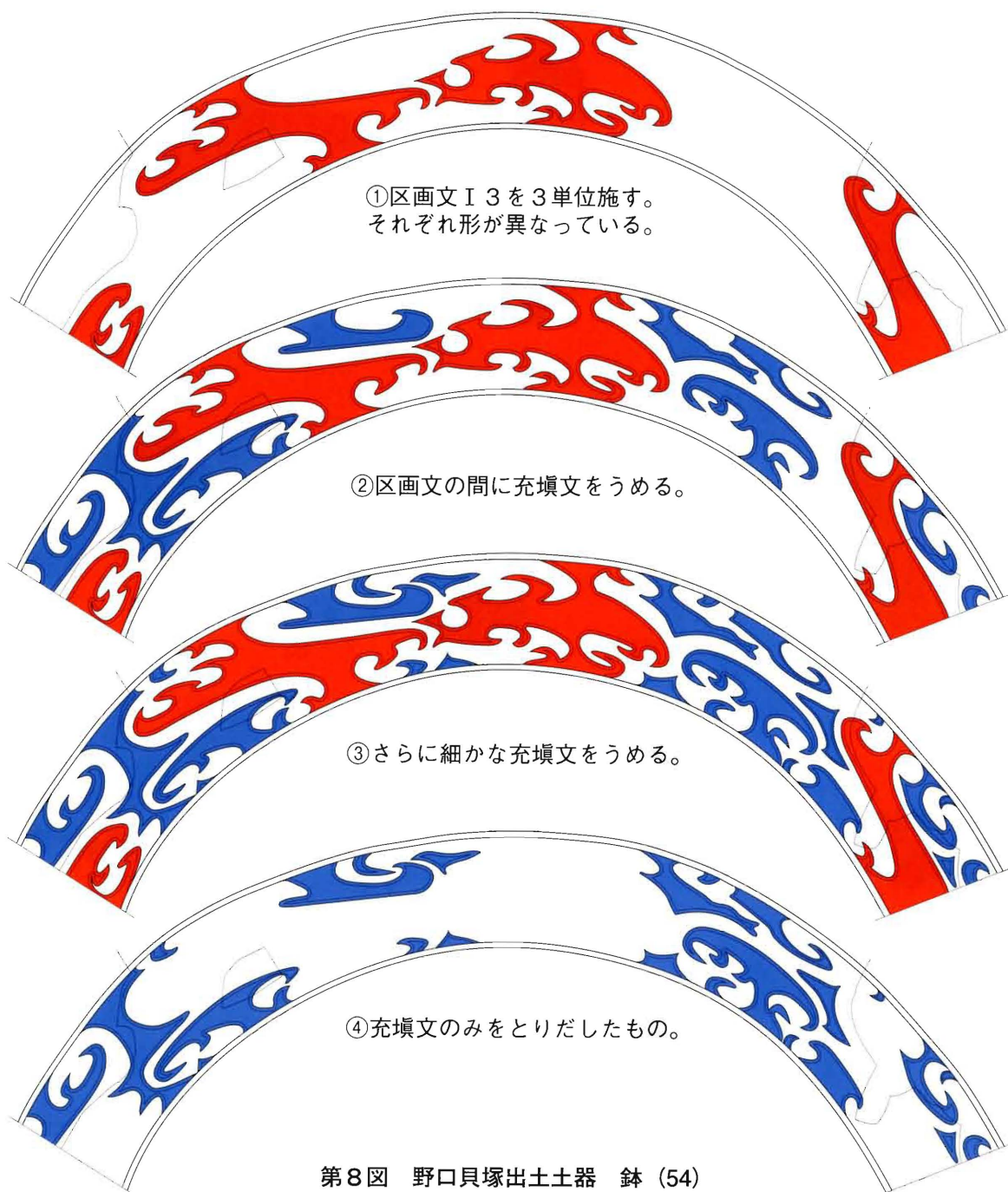


第7図 野口貝塚出土土器 鉢 (52・53)



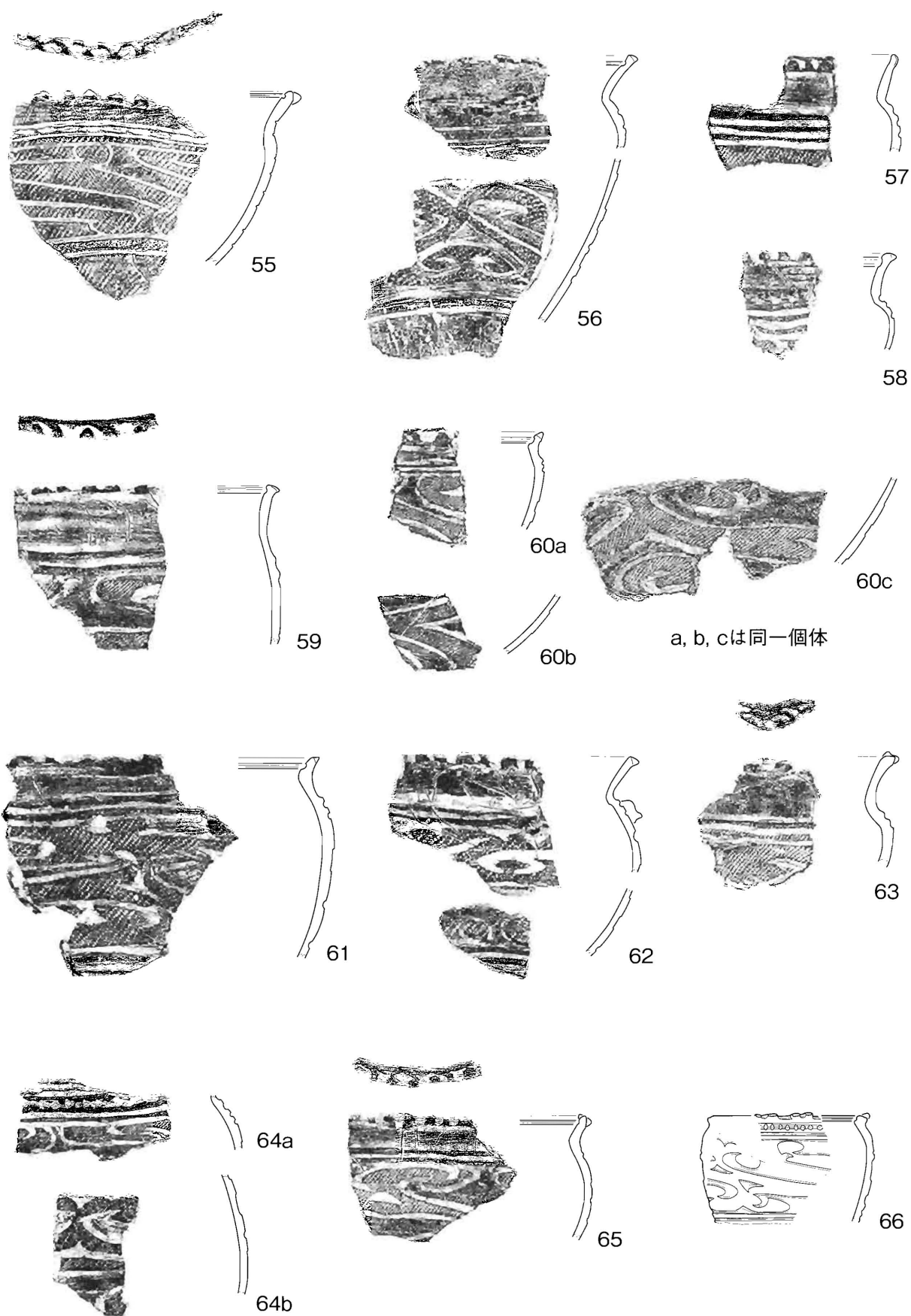


54

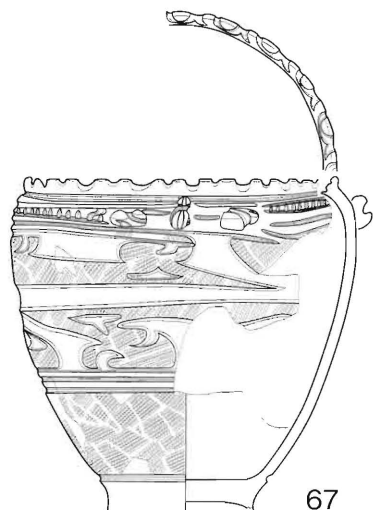


第8図 野口貝塚出土土器 鉢 (54)



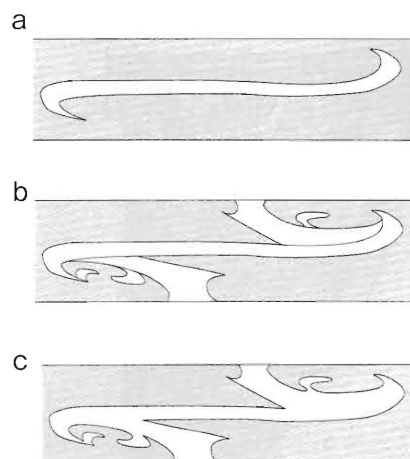


第9図 野口貝塚出土土器 鉢 (55~66)

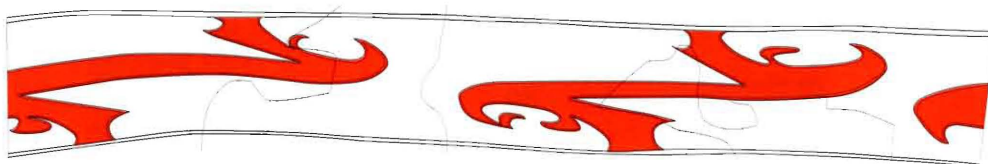


67

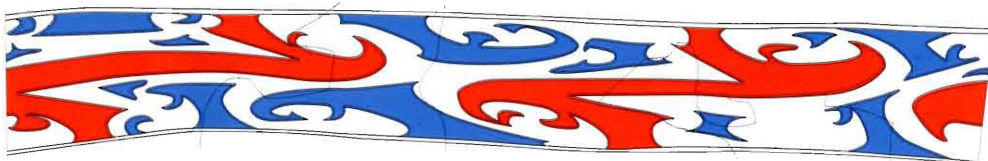
a, b, c 配置文に付加的要素を加え、区画文Ⅲ1に変更する。



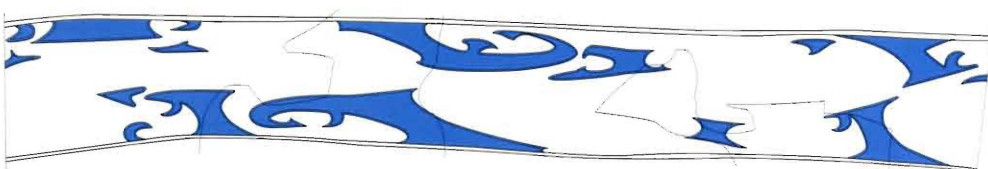
①区画文Ⅲ1を2単位施す。



②充填文をうめる。

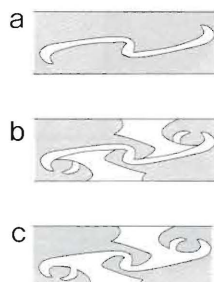


③充填文のみをとりだしたもの。



68

a, b, c 配置文に付加的要素を加え、区画文Ⅱ2に変更する。



①区画文Ⅱ2を4単位施す。  
1単位のみ形が他と異なっている。



②充填文をうめる。

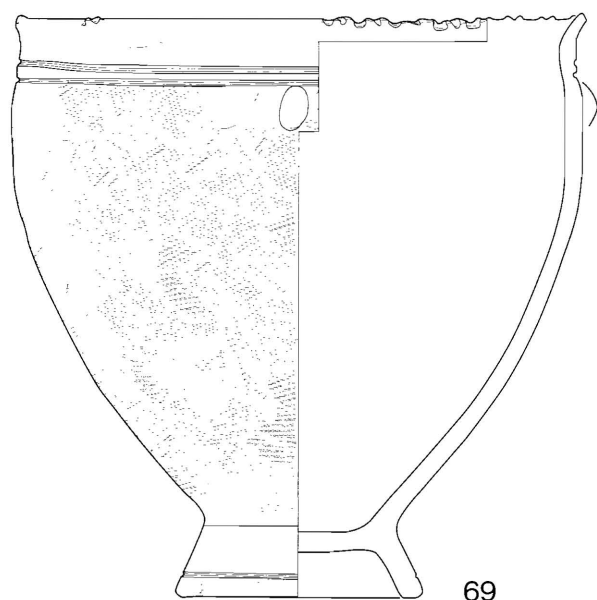


③充填文のみをとりだしたもの。

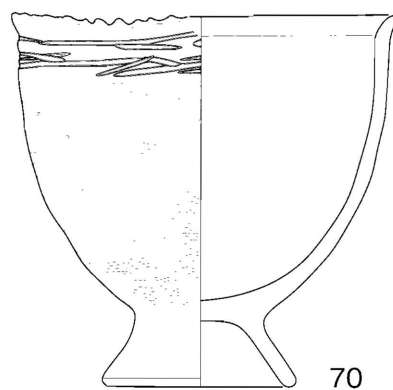


第10図 野口貝塚出土土器 鉢 (67・68)

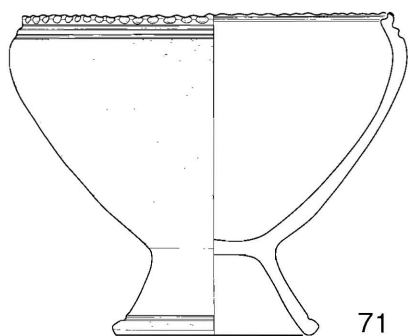




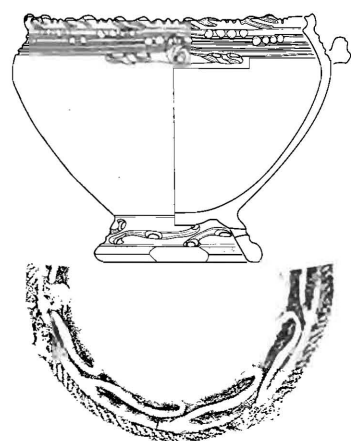
69



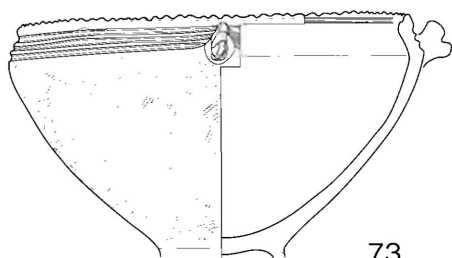
70



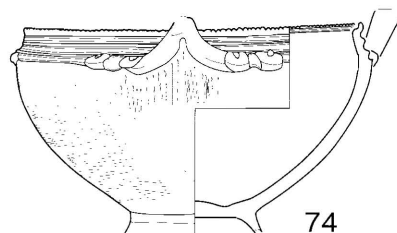
71



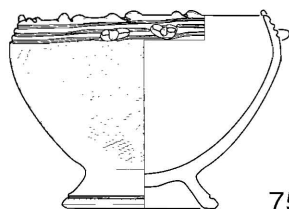
72



73



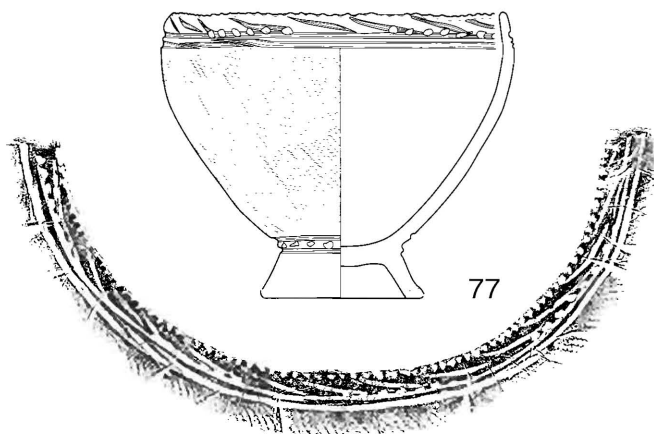
74



75



76



77

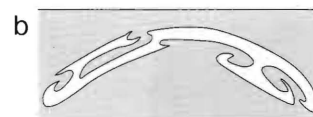
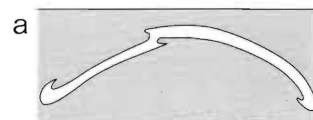


第11図 野口貝塚出土土器 鉢 (69~77)

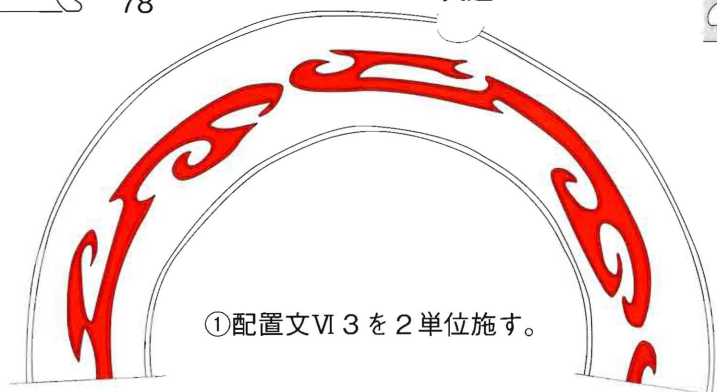


78

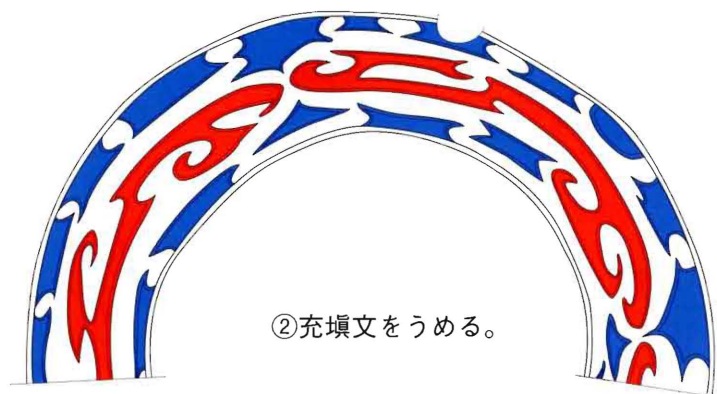
a, b 配置文に付加的要素を加え、配置文VI 3が完成する。



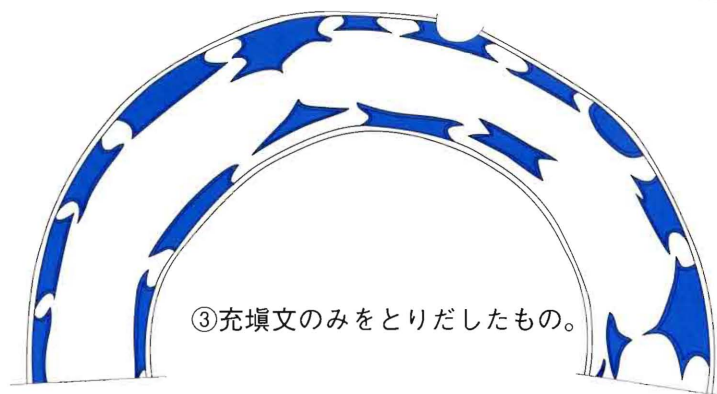
突起



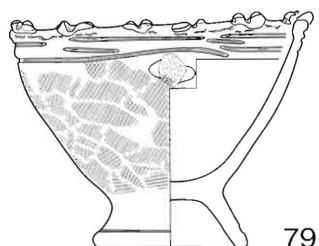
①配置文VI 3を2単位施す。



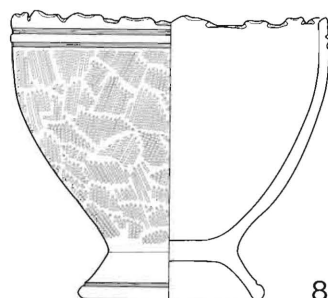
②充填文をうめる。



③充填文のみをとりだしたもの。



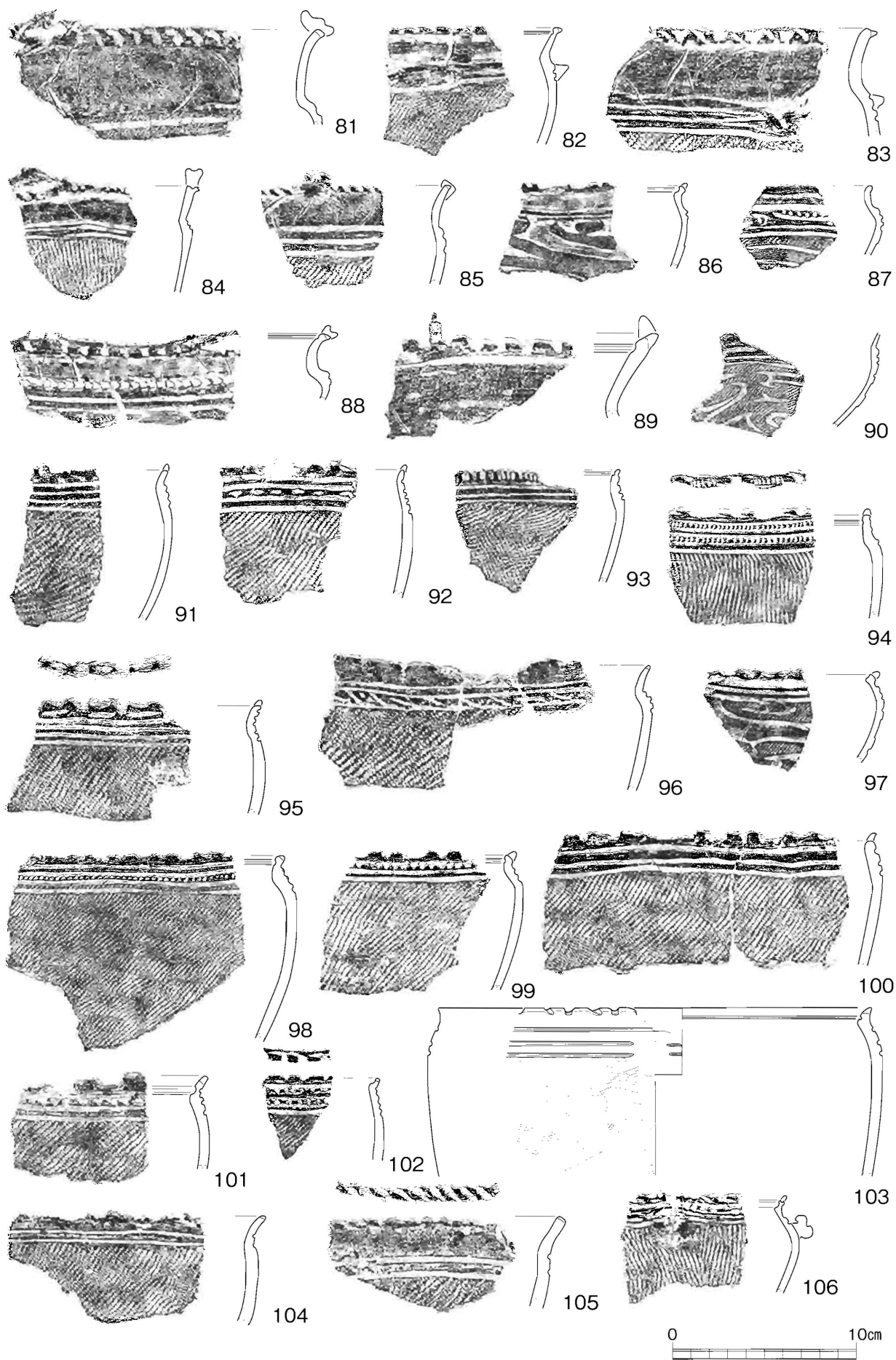
79



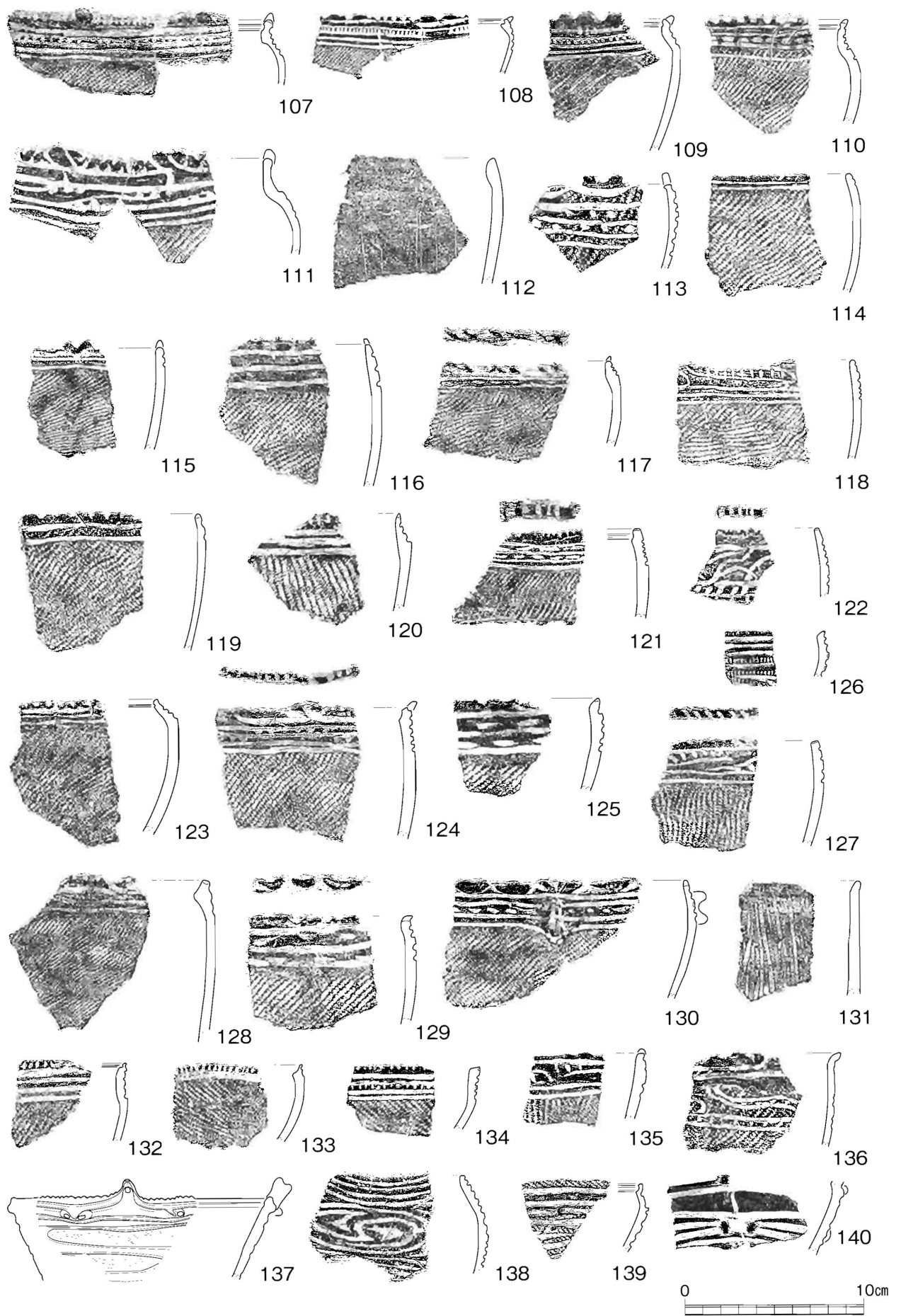
80



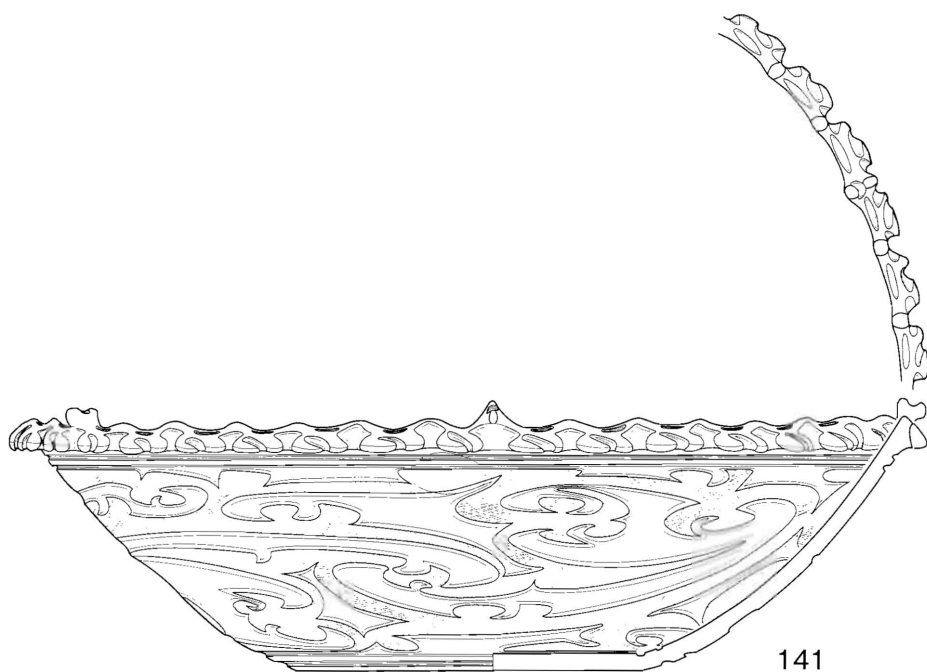
第12図 野口貝塚出土土器 鉢 (78~80)



第13図 野口貝塚出土土器 鉢 (81~106)



第14図 野口貝塚出土土器 鉢 (107~140)



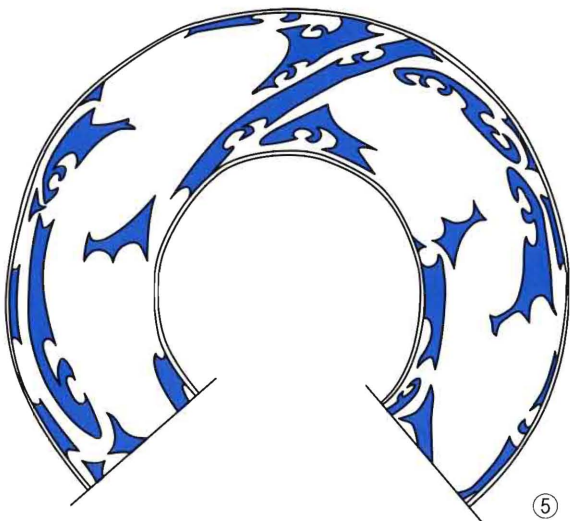
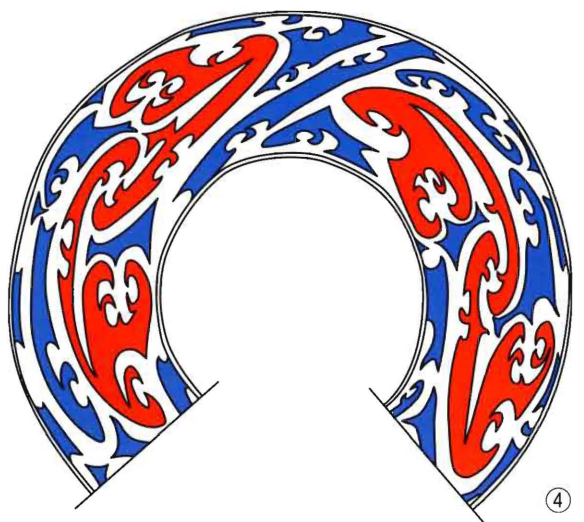
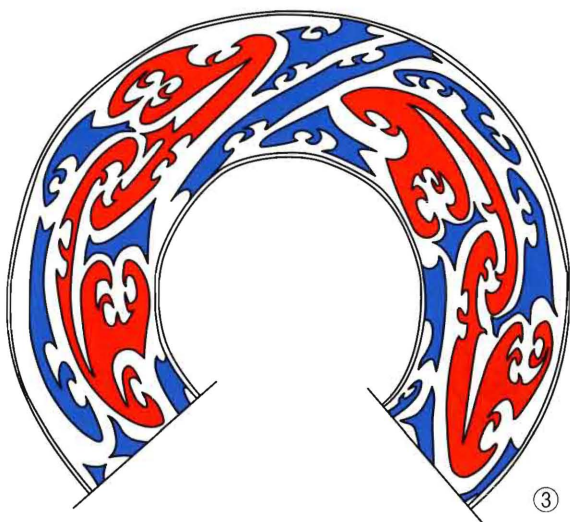
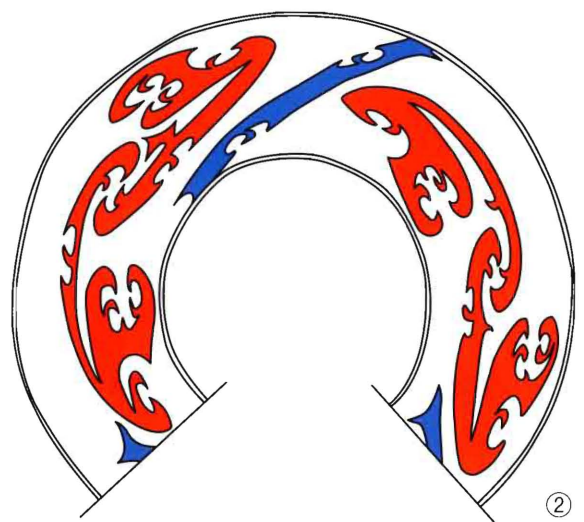
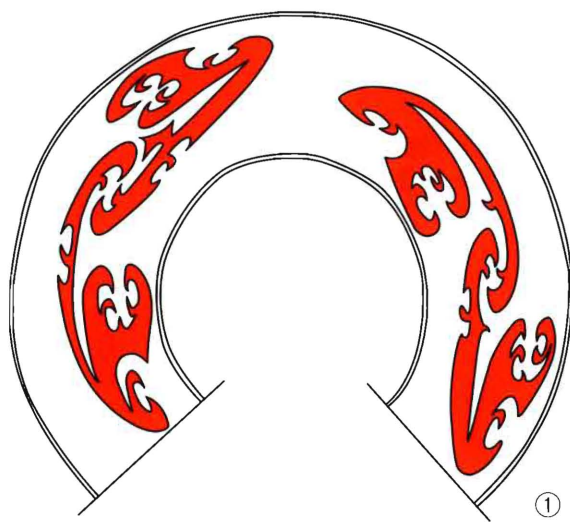
141



0 10cm

第15図 野口貝塚出土土器 皿 (141)





- ①配置文V3を4単位施す。
- ②配置文の間に充填文をうめる。
- ③大型の充填文をうめる。
- ④さらに細かな充填文をうめる。
- ⑤充填文のみをとりだしたものの。

第16図 野口貝塚出土土器（141の文様の施文工程1）

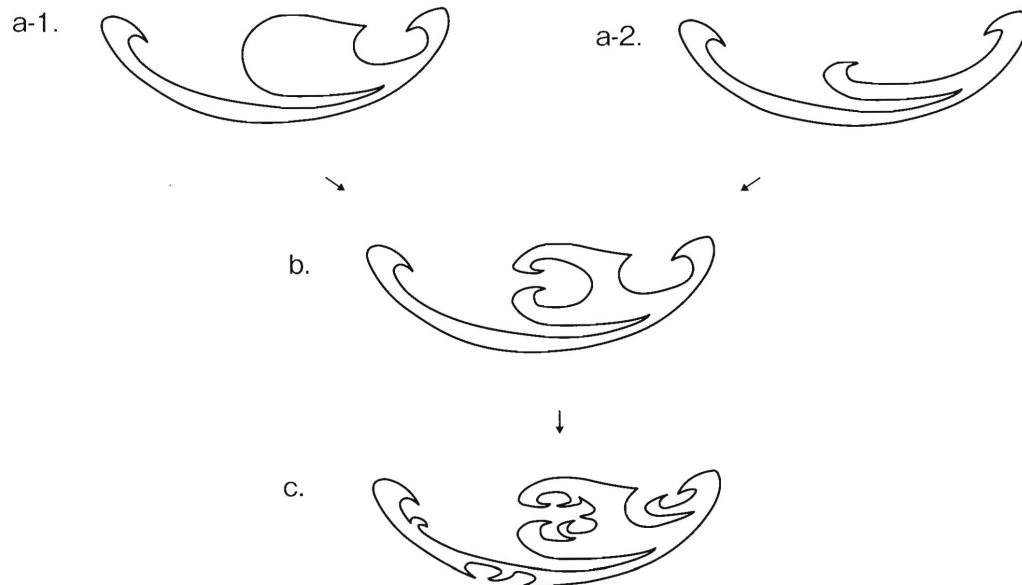
### 配置文V3について



左図の配置文を点対称に組み合わせることで、2単位1組のパターンを作り上げている。

### 施文順序

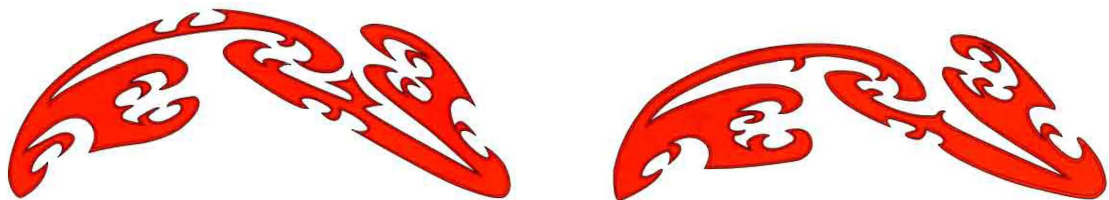
配置文は以下のようにして描かれたと考えられる。



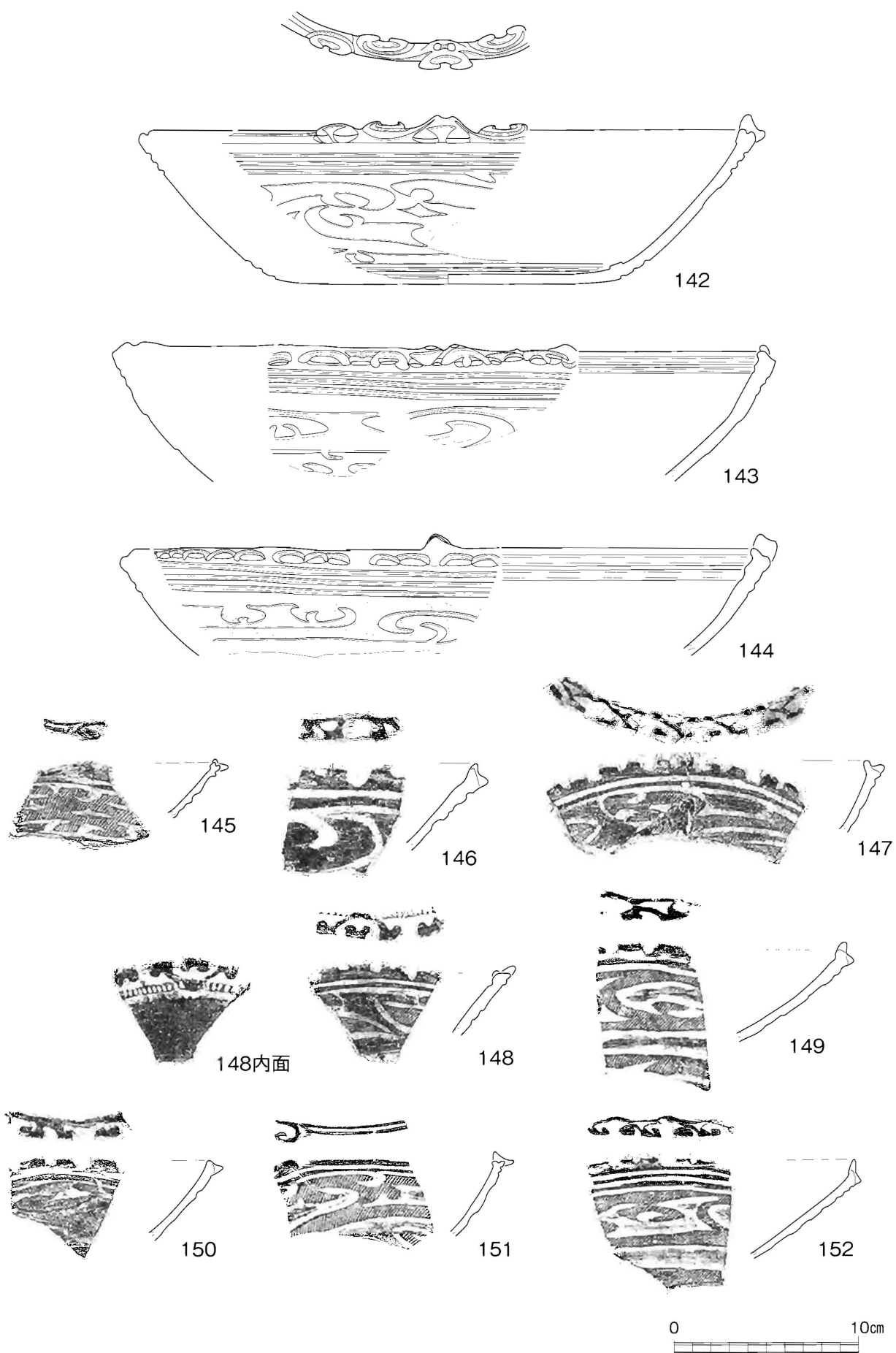
aの段階で配置文の基礎となるC字形の文様を描く。aについては2パターン考えられる。その後bの段階で切り込みや付加的な文様を加える。最後にcの段階で細かな付加的要素を加えて完成する。

### 配置文のみをとりだしたもの

同じ文様が点対称に施されているのがわかる。

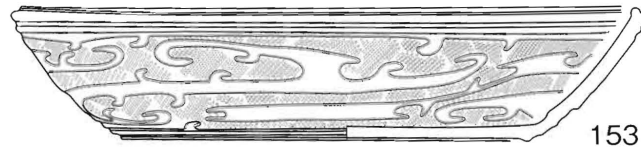


第17図 野口貝塚出土土器（141の文様の施文工程2）

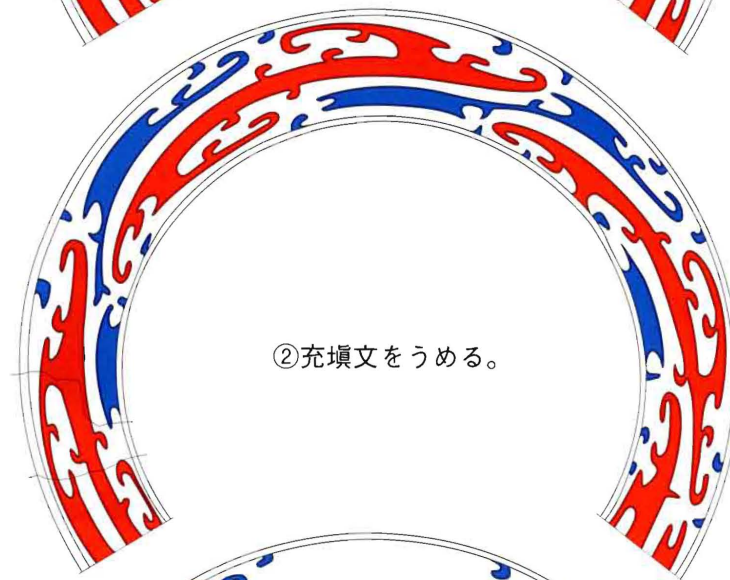


第18図 野口貝塚出土土器 皿 (142~152)



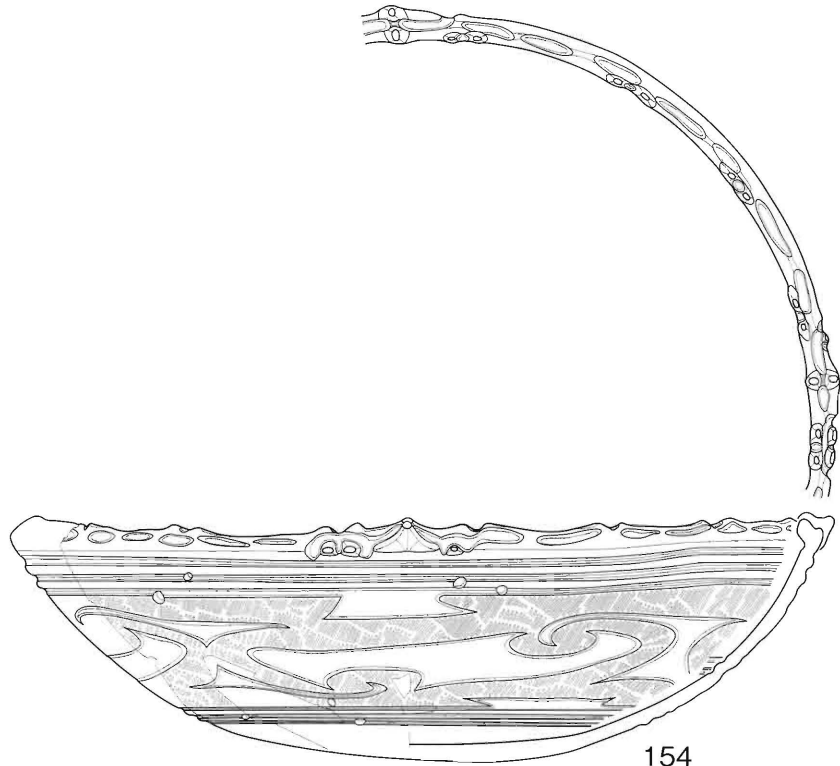


153

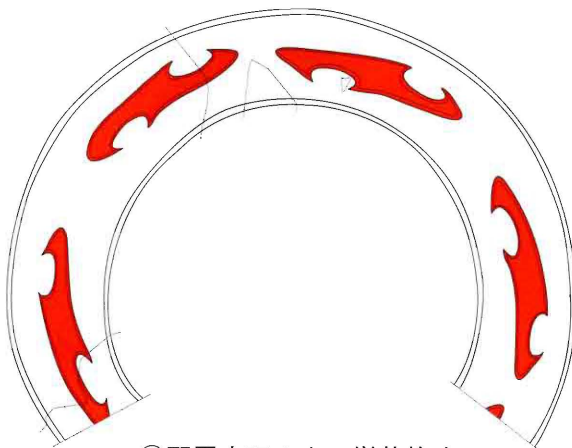


第19図 野口貝塚出土土器 皿 (153)

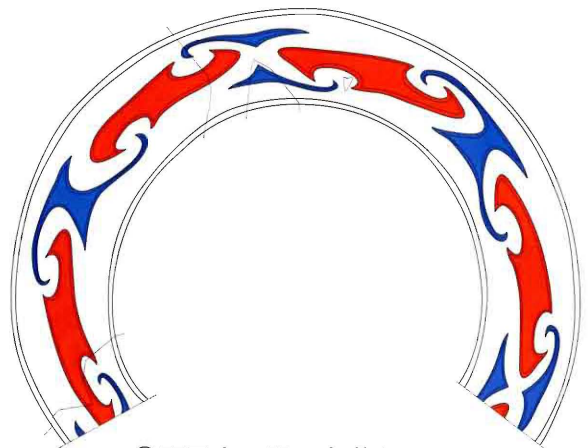




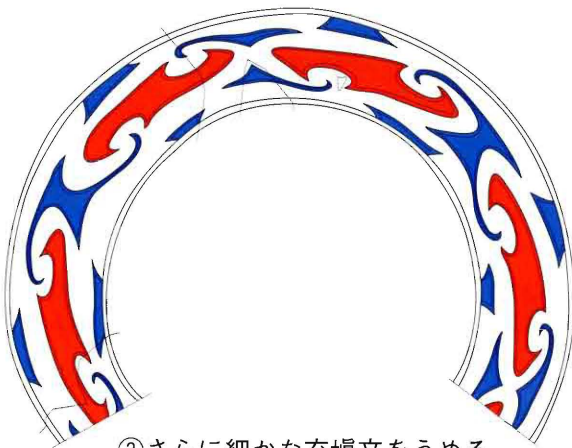
154



①配置文VI 1を4単位施す。



②配置文の間に充填文をうめる。



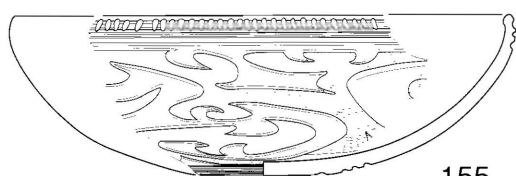
③さらに細かな充填文をうめる。



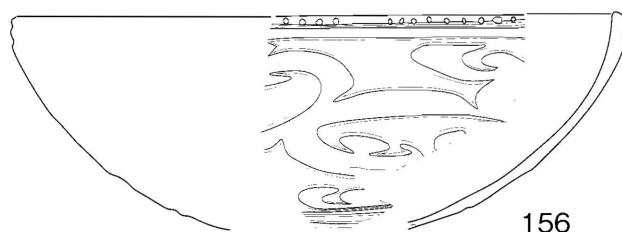
④充填文のみをとりだしたもの。



第20図 野口貝塚出土土器 皿 (154)



155



156

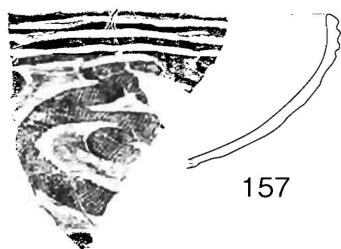


157

158



159



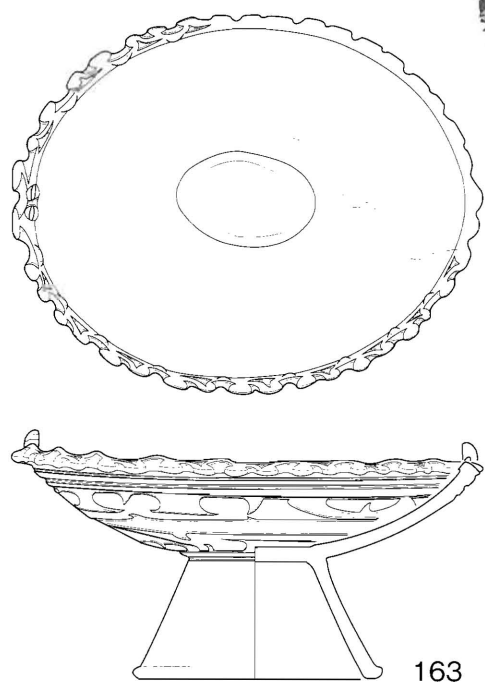
160



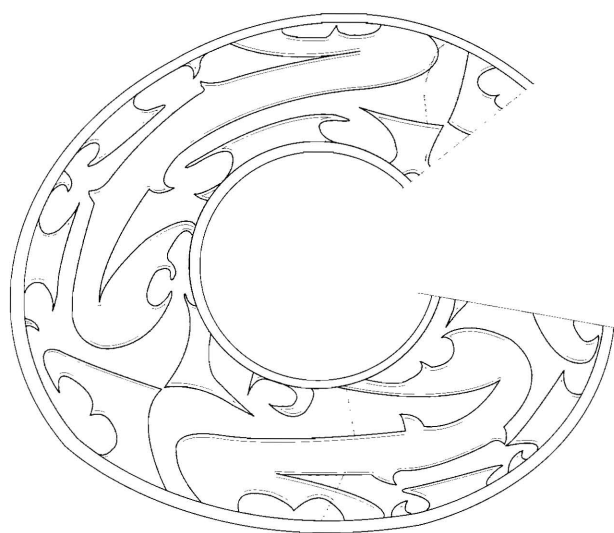
161



162

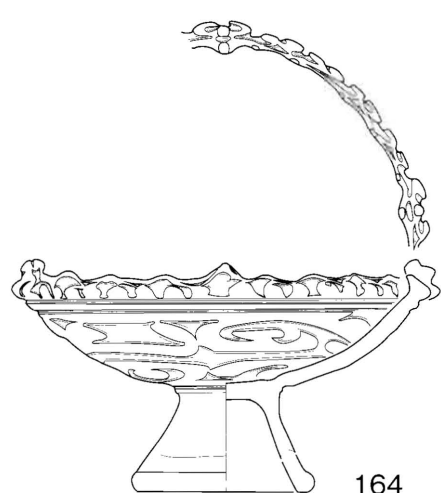


163

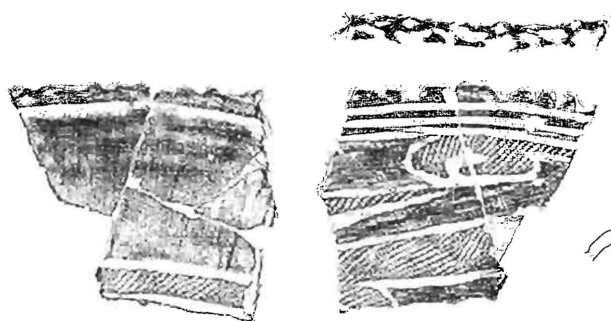


0 10cm

第21図 野口貝塚出土土器 皿 (155~163)



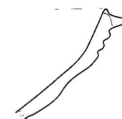
164



165内面



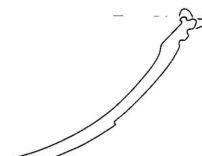
165



166



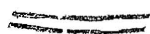
167



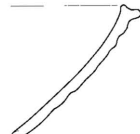
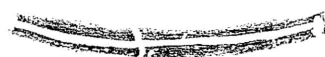
168



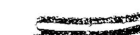
169



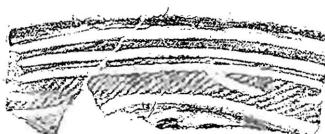
170



171



172



173



第22図 野口貝塚出土土器 皿 (164~173)

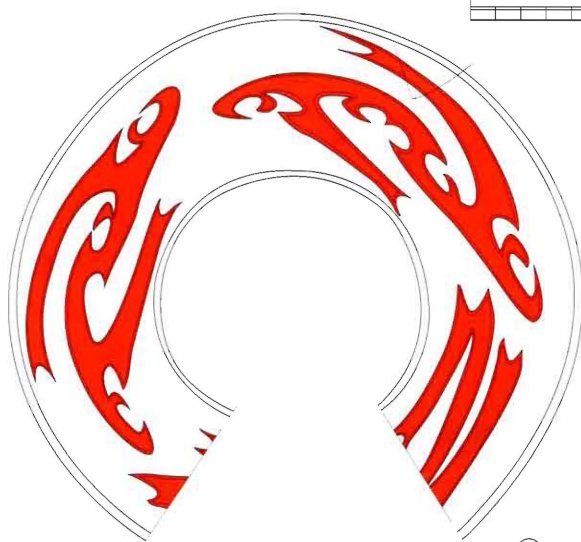




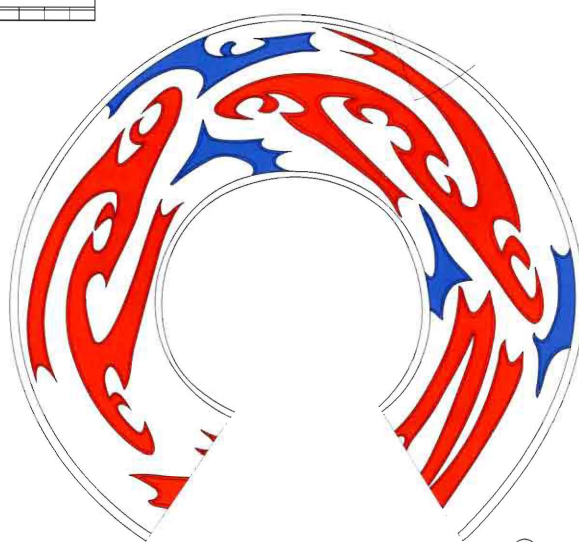
174



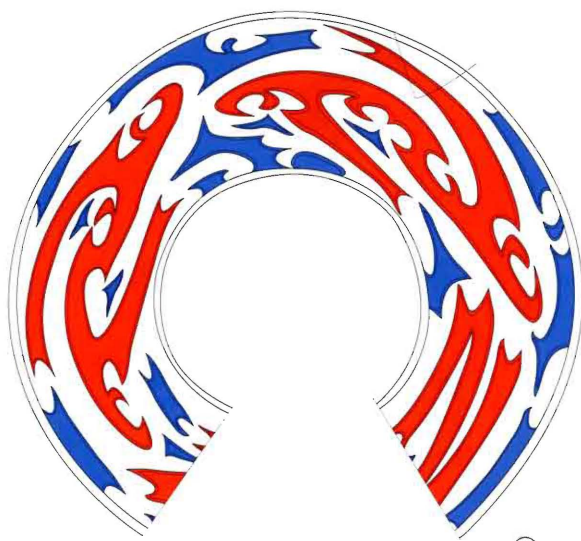
- ①配置文VI 2を3単位施す。  
1単位のみ形が他と異なる。
- ②配置文の間に充填文をうめる。
- ③さらに細かな充填文をうめる。
- ④充填文のみをとりだしたものの。



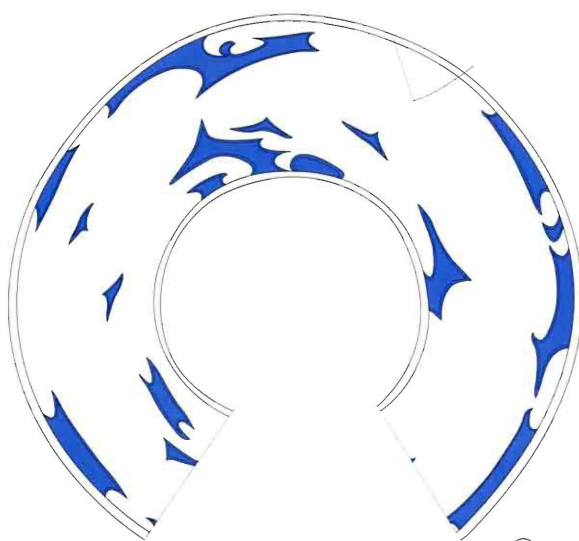
①



②

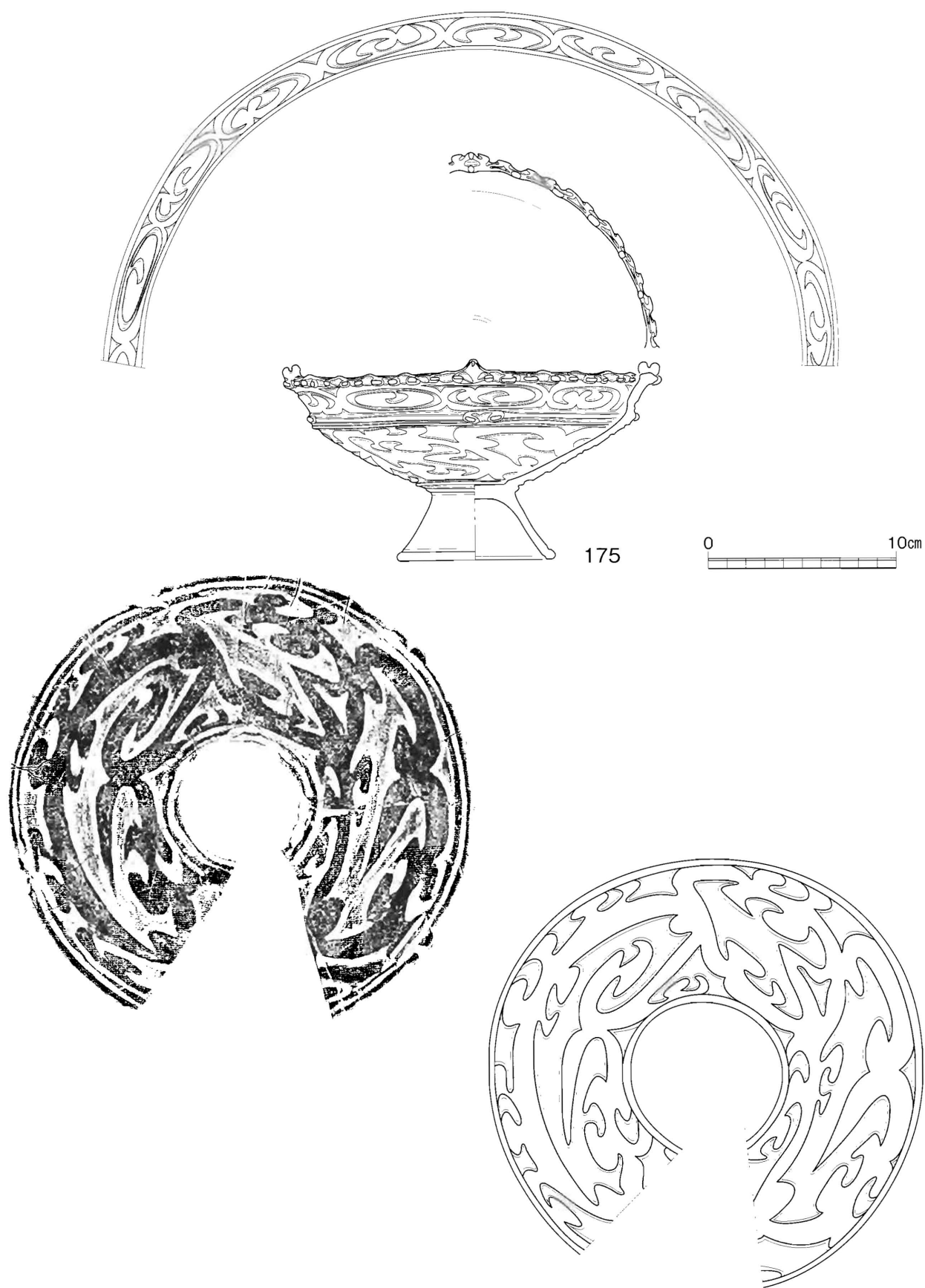


③

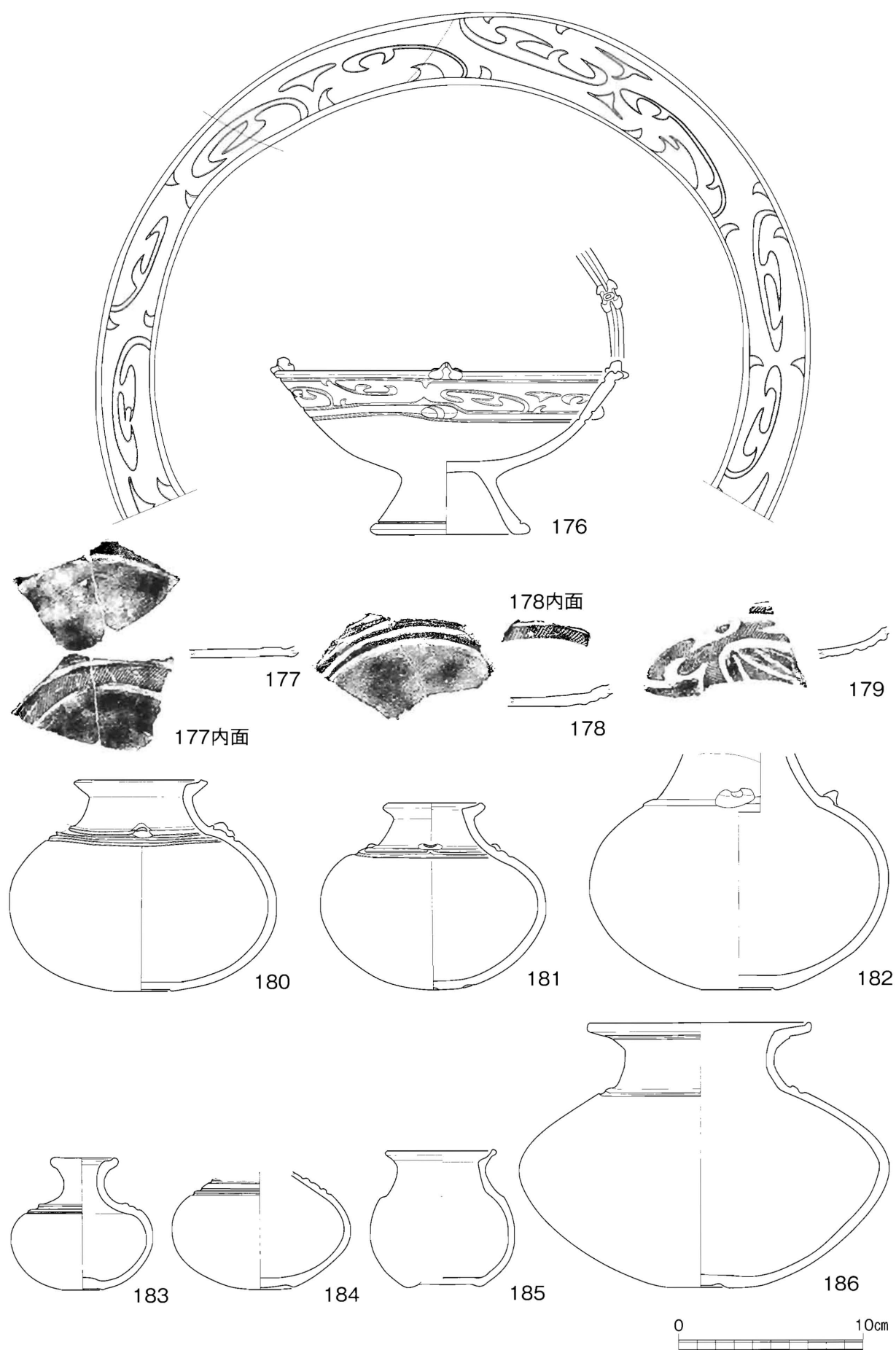


④

第23図 野口貝塚出土土器 皿 (174)



第24図 野口貝塚出土土器 皿 (175)

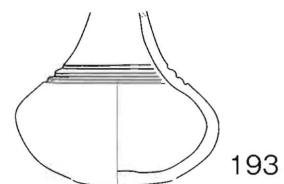
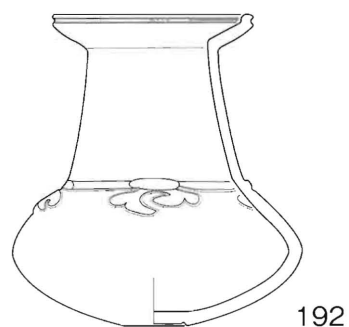
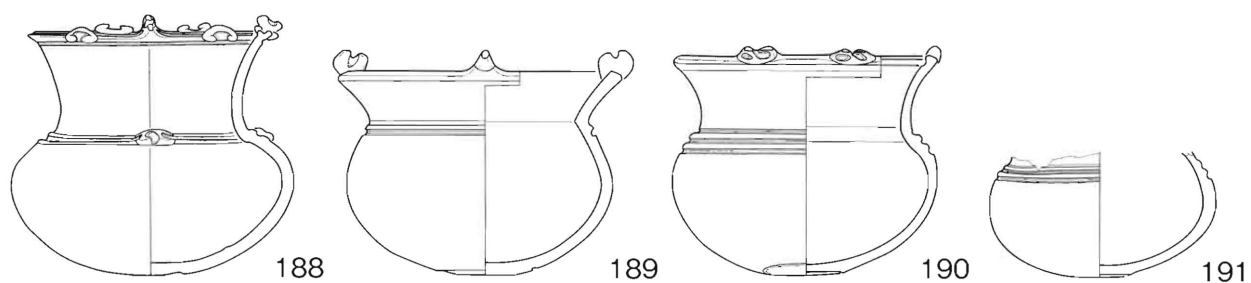
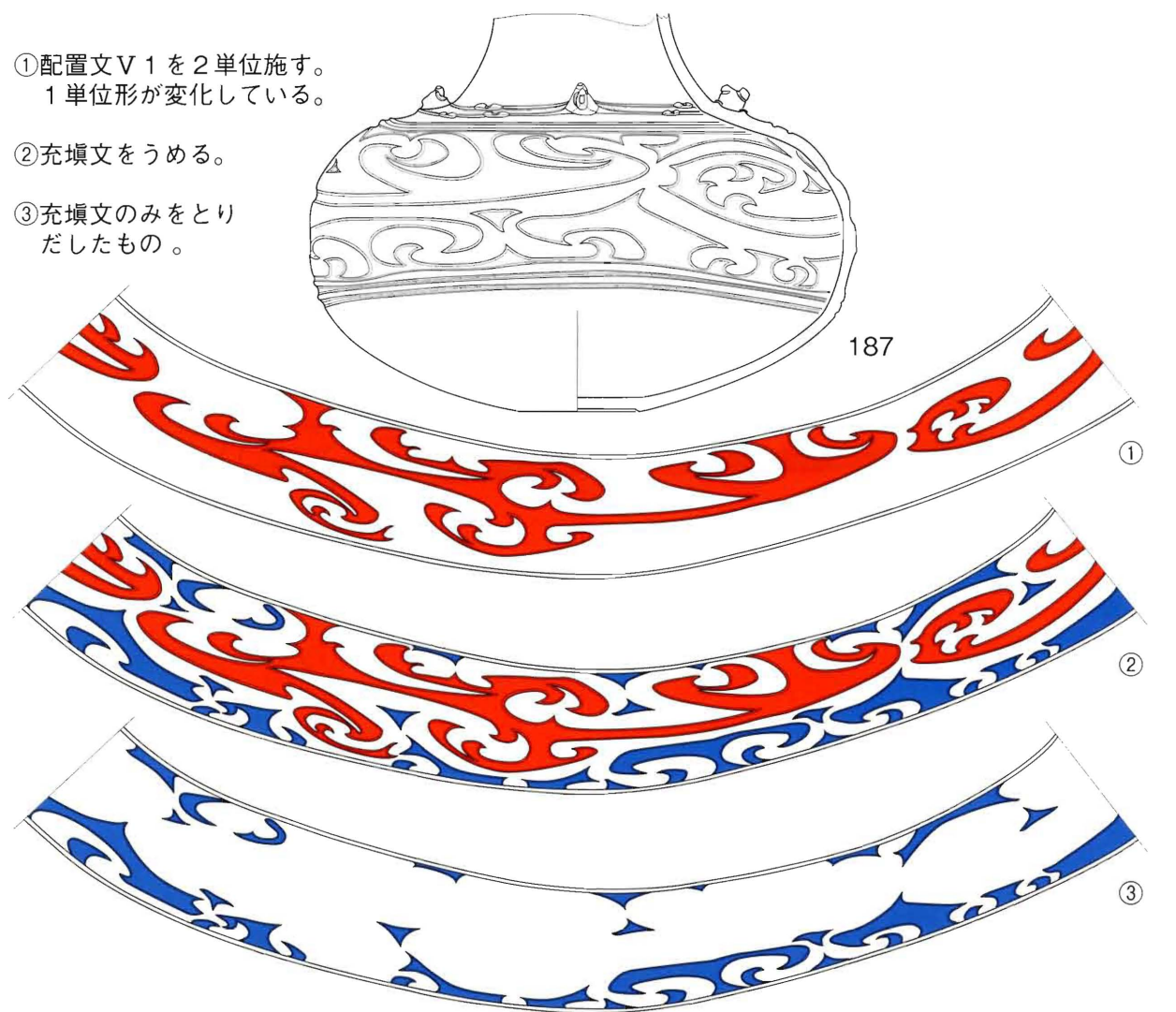


第25図 野口貝塚出土土器 皿・壺 (176~186)

①配置文V1を2単位施す。  
1単位形が変化している。

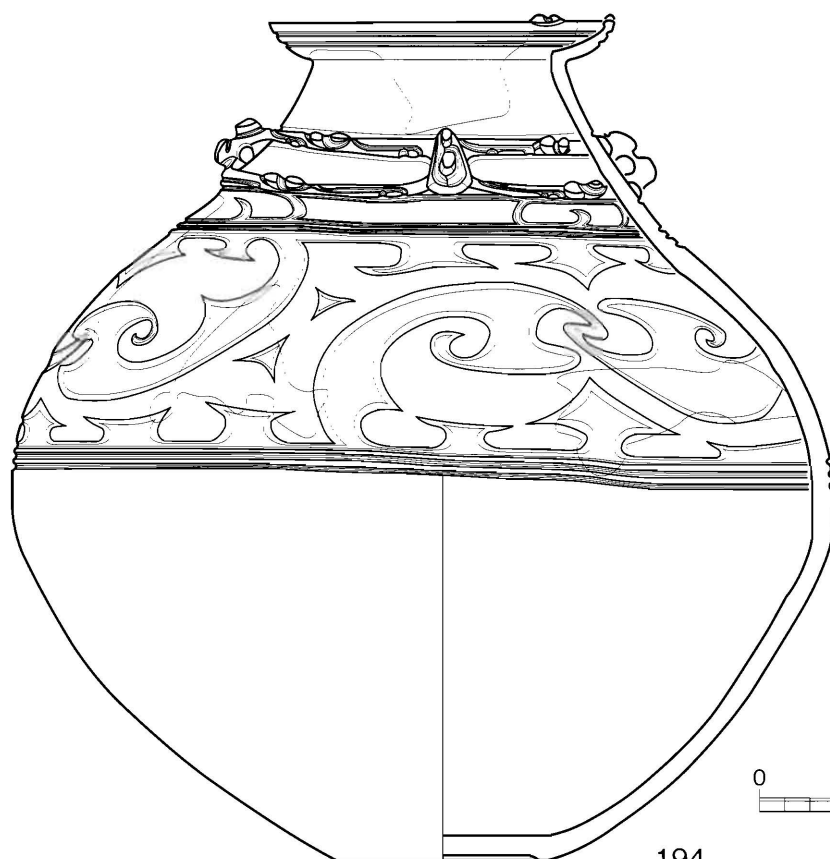
②充填文をうめる。

③充填文のみをとり  
だしたもの。

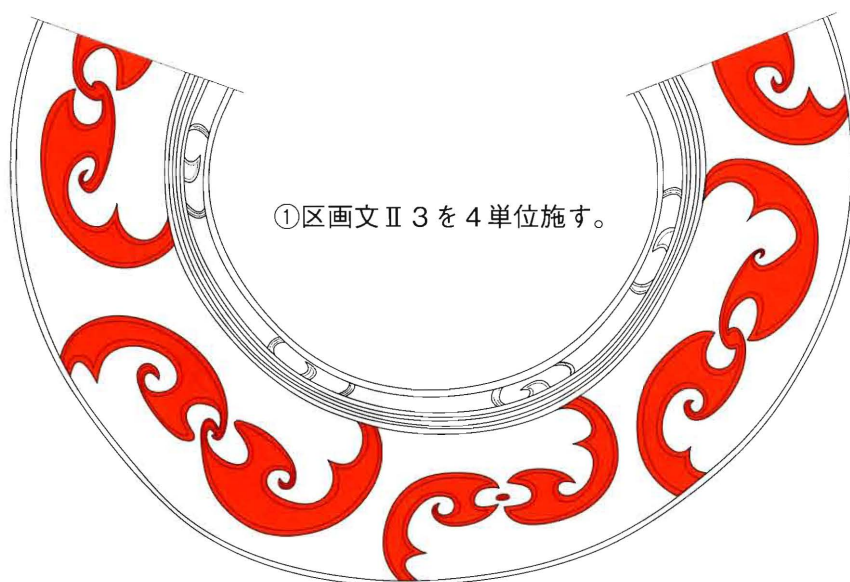


第26図 野口貝塚出土土器 壺 (187~193)

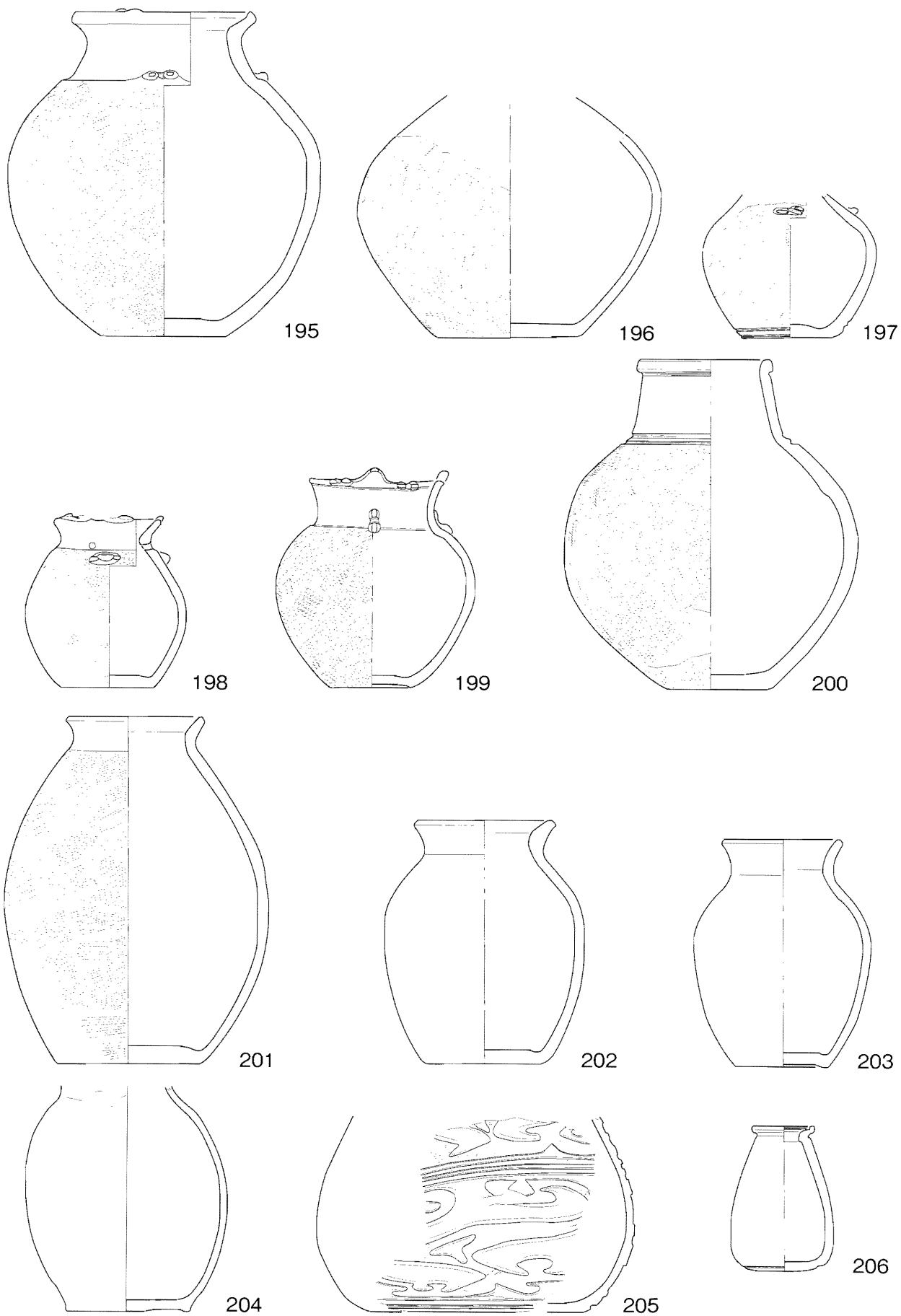




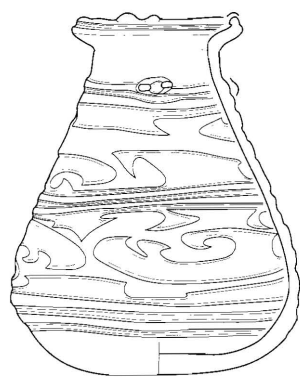
第27図 野口貝塚出土土器 壺 (194)



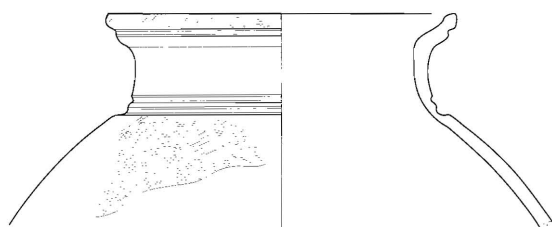
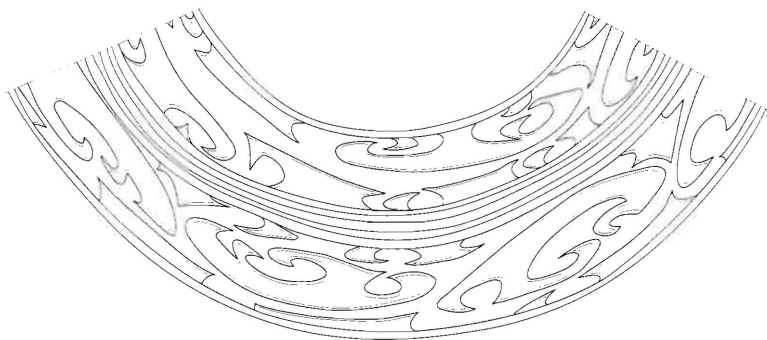
第28図 野口貝塚出土土器（194の文様の施文工程）



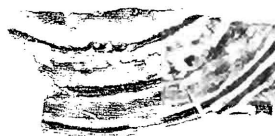
第29図 野口貝塚出土土器 壺 (195~206)



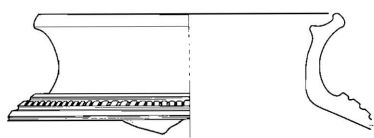
207



208



209



210



211



212



213



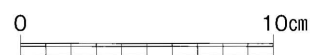
214



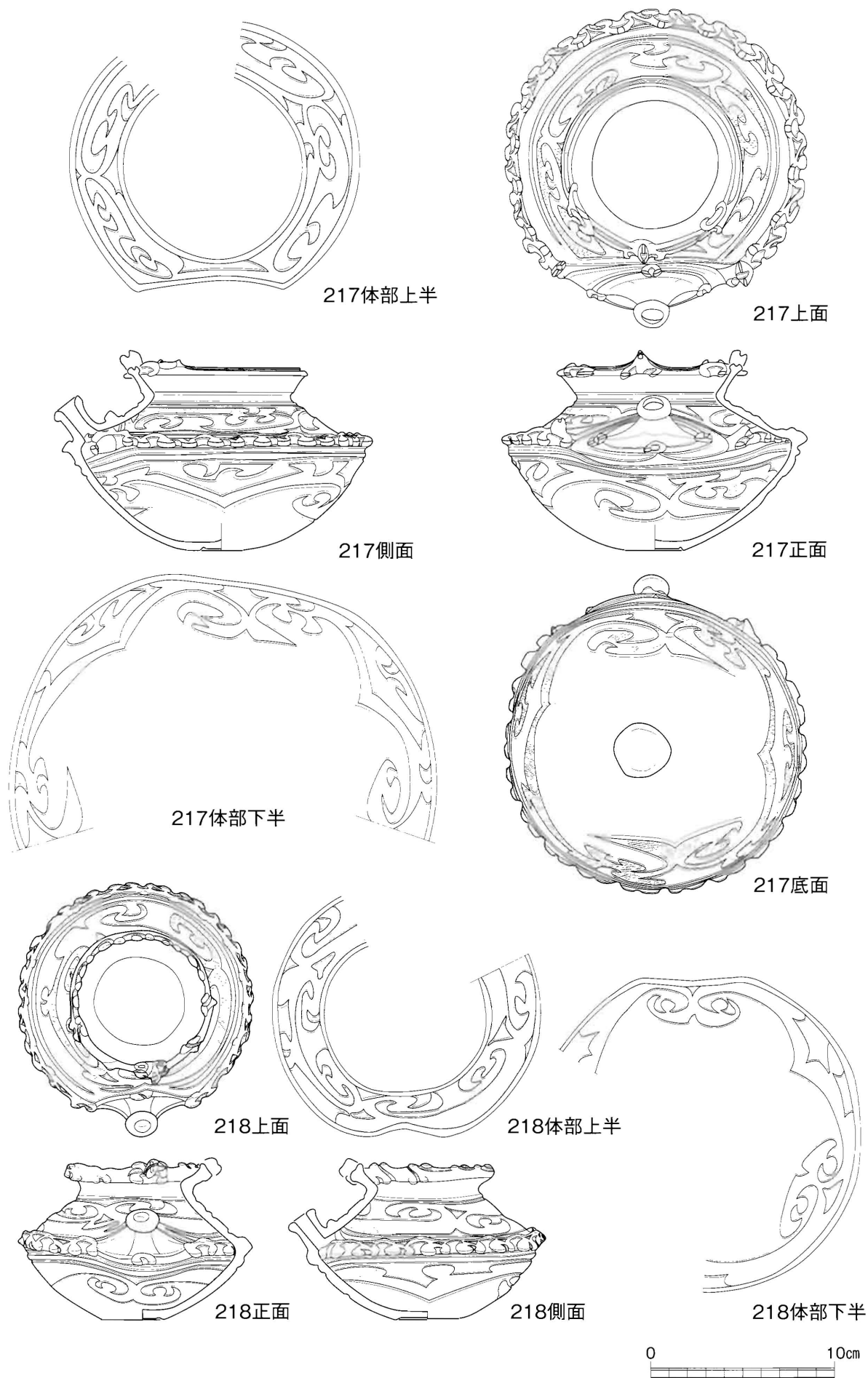
215



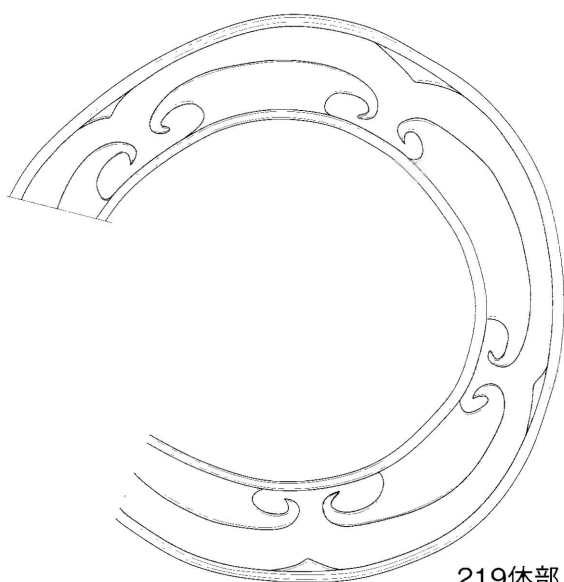
216



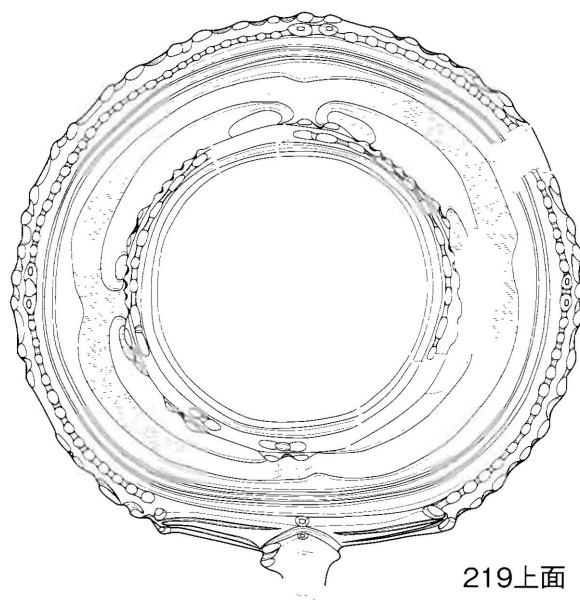
第30図 野口貝塚出土土器 壺 (207~216)



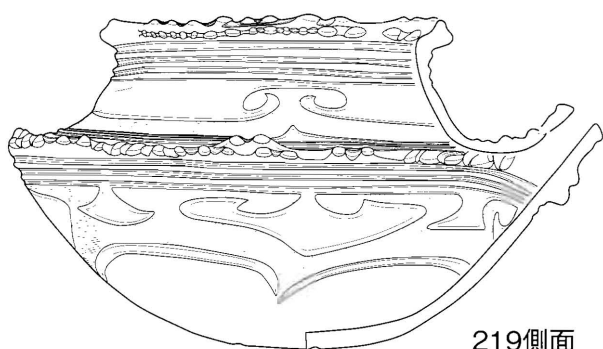
第31図 野口貝塚出土土器 注口土器 (217・218)



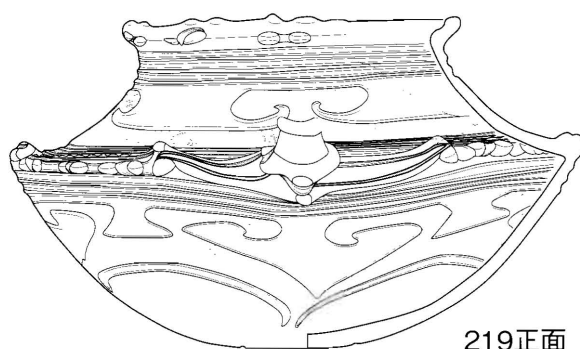
219体部上半



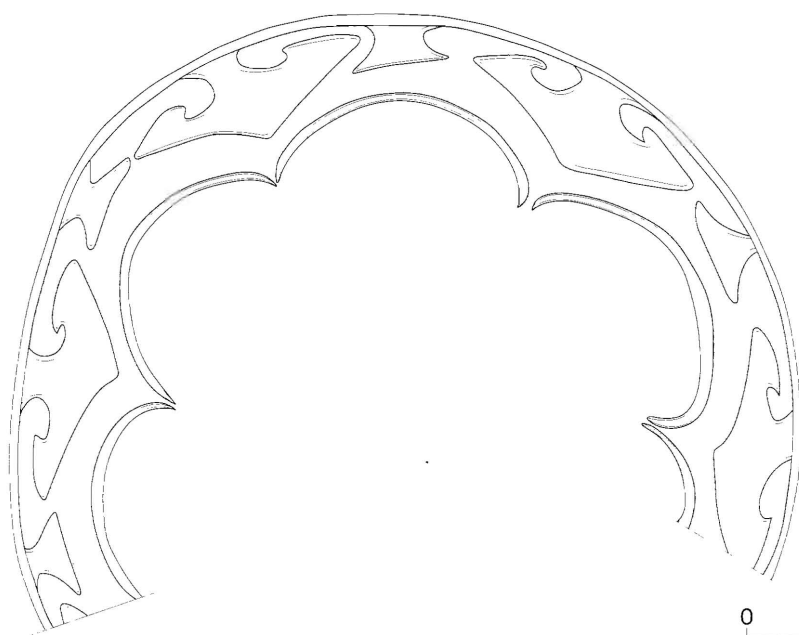
219上面



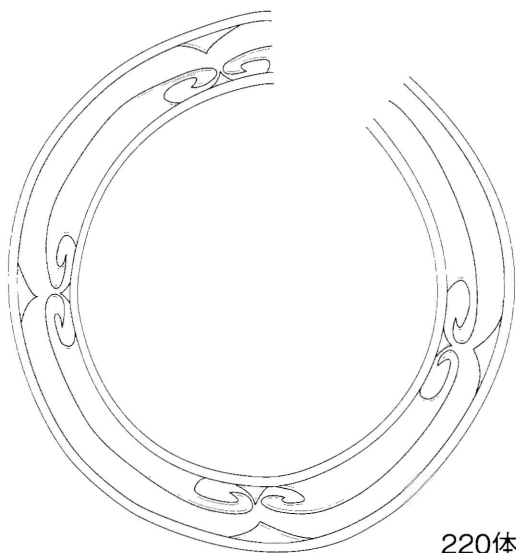
219側面



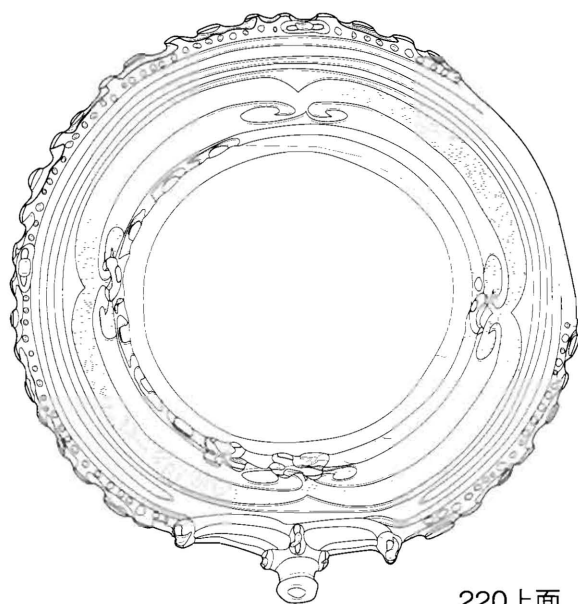
219正面



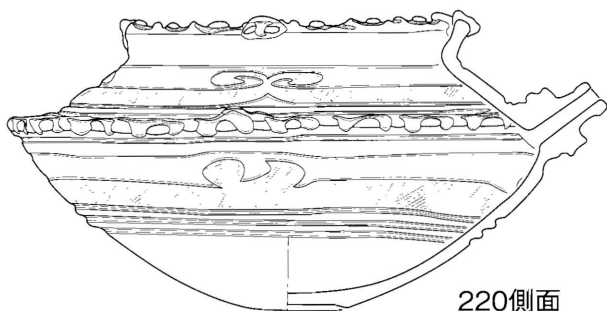
第32図 野口貝塚出土土器 注口土器 (219)



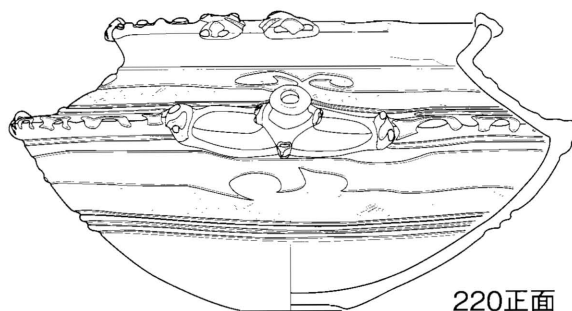
220体部上半



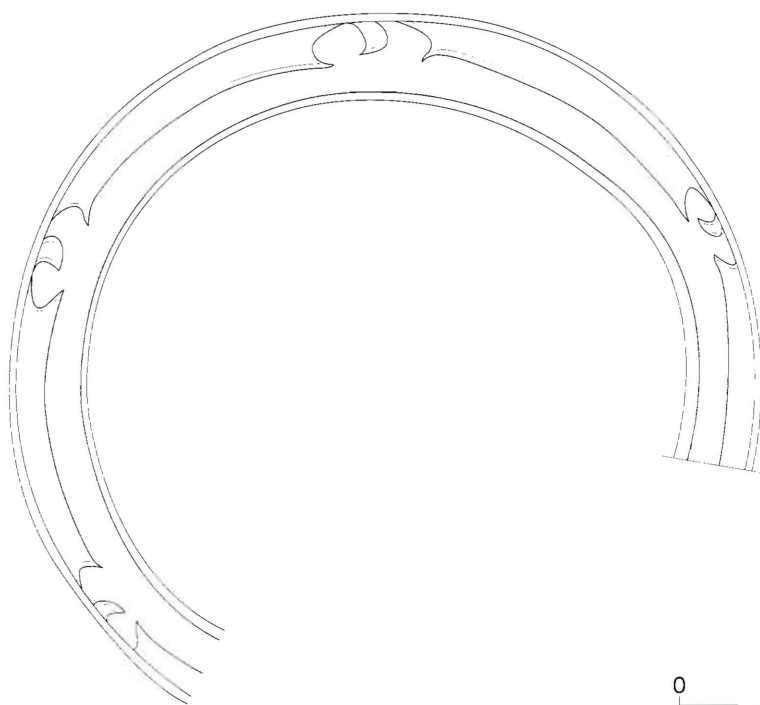
220上面



220側面



220正面



220体部下半

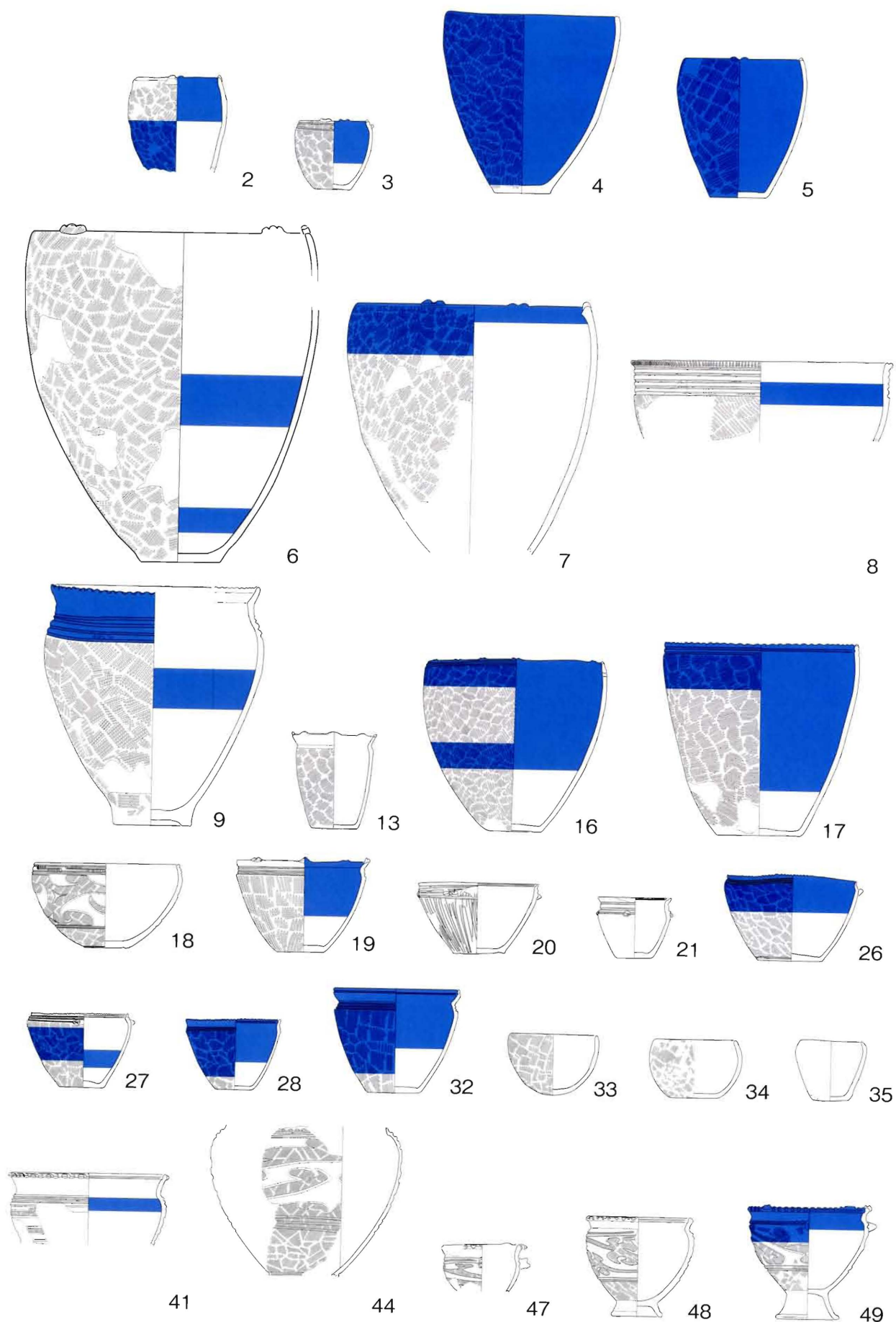


第33図 野口貝塚出土土器 注口土器 (220)



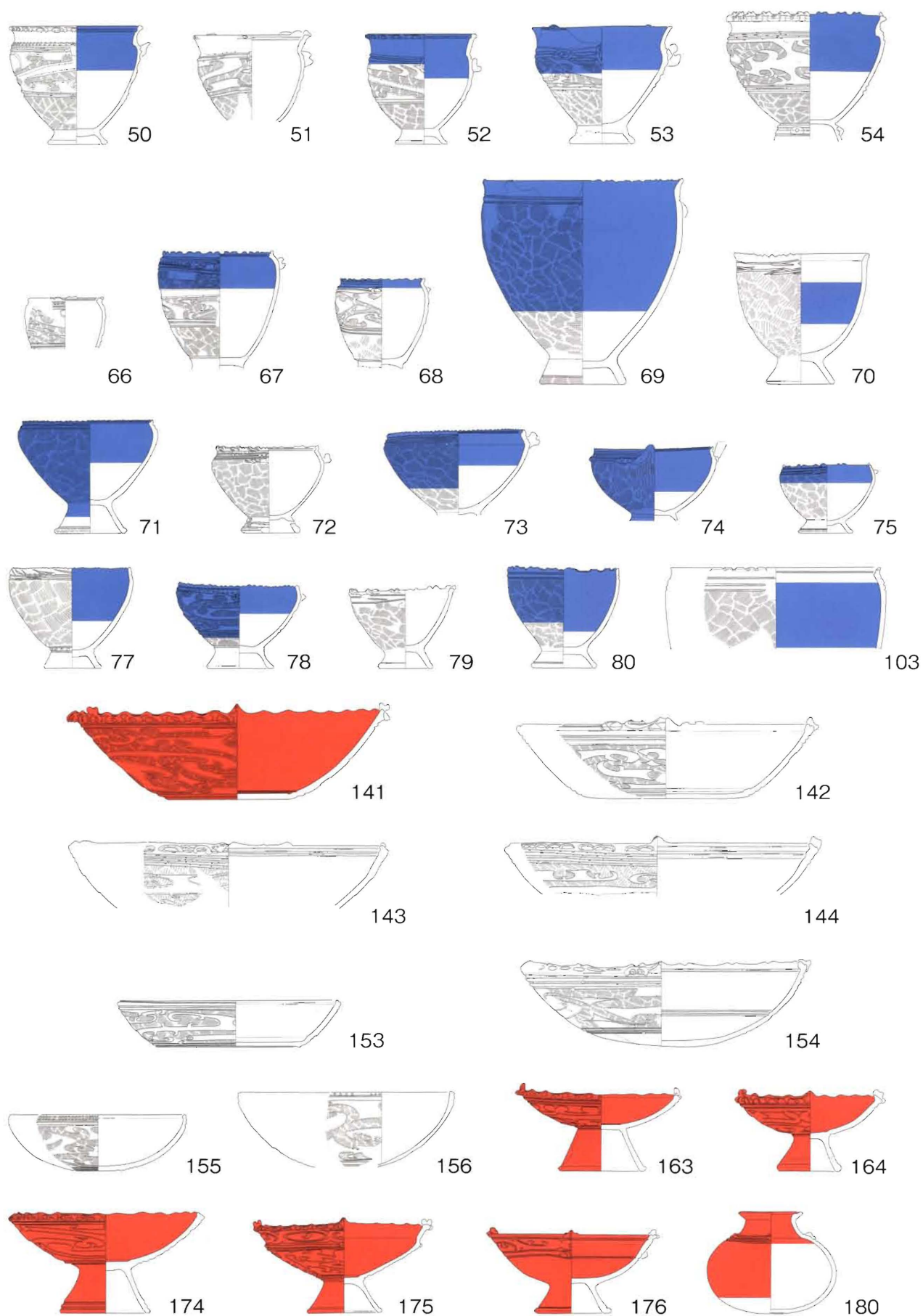


第34図 野口貝塚出土土器 注口土器・ミニチュア土器・台部 (221～233)



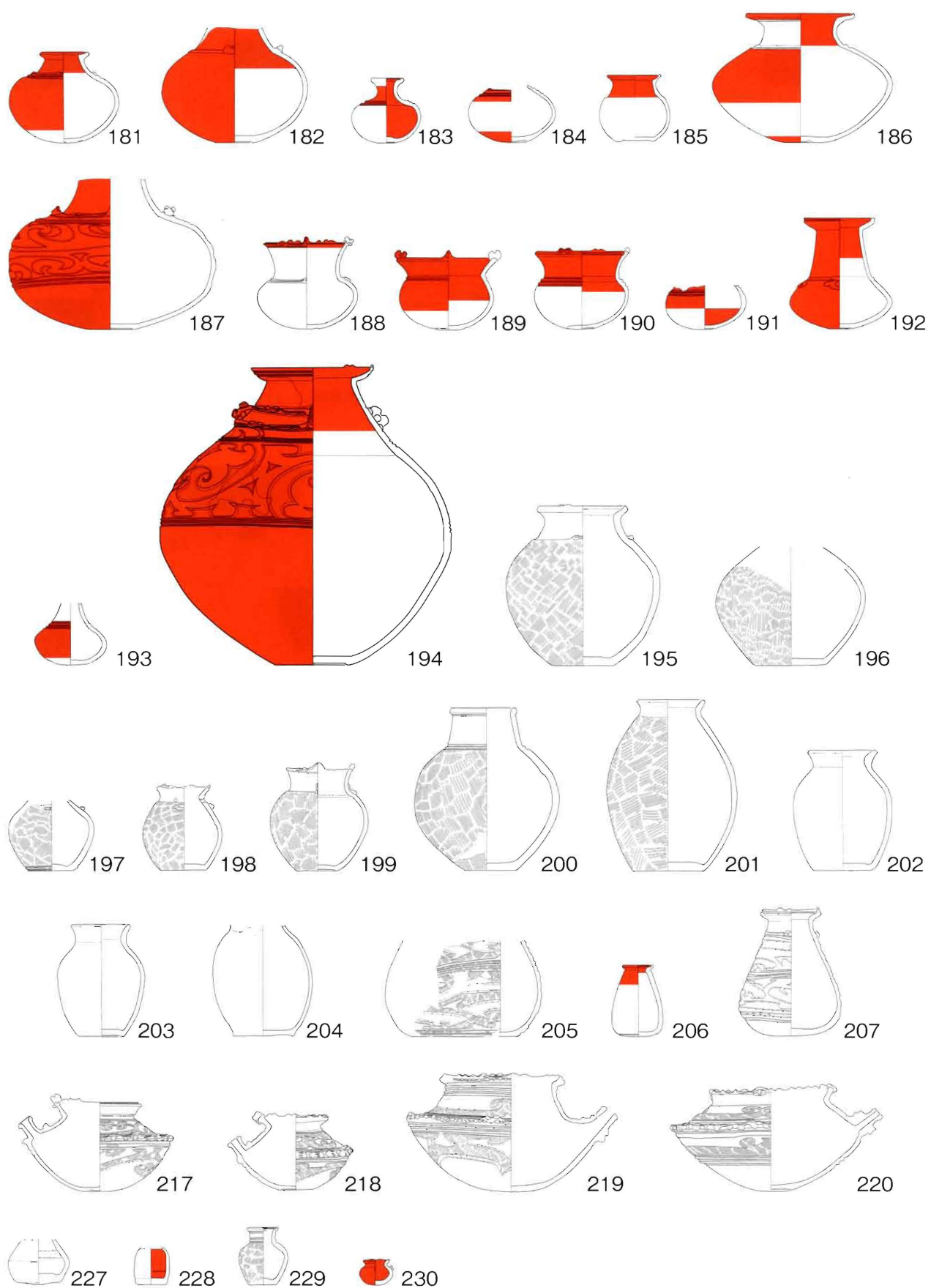
第35図 炭化物・赤彩が見られた土器 (1)

0 10cm



第36図 炭化物・赤彩が見られた土器（2）

0 10cm



第37図 炭化物・赤彩が見られた土器（3）

0 10cm

番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
1	深鉢	I A	—	口縁部に無文帯。	縄文LR	—	18.7
2	深鉢	I A	—	口縁部に B 突起が 1 単位。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	11.4
3	深鉢	I A	—	口唇部に B 突起が 2 単位、口唇部上面に縄文 LR が施文。口縁部に B 突起が 1 単位。内面に炭化物付着。平底。	縄文LR	9.1	8.9
4	深鉢	I A	—	内・外面に炭化物付着。平底。	縄文LR	21.0	20.4
5	深鉢	I A	—	口唇部に B 突起が 1 単位残存。突起部に縄文 LR が施文。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文LR	16.0	14.9
6	深鉢	I A	—	口唇部に 3 瘤の突起が 2 単位残存。内面に炭化物付着。平底。	縄文LR	38.8	34.0
7	深鉢	II A	—	口唇部に B 突起が 2 単位残存。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	28.8
8	深鉢	III A	—	口唇部上面に沈線が 1 条、外面に刻目列、その下に沈線が 5 条。内面に炭化物付着。	縄文RL	—	30.1
9	深鉢	IV B	—	小波状口縁。接合が悪く口縁部が歪んでいる。口縁部に沈線が 4 条。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文LR	27.7	(25.2)
10	深鉢	IV B	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が 1 条。体部の突起が剥離した部分にも縄文が施文。外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
11	深鉢	IV B	—	小波状口縁。口唇部に突起が 1 単位残存。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
12	深鉢	IV B	—	小波状口縁。体部に B 突起が 1 単位残存。外面に炭化物付着。	縄文RL	—	—
13	深鉢	IV A	—	口唇部に瘤状の突起が 4 単位残存。平底。	縄文LR	11.3	9.4
14	深鉢	VB	—	小波状口縁。同一個体が計 2 点。補修孔がある。	縄文RL	—	—
15	深鉢	VB	—	小波状口縁。口唇部に B 突起が 2 単位残存。	縄文LR	—	—
16	鉢	I A	—	口唇部に B 突起が 11 単位残存。口縁部に補修孔が 2 個。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文RL	20.0	21.2
17	鉢	I B	—	小波状口縁。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文LR	22.2	22.7
18	鉢	II A	区画文 II 1	口縁部に羊歯状文が 9 単位。体部に区画文が 4 単位。三叉状、ノの字状の充填文が施文。内面がよく磨かれている。丸底。	縄文LR	9.7	17.3
19	鉢	III A	—	口唇部に A 突起と B 突起が交互に配置され、それぞれ 4 単位ある。内面に炭化物付着。平底。	縄文RL	10.5	15.1
20	鉢	III A	—	口唇部内面に沈線が 1 条。口縁部に B 突起が 5 単位残存、突起が 1 単位剥離している。基本的に地文、沈線、突起の順番に装飾が施されているが、突起の剥離部には地文がみられるので、部分的に地文の装飾順番が異なっている。平底。	条痕	8.2	14.1
21	鉢	III A	—	口唇部内面に沈線が 1 条。体部に 2 個 1 対の突起が 3 単位、単一のものが 1 単位。平底。	無	7.1	8.4
22	鉢	III A	—	口唇部に B 突起が 2 単位残存。体部に B 突起が 1 単位残存。外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
23	鉢	III B	—	小波状口縁。	縄文LR	—	—
24	鉢	III B	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が 1 条。内・外面に炭化物付着。	縄文RL	—	—
25	鉢	III B	—	小波状口縁。	条痕	—	—
26	鉢	III B	—	小波状口縁。体部に突起が 1 単位。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文LR	10.0	15.4
27	鉢	III B	—	小波状口縁。体部に 2 個 1 対の突起が 1 単位。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文RL	9.5	11.0
28	鉢	III B	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が 1 条。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文LR	8.2	12.0
29	鉢	III B	—	小波状口縁。外面に炭化物付着。	縄文RL	—	—
30	鉢	III B	—	小波状口縁。	条痕	—	—
31	鉢	III B	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が 1 条。	縄文LR	—	—
32	鉢	IV A	—	口唇部内面に沈線が 1 条。内・外面に炭化物付着。平底。	縄文LR	12.1	14.6
33	鉢	IV A	—	内面調整が粗く、凹凸がある。丸底。	縄文LR	7.1	10.5
34	鉢	IV A	—	外面が磨減している。平底。	縄文LR	6.8	10.7
35	鉢	IV A	—	内・外面共に調整が粗い。平底。	無	7.0	8.5
36	鉢	V 1 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。B 突起が 2 単位残存。頸部に文様がめぐる。	縄文LR	—	(24.1)

野口貝塚出土土器観察表（1）



番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
37	鉢	V 1 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、頸部に三日月状の文様、刺突列がめぐる。体部に四角形状、ノの字状の充填文が施文。	縄文LR	—	—
38	鉢	V 1 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。頸部に文様、刺突列がめぐる。	縄文LR	—	(29.9)
39	鉢	V 1 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。頸部に三日月状の文様、刺突列がめぐる。体部に突起が2単位残存。1単位はB突起、1単位は縦位のB突起。	縄文LR	—	(13.6)
40	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。体部に縦位のB突起が1単位残存。	縄文LR	—	(16.3)
41	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	(18.6)
42	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、突起が1単位残存。	縄文LR	—	(15.0)
43	鉢	V 2 A	—	口唇部にB突起が1単位残存、内面に沈線が1条。体部に縦位のB突起が1単位。沈線間に刺突列。	縄文LR	—	(18.7)
44	鉢	V 2 C	—	頸部に刺突列。台部を伴う。	縄文LR	—	(22.0)
45	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。口唇部にB突起が1単位残存。	縄文LR	—	(24.2)
46	鉢	V 2 C	—	口縁部の沈線の中に刺突列がめぐる。体部に突起が1単位残存。磨消部に縄文が残っている。	縄文RL	—	(15.5)
47	鉢	V 2 C	区画文 I 2	口唇部に彫り込みによる突起列、B突起が3単位残存。体部に縦位のB突起が1単位。体部に区画文が3単位。四角形状、ノの字状の充填文が施文。	縄文LR	—	9.9
48	鉢	V 2 C	区画文 I 2	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。体部に突起が1単位あるが、剥離している。体部に区画文が3単位。四角形状、ノの字状の充填文が施文。	縄文LR	11.4	12.4
49	鉢	V 2 C	区画文 I 2	口唇部にB突起が2単位残存。口唇装飾は外面と内面から彫り込むことによって小波状を呈する。口唇部内面に沈線が1条。頸部に刺突列。体部に突起が1単位残存、区画文が6単位。四角形状、ノの字状の充填文が施文。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	13.3	14.1
50	鉢	V 2 C	区画文 I 1	口唇部に彫り込みによる突起列。頸部に刺突列。体部に突起が1単位。突起は破損している。区画文が4単位。四角形状、ノの字状の充填文が施文。内面に炭化物付着。	縄文LR	13.5	15.3
51	鉢	V 2 C	区画文 I 1	口唇部に彫り込みによる突起列、B突起が3単位残存。体部に縦位のB突起が1単位、区画文が3単位。三叉状、四角形状、ノの字状の充填文が施文。	縄文LR	—	13.3
52	鉢	V 2 C	区画文 I 2	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。体部に縦位のB突起が1単位。体部に区画文が3単位。四角形状、ノの字状の充填文が施文。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	12.6	12.7
53	鉢	V 2 C	配置文 Ⅲ 1	口唇部に彫り込みによる突起列、B突起が2単位残存。体部に突起が3単位。うち2単位はB突起、1単位は縦位のB突起。体部に区画文が4単位。三叉状、ノの字状の充填文が施文。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	13.6	16.1
54	鉢	V 2 C	区画文 I 3	口唇部に彫り込みによる突起列、B突起が11単位。体部に区画文が3単位。台部にB突起が4単位。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	18.2
55	鉢	V 2 C	区画文 I 2	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。頸部に左方向から右方向への刺突列。体部に区画文。	縄文LR	—	—
56	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。同一個体が計2点。	縄文LR	—	—
57	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
58	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。頸部に刺突列。	縄文LR	—	—
59	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
60	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。内・外面に炭化物付着。同一個体が計3点。	縄文LR	—	—
61	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
62	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。体部に縦位のB突起が1単位残存。同一個体が計2点。	縄文LR	—	—
63	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、B突起が1単位残存。	縄文LR	—	—

野口貝塚出土土器観察表（2）

番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
64	鉢	V 2 C	—	沈線間に刺突列。内面に炭化物付着。同一個体が計2点。	縄文LR	—	—
65	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。内面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
66	鉢	VI C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。口縁部に刺突列。	縄文LR	—	(9.0)
67	鉢	VI C	区画文 Ⅲ 1	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。体部の沈線間に刺突列がめぐる。刺突列には部分的に羊歯状文に似た文様がみられる。体部に突起が3単位残存。うち2単位はB突起、1単位は縦位のB突起。体部に区画文が2単位。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	13.9
68	鉢	VI C	区画文 Ⅱ 2	口唇部に彫り込みによる突起列、B突起が13単位。口縁部にB突起が1単位。体部に区画文が4単位。うち1単位は他の3単位と形が異なっている。口縁部の内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	10.7
69	鉢	VII C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。口縁部に突起が1単位。突起は破損している。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	32.6	22.9
70	鉢	VII B	—	小波状口縁。口縁部に沈線が2条めぐると思われるが、何度も描いた痕が全体に残存しており、正確な数は不明。内面に炭化物付着。	縄文LR	15.0	15.5
71	鉢	VIII B	—	外面からの彫り込みによって、口縁部が小波状を呈する。口唇部内面に沈線が1条。内・外面に炭化物付着。	縄文RL	12.9	16.0
72	鉢	VIII B	—	小波状口縁。口唇部にB突起が13単位、内面に沈線が1条。頸部に沈線が4条。沈線の1本目と2本目には2～4つを1単位とした刺突が等間隔にめぐる。体部に縦位のB突起が1単位、両脇にB突起が各1単位。台部にはS字状の文様が5単位。各文様の中には穿孔が3単位。	縄文RL	10.0	12.8
73	鉢	VIII B	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条。口縁部に縦位のB突起が1単位。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	16.5
74	鉢	VIII B	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条。口縁部にA突起が1単位、B突起が5単位。A突起直下にのち条痕が施文。地文は縄文、条痕の順番に施文。内・外面に炭化物付着。	縄文RL と条痕	—	14.3
75	鉢	IX A	—	口唇部にB突起が10単位残存。口縁部にB突起が2単位。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	8.0	10.9
76	鉢	IX B	—	小波状口縁。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
77	鉢	IX B	—	小波状口縁。口縁部に羊歯状文が施文。文様の一部の刺突は1条目の沈線上に6個、または7個ある。2条目の沈線は途中で切れている部分が4箇所ある。体部と台部の境界に刺突列。内面に炭化物付着。	縄文RL	(11.6)	14.2
78	鉢	IX B	配置文 VI 3	小波状口縁。口縁部の沈線間に右方向からの刺突列。体部にB突起が6単位。突起に右方向からの刺突列が2列～3列施文。体部に配置文2単位。三叉状、四角形状、楕円形状の充填文が施文。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	9.9	14.3
79	鉢	X A	—	口縁部にB突起が12単位残存。口縁部に沈線が2条。その直下に突起が1単位剥離。剥離面に縄文がみられる。	縄文LR	9.2	12.1
80	鉢	X C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	11.6	12.9
81	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。突起が1単位残存。	縄文LR	—	—
82	鉢	VII C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。頸部にB突起が1単位残存。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
83	鉢	VII C	—	口唇部に彫り込みによる突起列。突起が1単位残存。	縄文LR	—	—
84	鉢	VII A	—	口唇部に突起が1単位残存。口唇部上面に沈線が1条。内面に炭化物付着。	縄文RL	—	—
85	鉢	VII C	—	口唇部に突起列、突起が1単位残存。	縄文LR	—	—
86	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
87	鉢	VIII A	—	羊歯状文、雲形文が施文。	縄文LR	—	—
88	鉢	V 2 C	—	口唇部上面に突起が2単位残存、内面に沈線が1条。頸部に左方向からの刺突列。	縄文RL	—	—
89	鉢	V 2 C	—	口唇部に彫り込みによる突起列、A突起が1単位残存、内面に沈線が1条。	—	—	—

野口貝塚出土土器観察表（3）



番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
90	鉢	—	—	四角形状、ノの字状の充填文が施文。	縄文LR	—	—
91	鉢	ⅢB	—	小波状口縁。口唇部に突起が1単位残存。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
92	鉢	ⅢA	—	口唇部にB突起が1単位残存。沈線間に右方向からの刺突列。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
93	鉢	ⅢA	—	口唇部内面に沈線が1条、外面に刻目列。外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
94	鉢	ⅧB	—	口唇部上面に刻目列、突起が3単位残存。口唇部内面に沈線が1条。外面の沈線間に刺突列がめぐる。	縄文RL	—	—
95	鉢	ⅢA	—	口唇部に突起が3単位。突起の下に短沈線。	縄文LR	—	—
96	鉢	ⅦC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	縄文LR	—	—
97	鉢	ⅦC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	縄文LR	—	—
98	鉢	ⅧC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。口唇部内面に沈線が1条。口縁部の沈線間に刺突列。	縄文LR	—	—
99	鉢	ⅧC	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。口縁部に刺突列。	縄文LR	—	—
100	鉢	ⅨC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
101	鉢	ⅦC	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が1条。口縁部の沈線間に刺突列。内面に炭化物付着。	縄文RL	—	—
102	鉢	ⅨC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。口縁部に列点。	縄文LR	—	—
103	鉢	ⅦC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。口唇部内面に沈線が1条。体部の突起が剥離している。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	(25.1)
104	鉢	ⅦC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	縄文LR	—	—
105	鉢	ⅦC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
106	鉢	ⅧB	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条、B突起が2単位残存。口縁部の沈線間に刺突列。突起が1単位。内面に炭化物付着。	縄文RL	—	—
107	鉢	ⅧB	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条、突起が2単位残存。外面の沈線間に刺突列。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
108	鉢	ⅨB	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条、B突起が2単位残存。口縁部の沈線間に刻目列。	縄文LR	—	—
109	鉢	ⅧB	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条。口縁部の沈線間に刻目列。	縄文LR	—	—
110	鉢	ⅧB	—	小波状口縁。沈線間に刺突列。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
111	鉢	ⅧB	—	小波状口縁。口唇部にB突起が2単位残存。頸部に羊歯状文。	縄文LR	—	—
112	鉢	ⅠA	—	折り返し口縁。	条痕	—	—
113	鉢	ⅠA	—	口唇部にB突起が1単位残存。沈線間に刺突列。	縄文LR	—	—
114	鉢	ⅠA	—	口縁部に2条の平行沈線。内・外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
115	鉢	ⅠB	—	口唇部にB突起が1単位残存。	縄文LR	—	—
116	鉢	ⅠA	—	小波状口縁。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
117	鉢	ⅣC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。口縁部の沈線間に刺突列。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
118	鉢	ⅠA	—	口縁部に羊歯状文。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
119	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
120	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。外面に炭化物付着。	縄文RL	—	—
121	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。口唇部にB突起が1単位残存。口縁部の沈線間に刺突列。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
122	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。口縁部に羊歯状文。	—	—	—
123	鉢	ⅨB	—	小波状口縁。内面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
124	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。口縁部の沈線間に刺突列。	縄文LR	—	—
125	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。口縁部の沈線間に刺突列。	縄文LR	—	—
126	鉢	ⅣA	—	口縁部の沈線間に刻目列。	—	—	—
127	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。口縁部に羊歯状文。内面に爪痕がみられる。	縄文LR	—	—
128	鉢	ⅣB	—	小波状口縁。外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—
129	鉢	ⅠB	—	小波状口縁。口縁部の沈線間に右方向からの刺突列。外面に炭化物付着。	縄文LR	—	—

野口貝塚出土土器観察表（4）

番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
130	鉢	IXC	—	口唇部に彫り込みによる突起列。口縁部の沈線間に刺突列。縦位のB突起が1単位残存。	縄文LR	—	—
131	鉢	IVA	—	内・外面に炭化物付着。	条痕	—	—
132	鉢	IIIB	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
133	鉢	IVA	—	口唇部に刻目列。	縄文RL	—	—
134	鉢	IVB	—	小波状口縁。口縁部の沈線間に刺突列。	縄文LR	—	—
135	鉢	IVB	—	小波状口縁。口唇部にB突起が1単位残存。口縁部に羊歯状文。	縄文LR	—	—
136	鉢	IVB	—	小波状口縁。口縁部に羊歯状文。	縄文LR	—	—
137	鉢	IVB	—	小波状口縁。口唇部内面に沈線が1条。口縁部にA突起が1単位、B突起が2単位残存。	縄文RL	—	(16.1)
138	鉢	IVA	—	渦巻き文が施文。	—	—	—
139	鉢	IVA	—	口唇部内面に沈線が1条。工字文がみられる。	縄文RL	—	—
140	鉢	—	—	2個1対の瘤状の突起が2単位残存。変形工字文がみられる。	—	—	—
141	皿	IB	配置文 V 3	口唇部に彫り込みによる突起列。口唇部にA突起が5単位。体部に配置文が4単位、2単位1組で施文。S字状、ノの字状、四角形状、文様帯を縦に区画する充填文が施文。内・外面に赤彩。平底。	縄文LR	11.0	36.8
142	皿	IA	—	口唇部上面に沈線が1条、彫り込みによる突起が1単位、B突起が3単位残存。四角形状、ノの字状の充填文が施文。平底。	縄文LR	9.3	(34.5)
143	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が2条。口唇部が摩滅しており、正確な装飾は不明。	縄文LR	—	(36.5)
144	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に沈線が2条。口唇部が摩滅しており、正確な装飾は不明。口唇部に彫り込みがあるA突起が1単位。	縄文LR	—	(36.5)
145	皿	IA	—	口唇部に三叉状の彫り込み、突起が1単位残存。外面に赤彩。	縄文LR	—	—
146	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	無	—	—
147	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	縄文LR	—	—
148	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列、内面に刻目列、突起が1単位残存。	縄文LR	—	—
149	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	縄文LR	—	—
150	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	無	—	—
151	皿	IA	—	口唇部上面に沈線が1条。外面に赤彩。	縄文LR	—	—
152	皿	IB	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	縄文LR	—	—
153	皿	IA	配置文 VII 2	口唇部上面に沈線が1条。体部に配置文が3単位、間に四角形状、ノの字状の充填文が施文。平底。	縄文LR	5.3	25.5
154	皿	II B	配置文 VI 1	口唇部上面に短沈線がめぐる。口唇部にA突起が2単位、B突起が10単位残存。体部に配置文が4単位、四角形状、三叉状の充填文が施文。丸底。体部に補修孔あり。	縄文LR	10.0	32.7
155	皿	IIIA	—	口唇部外面に刺突列。体部に四角形状、ノの字状の充填文が施文。丸底。同一個体が計3点。	縄文LR	6.5	(20.4)
156	皿	IIIA	—	口唇部外面に刺突列。体部に四角形状、ノの字状の充填文が施文。同一個体が計2点。	縄文LR	—	(24.8)
157	皿	IIIA	—	内面に赤彩。	縄文LR	—	—
158	皿	IIIA	—	口唇部外面に刺突列。	縄文LR	—	—
159	皿	IIIA	—	口唇部外面に刺突列。	縄文LR	—	—
160	皿	IIIA	—	口唇部外面に刺突列。	縄文LR	—	—
161	皿	IIIA	—	口唇部外面に刺突列。	縄文LR	—	—
162	皿	IIIA	—	口唇部上面に短沈線がめぐる。	縄文LR	—	—
163	皿	IVB	区画文 IV 1	口唇部に彫り込みによる突起列。口縁部に突起が1単位。体部に区画文が2単位、三叉状、四角形状、ノの字状の充填文が施文。内・外面に赤彩。上面から見て楕円形である。	無	10.0	18.8
164	皿	IVB	配置文 VII 1	口唇部に彫り込みによる突起列。口唇部上面に彫り込みがある突起が5単位。体部に配置文が2単位、三叉状、四角形状の充填文が施文。内・外面に赤彩。	無	8.7	17.2

野口貝塚出土土器観察表（5）

番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
165	皿	Ⅱ B	—	口唇部に彫り込みによる突起列。内面に縄文が施されている隆帯が1条。	縄文LR	—	—
166	皿	Ⅱ B	—	口唇部に彫り込みによる突起列。内・外面に赤彩。	無	—	—
167	皿	Ⅱ B	—	小波状口縁。口唇部に突起が1単位残存。	縄文LR	—	—
168	皿	Ⅱ A	—	口唇部上面に沈線が1条。口唇部に突起が一単位、B突起が2単位残存。内・外面に赤彩。	無	—	—
169	皿	Ⅱ A	—	口唇部上面に沈線が1条。内・外面に赤彩。	縄文LR	—	—
170	皿	Ⅱ A	—	口唇部上面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
171	皿	Ⅱ A	—	口唇部上面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
172	皿	Ⅱ A	—	口唇部上面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
173	皿	Ⅱ A	—	口唇部上面に沈線が1条。	縄文LR	—	—
174	皿	Ⅳ B	配置文 Ⅵ 2	口唇部に彫り込みによる突起列。体部に配置文が3単位、うち1単位のみ形が他と異なる。三叉状、四角形状、ノの字状の充填文が施文。内・外面に赤彩。	無	11.3	22.4
175	皿	Ⅴ B	配置文 Ⅰ 1・ Ⅴ 2	口唇部に彫り込みによる突起列。口唇部に突起が4単位。頸部に配置文が9単位、三叉状の充填文が施文。体部に配置文が3単位、うち1単位のみ形が他と異なる。三叉状、四角形状、ノの字状の充填文が施文。体部にB突起が4単位。内・外面に赤彩。	無	10.9	20.5
176	皿	Ⅴ A	配置文 Ⅰ 1	口唇部上面に沈線が1条。口唇部に突起が4単位。頸部に配置文が8単位、三叉状、ノの字状の充填文が施文。体部にB突起が1単位。内・外面に赤彩。	無	9.6	19.7
177	皿	—	—	底部内面に縄文が施されている隆帯が1条。外面に黒漆、内面に黒漆と赤漆が塗られている。	縄文LR	—	—
178	皿	—	—	底部内面に縄文が施されている隆帯が1条。	縄文LR	—	—
179	皿	—	—	底部外面に文様が残存。	縄文LR	—	—
180	壺	Ⅰ A	—	口唇部内面に段差。頸部と体部の境界に3条の平行沈線。頸部にB突起が1単位残存。内・外面に赤彩。丸底。	無	11.7	14.7
181	壺	Ⅰ A	—	頸部と体部の境界に沈線が2条。B突起が4単位。内・外面に赤彩。底部の作り出しが中心よりずれている。丸底。	無	10.3	12.4
182	壺	Ⅰ A	—	頸部と体部の境界に隆帯が1条。隆帯上にB突起が1単位。内・外面に赤彩。外面の剥離が目立つ。平底。	無	—	16.5
183	壺	Ⅰ A	—	頸部と体部の境界に沈線が2条。内・外面に赤彩。ベンガラ保存容器としていた可能性がある。平底。	無	7.9	7.9
184	壺	Ⅰ A	—	頸部と体部の境界に沈線が3条。外面に赤彩。平底。	無	—	10.0
185	壺	Ⅰ A	—	内・外面に赤彩。底部に4単位の脚部。	無	7.6	8.3
186	壺	Ⅰ A	—	口唇部内面に段差、外面に沈線が1条。頸部と体部の境界に沈線が1条。内・外面に赤彩。平底。	無	14.7	20.4
187	壺	Ⅰ A	配置文 Ⅴ 1	頸部と体部の境界に2条の隆帯。隆帯の上段にはB突起が4単位、下段にはB突起が8単位、隆帯の上段と下段をつなぐように突起が4単位。配置文が2単位、うち1単位は形が変化している。外面に赤彩。平底。	無	—	23.5
188	壺	Ⅰ C	—	口唇部上面に沈線が1条、A突起が1単位、B突起が4単位。頸部と体部の境界にB突起が1単位。口唇部内・外面に赤彩。底部付近の孔にアスファルトによる補修痕がある。丸底。	無	10.5	11.4
189	壺	Ⅰ C	—	口唇部にA突起が4単位。頸部と体部の境界に1条の沈線。内・外面に赤彩。丸底。	無	9.1	10.7
190	壺	Ⅰ C	—	口唇部にB突起が2単位。口縁部内面に沈線が1条。内・外面に赤彩。底部の作り出しが中心からずれている。平底。	無	9.3	10.7
191	壺	Ⅰ C	—	内・外面に赤彩。丸底。	無	—	9.2
192	壺	Ⅰ D	その他	頸部と体部の境界に隆帯が1条。隆帯上に突起が4単位あるが、すべて剥離している。体部に文様が4単位。内・外面に赤彩。平底。	無	12.6	11.7
193	壺	Ⅰ D	—	外面に赤彩。外面に剥離が目立つ。底部が剥離している。	無	—	8.2

野口貝塚出土土器観察表（6）

番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
194	壺	Ⅱ D	区画文 Ⅱ 3	口唇部に B 突起が 1 単位残存。頸部と体部の境界に隆帯が 2 条。隆帯の上段と下段をつなぐように突起が 4 単位、各隆帯上に彫り込みによる装飾、B 突起が 4 単位。肩部に沈線による文様が 4 単位。体部に区画文が 4 単位施文。内・外面に赤彩。平底。	無	34.2	33.1
195	壺	Ⅱ A	—	口唇部に B 突起が 1 単位残存。頸部と体部の境界に B 突起が 1 単位。平底。	縄文LR	18.1	17.4
196	壺	Ⅱ A	—	頸部より上部が破損している。平底。	縄文LR	—	17.0
197	壺	Ⅱ A	—	体部に B 突起が 1 単位。平底。	縄文LR	—	7.7
198	壺	Ⅱ C	—	口唇部に B 突起が 2 単位残存。頸部と体部の境界に B 突起が 1 単位。頸部に孔が 1 単位。平底。	縄文LR	9.7	8.9
199	壺	Ⅱ C	—	口唇部に A 突起が 1 単位、B 突起が 2 単位。頸部と体部の境界に縦位の B 突起が 1 単位。平底。	縄文RL	12.2	11.1
200	壺	Ⅱ E	—	口縁部に 1 条の沈線。頸部と体部の境界に沈線が 2 条。平底。	縄文RL	18.3	16.3
201	壺	Ⅲ C	—	平底。	縄文LR	19.4	14.7
202	壺	Ⅲ C	—	平底。	無	13.6	11.1
203	壺	Ⅲ C	—	平底。	無	12.7	9.9
204	壺	Ⅲ C	—	平底。	無	—	11.2
205	壺	Ⅲ B	—	沈線によって体部文様が 2 段に分かれている。平底。	縄文LR	—	(17.8)
206	壺	Ⅲ B	—	口唇部内面に沈線が 1 条。頸部と体部の境界に段差。底部外面に沈線が 1 条。内・外面に赤彩。丸底。	無	8.1	5.8
207	壺	Ⅲ B	配置文 Ⅱ 1・ Ⅳ 1	口唇部、頸部に B 突起が 1 単位。文様帯が 2 段に分かれている。上段に配置文が 2 単位、下段に配置文が 3 単位。ノの字状、四角形状の充填文が施文。丸底。	無	14.7	11.7
208	壺	—	—	口唇部外面に沈線が 1 条。	縄文LR	—	(14.1)
209	壺	—	—	頸部と体部の境界に 2 条の隆帯。各隆帯上に B 突起が 1 単位ずつ残存。	無	—	—
210	壺	—	—	頸部と体部の境界の沈線間に縦方向の刻目列。	縄文LR	—	(12.0)
211	壺	—	—	頸部と体部の境界に沈線が 1 条、B 突起が 1 単位残存。外面に赤彩。	無	—	—
212	壺	—	—	体部に 3 条の沈線が残存。	縄文LR	—	—
213	壺	—	—	口唇部に彫り込みによる突起列。	—	—	—
214	壺	—	—	体部に文様の一部が残存。体部の沈線間に刺突列がめぐる。	縄文LR	—	—
215	壺	—	—	体部に文様の一部が残存。体部と底部の境界に沈線が 3 条。底部に円形の作り出しがある。	縄文LR	—	—
216	壺	—	—	沈線によって文様帯が 2 段に分かれている。上段に羊歯状文、下段に雲形文が施文。同一個体が計 3 点。	縄文RL	—	—
217	注口	—	配置文 Ⅵ 1・ その他	口唇部上面に沈線が 1 条。口縁部に 2 単位 1 組で背中合わせになって施される B 突起が 4 単位、突起が 1 単位。注口部の周囲に B 突起が 4 単位。肩部に彫り込みによる突起列、突起が 2 単位残存。文様は、体部上半に配置文が 3 単位、体部下半に横に連続する文様が施文。丸底。	縄文LR	11.1	17.6
218	注口	—	配置文 Ⅱ 1・ その他	口唇部に彫り込みによる突起列、B 突起と縦位の B 突起を組み合わせた突起が 1 単位、B 突起を上下に組み合わせた突起が 4 単位。注口部の周囲に B 突起が 2 単位。肩部に彫り込みによる突起列。文様は、体部上半に配置文が 3 単位、体部下半に横に連続する配置文が施文。平底。	縄文LR	8.8	14.1
219	注口	—	配置文 Ⅱ 2	口唇部上面に B 突起が 3 単位残存、小波状の装飾が施される。口唇部外面に B 突起が 6 単位残存。肩部上面には彫り込みによる突起列、B 突起が 3 単位。肩部に彫り込みによる突起列。注口部は破損している。注口部の周囲に B 突起が 4 単位。文様は、体部上半に配置文が 4 単位、体部下半に配置文が 4 単位。丸底。	縄文LR	13.5	23.1
220	注口	—	配置文 Ⅱ 2	口唇部に彫り込みによる突起列がめぐり、2 単位 1 組で背中合わせになって施される B 突起が 4 単位残存、B 突起が 2 単位残存。注口部の周囲に B 突起が 3 単位。肩部上面に刺突列がめぐり、B 突起が 2 単位残存。肩部には口唇部と同じ突起列がめぐる。文様は、体部上半に配置文が 4 単位、体部下半に配置文が 4 単位。平底。	縄文LR	12.0	24.1

野口貝塚出土土器観察表（7）

番号	器種	器 形	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
221	注口	—	—	肩部から体部下半が残存。肩部に突起が1単位残存、彫り込みによる突起列。体部下半に文様の一部が残存。外面に赤彩。	縄文LR	—	—
222	注口	—	—	隆帯部から体部下半が残存。隆帯部に彫り込みによる突起列。体部下半に沈線が1条、文様の一部が残存。外面に赤彩。	縄文LR	—	—
223	注口	—	—	肩部から体部下半が残存。肩部に彫り込みによる突起列、B突起が1単位残存。体部下半に沈線が2条。	縄文LR	—	—
224	注口	—	—	口縁部から体部上半が残存。口唇部に彫り込みによる突起列。体部上半に沈線が3条。沈線間に刻目列。	縄文RL	—	—
225	注口	—	—	口縁部から体部上半が残存。文様の一部が残存。	—	—	—
226	注口	—	—	文様の一部が残存。	—	—	—
227	ミニチュア	—	—	内面に輪積み痕がみられる。平底。	無	—	7.0
228	ミニチュア	—	—	内面に輪積み痕がみられる。内面に赤彩。平底。	無	—	4.0
229	ミニチュア	—	—	口唇部内面に沈線が1条。平底。	縄文LR	6.5	5.1
230	ミニチュア	—	—	口縁部にB突起が2単位。体部に縦位のB突起が1単位。内・外面に赤彩。平底。	無	3.0	3.8
231	—	—	—	文様が3単位残存。孔が3単位残存。	縄文RL	—	—
232	—	—	—	楕円形の文様がみられる。内・外面に赤彩。	—	—	—
233	—	—	—	文様がみられる。	—	—	—

野口貝塚出土土器観察表（8）

## Ⅱ．青森県外ヶ浜町今津遺跡の縄文晩期 の土器について

藤沼邦彦・安保里美

## Ⅱ．青森県外ヶ浜町今津遺跡の縄文晩期の土器について

藤沼邦彦・安保里美

### 1. はじめに

ここで取り上げた実測図は、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査した今津遺跡の土器群を再検討するために、文様付き土器について再実測し、拓本をもとに文様の展開図を作成したものである。報告書には文様付き土器が44点あるが、三足土器のように貸し出し中のものもあり、今回、再検討の対象とすることができたのは27点であった。一部のものは施文工程図も示した。

### 2. 今津遺跡の立地

今津遺跡は、青森県外ヶ浜町（旧平館村）今津字オノ神に所在する。旧平館村は、津軽半島の北東端にあり、津軽海峡に近い、陸奥湾に沿った南北に細長い村であった。冬は西からの偏西風で積雪量も多く、夏は東からの「やませ」とよばれる季節風の影響を強く受ける地域でもある。

今津遺跡は、オノ神川と尻高川に挟まれた標高10～20mの河岸段丘上に立地する。段丘面は北東から南西へ、すなわち陸奥湾に向かって緩やかに傾斜しており、遺跡から海岸までは約200mの距離である。段丘下の海岸には人家がならぶ。遺跡の西には平館山地からのびる丘陵が迫るが、東は陸奥湾となり、晴れた日には、対岸の下北半島の西海岸や、遠くの北海道渡島半島の一部を望むことができる。

### 3. 今津遺跡の発掘調査史

今津遺跡は、津軽半島の海岸部にある縄文晩期の遺跡としては、外ヶ浜町宇鉄遺跡（旧三厩村）や五所川原市五月女菰遺跡（旧市浦村）と並ぶ重要な遺跡で、過去3回発掘調査されている。

#### （1）平館村教育委員会による発掘調査

平館村教育委員会（発掘担当者は橘善光氏。平館教委と略す）は、1972（昭和47）年、平館村史編さん事業の一環として、今津遺跡を発掘調査し、その成果を『平館村史』に発表している。発掘面積は、A区・B区あわせて24㎡である。主な出土品は、第Ⅱ層出土の縄文時代晩期中葉のものであり、報告者は大洞C2式期単一のものとする。遺物整理を担当した工藤竹久氏（現、八戸市教育委員会）の御教示によると、土器の接合率・復元率が高いことに驚いたという。平館教委の発掘地点も遺物密集ブロックを形成していた可能性が高い。しかし、2002（平成14）年に弘前大学人文学部日本考古学研究室が発掘調査した大洞C2式土器と比較すると、皿形が少ないこと、工字文や沈線多重手法による連繋入組文らしき文様が含まれていることなどの違いがみられる。

なお、平館教委の調査区は、1984年の青森県埋蔵文化財調査センターの調査区内に含まれるようであるが、報告書では、その調査区の有無や痕跡などについては全くふれていない。

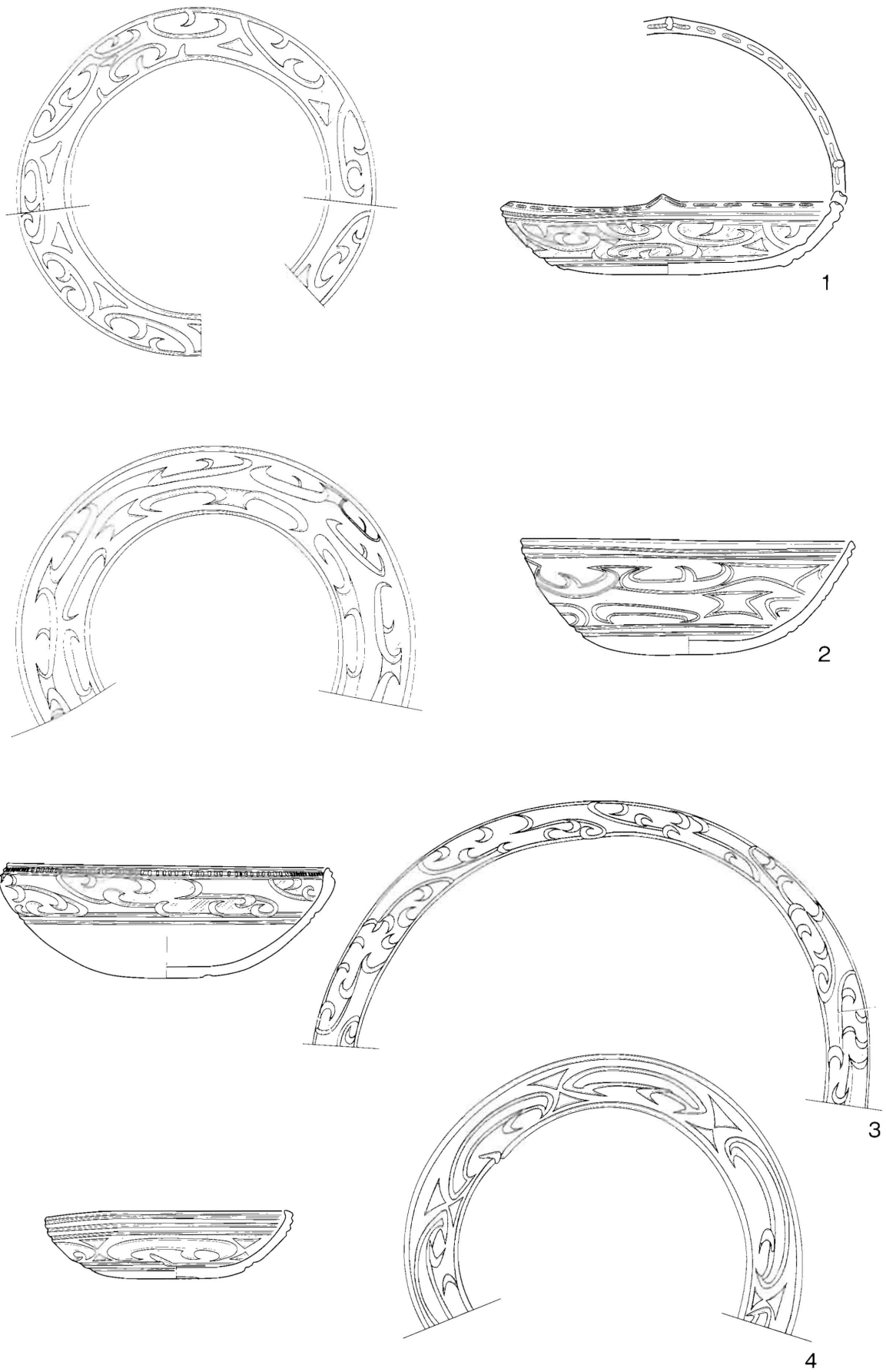
#### （2）青森県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査

青森県埋蔵文化財調査センター（県埋文と略す）は、今津バイパス施設工事に先立ち、1984（昭和59）年に今津遺跡の発掘調査を行った。発掘面積は3280㎡で『今津遺跡・間沢遺跡』が刊行された。

縄文晩期の遺構は、第Ⅱ層の遺物密集ブロック（捨て場）1ヶ所、野外石囲炉3基である。野外石囲炉は第Ⅱ層下面で検出され、遺物密集ブロック（捨て場）を囲むように存在していた。遺物密集ブロック（捨て場）は、面積が380㎡、最も厚いところで80cmあり、層の形成や土器の分布状況の在り方から、遺物密集ブロックは纏まりとしては一つであるという。また出土土器はすべて大洞C2式土器の単一型式であると結論している。

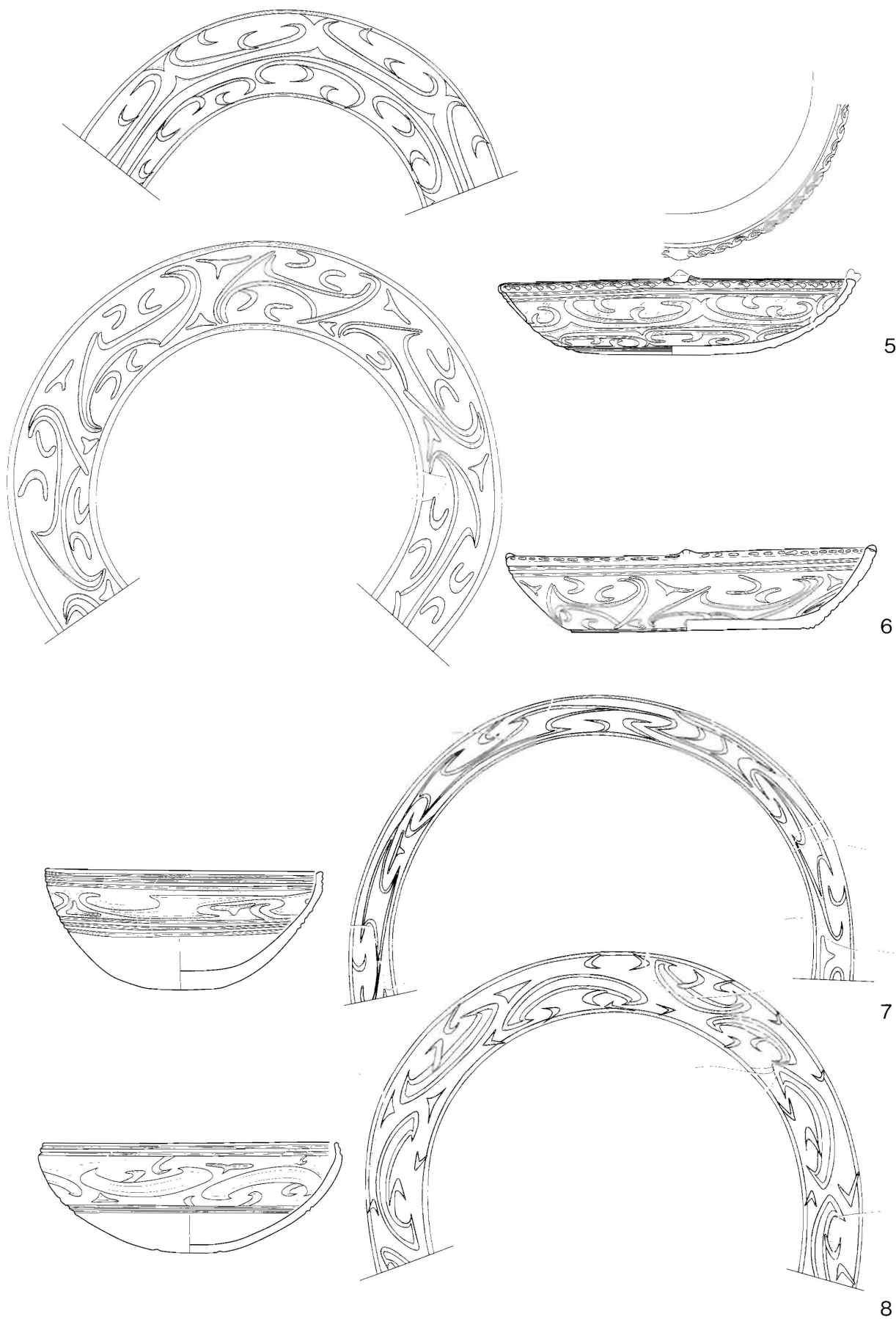






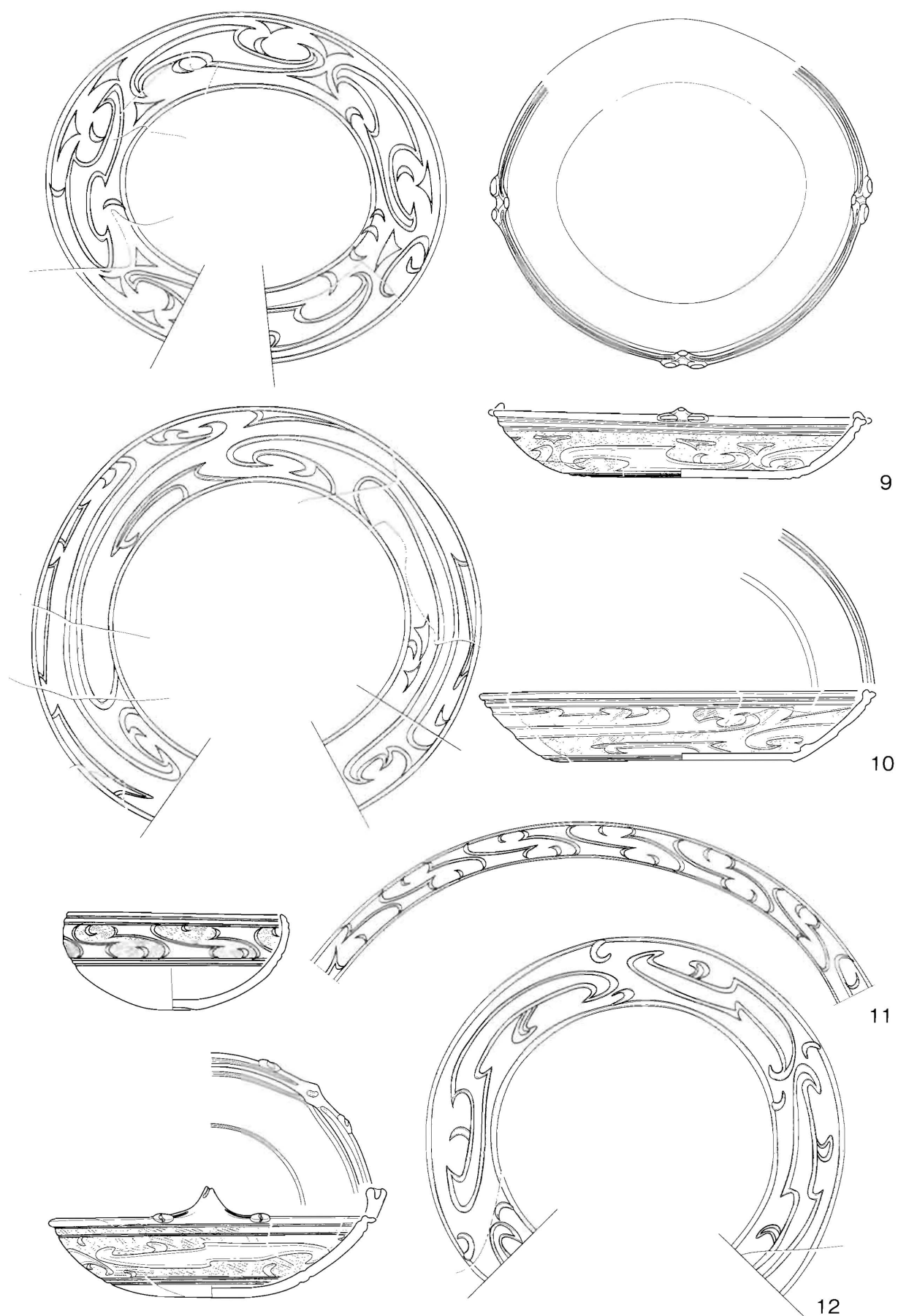
第38図 今津遺跡出土土器 皿・浅鉢 (1~4)





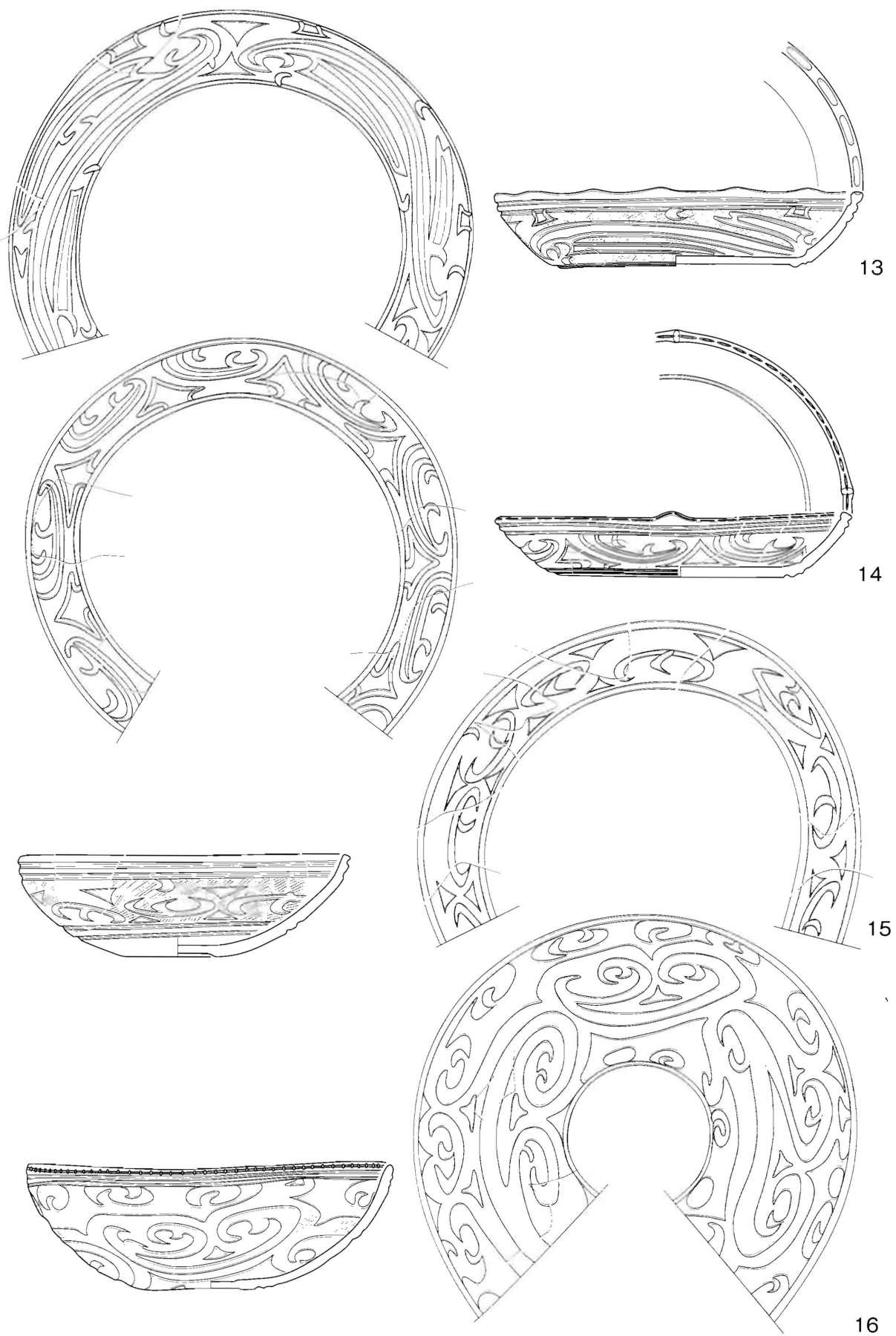
第39図 今津遺跡出土土器 皿・浅鉢（5～8）





第40図 今津遺跡出土土器 皿・浅鉢 (9~12)

0 10cm

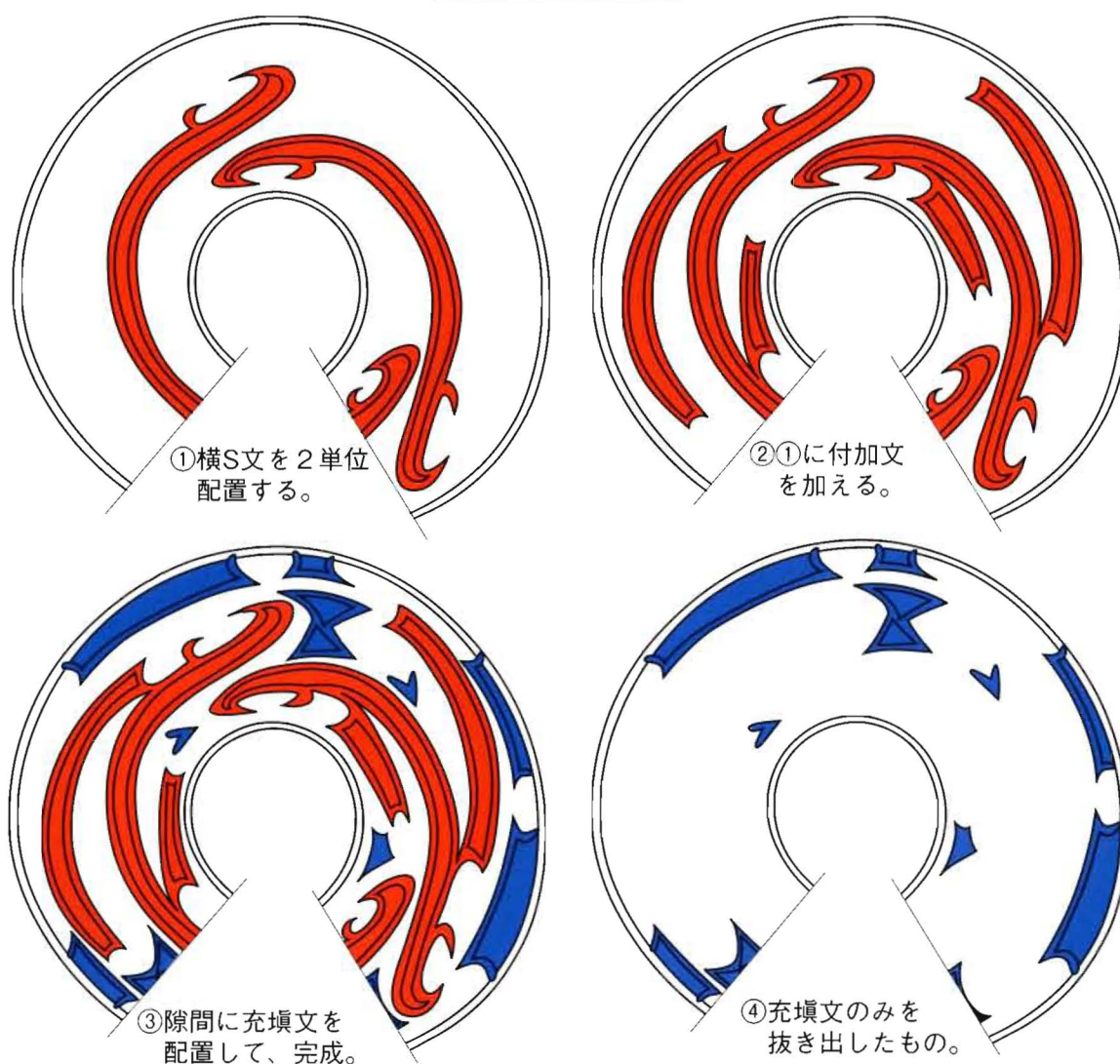
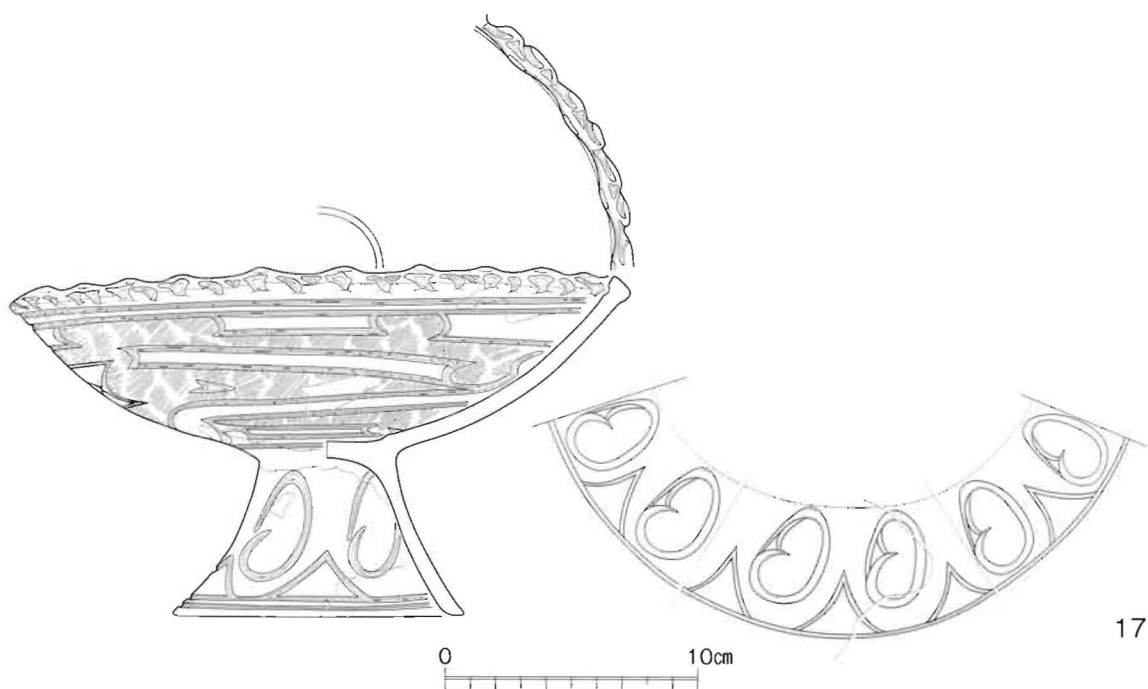


第41図 今津遺跡出土土器 皿・浅鉢 (13~16)





第42図 今津遺跡出土土器（16の文様の施文工程）

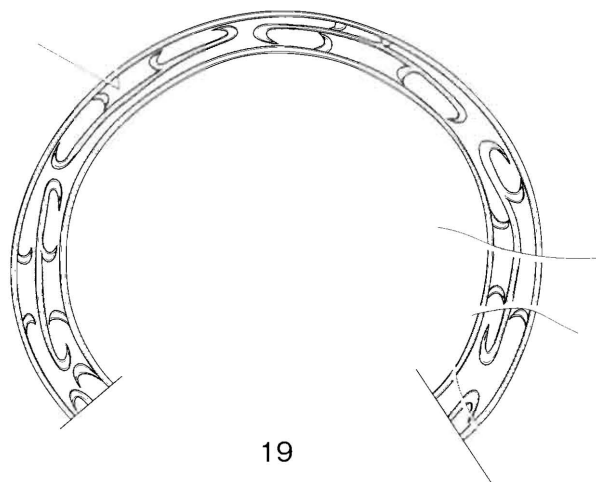
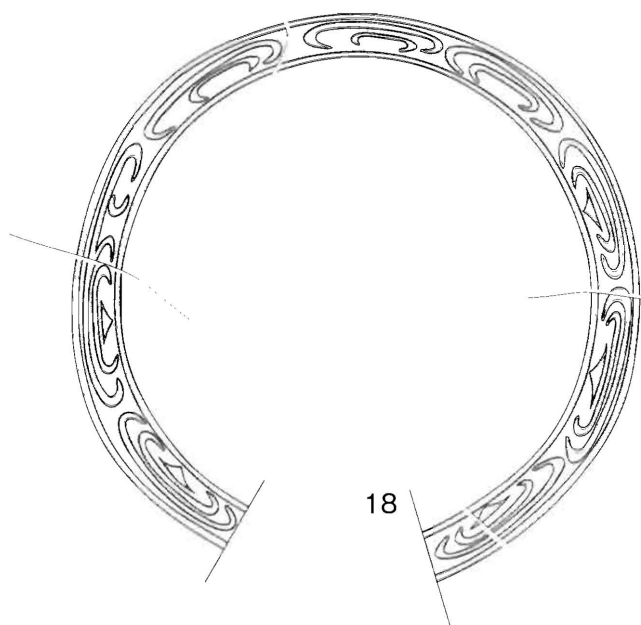
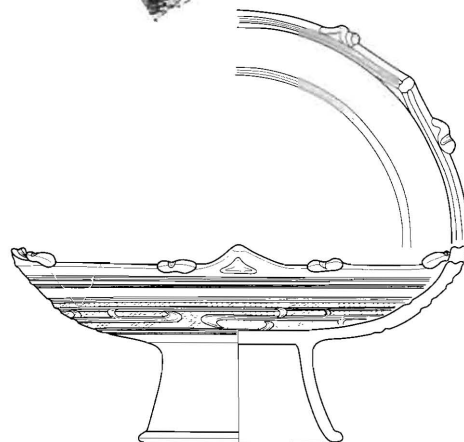
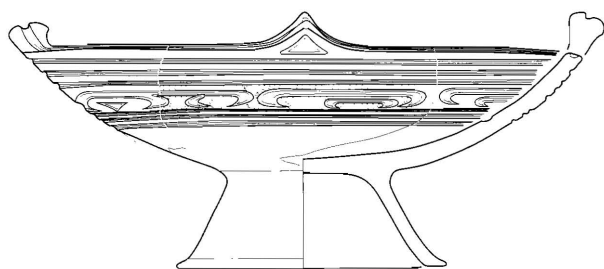


第43図 今津遺跡出土土器 浅鉢 (17)





17の拓本

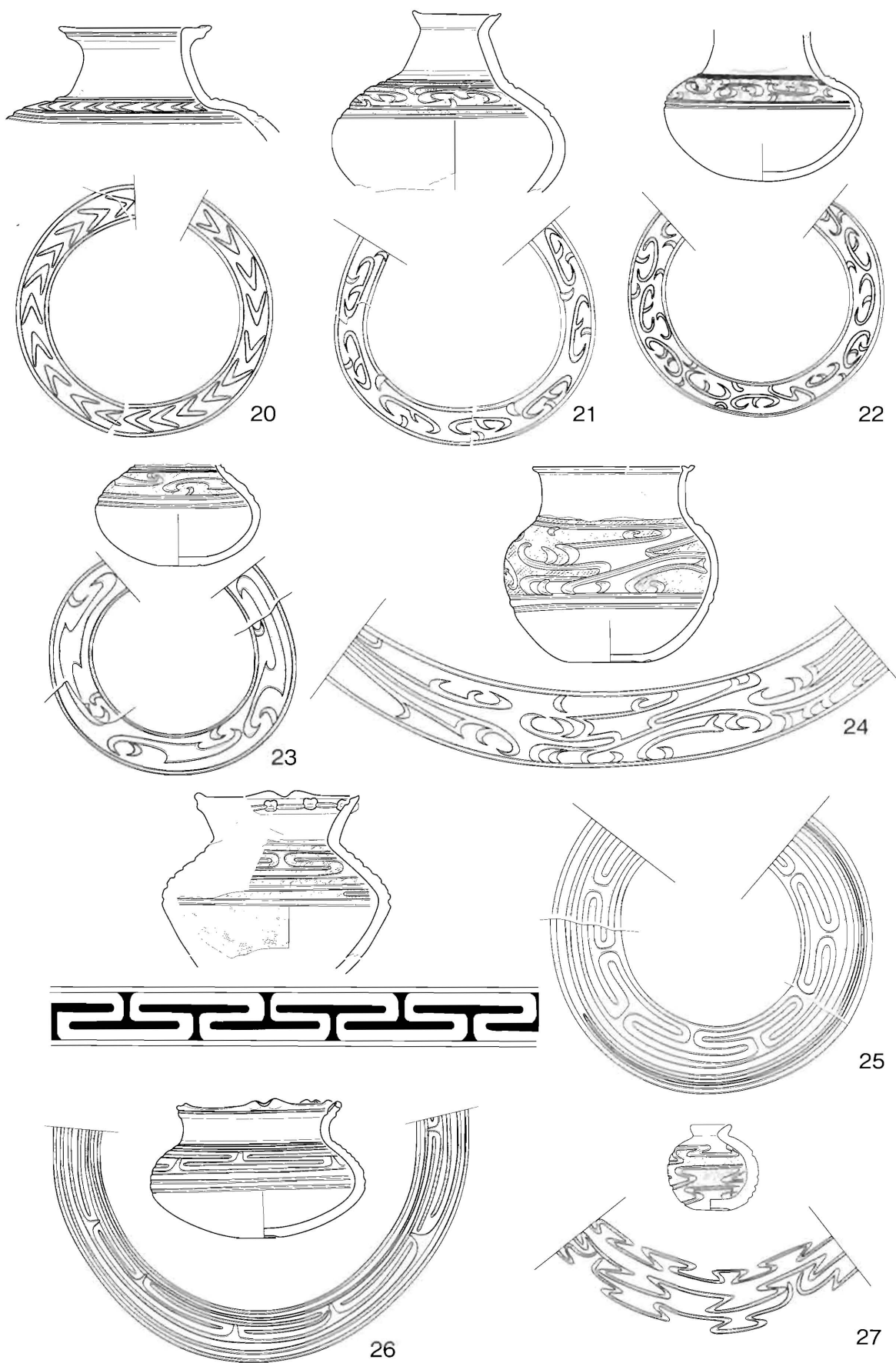


18

19

第44図 今津遺跡出土土器 皿・浅鉢 (18・19)





第45図 今津遺跡出土土器 壺・ミニチュア (20～27)

0 10cm

番号	県教委報告書番号	出土区	器種	文様	特徴	地文	器高 (cm)	器幅 (cm)
1	図58-3	F-86Ab	皿	雲形文グループ	A突起が4単位配置されている。全体の1/2残存。	LR	4.2	18.0
2	図59-1	G-86Aa	浅鉢	雲形文グループ	特に磨減が激しい。	LR	6.2	16.9
3	図59-4	G-86Ad	浅鉢	雲形文グループ	内外面に赤彩が見られる。内面に丁寧な磨きが施されている。	LR	5.9	16.5
4	図60-1	G-86Ca	浅鉢	雲形文グループ		LR	3.9	11.8
5	図60-2	G-86Dd	皿	雲形文グループ	A突起が4単位配置されていたものと思われる。全体の1/2残存。	LR	4.2	19.7
6	図60-3	G-86Db	皿	雲形文グループ	A突起が4単位配置されている。内面に段差が見られる。	無文	4.5	20.3
7	図60-5	G-86Dd	浅鉢	雲形文グループ	部分的に口唇部の磨減が激しい。	R	6.7	15.0
8	図61-1	G-86Aa	浅鉢	雲形文グループ		LR	6.4	16.2
9	図61-3	H-86Dd	皿	雲形文グループ	口縁部が楕円形の土器である。内外面に赤彩が見られる。	LR	4.1	21.6
10	図61-4	H-86Da	皿	雲形文グループ	赤彩土器である。破損が激しく、残存は全体の1/4程度である。	LR	4.0	21.1
11	図61-5	H-86Db	浅鉢	雲形文グループ	完形である。体部から底部にかけて磨きの跡がはっきり見られる。	RL	6.1	11.8
12	図62-1	G-87Bd	浅鉢	雲形文グループ	口唇部にA突起が1単位、その両脇にB突起が配置されている。	LR	4.9	18.3
13	図62-2	G-87Cc	皿	雲形文グループ	非常に磨減が激しい。	RL	4.5	19.4
14	図63-2	H-87Cb	皿	雲形文グループ	A突起が4単位配置されていたものと思われる。残存は全体の1/8程度である。	LR	4.1	18.9
15	図63-3	G-85Bd、 G-85Ac	浅鉢	雲形文グループ	磨減が激しい。	LR	5.9	17.9
16	図62-5	H-87Dc	浅鉢	雲形文グループ	磨減が激しい。	LR	7.0	19.5
17	図65-3	H-84Cd	浅鉢	雲形文グループ	赤彩土器である。磨減が激しく、鉢部は約3/4、台部は約1/3残存している。	無文	14.4	24.8
18	図65-1	G-86Dc	浅鉢	雲形文グループ	口唇部にA突起が4単位配置されている。わずかに赤彩が見られる。	RL	10.7	23.2
19	図65-2	G-82Ca	皿	雲形文グループ	赤彩土器である。A突起が4単位、その両脇にB突起が配置されている。	LR	8.0	18.7
20	図73-7	G-86Bd	壺	-	赤彩土器である。残存は肩部のみ1/2程度である。	LR	-	7.6
21	図73-8	H-87Dc	壺	雲形文グループ	体部の外面下半に赤彩。	LR	-	4.5
22	図73-9	G-87Cd	壺	雲形文グループ		LR	-	(5.1)
23	図73-10	G-86Ad	壺	雲形文グループ	赤彩土器である。体部の外面下半は丁寧に磨かれている。	LR	-	(5.2)
24	図73-11	G-82Bd	壺	雲形文グループ	残存は全体の1/2程度である。	RL	10.4	(7.9)
25	図73-12	H-86Cd	壺	工字文グループ	工字文の土器である。文様部に縄文を伴う。	無文	-	8.2
26	図73-13	G-86Ac	壺	工字文グループ	口唇部に突起が5単位見られる。工字文の文様部分に縄文を伴わない。	LR	7.8	8.8
27	図92-9	G-86Ac	ミニチュア	-	ミニチュア土器である。磨減が激しいため、縄文が消えてしまっている。	LR	4.6	2.1

今津遺跡出土土器観察表

# Ⅲ．岩手県岩手町豊岡遺跡の縄文晩期の 土器（高橋昭治コレクション）について

藤沼邦彦・鈴木春菜

### Ⅲ. 岩手県岩手町豊岡遺跡出土の縄文晩期の土器 (高橋昭治コレクション) について

藤沼邦彦・鈴木春菜

#### 1. はじめに

ここで実測図化の対象としたものは、岩手県立博物館が所蔵する「高橋コレクション」の中から、工芸的な観点からみて優れた文様をもつ土器を選び出したものである。複雑で美しくみえる曲線的な雲形文様が、基本としては簡単な形の区画文や配置文を配し、それに簡単な形の充填文を加えることで、自ずと形成される工程も表現してみた。

#### 2. 豊岡遺跡の位置・立地

豊岡遺跡は、岩手県岩手郡岩手町久保第1地割329番地に所在する。岩手町は、岩手県の北部に位置し、岩手県西部を南北に連なる奥羽山脈と東部を南北に連なる北上山地が北部で近接する地帯にあり、大半が山地となっている山間の町である。平坦地は、町の中央を流れる北上川やその支流の流域に、わずかに形成されているだけである。

遺跡の所在する久保地区は、岩手町の北西部に位置し、北には北上川と馬淵川の分水山脈となる七時雨火山連峰の西岳がそびえ、その南麓にはゆるやかに起伏した丘陵地が広がっている。豊岡遺跡はそれらの丘陵が太田川右岸に張り出した緩やかな東南斜面に立地する。標高は420～430mと高く、IGR いわて銀河鉄道の御堂駅（八戸方面に向かって、いわて沼宮内駅の次の駅）から北西約6kmに位置する山間部の遺跡である。

#### 3. 豊岡遺跡の研究史

豊岡は、第二次世界大戦後に、樺太（サハリン）から引き上げてきた人々によって開墾された土地である。豊岡という地名も、豊かな岡となるようにという希望のもとに、樺太の豊原と真岡に因んで、新たに付けられたものである。遺跡発見のきっかけは開墾作業中に多数の土器や石器が出土したことによる。

##### (1) 岩手町郷土史研究会による踏査（1958年10月）

岩手町在住の高橋昭治氏を中心に結成された「岩手町郷土史研究会」は、1958年、豊岡遺跡の現況を把握し、遺跡の保存を考えるために、踏査を行った。その結果、遺跡が広範囲に広がっていること、遺物包含層が地表面から20～30cmほどの浅い部分にあることなどが確認された。このままでは、耕作によって遺跡が破壊される危険があるため、早急に学術調査をする必要性も検討され、岩手大学の草間俊一氏に調査を依頼することになった（岩手県立博物館2004）。

##### (2) 岩手大学の草間俊一氏の発掘調査（1959年8月）

岩手町教育委員会と岩手町郷土史研究会は、岩手大学の草間俊一氏を発掘担当者として、1959年に、発掘調査を行った。2ヶ所にトレンチを設定し、遺構の存在や遺物の包含状態を調査した。その結果、遺物包含層・石囲炉（埋甕を伴うものもある）・焼土・柱穴らしきものなどが発見されたが、竪穴住居跡を検出することはできなかった。出土品は、多数の縄文晩期の土器のほか、石器（石鏃・石匙・石錐・石斧・石棒）、土製品（土偶・顔面付土器・動物形土製品・土笛）、玉類などである。

土器は、縄文晩期の大洞BC式と大洞C1式が大部分で、大洞B式・大洞C2式・大洞A式などは破片が数点混じる程度であった（草間1960）。

##### (3) 高橋昭治コレクション

岩手町郷土史研究会の高橋昭治氏は、先に述べた郷土史研究会としての遺跡踏査や岩手大学の草間

俊一氏の発掘調査にも調査員として参加した在野の研究者である。1961年の開田工事の際に出土した豊岡遺跡の膨大な遺物を収集し、それらを修理・復元し、出土品の保護に努めた。さらに、1963年には、自宅に北進考古学資料室を設置し、豊岡遺跡出土の土器や土偶は、各地の博物館・資料館に貸し出され、展示されることが多くなり、豊岡遺跡の名前は徐々に知られるようになった。

2001年、高橋氏は「岩手県の財産として広く県民のために役立てて欲しい」という願いを込めて、豊岡遺跡出土品を、岩手県立博物館に寄贈した。これらは、「高橋昭治コレクション」として、博物館に常設展示されているが、その内訳は、土器（完形品および図上復元可能なものが約400点、破片が約13000点）、土製品152点、石器2438点、石製品344点という。

#### 4. 豊岡遺跡の土器

草間俊一氏や高橋昭治氏によって明らかにされたように、豊岡遺跡の出土土器は、少量の縄文後期の土器を含むが、そのほとんどのものは縄文晩期の土器である。縄文晩期の土器は、大洞B式から大洞A式まで、亀ヶ岡式土器諸型式をすべて含むが、なかでも大洞BC式と大洞C1式が圧倒的に多い。おそらく豊岡遺跡は大洞BC式・大洞C1式のころ遺跡（集落）としてもっとも大きかったのであろう。

豊岡遺跡出土の精製土器は、文様の構成に優れ、美しく、器面の調整も丁寧で光沢をもつものが多い。2005年秋に行った弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター設立記念のミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」で、豊岡遺跡出土の土器・土偶の優品を多数展示したが、美しいもの・工芸的にすぐれたものとして、観客の注目を集め、喜ばれた。

#### 5. 豊岡遺跡の土器の文様

豊岡遺跡出土の精製土器は、美しいものが多いといっても、すべてが美しいわけではない。今回、実測図化の対象としたのは、豊岡遺跡出土の土器のうちでも、工芸的に美しいものを選んだ。これらは、縄文晩期の社会における工芸的遺物の存在意義を考える上で、重要な資料となり得ると考えたからである。図1・2・4～7・10・16・18～25・30・31・33は亀ヶ岡文化研究センターのミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」で展示したもの、図3・8・9・11～15・17・26～29・32・34は常設展で展示中のものである。なお、これらは、ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録でも取り上げ、側面写真・展開写真・展開拓本図などをオールカラーで掲載しているので、参考にしてほしい。

取り上げた土器の文様については、ほとんど施文工程を推定復元することができた。その多くが、区画文あるいは配置文で文様帯を割り付け、さらに充填文を加えて、単位文様あるいは連続文様を構成するものであった。区画文は3つ（区画文Ⅰ～Ⅲ）に、配置文も3つ（配置文Ⅰ～Ⅲ）に大別したが、以下でも述べるように、これらの基本形は単純な形のものが多い（73頁の模式図参照）。

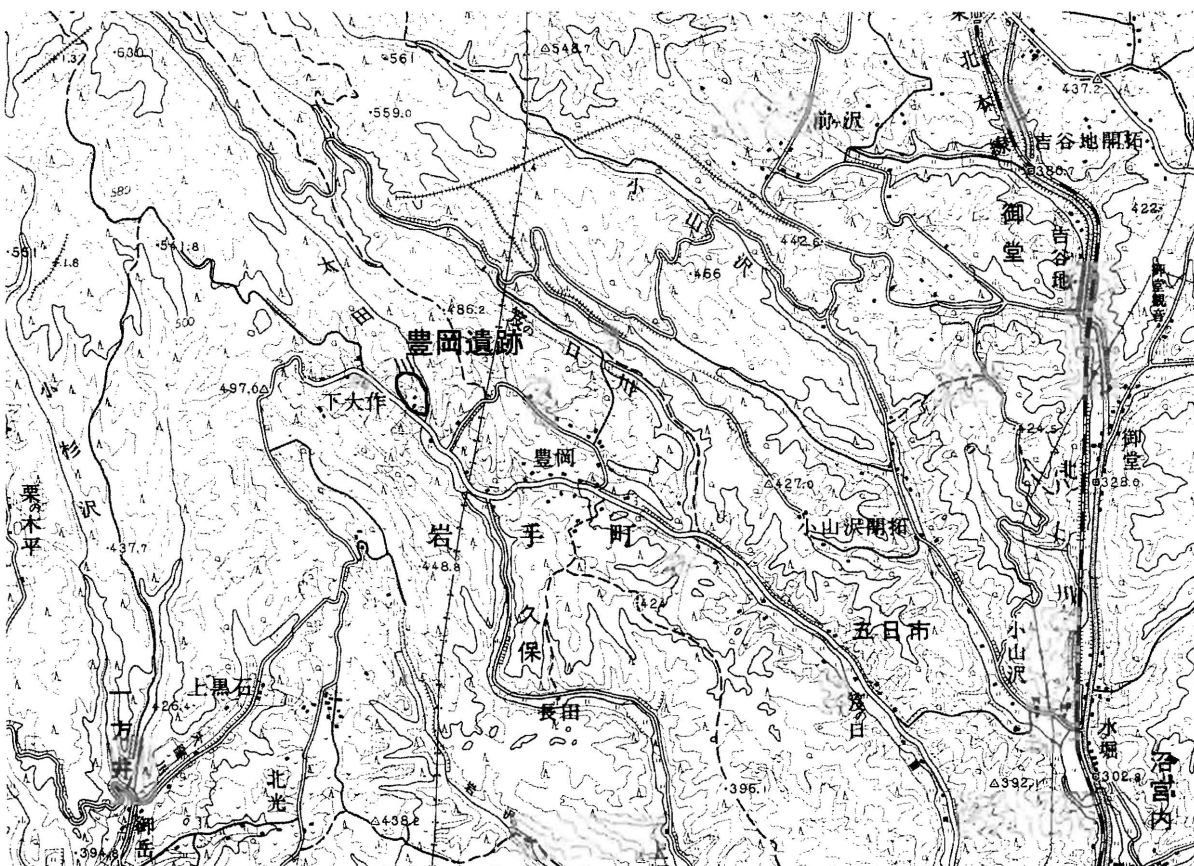
たしかにここで取り上げた豊岡遺跡の土器の文様は美しいが、区画文・配置文・充填文の基本形や施文工程は単純で、他の亀ヶ岡文化圏の雲形文などと何ら変わるところはない。豊岡遺跡の土器が、ことさら美しく見えるのは、豊岡縄文人の美に対する工夫が巧みであったからに違いない。本来単純な形の区画文や配置文、充填文にちょっとした付加的な装飾を加えるだけで、複雑そうにみえる美しい曲線的な単位文様や連続文様を構成していることが、図面から読み取ることができよう。

実測図化できた豊岡遺跡の土器群は、羊歯状文を主体とする一部の土器を除けば、大洞C1式に属するものであろう。土器の形・文様・光沢・施文工程、そこから醸し出される雰囲気は、馬淵川流域の同時期の土器群によく似ている。しかし、小川原湖畔の野口貝塚や奥入瀬川上流域の明戸遺跡、津軽の細野遺跡、岩木川流域の観音林遺跡などの大洞C1式土器にも類似点多そうである。

北上川中・下流域の土器群との比較・研究は行うことができなかった。北上川中・下流域の土器群の研究は、弘前大学考古学ゼミナールのこれからの大きな課題であろう。

## 〈豊岡遺跡の基本文献〉

- |       |  |
|-------|--|
| 1960年 | 草間俊一「岩手県岩手町豊岡遺跡」『岩手大学学芸学部研究年報』第17巻、1～13頁   |
| 1964年 | 草間俊一「岩手県岩手郡豊岡遺跡」『日本考古学年報』12、誠文堂新光社   |
| 1965年 | 高橋昭治『考古学資料 岩手町遺物出土表 附 岩手町出土品所蔵目録』  |
| 1976年 | 岩手町史編纂委員会編『岩手町史』岩手町史刊行会  |
| 2000年 | 菅原修「豊岡遺跡」『いわて未来への遺産 遺跡は語る 旧石器～古墳時代』岩手日報社   |
| 2004年 | 岩手県立博物館『再発見！亀ヶ岡文化 ～豊岡遺跡展～』   |
| 2004年 | 岩手町教育委員会『第5回発掘された岩手町の遺跡展 北上川上流の縄文文化Ⅲ 再発見！<br>亀ヶ岡文化 ～豊岡遺跡展～』（岩手町教育委員会2004と同じ内容である）。 |
| 2004年 | 高橋昭治『豊岡遺跡の思い出（第5回発掘された岩手町の遺跡展 再発見！亀ヶ岡文化<br>亀ヶ岡遺跡講演会）』岩手町教育委員会                      |
| 2004年 | 岩手県立博物館『高橋昭治コレクション（豊岡遺跡）その1、土製品・石器・石製品編』<br>岩手県立博物館収蔵資料目録第17集（考古Ⅵ）                 |
| 2006年 | 藤沼邦彦・小川忠博編『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』<br>（弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3）、亀ヶ岡文化研究センター               |

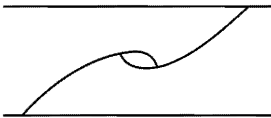
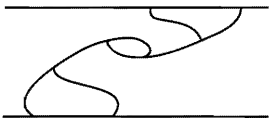
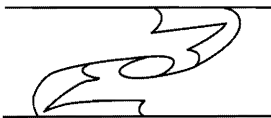
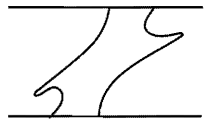
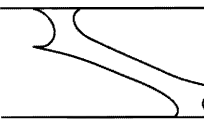


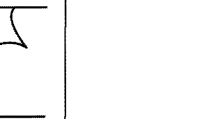
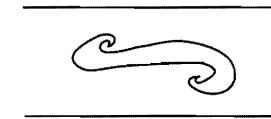


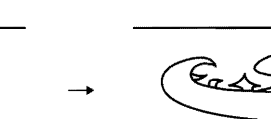
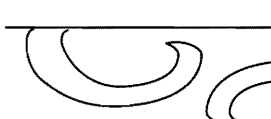
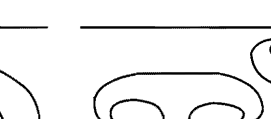
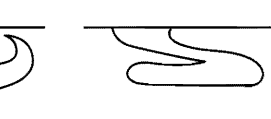
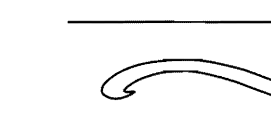
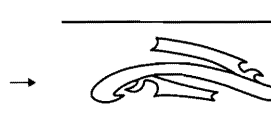



豐岡遺跡位置

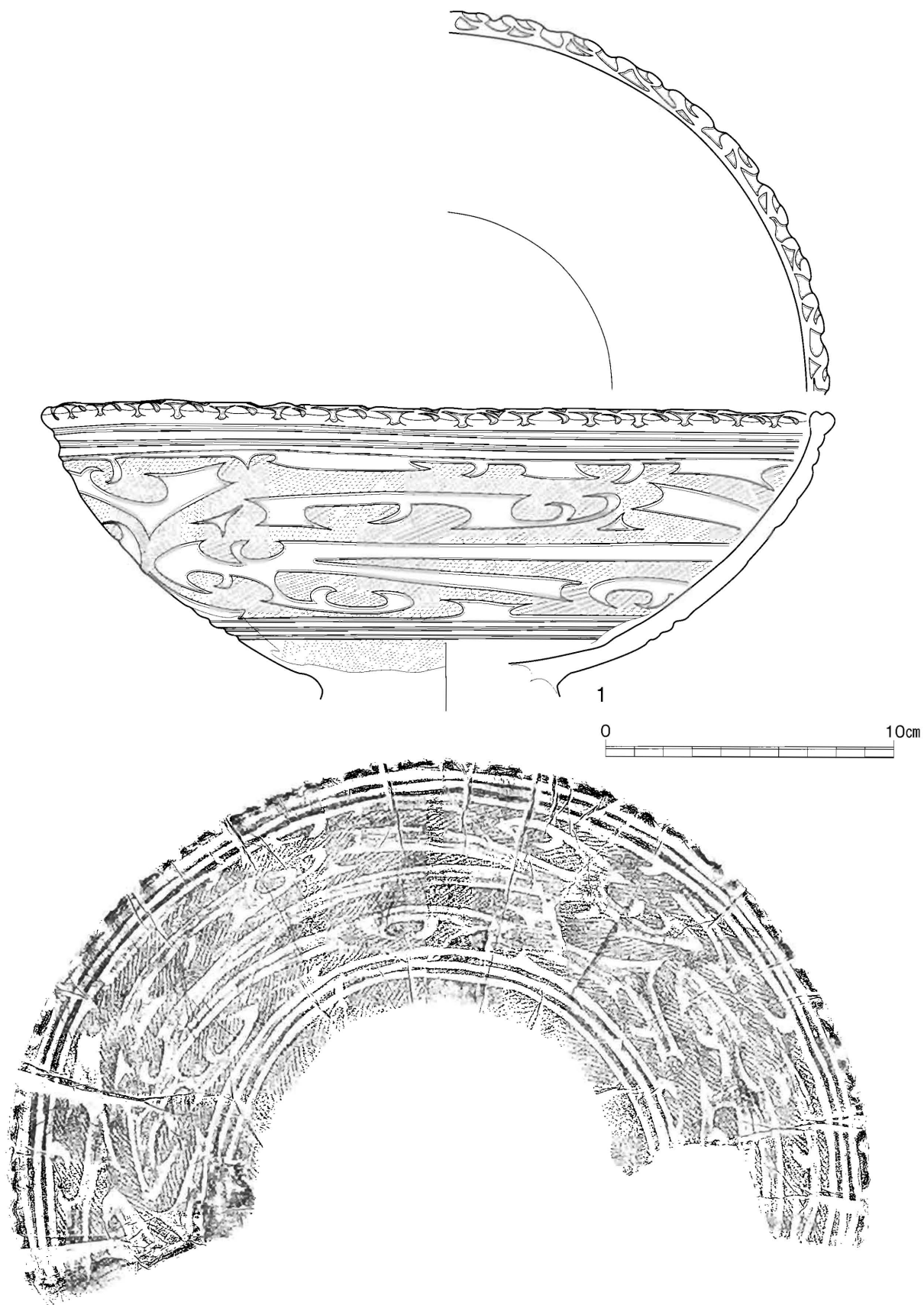
国土地理院発行5万分の1地形図「荒屋」使用

- (2004年 岩手県立博物館『高橋昭治コレクション（豊岡遺跡）その1、土製品・石器・石製品編』  
岩手県立博物館収蔵資料目録第17集（考古Ⅵ）より転載）

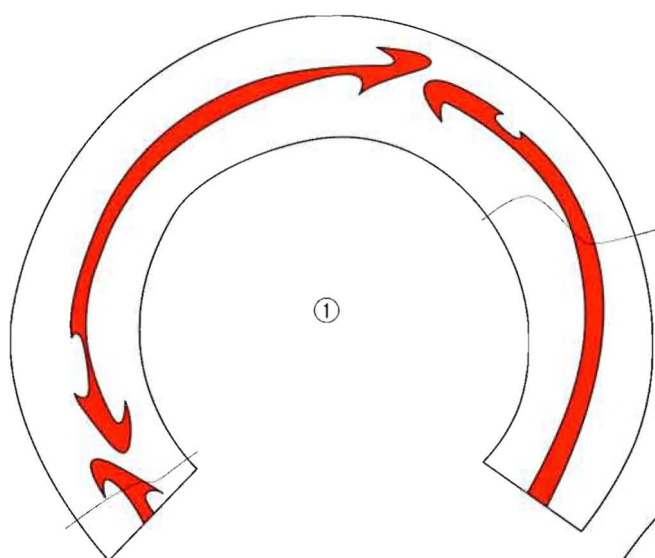


区画文Ⅰ	   <p>17・21・32下 2</p>
区画文Ⅱ	     <p>17 3・5・7・19 22 23</p>
区画文Ⅲ	  <p>15</p>
配置文Ⅰ	  <p>14</p>
配置文Ⅱ	   <p>16 4・31 29</p>
配置文Ⅲ	   <p>18 20 1</p>

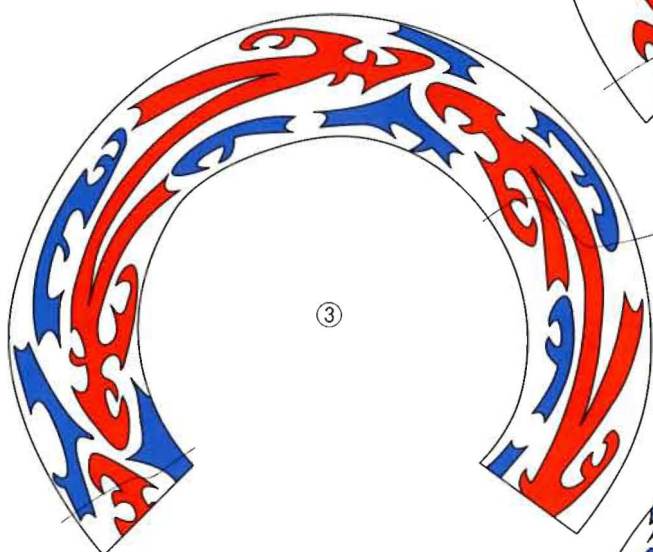
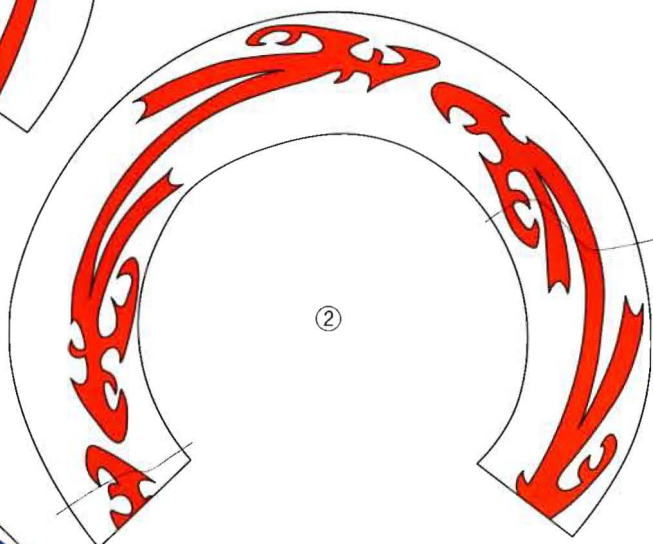
文様模式図



第46図 豊岡遺跡出土土器（1）

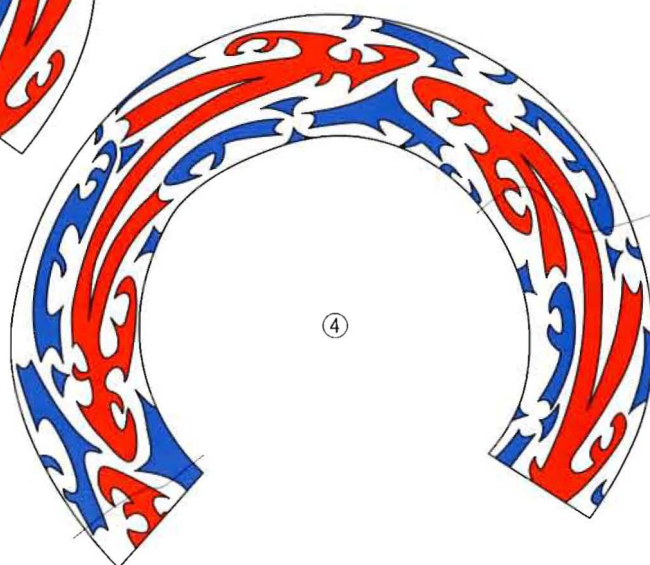


①, ② 配置文に付加的要素を加え、配置文が完成する。

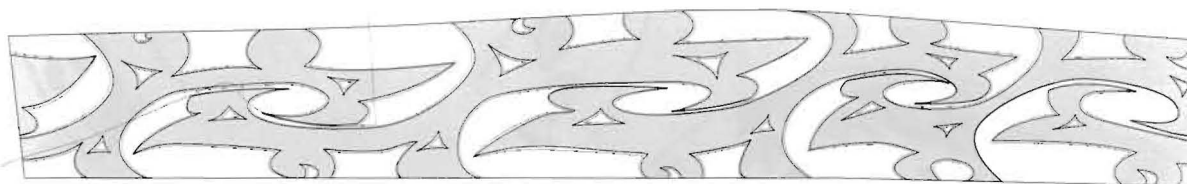
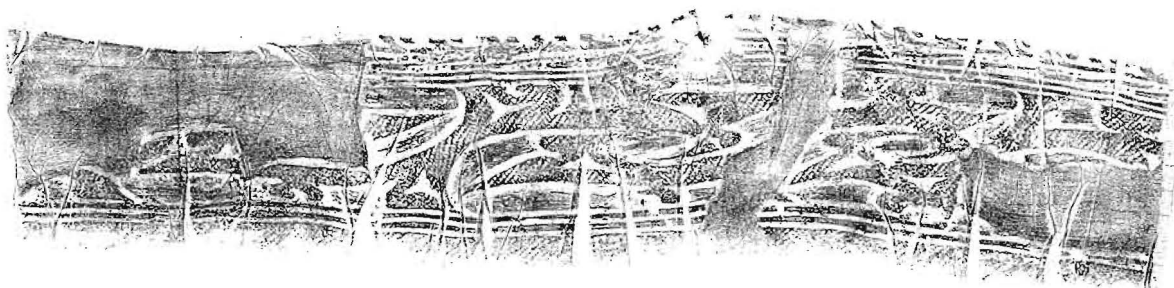
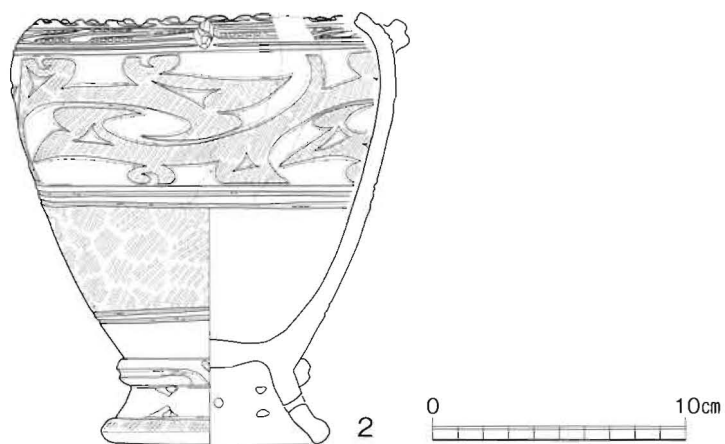


③ 大型の充填文をうめる。

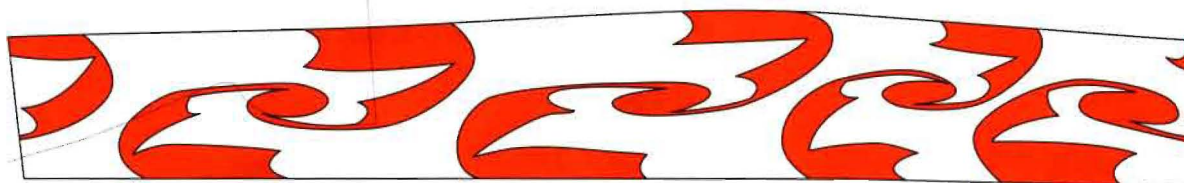
④ さらに細かな充填文をうめる。



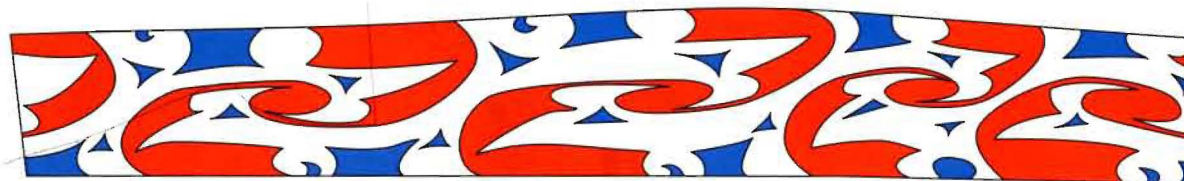
第47図 豊岡遺跡出土土器（1の文様の施文工程）



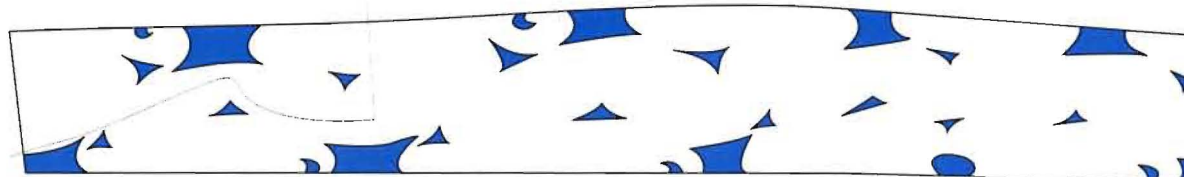
① 区画文 4 単位を施す。



② 充填文をうめる。

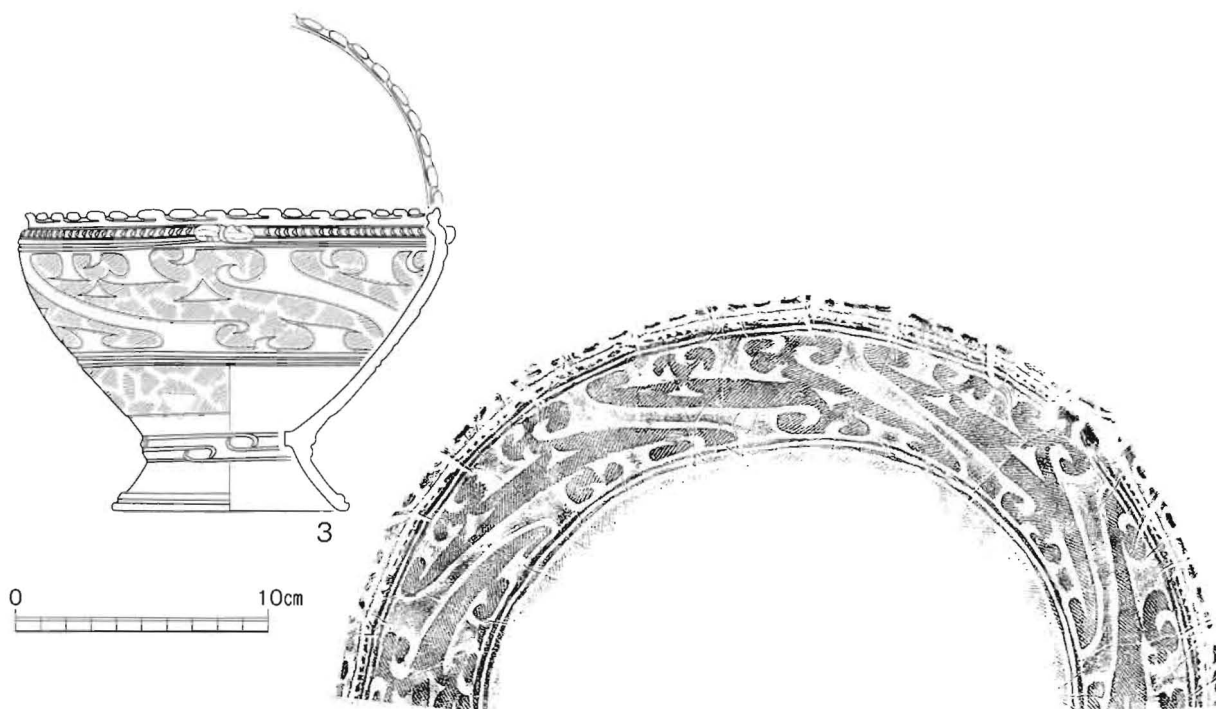


③ 充填文のみをとりだしたもの

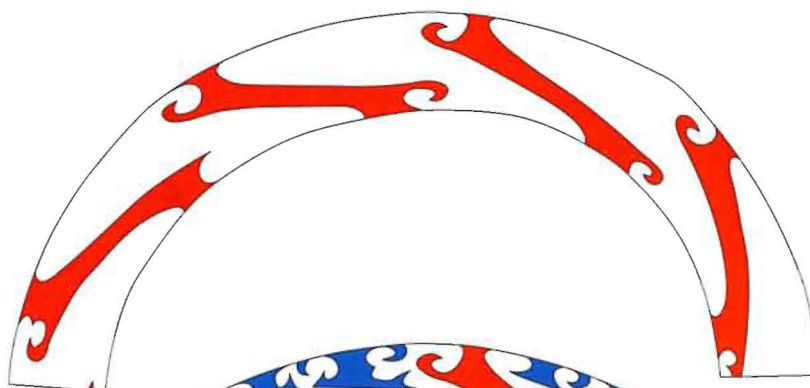


第48図 豊岡遺跡出土土器 (2)

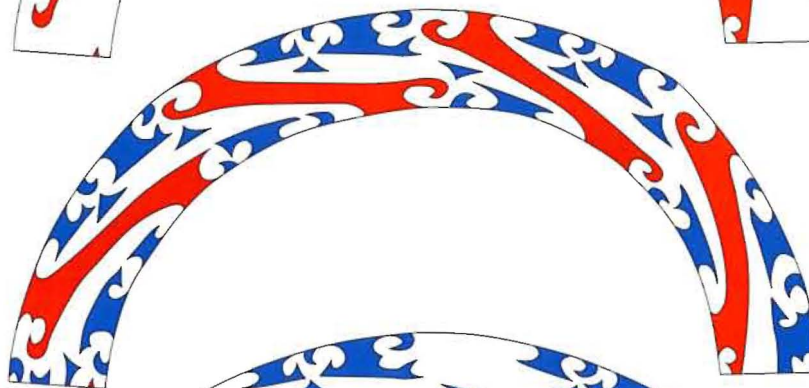




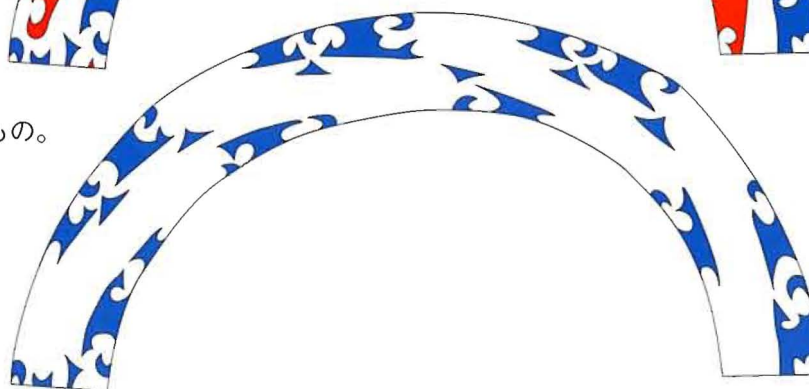
①区画文4単位を施す。



②充填文をうめる。



③充填文のみをとりだしたもの。



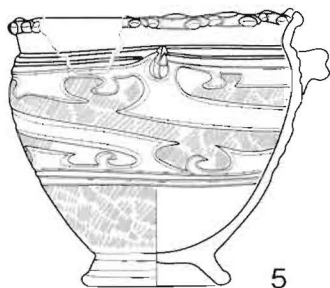
第49図 豊岡遺跡出土土器（3）



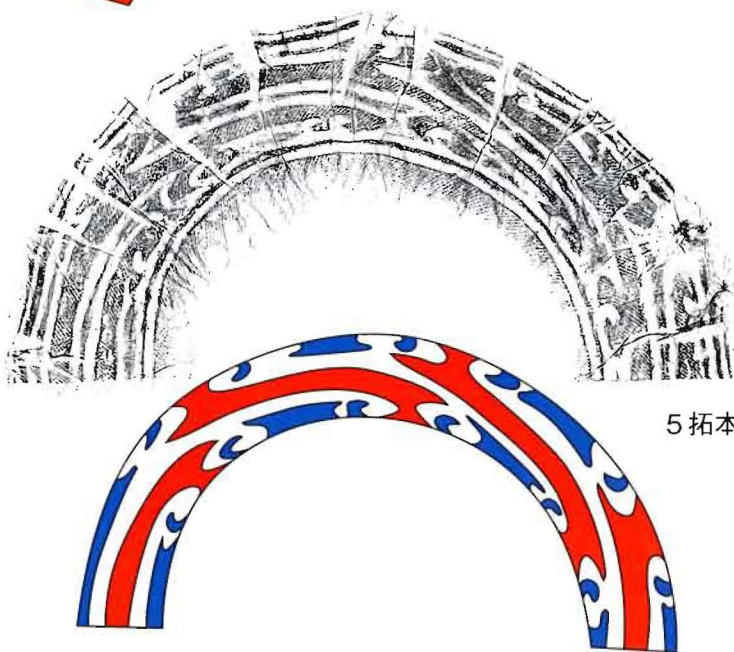
4



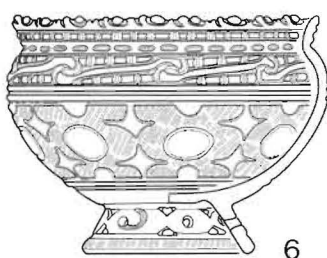
4 拓本



5



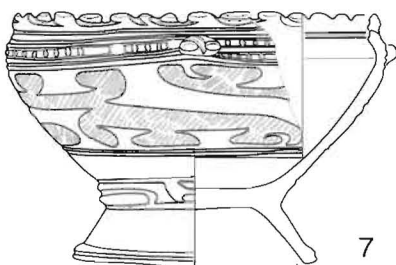
5 拓本



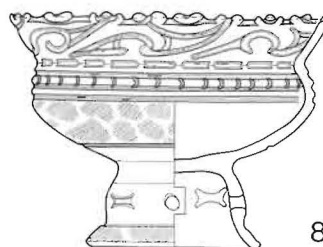
6



6 拓本

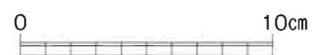


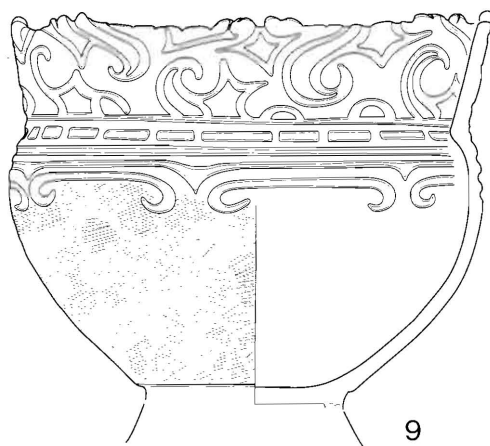
7



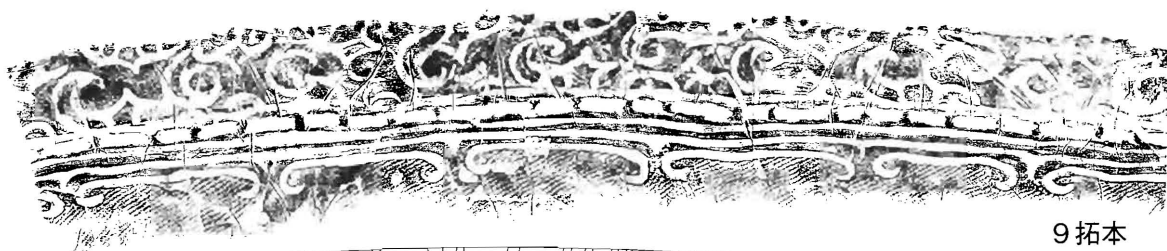
8

第50図 豊岡遺跡出土土器 (4~8)

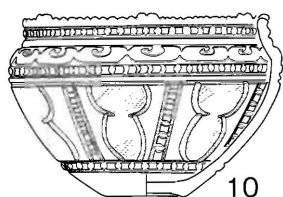
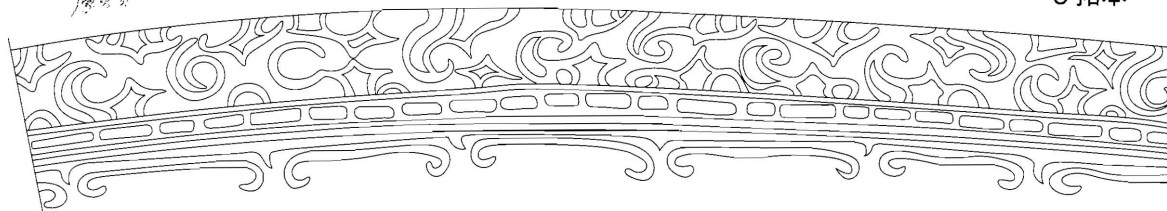




9



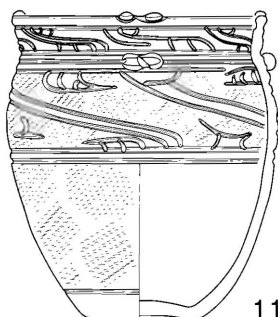
9 拓本



10



10 拓本



11



12

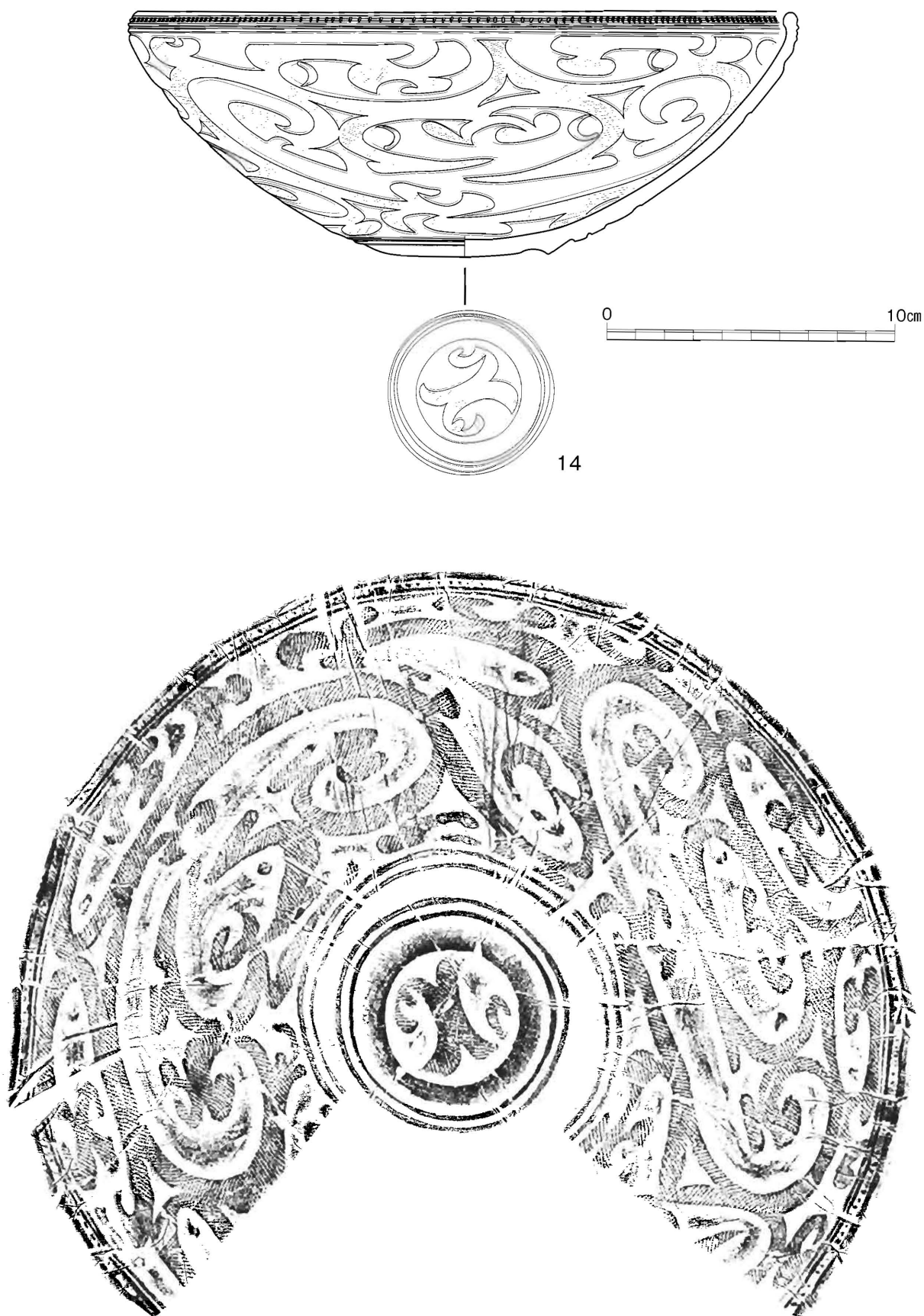


13

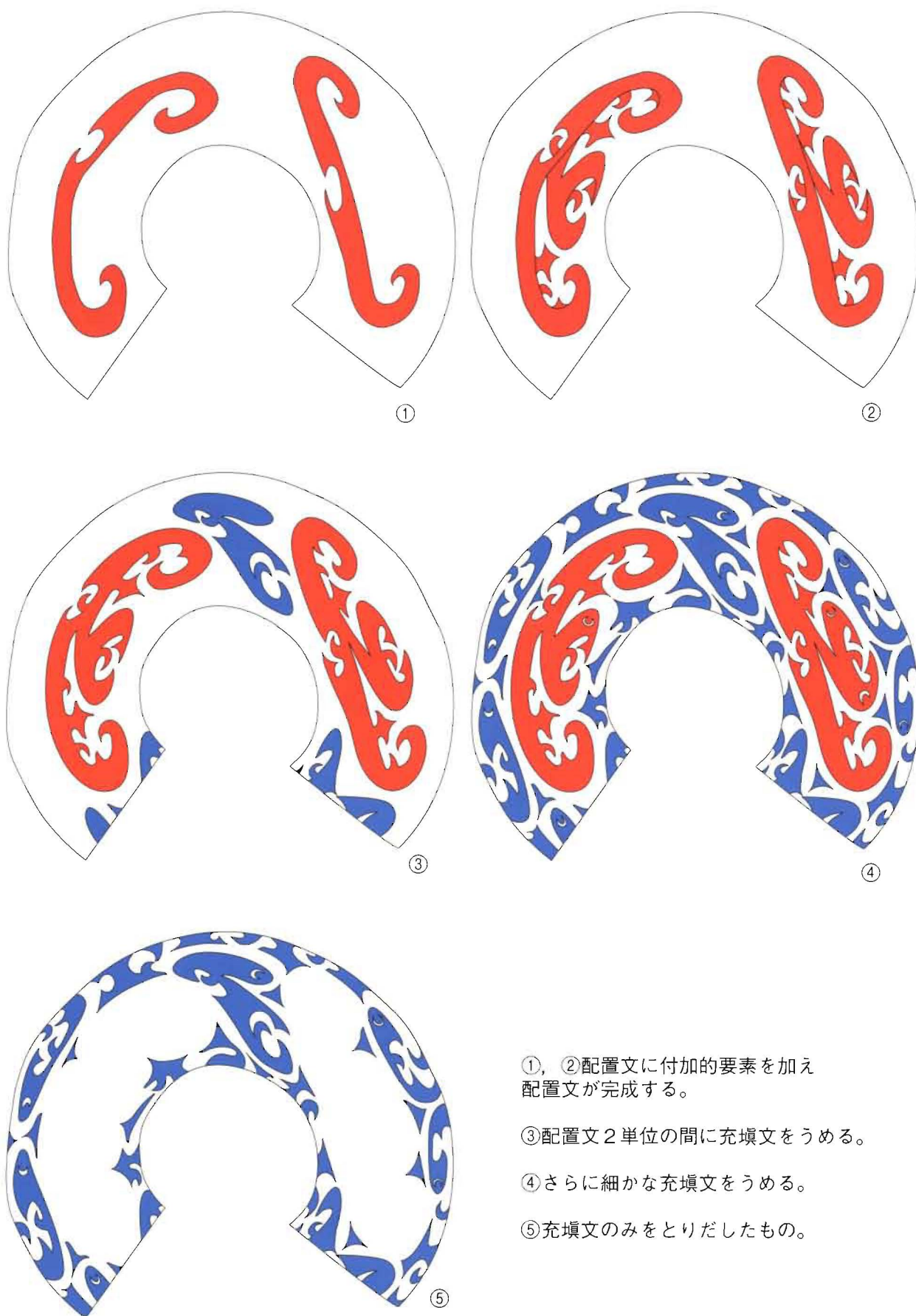
第51図 豊岡遺跡出土土器 (9~13)



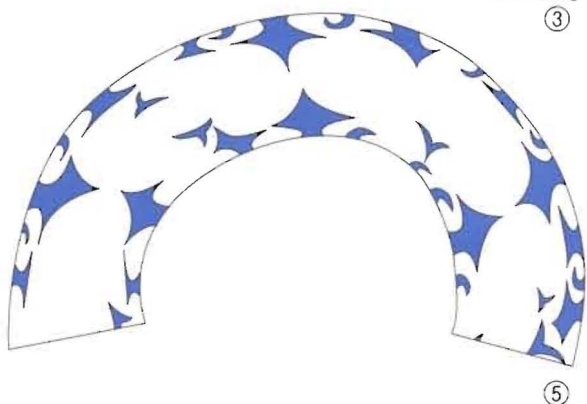
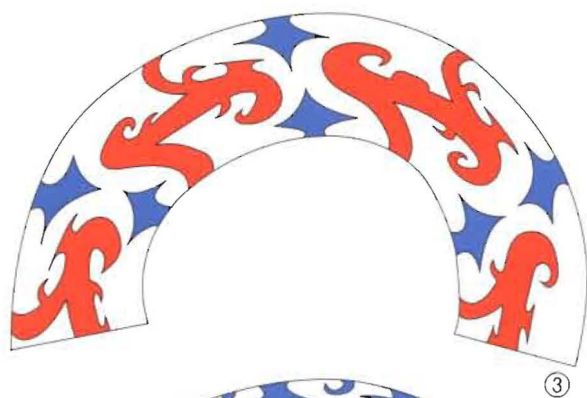
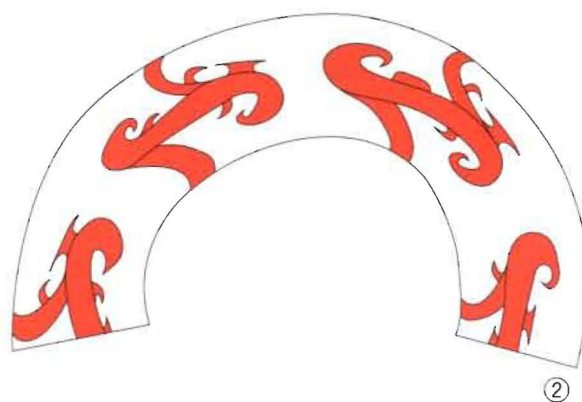
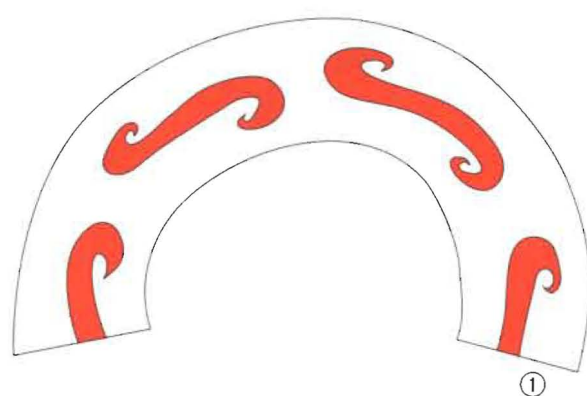




第52図 豊岡遺跡出土土器 (14)



第53図 豊岡遺跡出土土器（14の文様の施文工程）



①, ②配置文に付加的要素を加え、  
区画文に変更する。

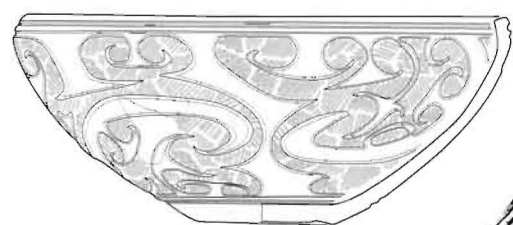
③大型の充填文をうめる。

④さらに細かな充填文をうめる。

⑤充填文のみをとりだしたもの。

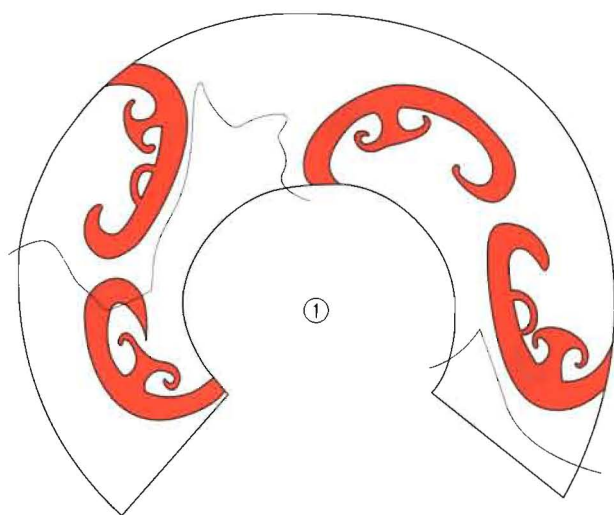
第54図 豊岡遺跡出土土器 (15)





16

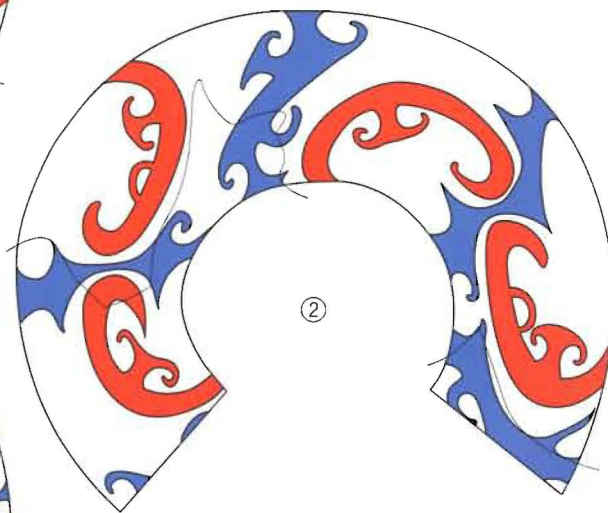
0 10cm



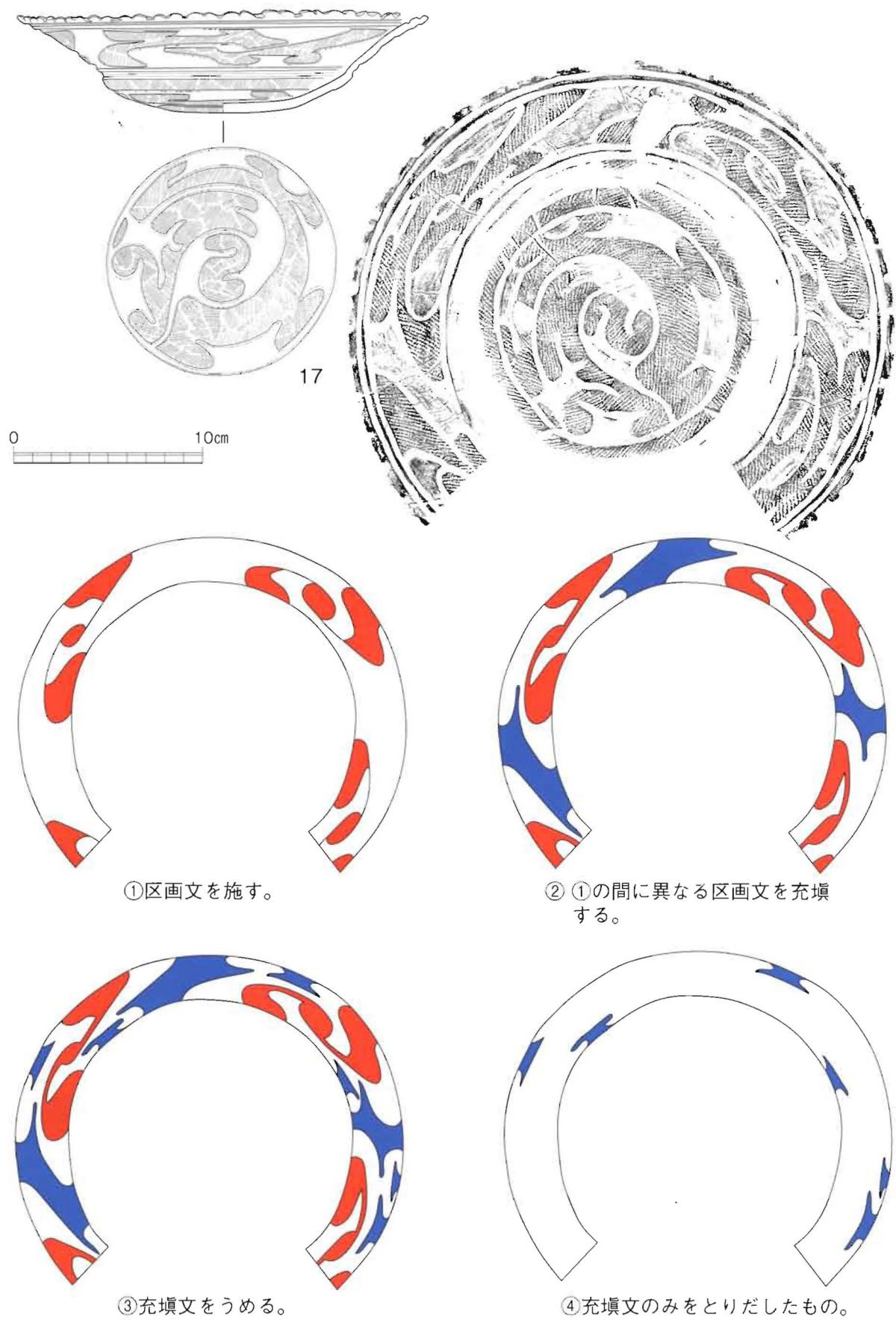
①配置文に付加的要素を加え、配置文が完成する。

②配置文間に区画文を充填する。区画文が充填されるのは珍しい例である。

③細かな充填文をうめる。

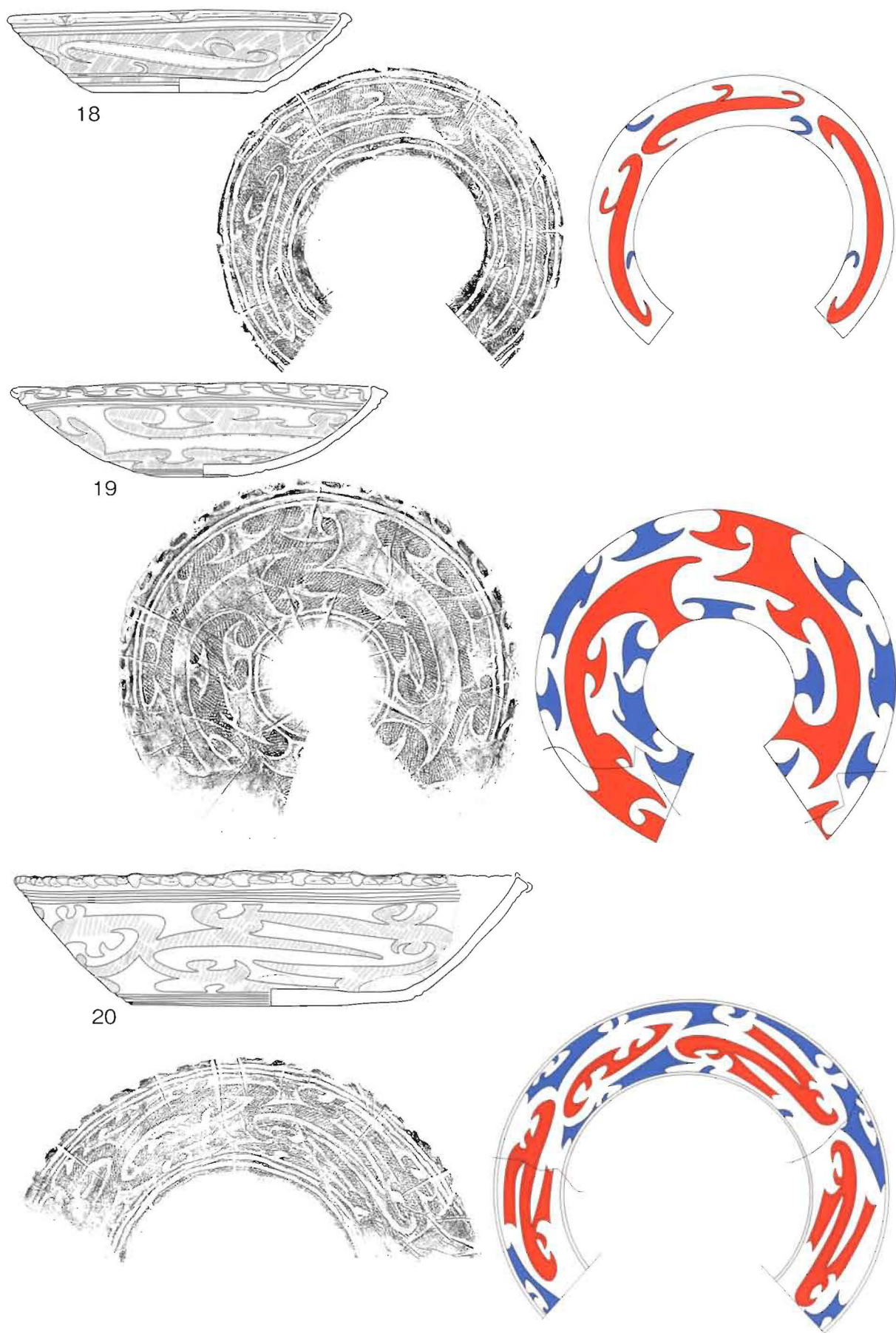


第55図 豊岡遺跡出土土器 (16)

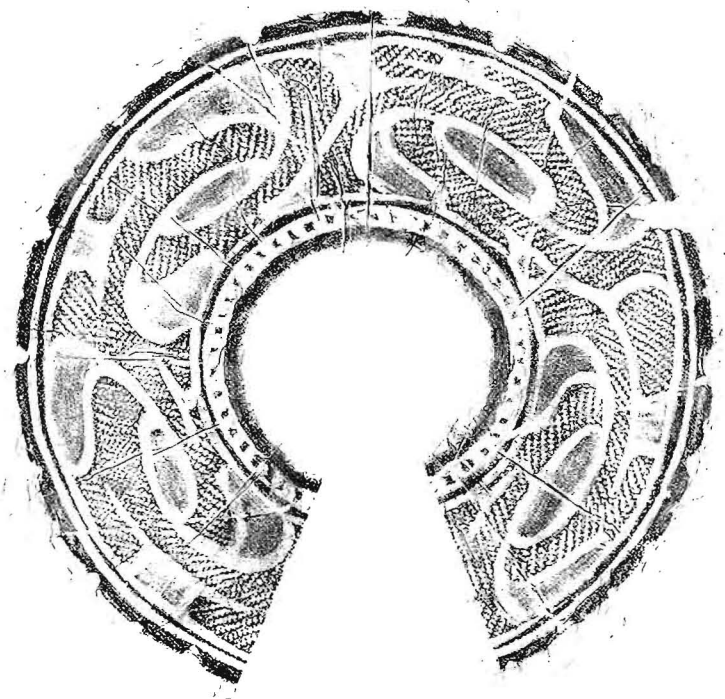
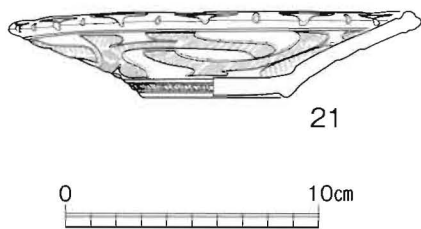


第56図 豊岡遺跡出土土器 (17)

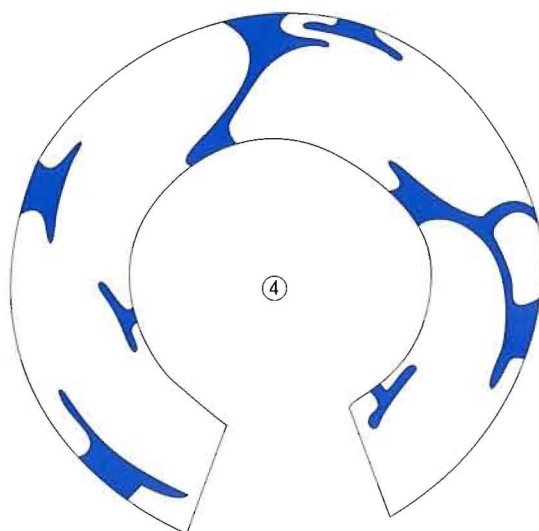
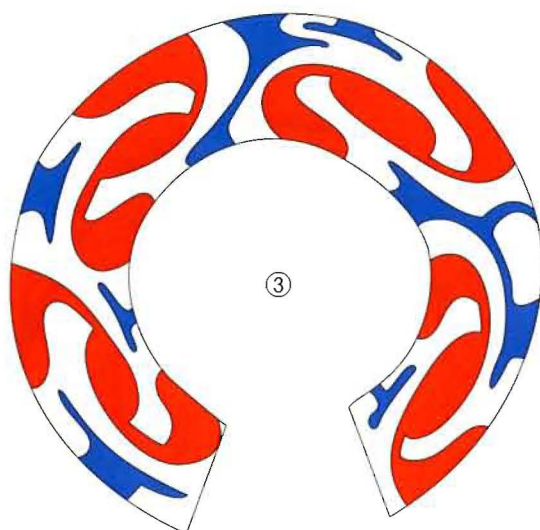
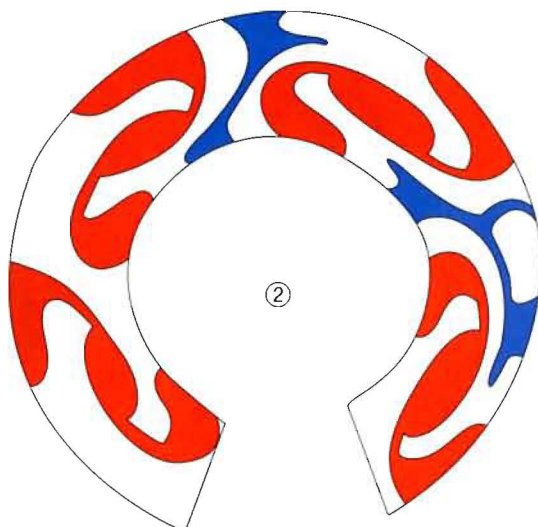
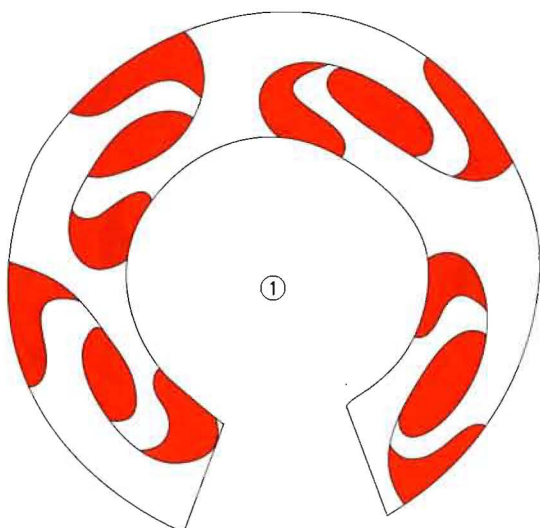




第57図 豊岡遺跡出土土器 (18~20)

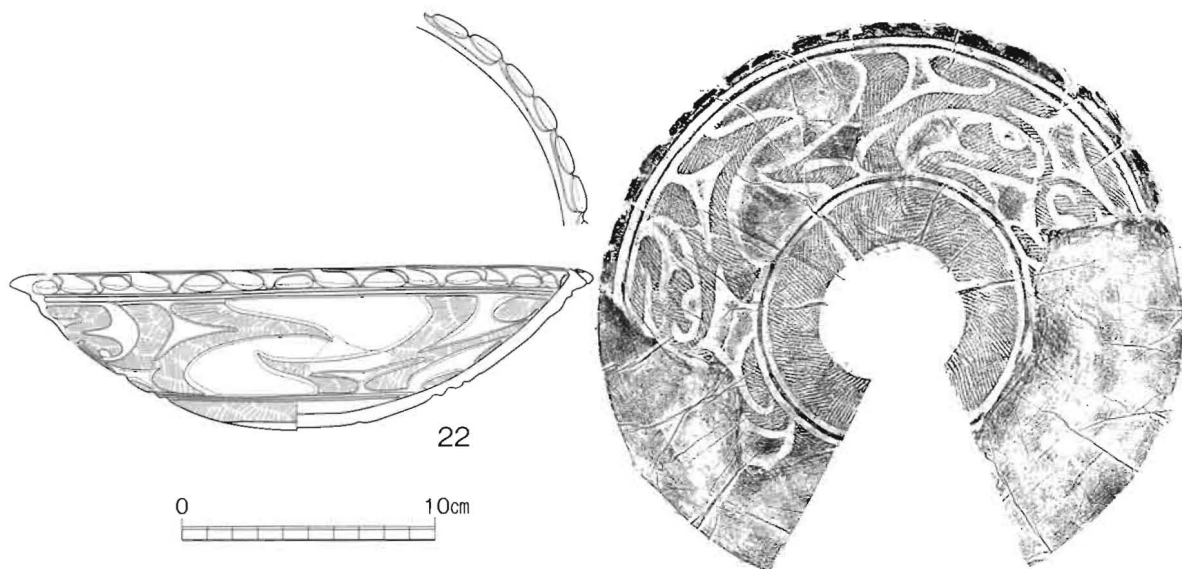


- ① 区画文4単位を施す。
- ② ①の間に区画文を充填する。
- ③ 充填文をうめる。
- ④ 充填文のみをとりだしたもの。



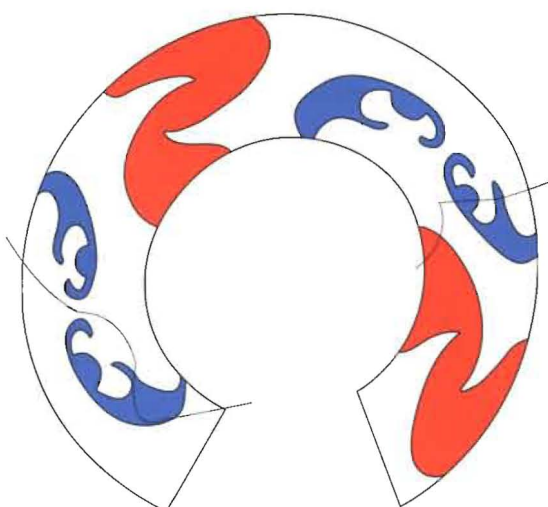
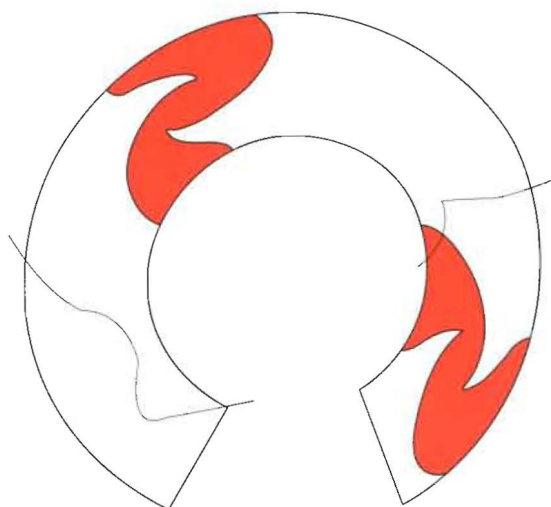
第58図 豊岡遺跡出土土器 (21)





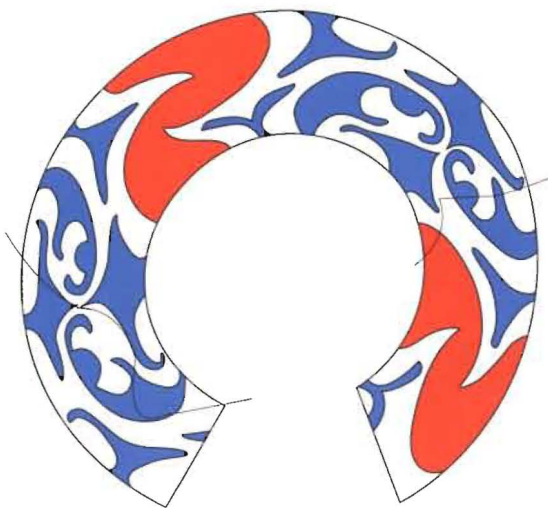
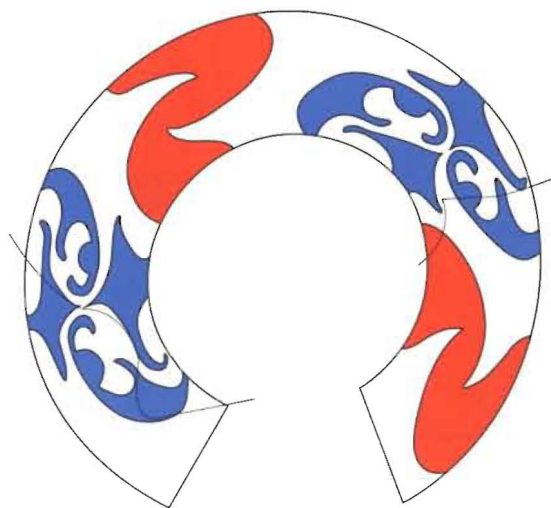
①区画文2単位を施す。

②大型の、きわめて配置文的な要素をもつ充填文をうめる。

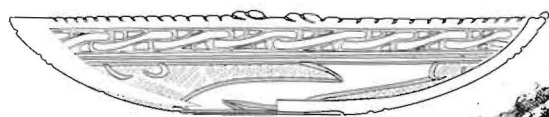


③大型の充填文をうめる。

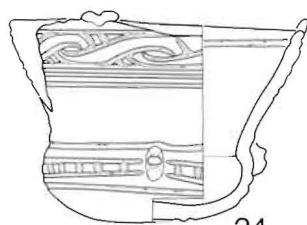
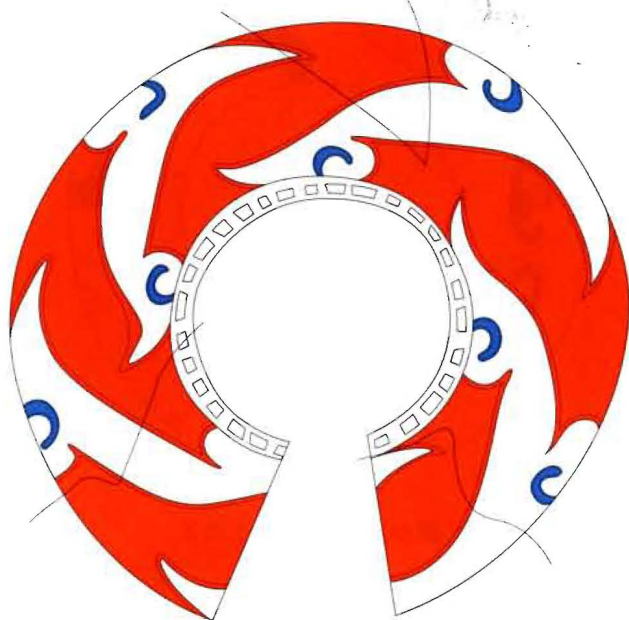
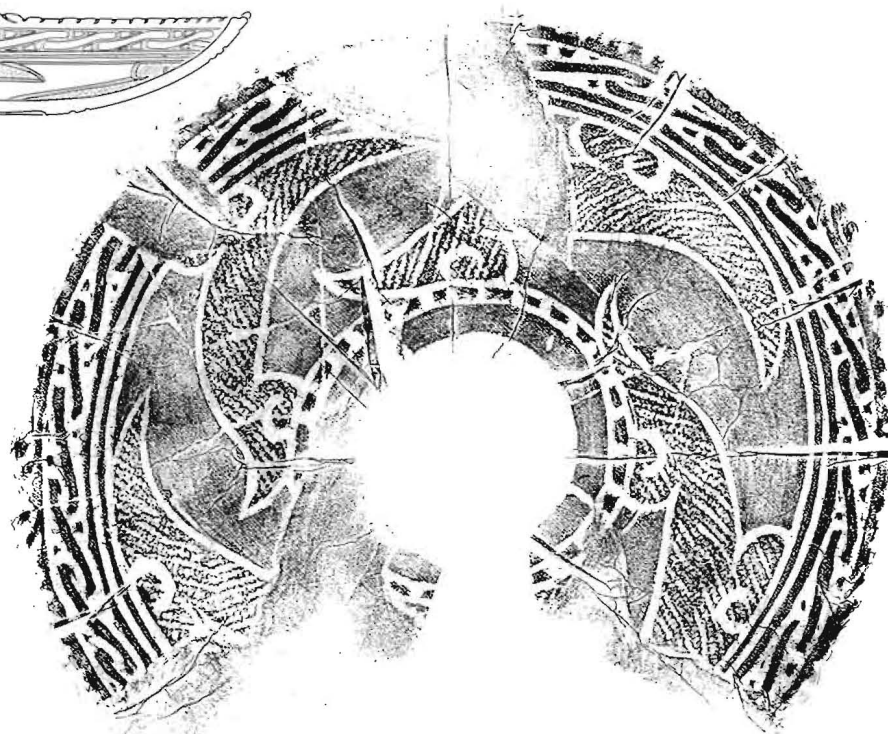
④さらに細かな充填文をうめる。



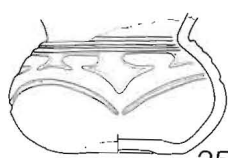
第59図 豊岡遺跡出土土器 (22)



23



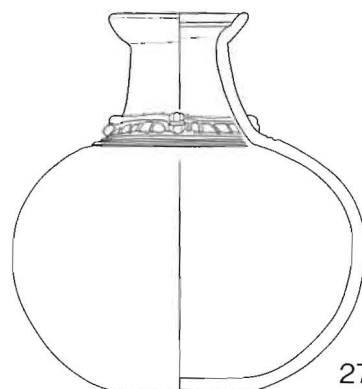
24



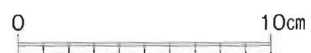
25



26



27



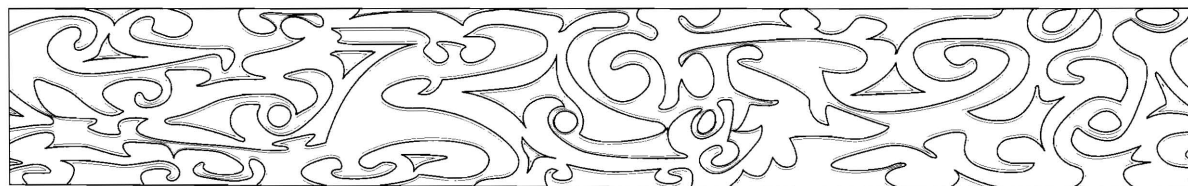
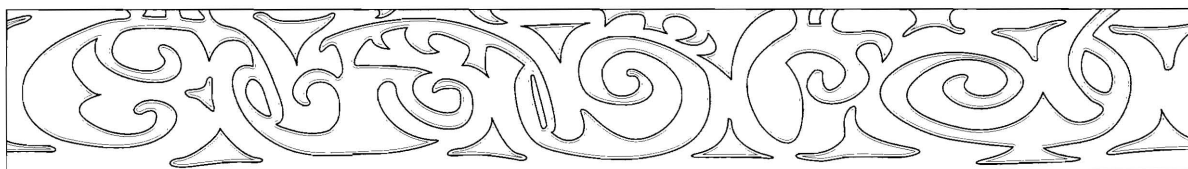
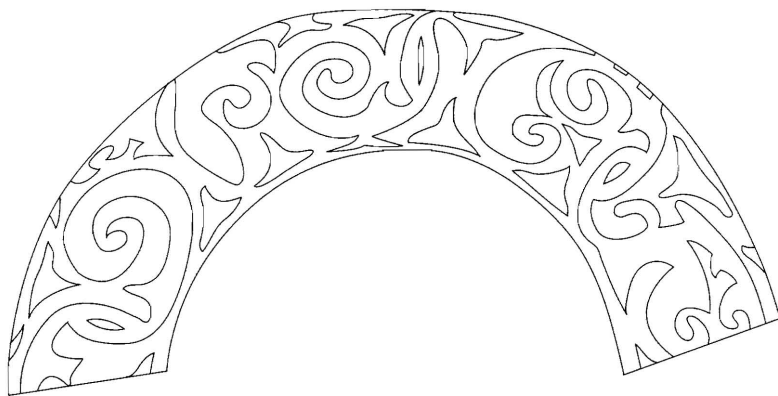
第60図 豊岡遺跡出土土器 (23~27)



28

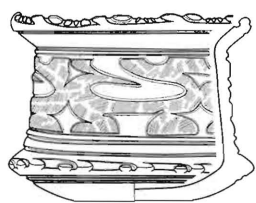
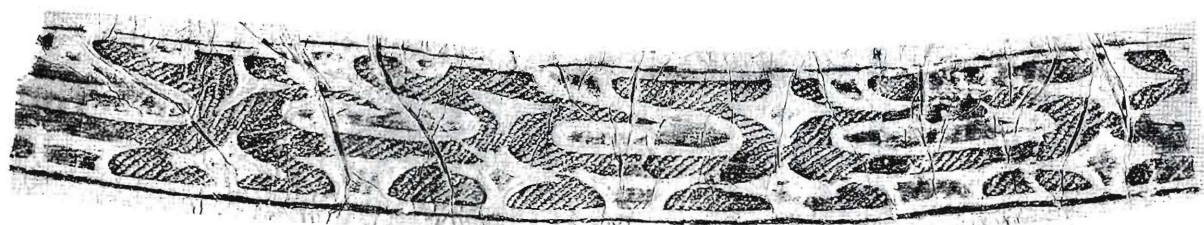


28底部

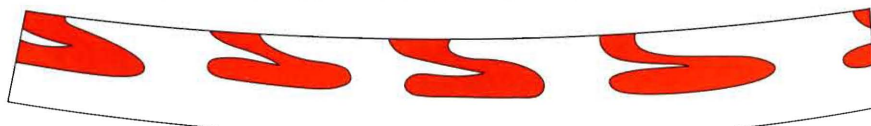


第61図 豊岡遺跡出土土器 (28)





29



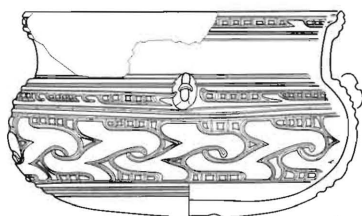
①配置文4単位が施される。



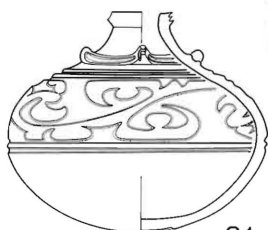
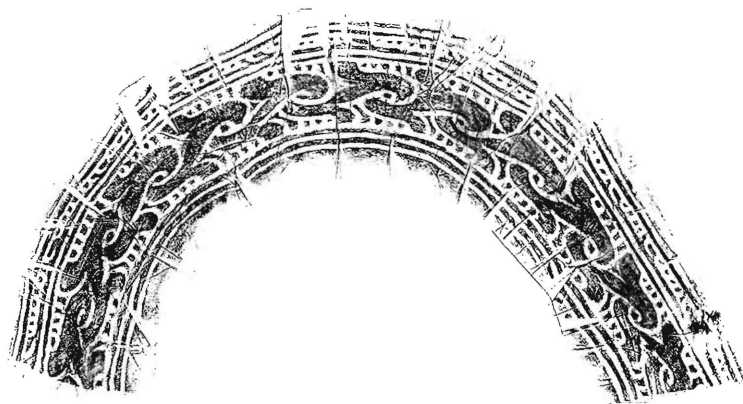
②充填文をうめる。



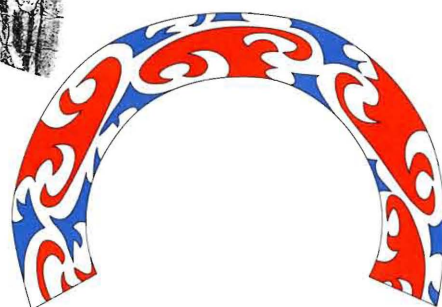
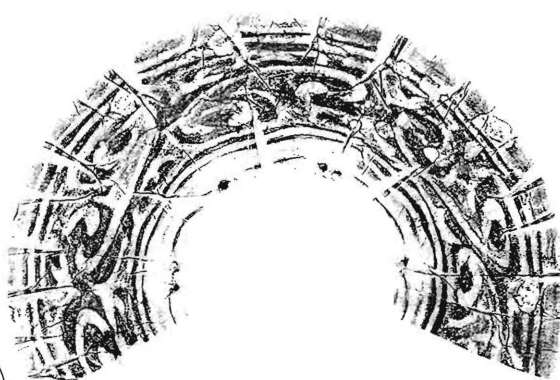
③充填文のみをとりだしもの。



30



31

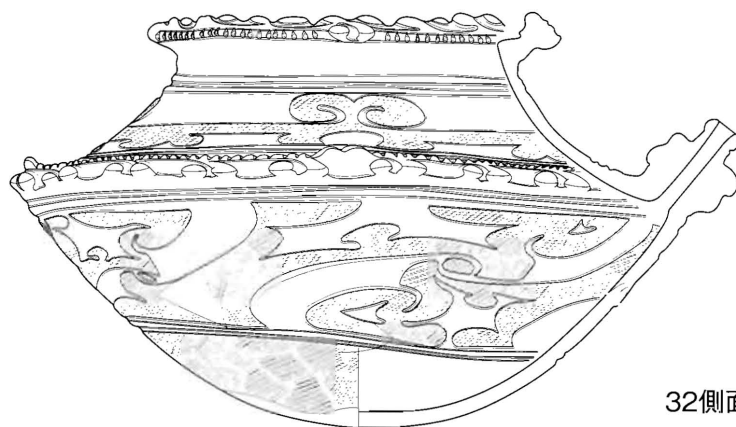


0 10cm

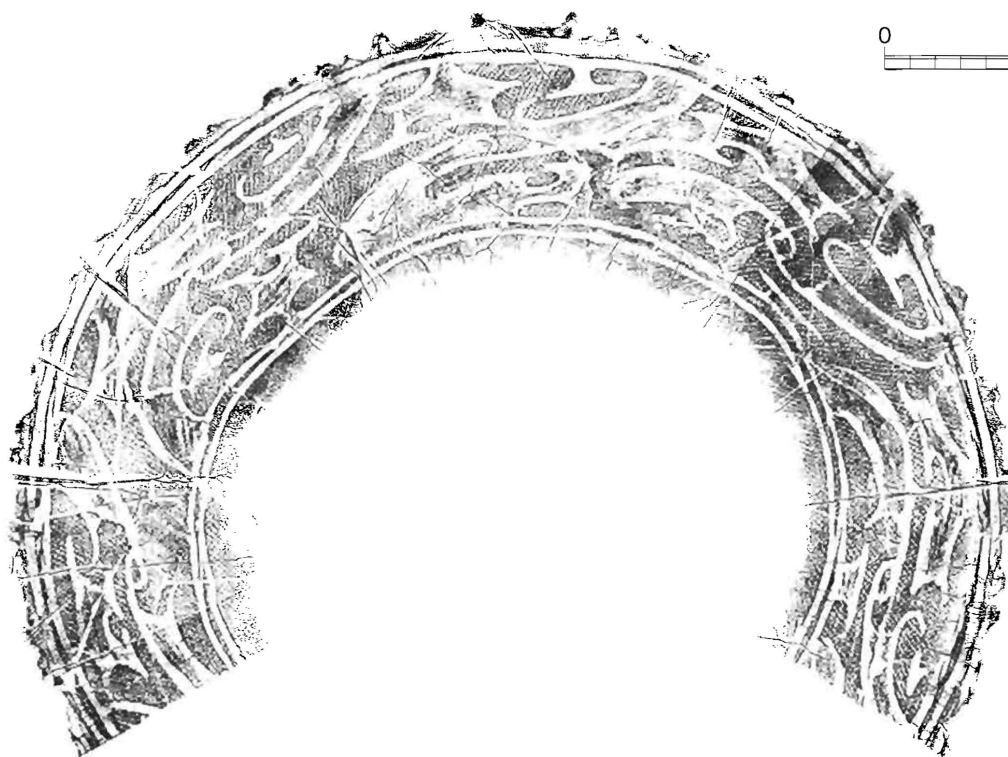
第62図 豊岡遺跡出土土器 (29~31)



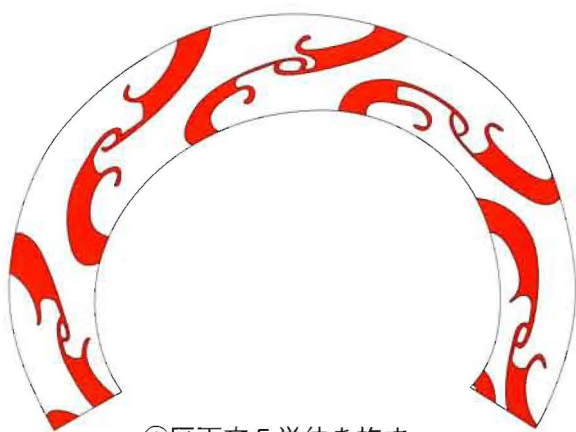
32正面



32側面



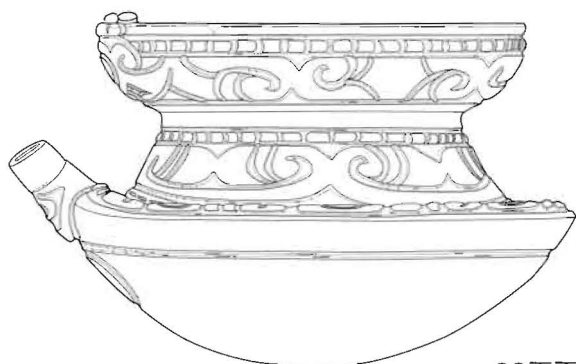
第63図 豊岡遺跡出土土器 (32)



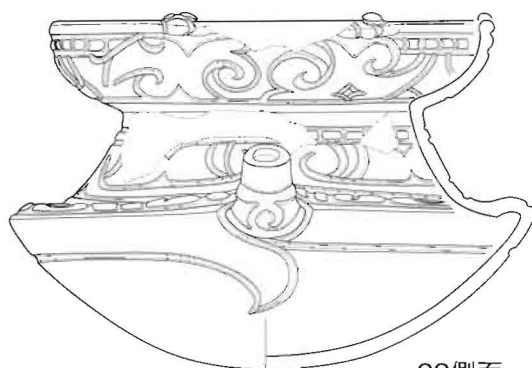
①区画文5単位を施す。



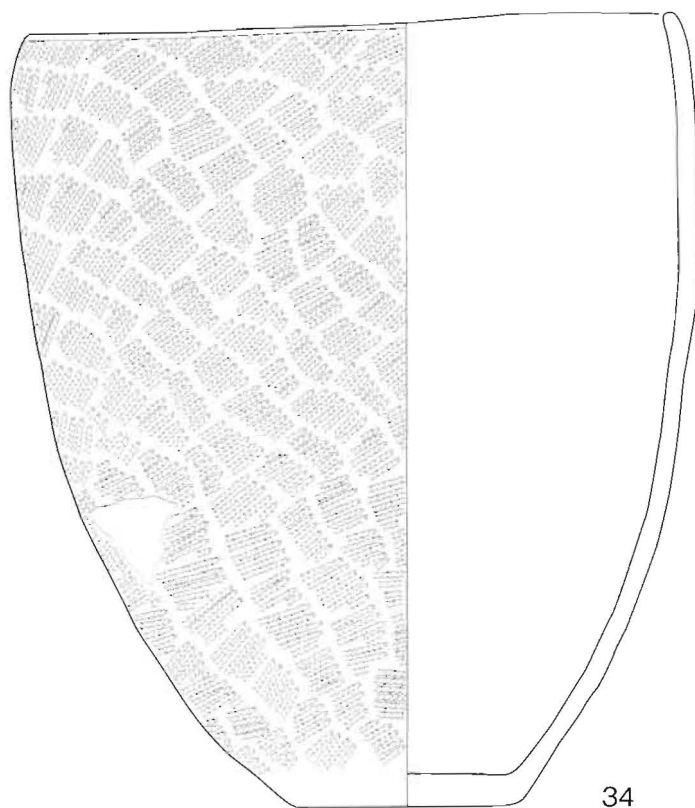
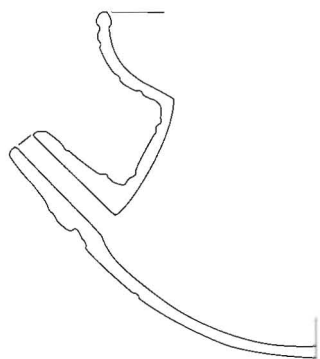
②充填文をうめる。



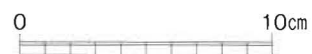
33正面



33側面



34



第64図 豊岡遺跡出土土器 (32の文様の施文工程・33・34)



番号	器種	文 様	特 徴	縄文	器高 (cm)	器幅 (cm)
1	台付鉢	配置文Ⅲ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。体部文様帯は配置文2単位を施し、山形の充填文をうめる。	LR	—	27.7
2	台付鉢	区画文Ⅰ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。口縁部に羊歯状文がめぐる。縦位B突起が1単位施される。体部文様帯は区画文4単位を施し、充填文をうめる。鉢部と台部の間につくられた隆帯に沈線による文様が施される。台部に丸形と三角形の小さな透かし孔が施される。口縁部に炭化物の付着がみられ台部は赤く変色している。	LR	17.4	15.5
3	台付鉢	区画文Ⅱ	口唇部に突起列がめぐる。口縁部に1条の内面沈線がめぐる。口縁部に2条の平行沈線と刻みがめぐる。体部文様帯は区画文4単位を施し、充填文をうめる。鉢部と台部の間の隆帯に、4単位の文様が施される。台部下端に1条の沈線がめぐる。台部が赤く変色している。	LR	12.2	17.5
4	台付鉢	配置文Ⅱ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。体部文様帯は配置文を施し、充填文をうめる。	LR	11.2	11.6
5	台付鉢	区画文Ⅱ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。体部上半に縦位B突起1単位が施されている。体部文様帯は区画文4単位を施し、充填文をうめる。	LR	11.2	11.8
6	台付鉢	配置文	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。口縁部に列点、頸部には短沈線がめぐる。体部上半に羊歯状文が施される。体部文様帯は円形の配置文を施し、充填文をうめる。台部には丸形と三角形の小さな透かし孔が施される。台部が赤く変色。内外面とも丁寧なミガキが施されている。	LR	9.7	12.9
7	台付鉢	区画文Ⅱ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。文様帯の上線に横位B突起が1単位施される。体部文様帯は区画文を施し、充填文をうめる。鉢部と台部の間につくられた隆帯に沈線による文様が施される。口縁部から体部上半にかけて炭化物の付着が著しく、台部は赤く変色している。	LR	10.7	16.0
8	台付鉢	配置文	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。頸部に短沈線、体部上半に3条の沈線と刻み、体部下半に1条の沈線がめぐる。台部に円形4単位・四角形4単位のすかし孔が交互に施される。	LR	9.4	12.6
9	台付鉢	配置文	口唇部に波状の装飾が施される。口縁部文様はひし形文から渦巻きがのびたような文様が点対称の構図に施文され、四角文・半円文・ひし形文などが充填される。	LR	16.0	19.0
10	鉢	区画文	口唇部は小波状の装飾がされ、6単位の山状突起が施される。口縁部に列点がめぐる。その下には弧線を組み合わせた、楕円形の隆帯部にノの字文を施した文様、その下に列点がめぐる。体部文様帯は縦の列点によって区画され、その中に2本の弧線を組み合わせ楕円形が縦に2つ並ぶ縄文部をつくっている。	LR	7.2	11.0
11	鉢	区画文	口唇部に横位B突起が4単位施されている。口縁部に羊歯状文が施される。頸部に1条の沈線がめぐり、正面に横位B突起が施される。体部上半の文様帯に4単位の区画文を施し、充填文をうめる。体部下半に1条の沈線がめぐる。	LR	12.6	11.0
12	ミニチュア	配置文	口唇部に波状の装飾がみられる。体部上半に入り組み三叉文と2条の平行沈線、体部下端に1条の沈線がめぐる。	LR	3.5	6.9
13	ミニチュア	無	内外面にミガキが施されている。	無	5.0	4.2
14	浅鉢	配置文Ⅰ	口縁部に施された2条の平行沈線の間に刻みがめぐる。体部文様帯は配置文を2単位点対称に配置し、充填文をうめる。底部文様はノの字文と三角文によって、X字形の縄文部が形成される。	LR	8.5	23.3
15	浅鉢	区画文Ⅲ	口縁部に3条の平行沈線と刻みがめぐる。体部文様帯に区画文3単位を施し、充填文をうめる。もともとの色調は黒褐色であるが、焼土に埋まっていた破片は浅黄橙色に変色している。	LR	8.2	18.2
16	浅鉢	配置文Ⅱ	体部文様帯は配置文4単位を施し、区画文4単位を充填する。器面に高師小僧が付着している。	LR	8.5	20.0
17	皿	区画文Ⅰ・Ⅱ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。口縁部内面に一条の沈線がめぐる。体部文様帯は2種類の区画文を交互に各3単位ずつ施し、充填文をうめる。底部文様は、不定形の区画文を1単位施した後、充填文を埋める。	LR	5.5	22.0
18	皿	配置文Ⅲ	口唇部に7単位の突起が施される。体部文様帯は配置文3単位を施し、充填文をうめる。	LR	4.5	18.7

豊岡遺跡出土土器観察表（1）

番号	器種	文 様	特 徴	縄文	器高 (cm)	器幅 (cm)
19	皿	区画文Ⅱ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。体部文様帯は区画文2単位を施し、充填文をうめる。	LR	5.2	20.5
20	皿	配置文Ⅲ	全体の50%残存。口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。文様帯は配置文(単位不明)を施し、充填文をうめる。	LR	7.5	28.7
21	皿	区画文Ⅰ	口唇部に波状の装飾が施される。体部文様帯は区画文4単位を施し、充填文をうめる。体部下端に列点が施される。内外面ともに丁寧なミガキが施されている。	LR	3.5	16.6
22	皿	区画文Ⅱ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。体部文様帯は区画文2単位を施し、充填文をうめる。内外面とも丁寧なミガキが施されている。	LR	6.4	23.5
23	皿	区画文Ⅱ	2個一対のB突起が4単位あると考えられるが、一部口縁部破損のため不明。口縁部に羊歯状文が施される。体部文様帯は区画文4単位を施し、充填文をうめる。文様帯下端に列点がめぐる。	LR	3.9	21.5
24	壺	羊歯状文	口唇部に羊歯状文と2条の平行沈線が施される。体部には2条の平行沈線と列点文がめぐる。体部の2条の沈線上には縦位B突起が施される。	無	7.7	12.1
25	壺	配置文	頸部破損。瘤状の4つの足がつき、漆の塗られたあとがみられる。体部文様は文様帯の上端に接して山形文・四角文を施している。	無	—	8.7
26	壺	無	口唇部に5個1単位の突起が施され、頸部には1条の沈線がめぐる。体部の縄文はLRとRLが羽状に交互に施文される。底部は小さな円形に区切られ、内部は無文になっている。	LR RL	9.0	10.3
27	壺	無	口縁部に1条の内面沈線がめぐる。頸部に縦位B突起が5単位、等間隔に並ぶ。突起間には列点文が施され、その下には2条の平行沈線がめぐる。	無	15.4	14.3
28	壺	配置文	口唇部正面に3個1単位のB突起が施され、その左右に上下一対のB突起が施される。正面突起と左右の突起間には刻みが施される。口縁部に刻みがめぐる。頸部文様帯に不定形の配置文3単位を施し、充填文をうめる。体部と頸部の間には3段の隆帯がつくれ、羊歯状の文様が施される。2段目の隆帯には横位B突起が1単位施される。底部文様はノの字文と三角文によってX字状の隆帯部が形成される。焼土から出土したため全体が浅黄橙色に変色している。	LR	14.0	12.1
29	壺	配置文Ⅱ	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。口縁部に1条の内面沈線がめぐる。頸部文様帯は配置文4単位を施し、充填文をうめる。頸部の下の隆帯にも彫りこみによる突起列と2条の平行沈線がめぐる。	LR	7.5	10.0
30	壺	羊歯状文	口縁部に列点と1条の沈線がめぐる。体部は上位、下位に二分され、それぞれに羊歯状文が施されている。	無	8.3	14.1
31	壺	配置文Ⅱ	頸部と体部の間に縦位B突起2単位、横位B突起2単位が交互に施される。体部文様帯は配置文4単位を施し、充填文をうめる。全体に赤彩が施されたあとがみられる。	無	8.9	11.5
32	注口	配置文 (上) 区画文Ⅰ (下)	口唇部に彫りこみによる突起列がめぐる。体部上半の文様帯は配置文4単位を施し充填文をうめる。隆帯部上位には刻みがめぐり、横位B突起5単位が施される。隆体部に彫りこみによる突起列がめぐっている。注口部の左右には縦位B突起が施され、注口の周りには上下に縦位B突起が、左右には横位B突起が施されている。体部下半文様帯は区画文5単位を施し、充填文をうめる。	LR	17.0	27.0
33	注口	区画文 配置文	口縁部には列点がめぐり、区画文が5単位施される。体部上半は配置文が4単位施される。体部上半と下半の境界には配置文が13単位施され注口部には玉抱き三叉文が施される。	無	14.0	21.1
34	深鉢	無	口縁部に炭化物が付着している。	LR	31.7	27.6

豊岡遺跡出土土器観察表(2)

# IV. 青森県平内町槻ノ木遺跡の縄文晩期 の土器について

藤沼邦彦・板橋秋穂・松田元生

## Ⅳ．青森県平内町槻ノ木遺跡の縄文晩期の土器について

藤沼邦彦・板橋秋穂・松田元生

### 1. 槻ノ木遺跡の立地

槻ノ木遺跡は青森県の中央、陸奥湾に面する平内町の小湊地区に所在する。平内町は青森市と野辺地町に挟まれており、南は八甲田山に連なる山岳地帯、北は陸奥湾に突出する夏泊半島となっている。

槻ノ木遺跡は平内町役場から直線距離にして南東へ約1 km、小湊川の右岸から夜越山へと続く標高10mの河岸段丘上に位置する。この地域は6、7月になるとヤマセと呼ばれる季節風が吹き、その影響で非常に風が強く、気温も上がりにくい。

かつて槻ノ木遺跡は他に、錦野里遺跡、下槻遺跡、小湊遺跡などとも呼ばれた。

### 2. 槻ノ木遺跡の調査歴

#### (1) 小湊中学校教職員、町有志による発掘

1949(昭和24)年4月に小野忠明による調査が行われた。詳しい遺物の出土状況は不明であるが、『平内町史』に発掘当時の現場写真と遺物の出土状況の写真が掲載されている。

#### (2) 慶應義塾大学による発掘調査

1951(昭和26)年7月31日～8月4日の5日間にわたり発掘を行っている。慶応大学の藤田亮策を中心に、清水潤三・江坂輝弥、それに地元の小野忠明などが参加した。遺跡の南部にある畑に東西長さ20m、幅2mのトレンチを設定した。表土下25cmの黒土層内から土師器・亀ヶ岡式土器・石器・装飾品などが出土した(平内町1977)。型式と層位の関係は明らかではない。

#### (3) 平内町教育委員会と平内町郷土史研究会による発掘調査

1965(昭和40)年5月2・3・5日の3日間に、延べ72人が参加した。発掘地点は遺跡中央から北寄りの畑で、長さ8m、幅2mのトレンチを3本設定し、それぞれA、B、Cと名づけた(平内町1977)。なお資料は平内町郷土資料館に所蔵されている。出土した土器は170点を越えていたが、層位などは不明である。

### 3. 実測図化の対象とした槻ノ木遺跡の遺物

今回資料化を行ったものは、田中忠三郎氏が保管しているもので、図33のみ青森県立郷土館所蔵の土器である。田中氏が発掘した槻ノ木遺跡の資料の大部分は、現在国立歴史民俗博物館に所蔵されている。田中氏の所にあるものは、その残りである。

槻ノ木遺跡から出土した遺物の総数は不明であるが、国立歴史民俗博物館に所蔵されているものだけでも、約800点ある。また、田中氏が所有している遺物の写真、平内町郷土資料館の展示品を検討すると、大洞B式と大洞BC式の土器が多く、槻ノ木遺跡はこの時期を主体とした遺跡であると言えることができる。

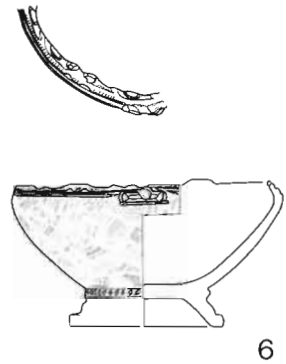
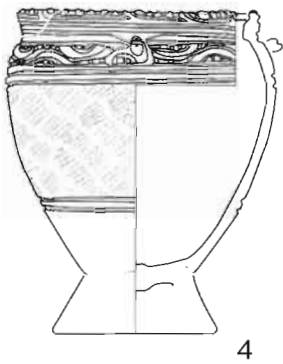
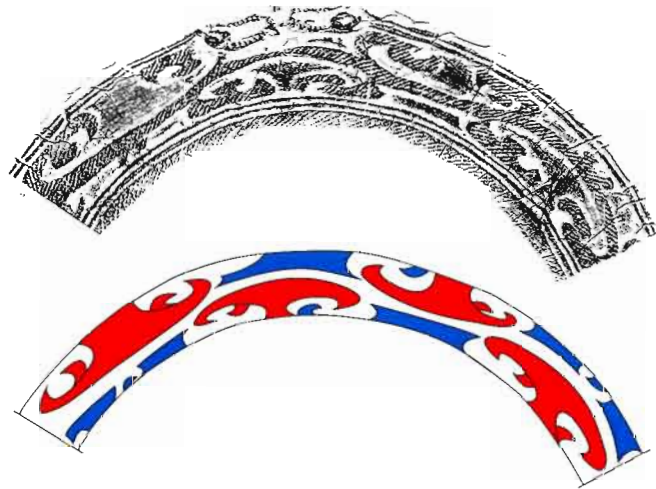
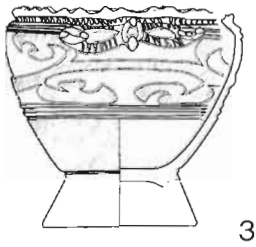
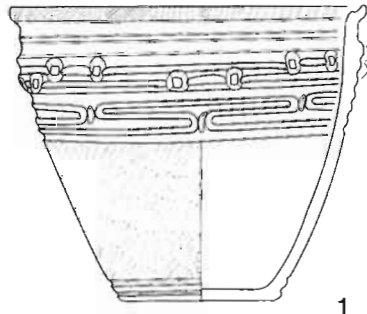
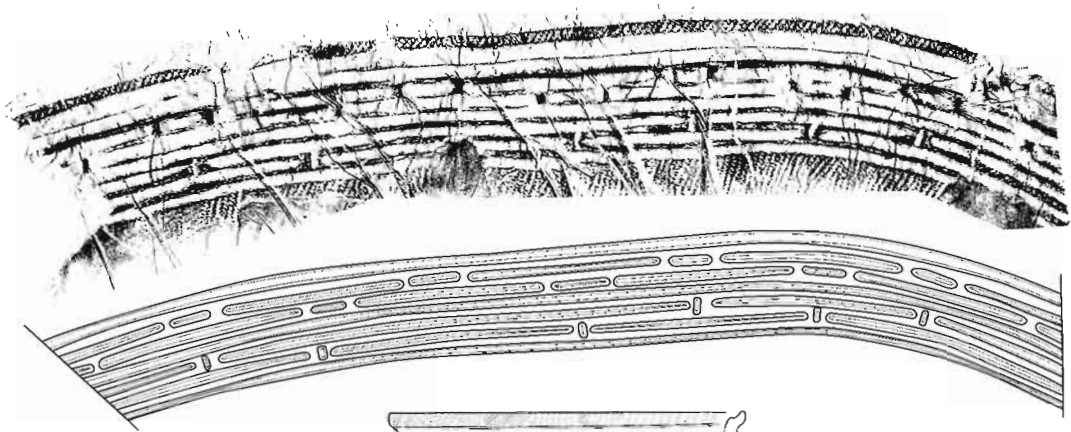


槻ノ木遺跡の出土遺物（国立歴史民俗博物館所蔵）

国立歴史民俗博物館『縄文時代の扉を開く－三内丸山遺跡から縄文列島へ－』2001より転載

〈槻ノ木遺跡の基本文献〉

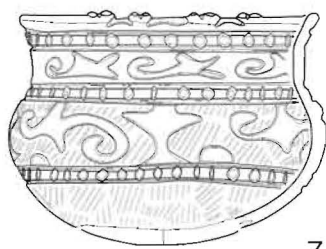
- 1955年 清水潤三「青森県東津軽郡小湊遺跡」『日本考古学年報』3 日本考古学協会
- 1955年 清水潤三「青森県東津軽郡小湊遺跡」『日本考古学年報』4 日本考古学協会
- 1966年 平内町教育委員会『縄文土器写真集 第一集』平内町郷土研究会
- 1977年 平内町「第二章 町のあゆみ 第一節 先史時代」『平内町史 上巻』
- 1990年 青森県埋蔵文化財調査センター編『北の誇り・亀ヶ岡文化』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③ 青森県教育委員会
- 2003年 小林圭一「東北北半における縄文晩期前葉の注口土器」『研究紀要 創刊号』財団法人山形県埋蔵文化財センター



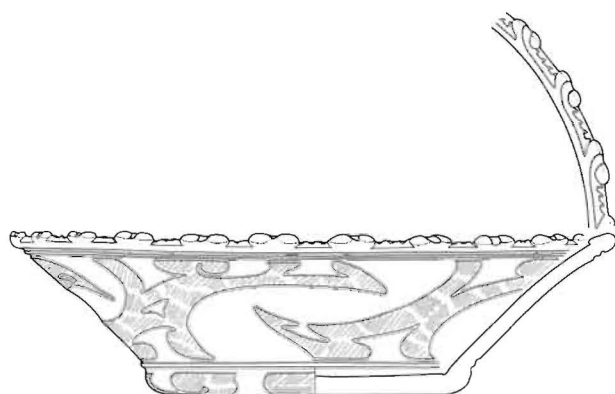
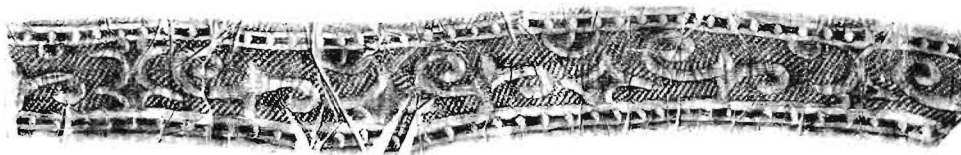
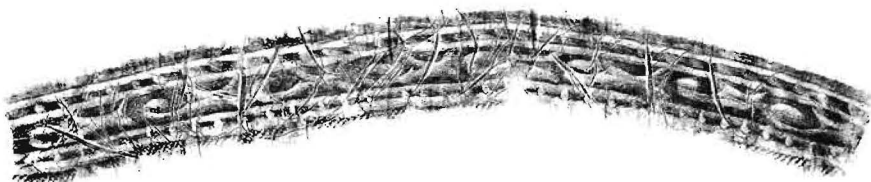
第65図 椀ノ木遺跡出土土器（1～6）



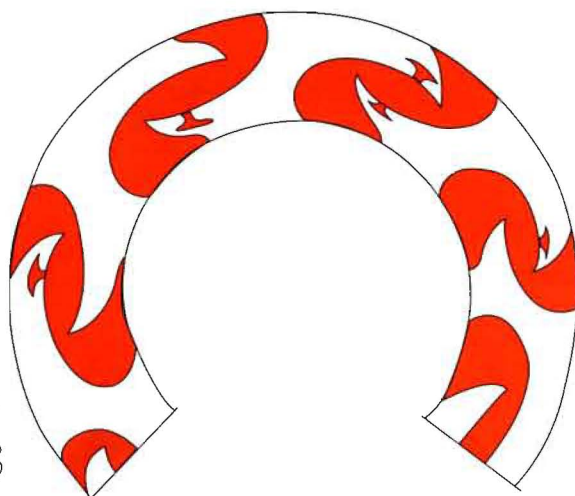




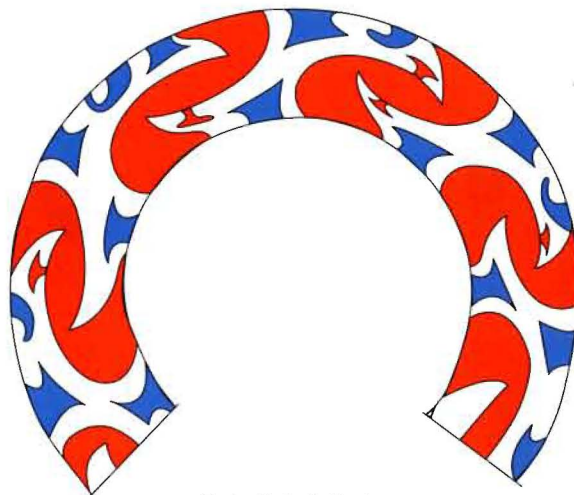
7



8



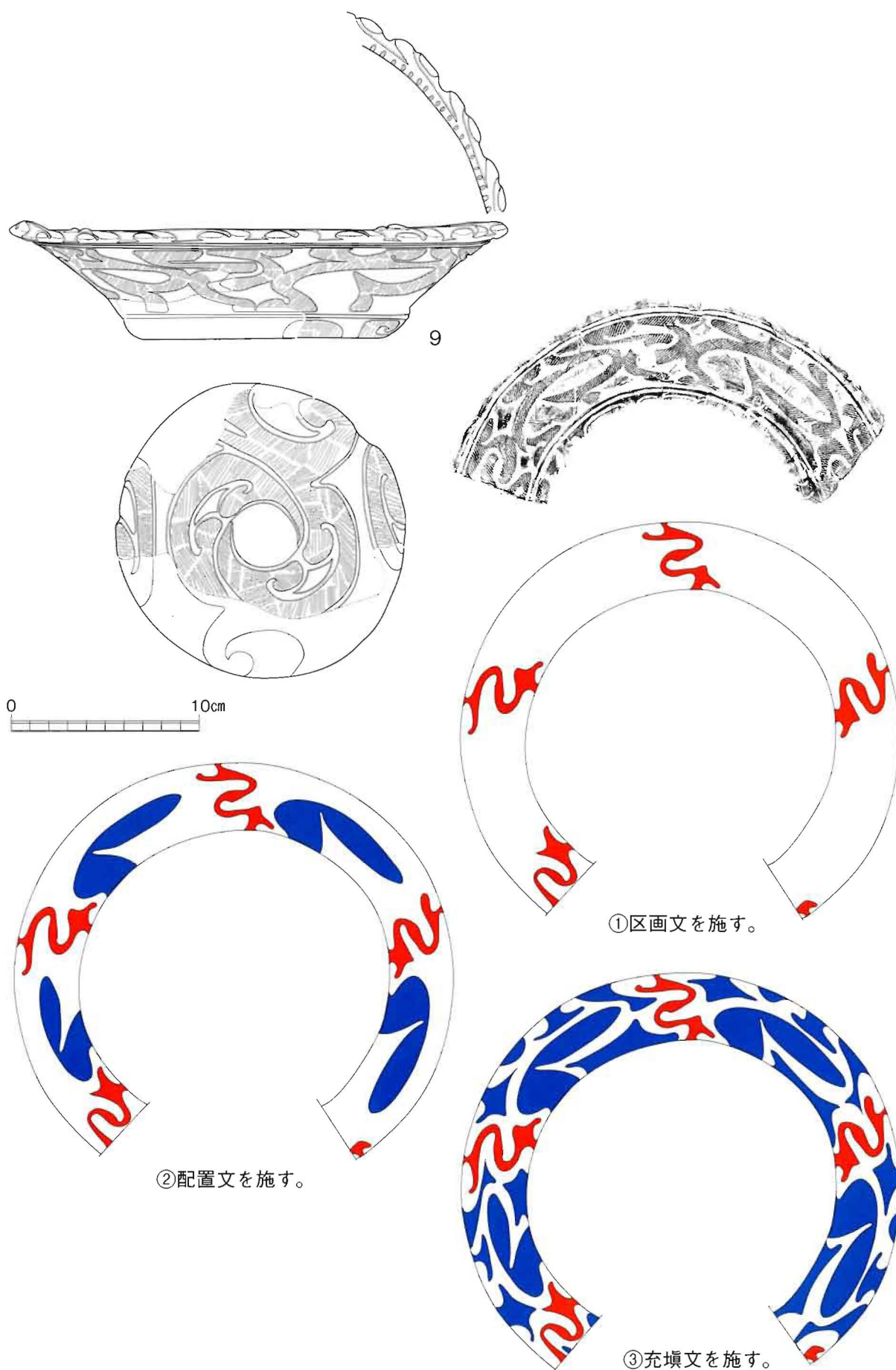
①区画文を施す。



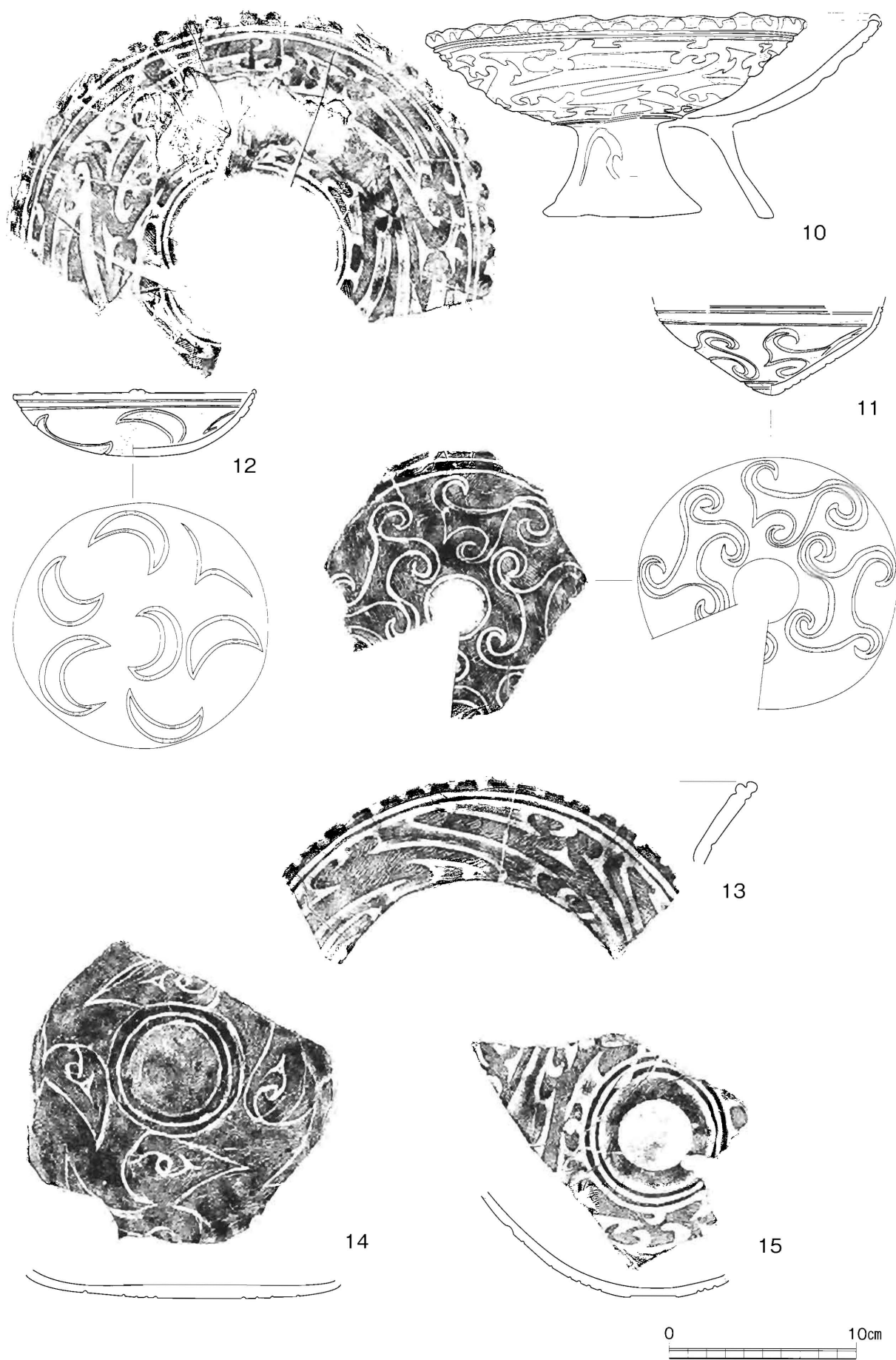
②充填文を施す。



第66図 梶ノ木遺跡出土土器（7・8）

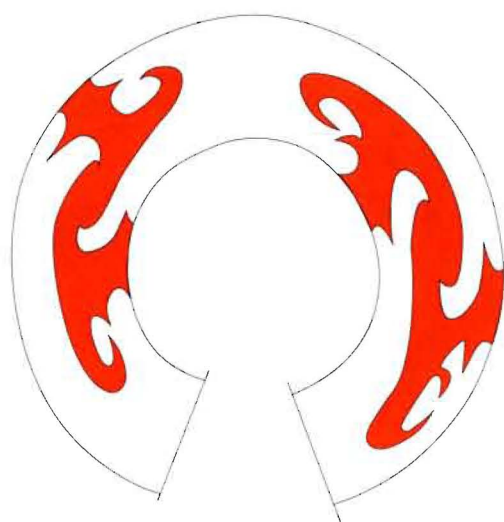
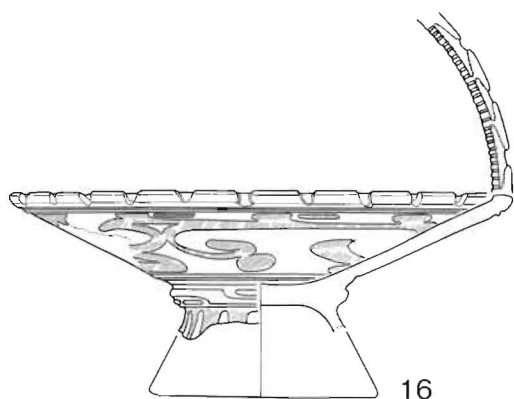


第67図 槻ノ木遺跡出土土器（9）

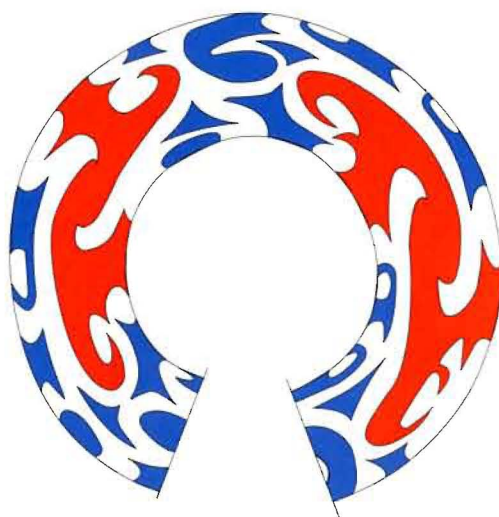


第68図 槻ノ木遺跡出土土器 (10~15)

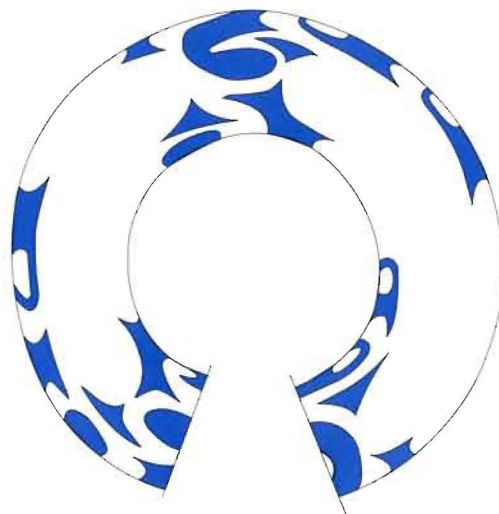




①区画文を施す。

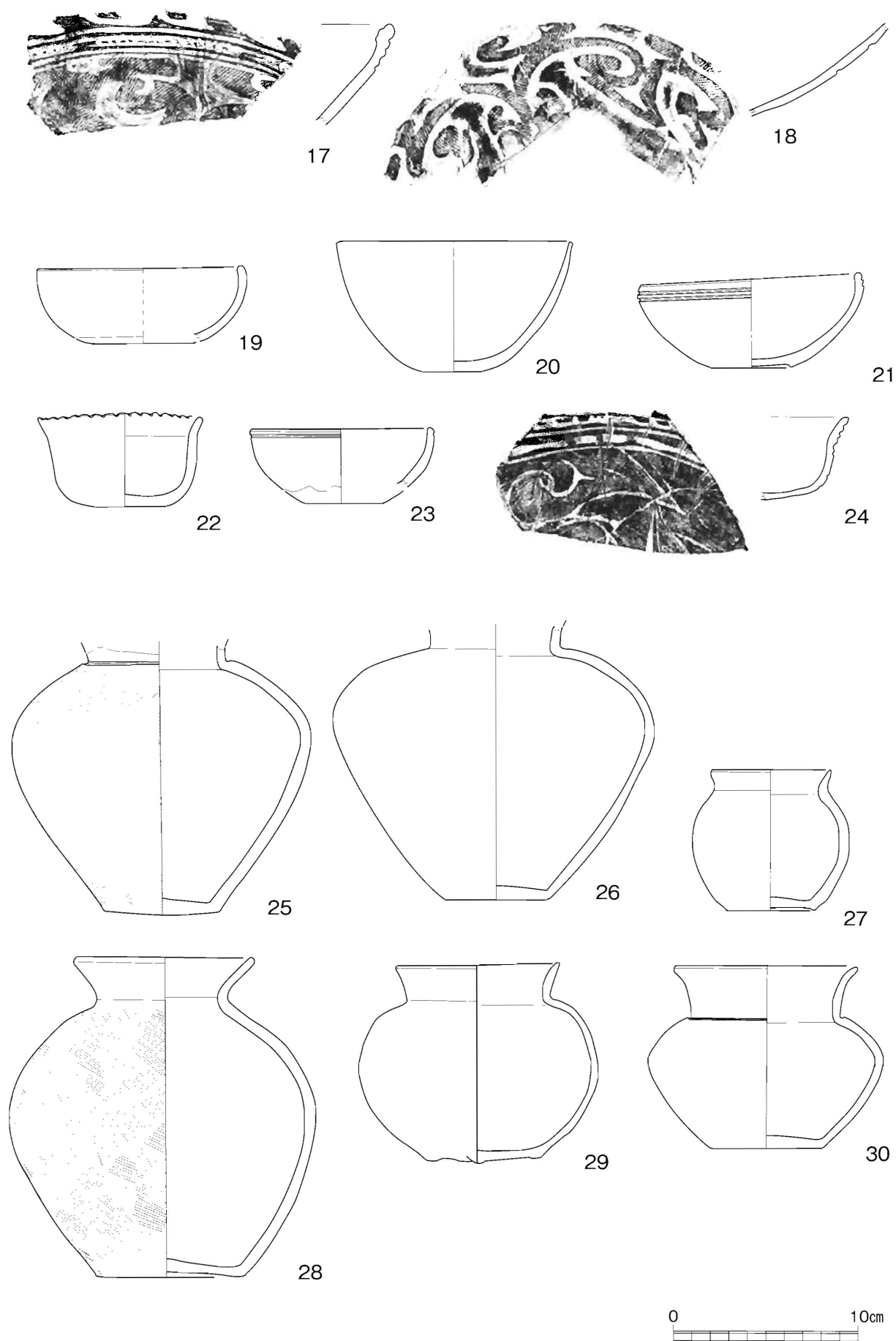


②充填文を施す。

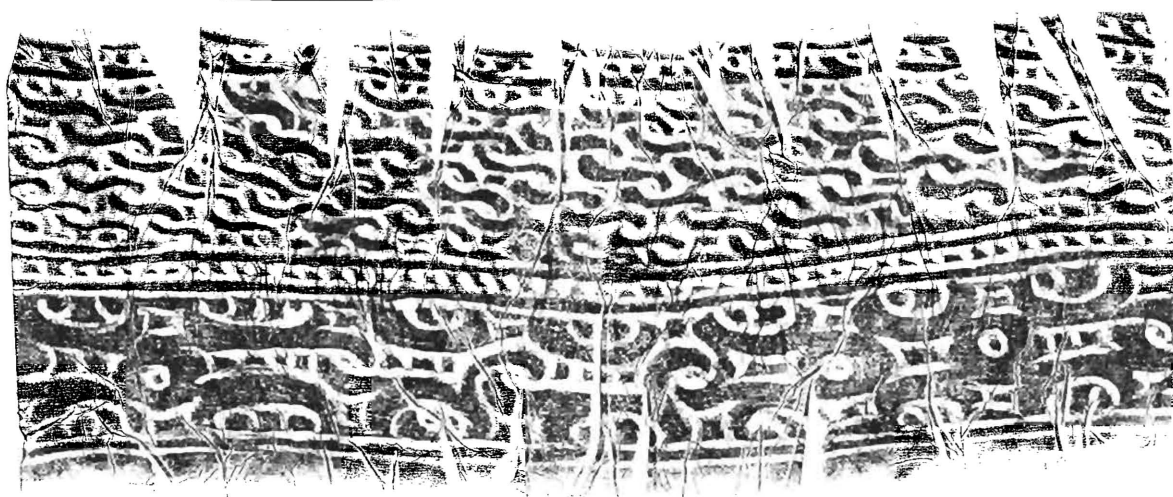
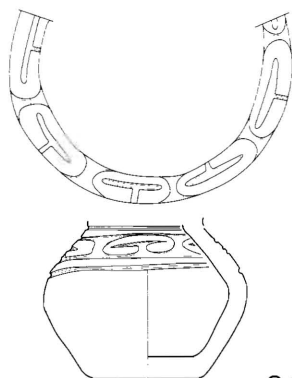
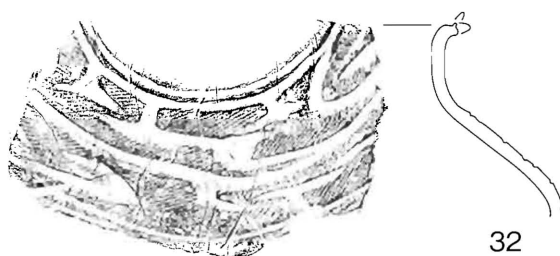
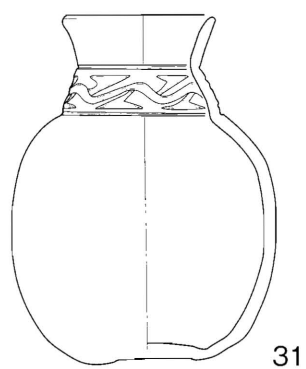


③充填文の抜き出し。

第69図 槻ノ木遺跡出土土器 (16)

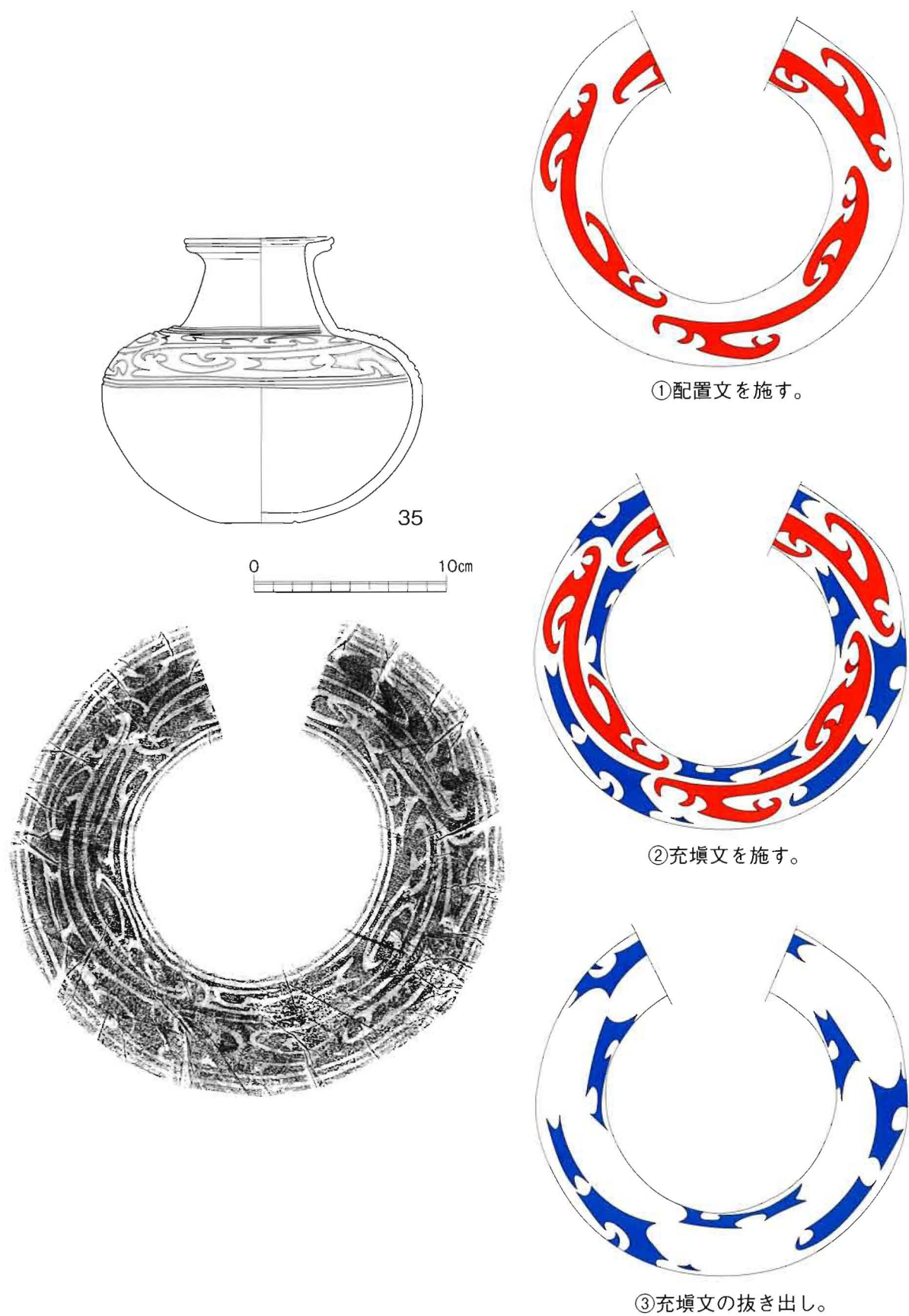


第70図 槻ノ木遺跡出土土器 (17~30)

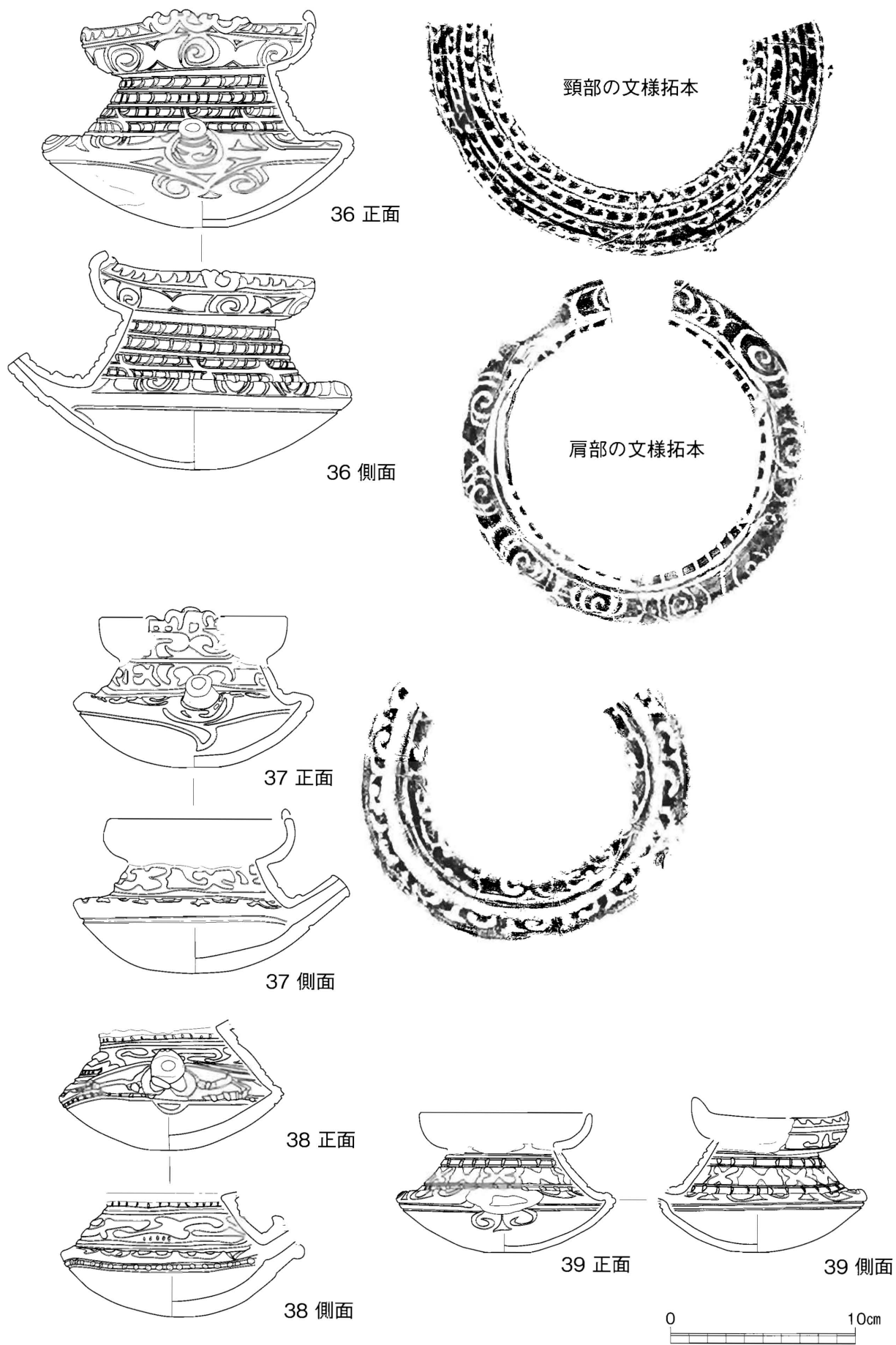


第71図 槻ノ木遺跡出土土器 (31~34)

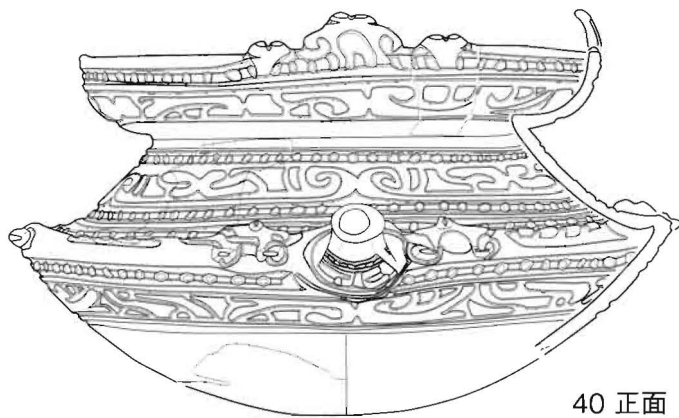




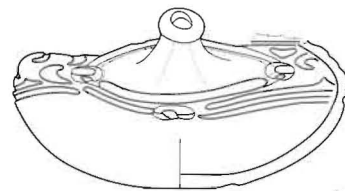
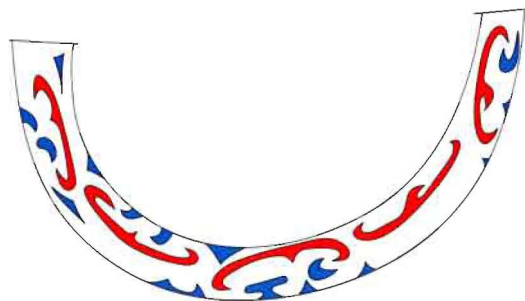
第72図 槻ノ木遺跡出土土器 (35)



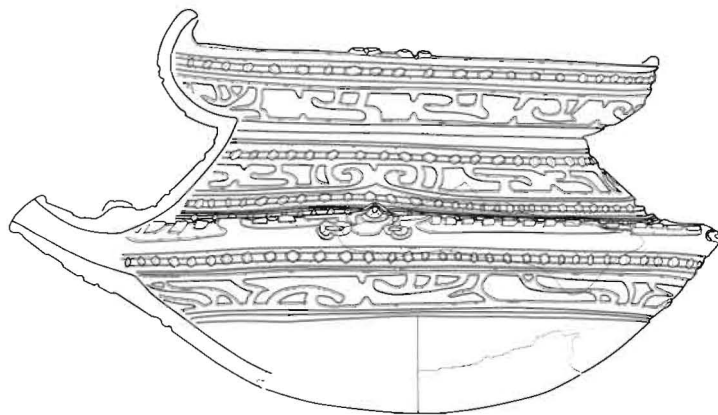
第73図 槻ノ木遺跡出土土器 (36~39)



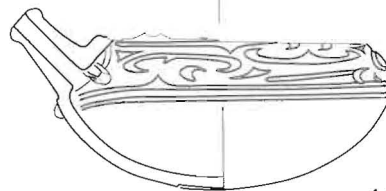
40 正面



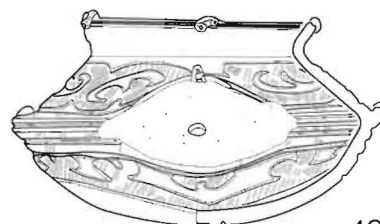
41 正面



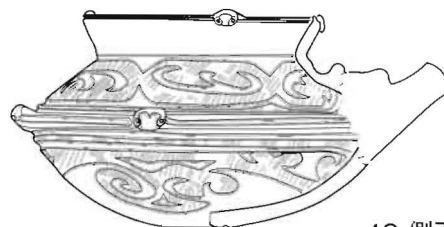
40 側面



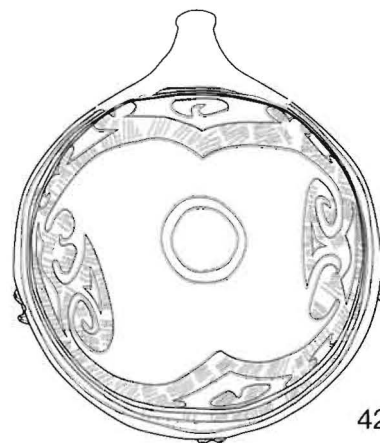
41 側面



42 正面



42 側面



42 下面

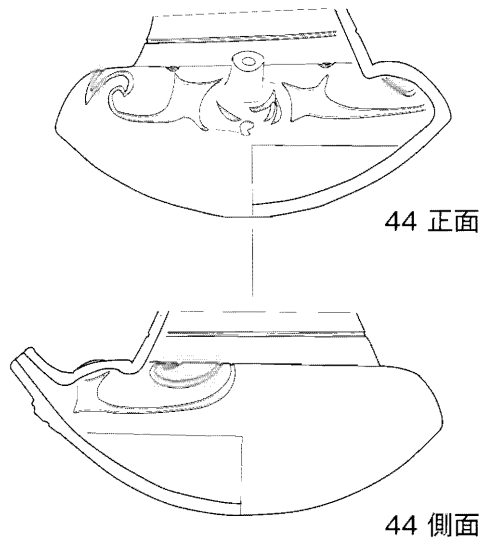


第74図 槻ノ木遺跡出土土器 (40~42)



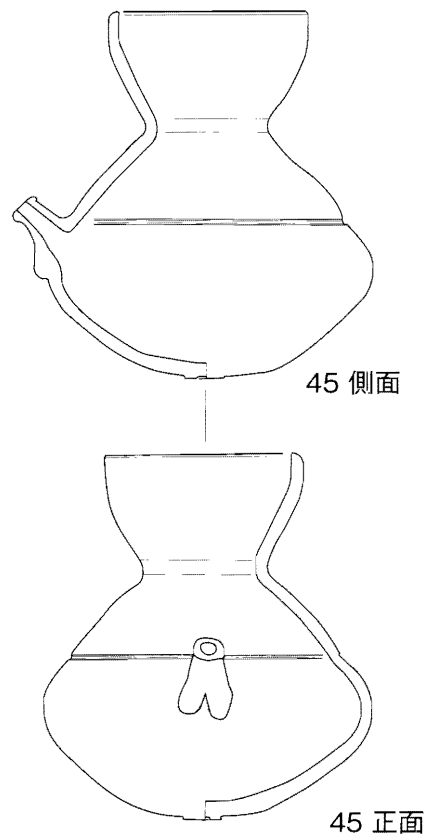
43 正面

43 側面



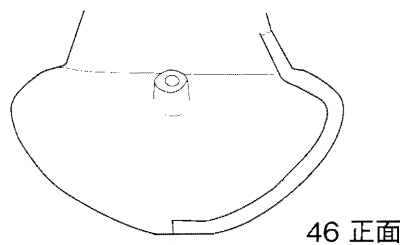
44 正面

44 側面

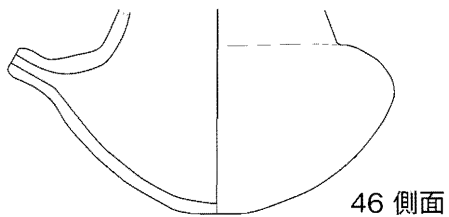


45 側面

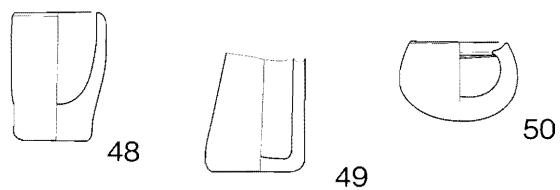
45 正面



46 正面



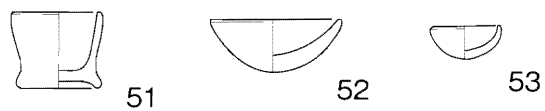
46 側面



48

49

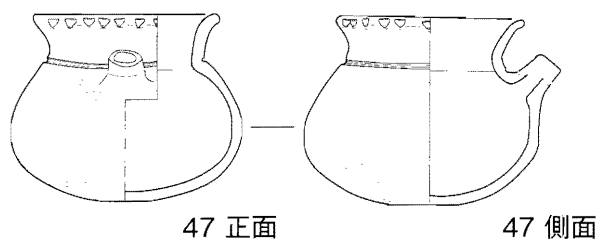
50



51

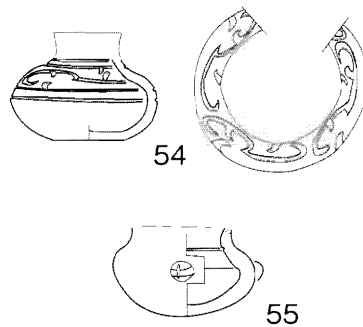
52

53



47 正面

47 側面



54

55



第75図 槻ノ木遺跡出土土器 (43~55)

番号	器種	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
1	鉢	口唇部上面に沈線が巡る。文様を区画する縦の短沈線がはっきり見られる。2個1対の突起が8単位。体部下半に沈線が2条巡る。	縄文LR	11.8	13.9
2	台付鉢	台部3分の1残存。口唇部が切り込みにより波状を呈す。B突起2単位残存。文様の下に沈線が2条。台部に穿孔。	縄文RL	10.3	11.7
3	台付鉢	台部破損。口唇部内面に沈線が1条。口唇部にB突起15単位。口縁部に沈線2条。正面にB突起3単位。中央の突起が縦向きで左右は横向き。体部下半に沈線が2条。	縄文LR	—	9.5
4	台付鉢	台部破損。口唇部内面に沈線1条。羊歯状文の下に沈線2条。体部の上部と下部に沈線が2条ずつめぐる。	縄文LR	—	10.7
5	台付鉢	口唇部内面に沈線が1条。口唇部に突起列が巡る。口縁部に沈線が2条。正面にB突起1単位。体部と台部の境に沈線によって描かれた文様が6単位。台部に沈線が巡る。	縄文LR	13.3	14.0
6	台付鉢	口唇部上面に突起列があり、突起列と沈線の間に刺突が巡る。口縁部正面にB突起。沈線が2条。台部と体部の境に列点が巡る。台部内面に横方向のミガキ。	縄文LR	5.8	10.8
7	鉢	全体にミガキが施される。口唇部にB突起が4単位。列点が3列。	縄文LR	—	12.6
8	皿	口唇部にB突起が22単位等間隔で配置。突起間には羊歯状の沈線が施される。内面に沈線1条。底部に文様。	縄文LR	6.5	24.3
9	皿	2分の1残存。口唇部内面に沈線1条、刻み目が巡る。口唇部上面にB突起2単位。口唇部に11単位の突起列。底部に文様。	縄文LR	7.7	(26.9)
10	台付浅鉢	2分の1残存。口唇部に2個1対の突起が14単位。口唇部突起の直下に沈線1条。台部との境に沈線2条。	縄文LR	11.0	20.5
11	—	先の尖った底部の土器片と思われる。沈線2条。配置文3単位。底部に沈線2条。	縄文LR	—	—
12	皿	口唇部に突起が3単位。口縁部に沈線が2条。三日月形の文様が6単位。	縄文LR	3.6	13.1
13	皿	口縁部内面に沈線1条、口唇部に彫り込みによる突起列。口縁部と体部文様との間に沈線2条。内面に横方向のミガキ。	縄文LR	—	—
14	—	底面に2条の平行沈線。内面がよく磨かれている。	縄文LR	—	—
15	—	底面に2条の沈線。上げ底。	縄文LR	—	—
16	台付浅鉢	台部破損。口唇部内面に刻み目が巡る。口唇部に彫り込みによる突起列が巡る。体部と台部の間に沈線によって描かれた文様が3単位。台部に一部文様が見られる。内面に縦方向のミガキ。	縄文LR	—	20.2
17	皿	口縁部内面に刻み目が巡る。口唇部に彫り込みによる突起列が巡る。	縄文LR	—	—
18	—	文様が見られる。	縄文LR	—	—
19	浅鉢	底部破損。外面に横方向のミガキ。	無	—	11.4
20	鉢	表面がやや凸凹。	無	7.2	13.2
21	浅鉢	赤彩。口縁部に沈線が2条。上げ底。外面に横方向のミガキ。	無	4.7	11.7
22	鉢	2分の1残存。口唇部が切込みによって波状を呈する。	無	5.1	8.9
23	浅鉢	底部破損。口縁部に沈線が1条。表面がやや凸凹。	無	(4.1)	9.9
24	浅鉢	沈線2条の間に短沈線2条。内面に横方向のミガキ。	縄文LR	—	—
25	壺	口縁部破損。頸部に沈線が1条。底部が少し盛り上がる。アスファルトによる補修が見られる。	縄文LR	—	16.8
26	壺	口縁部破損。頸部に沈線が1条。体部上半は横方向、下半は縦方向のミガキ。	無	—	17.6
27	壺	上げ底。	無	7.7	8.6
28	壺	上げ底。	縄文RL	17.7	16.9
29	壺	底部四足。	無	10.9	13.2
30	壺	頸部に沈線が1条。	無	10.1	(12.9)
31	壺	頸部の沈線間に波状文。底部四足。内部に赤彩。	無	14.1	10.7
32	壺	赤彩。口唇部にB突起1単位。口縁部に突起1単位。沈線2条のうち2条目は文様帯の上線。	縄文LR	—	—

槻ノ木遺跡出土土器観察表（1）



番号	器種	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
33	壺	口縁部内面に沈線が1条巡る。口唇部正面に2個1対のB突起。口縁部に沈線1条。頸部上半、下半に沈線が1条ずつ。体部上半に突起1単位。体部下半に沈線2条。青森県立郷土館所蔵。	無	18.1	11.9
34	壺	口縁部破損。体部沈線に挟まれる形で楕円文5単位。楕円文の中にT字状の文様が上下交互に施される。	縄文LR	—	8.1
35	壺	赤彩。口縁部に沈線1条。頸部に縦方向のミガキ。	無	15.1	17.0
36	注口	口唇部に2個1対の突起が3単位。注口部に三叉文が施される。体部下半に沈線が巡り正面で弧線状の文様が渦巻き状になる。	無	11.9	17.0
37	注口	体部下半に沈線が1条巡る。	無	8.8	13.2
38	注口	口縁部破損。注口部の左右に隆帯。	無	—	12.2
39	注口	口縁部3分の1残存。注口部破損。体部下半に沈線がめぐり正面で弧線状になる。	無	7.7	12.0
40	注口	口唇部に2個1対の突起が3単位。隆帯部に突起が5単位が巡る。	縄文LR	(16.1)	26.8
41	注口	注口部の上下左右に突起がある。赤彩。全体にミガキ。上げ底。	無	—	13.4
42	注口	注口部破損。口唇部に突起4単位。肩部に沈線が2条が巡る。文様が6単位。隆体部の中央に沈線1条。上げ底。	縄文LR	8.4	14.9
43	注口	口縁部、注口部が破損。体部下半に沈線がめぐる。全体にミガキ。	無	—	8.9
44	注口	口縁部破損。頸部に沈線が1条がめぐる。全体にミガキ。	無	—	16.5
45	注口	注口部根元に二股の突起。	無	14.7	13.2
46	注口	口縁部破損。	無	—	13.2
47	注口	注口部破損。口唇部に彫り込み。頸部に沈線が一条。縄文が底部にまで施される。	縄文LR	7.6	9.4
48	ミニチュア	2分の1残存。底部が厚い。	無	5.3	3.8
49	ミニチュア	口縁部から体部上半にかけて破損。	無	—	3.9
50	ミニチュア	口縁部内面に沈線が1条。折り返し口縁。	無	3.2	4.8
51	ミニチュア	口縁部2分の1残存。台付き。	無	3.4	4.2
52	ミニチュア	口縁部3分の2残存。	無	2.0	5.7
53	ミニチュア	2分の1残存。内面が凸凹している。	無	1.2	2.9
54	ミニチュア	口縁部破損。赤彩。頸部に沈線が2条。上げ底。	縄文LR	—	5.9
55	ミニチュア	口縁部破損。内面に沈線が1条。瘤状の突起が一単位。	無	—	4.5

槻ノ木遺跡出土土器観察表（2）

# V. つがる市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の 土器について

藤沼邦彦・境沢宏美・山口朋美

## V. つがる市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の土器について

藤沼邦彦・境沢宏美・山口朋美

### 1. 亀ヶ岡遺跡の概要

亀ヶ岡遺跡は、縄文時代晩期を代表する遺跡である。1944(昭和19)年6月に国の史跡に指定された。亀ヶ岡式土器や亀ヶ岡文化という呼称は、亀ヶ岡遺跡の名にちなんでいる。また植物性遺物や藍胎漆器などを出土する泥炭層遺跡として、八戸市是川中居遺跡と共に有名である。

本遺跡は、青森県つがる市木造大字館岡および亀ヶ岡に所在する。遺跡の西側には屏風山丘陵が南北に連なり、東側には岩木川の沖積作用で形成された津軽平野が広がっている。遺跡から日本海(七里長浜)までは直線距離にして約4kmである。遺跡は亀山丘陵と呼ばれる低い台地を中心に、北側の近江沢、南側の沢根と呼ばれる低地にまで及んでいる。本遺跡を特徴づける低湿地泥炭層は近江沢地区と沢根地区に存在する。標高は、亀山丘陵で20m、近江沢及び沢根地区で3～5mである。

### 2. 亀ヶ岡遺跡発掘調査の歴史

江戸時代から好事家や村人による出土品目当ての発掘が行われ、夥しい遺物が各地に散逸した。以下では明治時代以降に行なわれた代表的な学術発掘を紹介する。

#### (1) 佐藤伝蔵の発掘

1889(明治22)年に若林勝邦が発掘調査を行っているが(若林1889)、佐藤伝蔵の発掘調査の方が本格的である。

東京大学の佐藤伝蔵は、2回にわたり亀ヶ岡遺跡を発掘している。1回目の発掘は、1895(明治28)年に行われた(佐藤1896)。発掘地点は沢根地区の丘陵下と思われる。また亀山地区も発掘している。出土した土器は大洞A式を主体としており、このほかに石器・土偶・石製品が出土している。2回目の発掘は、1896(明治29)年に行われた(佐藤1896)。これは戦前における最大の発掘調査であった。発掘地点は近江沢であると思われる。出土した土器は大洞C2式を主体としており、このほかに土偶、動物形土製品、石棒、磨製石斧、打製石斧、石鏃など大量の遺物が出土している。さらに佐藤伝蔵は泥炭層から遺物が出土する理由について、地すべり説、水上住居説、水力運搬説、人工埋蔵説を紹介し、これらを否定して新たに海嘯説(津波説)を提唱した。

佐藤伝蔵の発掘報告では、亀ヶ岡遺跡の層序を示し、初めて泥炭層の成因を検討して海嘯説という一応の結論を出している。また出土遺物の図を載せて分類し、計測値も記しており、当時の発掘調査の報告としては極めて学術的な内容となっている。

#### (2) 小岩井兼輝の発掘

小岩井兼輝(旧制弘前高等学校教授)が亀ヶ岡遺跡を発掘調査した時期は不明であるが、齊藤報恩会の記録(齊藤報恩会1934)によると、昭和7年に発掘が行われた可能性が高い。報告記事にある写真に「雷電宮西下地下粘土及泥炭層より土出せるもの」とあり(小岩井1934)、沢根地区の最も谷奥に近い部分を発掘したことがわかる。遺物には石器・土器・骨器・角器・獣骨等がある。また壺形の同種類のものが一ヶ所から4個並んで出土したことから、小岩井兼輝は泥炭層の形成を地殻下降運動によるものとした。

この時の出土遺物は旧制弘前高等学校所蔵となり、その一部が現在の弘前大学人文学部日本考古学研究室に引き継がれている。

#### (3) 三田史学会の発掘

1950(昭和25)年に藤田亮策・清水潤三らを中心とする慶応大学の一行により発掘が行われた。沢

根地区にA・Bの2本のトレンチ、近江沢地区にC・Dの2地点を設けた。出土した遺物には、土器・石器・骨角器・木器・土製品・藍胎漆器・自然遺物がある。縄文時代後期の土器もあるが、大洞BC～大洞A'式までの晩期の土器が大部分で、完形または復元したものも約70点ある。特にBトレンチでは、大洞C2式を中心とした遺物が出土している。

三田史学会では、遺跡の成因について佐藤伝蔵の海嘯説（津波説）を批判し、新たに祭祀説を提唱した（三田史学会1959）。

#### （4）青森県教育委員会の発掘

青森県教育委員会は、1973（昭和48）年にバイパス道路建設に伴い、沢根地区の史跡指定地に隣接する地点を発掘調査した。発掘地区は農道を境として南側をS区、北側をN区に分け、約16のグリッドを設定している。出土した土器はS区、N区を合わせて、円筒下層d式、円筒上層a式、十腰内I～V式、大洞B、BC、C1、C2、A、A'式、弥生土器、須恵器、珠洲焼等がある。他に石器、石製品、土偶、土製品等が出土している。また大洞A'式を主体とする包含層からガラス玉が出土した（青森県教育委員会1974）。

#### （5）青森県立郷土館の発掘

青森県立郷土館は、1980（昭和55）～1982（昭和57）年の三カ年にわたって発掘調査を行った。第一年次調査では沢根地区を発掘し、A区とB区を設定した。第二年次調査では沢根地区と近江沢地区を発掘し、沢根地区ではB区の第一年次分の未発掘部分と新たにC1～C3区を設定して発掘している。沢根B区からは籾殻と炭化米が大洞A式土器に伴って発見されたという。第三年次調査では、沢根地区と亀山地区を発掘し、沢根地区では新たにD区を設定している。亀山地区からは縄文晩期の土坑墓が26基検出された。なお、沢根地区で大洞C1式～大洞A式、亀山地区で大洞BC式～大洞C2式が主体的に出土した。こうしたことから、各時期によって土器の廃棄場所が違うのではないかと考察している（青森県立郷土館1984）。

### 3. 弘前大学所蔵の土器

弘前大学人文学部日本考古学研究室で所蔵している資料は、旧制弘前高等学校教授の小岩井兼輝氏が発掘したものと伝えられている。それらの遺物は朱や墨書きで注記され、漆塗りの破片など優れたものを含んでいる。ここでは、亀ヶ岡遺跡出土の完形品36点と破片80点の実測図を掲載した。これらは、深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢・台付浅鉢・皿・壺・注口土器である。なお参考品として、青森県立郷土館所蔵の亀ヶ岡遺跡出土の土器1点（台付浅鉢58）、土井I号遺跡出土の土器1点（壺121）、八幡崎遺跡出土の土器2点（浅鉢120・注口122）、出土地不明の土器3点を掲載した。

#### 文様による分類

文様については、以下のように分類を行った。

##### （1）Ⅰ類：無文のもの

地文の無いもの（鉢32、浅鉢43、壺88～90・92～94・96・100・112～114・118・119）、地文が縄文のみでLRのもの（壺98・107・110）、RLのもの（壺97・108・111）、地文が条痕のもの（深鉢6）がある。

##### （2）Ⅱ類：羊歯状文

鉢29に見られた。鉢29は羊歯状文の末端が入組んでおり、文様が頸部に2段施されている。

##### （3）Ⅲ類：雲形文

浅鉢40・44・49、皿81～87、注口103・104に見られる。文様の全体像が比較的分かるものは浅鉢49のみである。この文様については施文工程を示した。まず付加文のある配置文を2単位配置する。次にその隙間を大きめの充填文で埋める。最後に小さめの充填文とノの字状の充填文を配置する。ただ

し破損部については、復元できない部分があった。

#### (4) IV類：入組文

鉢27・28、壺99・109・115に見られる。台付鉢27は摩滅がひどいが、壺109・115と同じく聖山Ⅰ式に見られる連繫入組文であると思われる。壺109については、施文工程を示した。

#### (5) V類：工字文

十字文の形を主な要素として分類を行った。

##### ①V A 類

三角形文を点対称に並べたものである。鉢34、台付浅鉢57・58・65・66、浅鉢77に見られる。

##### ②V B 類

十字状の三角形文を点対称に組み合わせて連続して配置したものである。台付浅鉢51・59に見られる。

##### ③V C 類

V A 類の配列によって生まれた工字文を沈線で表したもので、沈線で上向き下向きの三角形を交互に並べていくように描いたものである。またその中に1条の沈線が入るものもある。浅鉢45・74、台付浅鉢46・48・50・62・68、壺101に見られる。

##### ④V D 類

十字状の沈線を点対称に並べたものである。鉢13・21・33に見られる。

##### ⑤V E 類

T 字状の沈線を上下互いに並べたものである。鉢11・20・35に見られる。

#### (6) VI類：変形工字文

ここでは主に三角形の文様に着目して分類を行った。

##### ①VI A 類

彫り込みによる三角形の文様の中に十字状の文様を引いたものを連続して配置したものである。台付浅鉢47・56・60・63・67・70～72・76、壺91の下段に見られる。

##### ②VI B 類

彫り込みによる三角形の文様の中に沈刻で表された三角形の文様があり、その下に1条の沈線を引いているもので、三角形の間に斜線が2本引かれているものである。鉢10、台付浅鉢55に見られる。

##### ③VI C 類

沈線で表された三角形の中に楕円文を描き、その内部に1条の沈線を引き、さらにその上に1条の沈線が引かれるものである。さらに三角形の間に斜線が2本引かれている。壺91の上段にのみ見られる。

##### ④VI D 類

残存部のみでは特徴がわからないものである。深鉢4、鉢14、浅鉢61・69・73・75・78・79、壺102がこれにあたる。

#### (7) VII類：平行沈線文

平行沈線が複数引かれているものである。深鉢1～3・5、鉢7～9・12・15～19・22～25・30・31・36～39・106、台付鉢26、浅鉢41・42、台付浅鉢52～54・64がこれにあたる。

#### (8) VIII類

上記の文様に該当しないものである。浅鉢80は、彩文土器であり黒漆と赤漆で文様が描かれている。壺95は、上下に2条ずつ平行沈線を引き、その間を縦に並ぶ3条もしくは2条ずつの沈線で区画している。台部105は透かしで文様が施されている。

## 4. まとめ

弘前大学人文学部日本考古学研究室が所蔵する亀ヶ岡遺跡出土の土器は、大洞 BC～A'式まで含ま



れるが、晩期中葉から後葉にかけてのもの、特に大洞 A 式と A' 式が多かった。大洞 B 式のものは含まれていない。

また、連繫入組文も多くあり、青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡・むつ市二枚橋（2）遺跡・北海道七飯町聖山遺跡などの土器に共通している。

今回実測図化を行った資料は、小岩井兼輝氏の発掘品と伝えられているが、発掘地点や層位を知ることができない。また注記も様々で「瓶子山」「亀ヶ岡」「亀ヶ岡瓶子山北側」「亀ヶ岡丘陵」などがある。

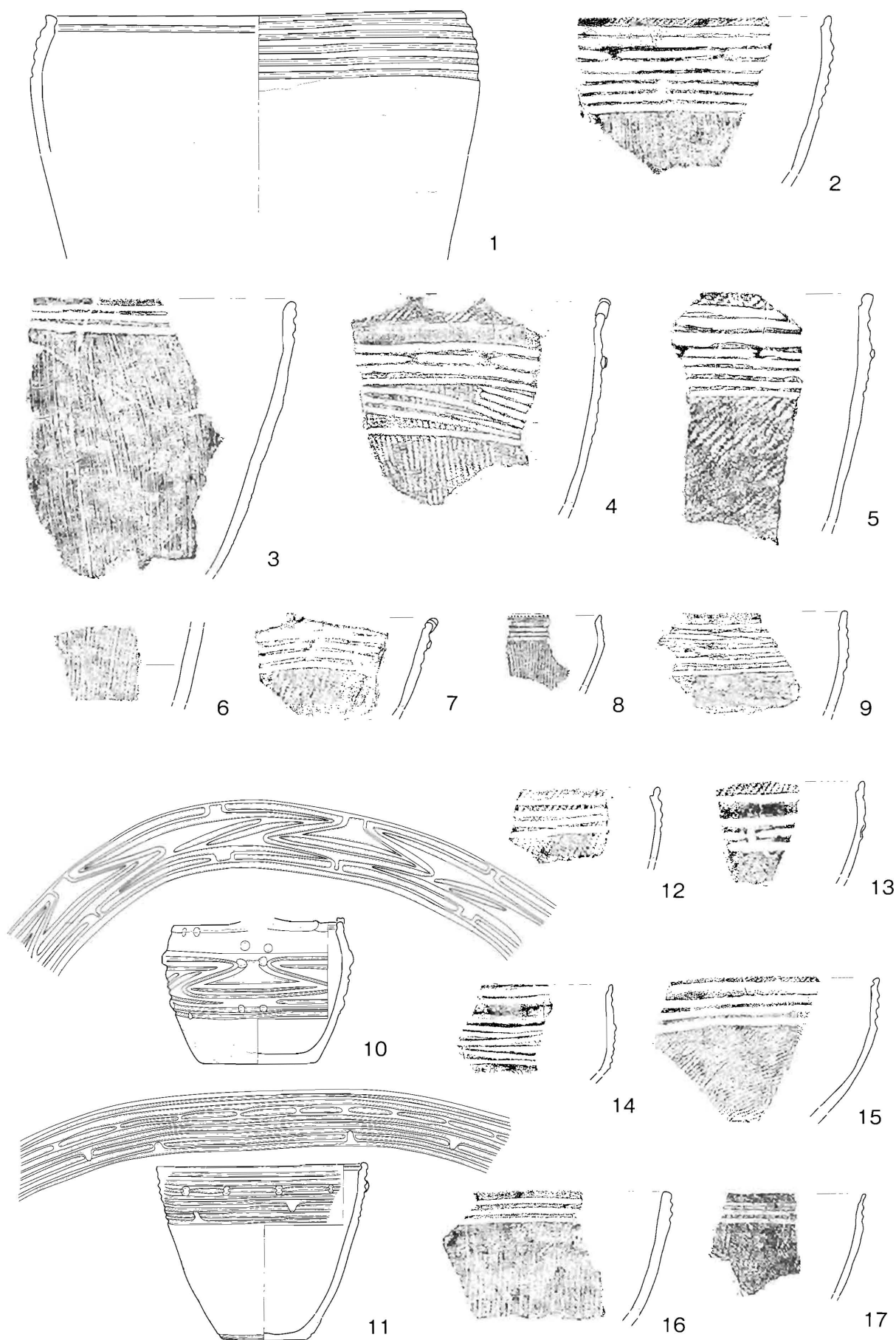
亀ヶ岡遺跡のどの地点から、どの時期の遺物が出ているのかを知るために、佐藤伝蔵・三田史学会・青森県教育委員会・青森県立郷土館の発掘調査で出土した土器、および久原コレクション、風韻堂コレクション、弘前大学所蔵品に見られる土器について、大洞 B 式～大洞 A' 式の 6 つの時期に分けて表に示した。型式が存在する時期に○、特に多く見られる型式は◎として示した。

これらを通じてわかることは、亀ヶ岡遺跡では大洞 B～A' 式の大洞諸型式がみられるが、特に多いのは大洞 C 1～A 式で、大洞 B・BC・A' 式は少ないことである。

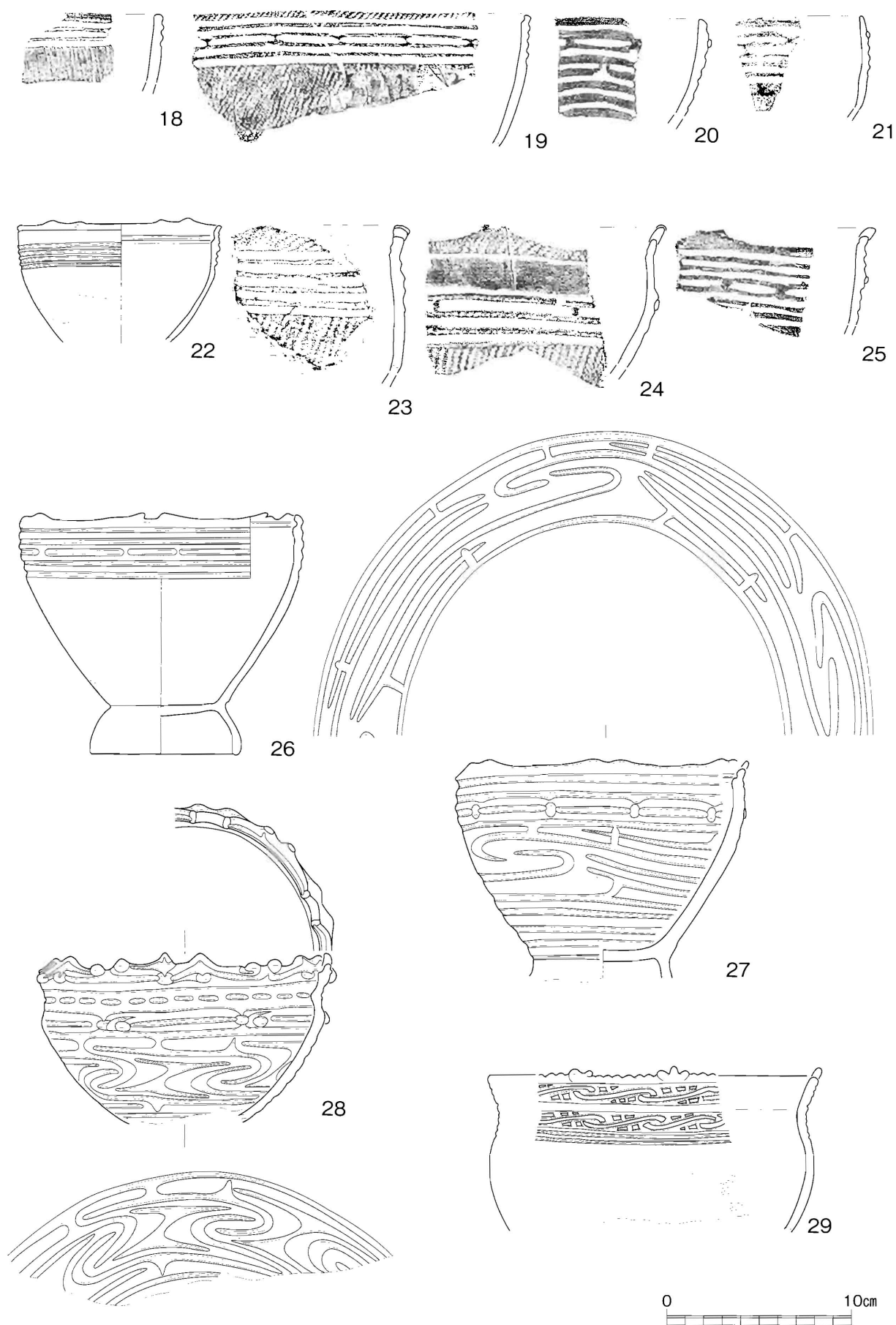
	大洞 B	大洞 BC	大洞 C1	大洞 C2	大洞 A	大洞 A'
佐藤 沢根					◎	○
佐藤 近江沢				◎		
三田 A トレンチ（沢根）		○	○	○	○	
三田 B トレンチ（沢根）				◎	○	○
三田 C 地点（近江沢）			○	○	○	
三田 D 地点（近江沢）		○	○	○	○	
教育委員会 N 区（沢根）	○	○	○	○		○
教育委員会 S 区（沢根）	○	○	○	○	○	○
郷土館 A 区（沢根）		○	◎	◎		
郷土館 B 区（沢根）			○	○	◎	○
郷土館 C 区（沢根）	○	○	◎	◎		
郷土館 D 区（沢根）	○	○	◎	○	○	○
郷土館 近江沢	○	○	○	◎	◎	○
郷土館 亀山地区		◎	◎	◎	○	
久原コレクション	○	○	◎	◎	○	○
風韻堂コレクション	○	○	◎	◎	○	○
弘大所蔵の土器		○	○	○	◎	◎

#### 〈亀ヶ岡遺跡の主要文献〉

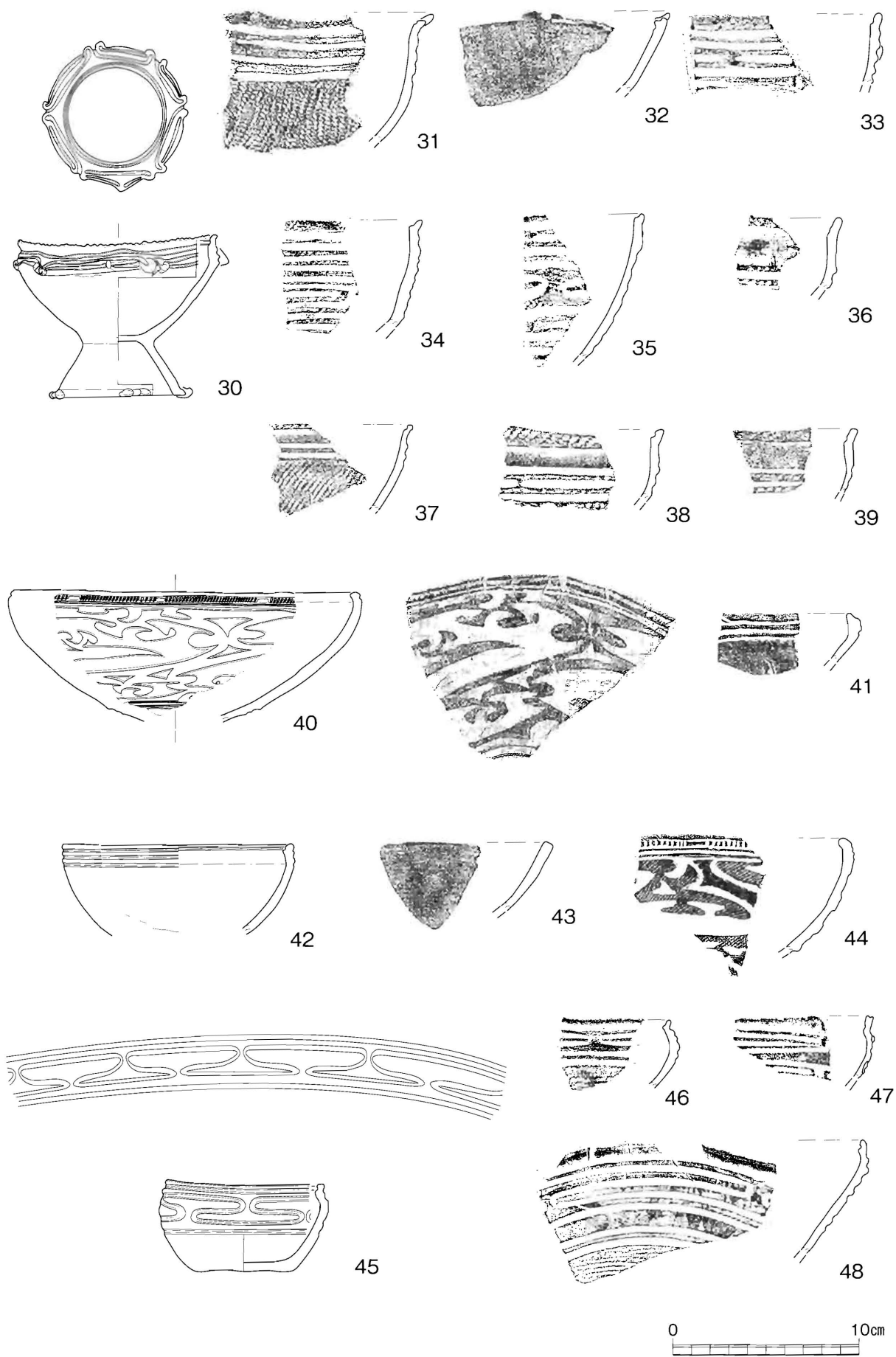
- 1889年 若林勝邦「陸奥亀岡探求記」『東洋学芸雑誌』97
- 1896年 佐藤伝蔵「陸奥亀ヶ岡発掘報告」『東京人類学雑誌』11-118
- 1896年 佐藤伝蔵「陸奥亀ヶ岡第2回発掘報告」『東京人類学雑誌』11-124
- 1896年 佐藤伝蔵「陸奥亀ヶ岡第2回発掘報告（続）」『東京人類学雑誌』11-125
- 1934年 小岩井兼輝「亀ヶ岡新石器時代遺跡と過去水準変化に就いて」『日本学術協会報告』9-2号
- 1934年 財団法人齋藤報恩会『事業年報』
- 1959年 三田史学会『亀ヶ岡遺跡－青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究－』三田史学会考古学民族学叢刊第3冊
- 1974年 青森県教育委員会『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書14
- 1982年 東北大学文学部『東北大学文学部考古学資料図録』第1・2巻
- 1983年 村越潔『亀ヶ岡式土器』考古学ライブラリー18 ニュー・サイエンス社
- 1984年 村越潔『亀ヶ岡式遺跡』考古学ライブラリー19 ニュー・サイエンス社
- 1984年 青森県立郷土館編『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告書第17集 考古—6
- 2001年 青森県立郷土館『青森県立郷土館収蔵資料図録第3集考古編（2）』



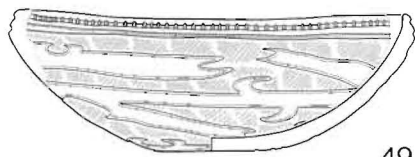
第76図 亀ヶ岡遺跡出土土器（1～17）



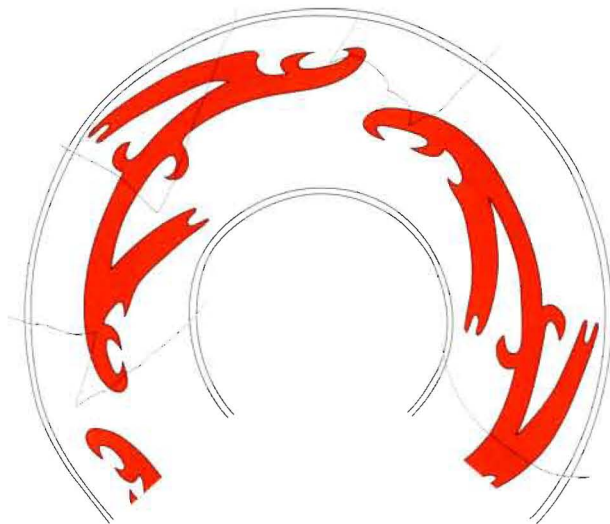
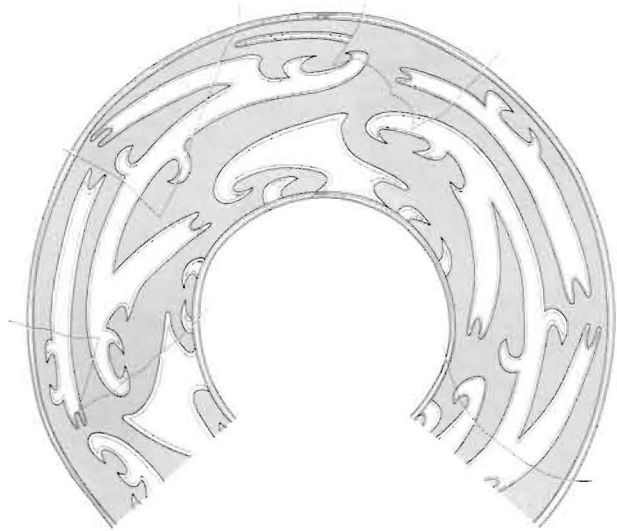
第77図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (18~29)



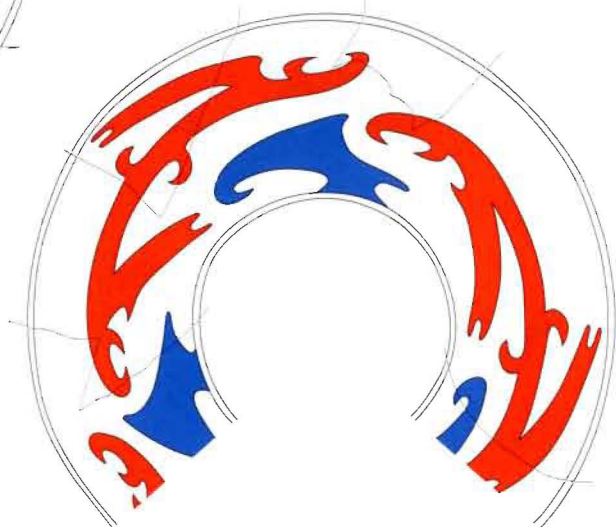
第78図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (30~48)



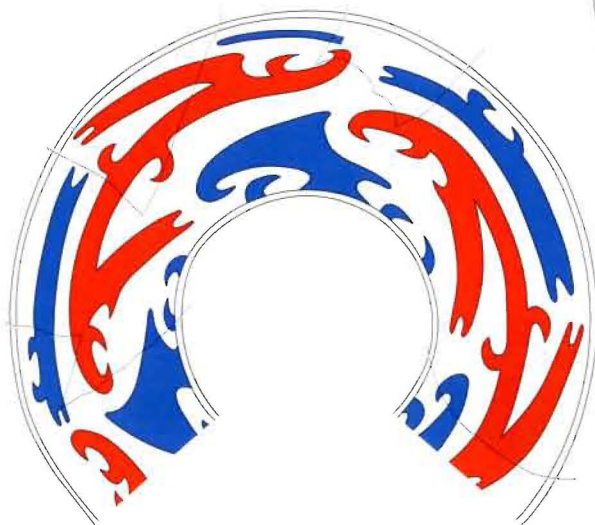
49



① 付加文のある配置文を2単位配置する。



② 大きめの充填文で隙間を埋める。

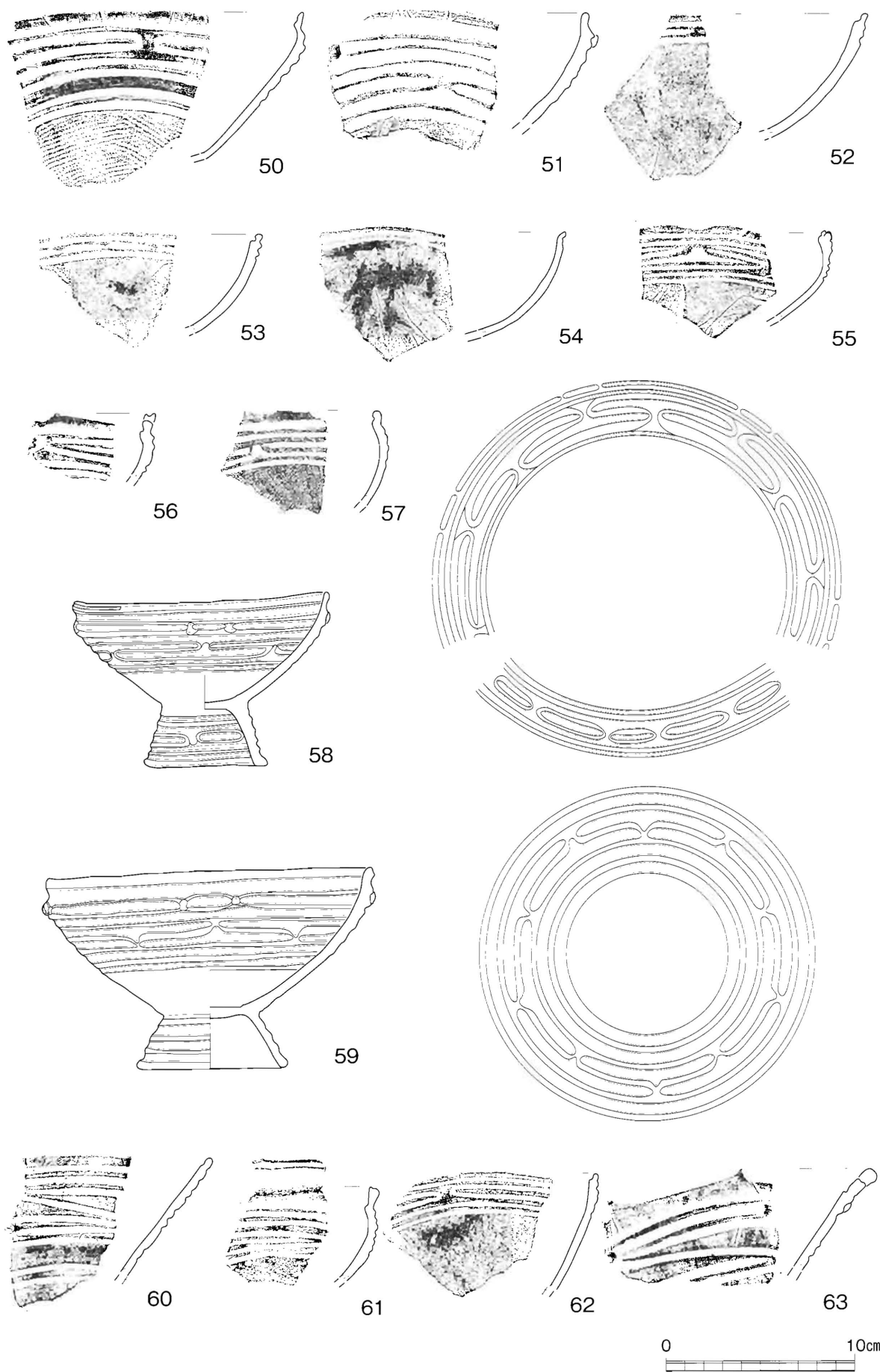


③ ①の配置文に沿う小さめの充填文とノの字状の充填文を配置して完成。

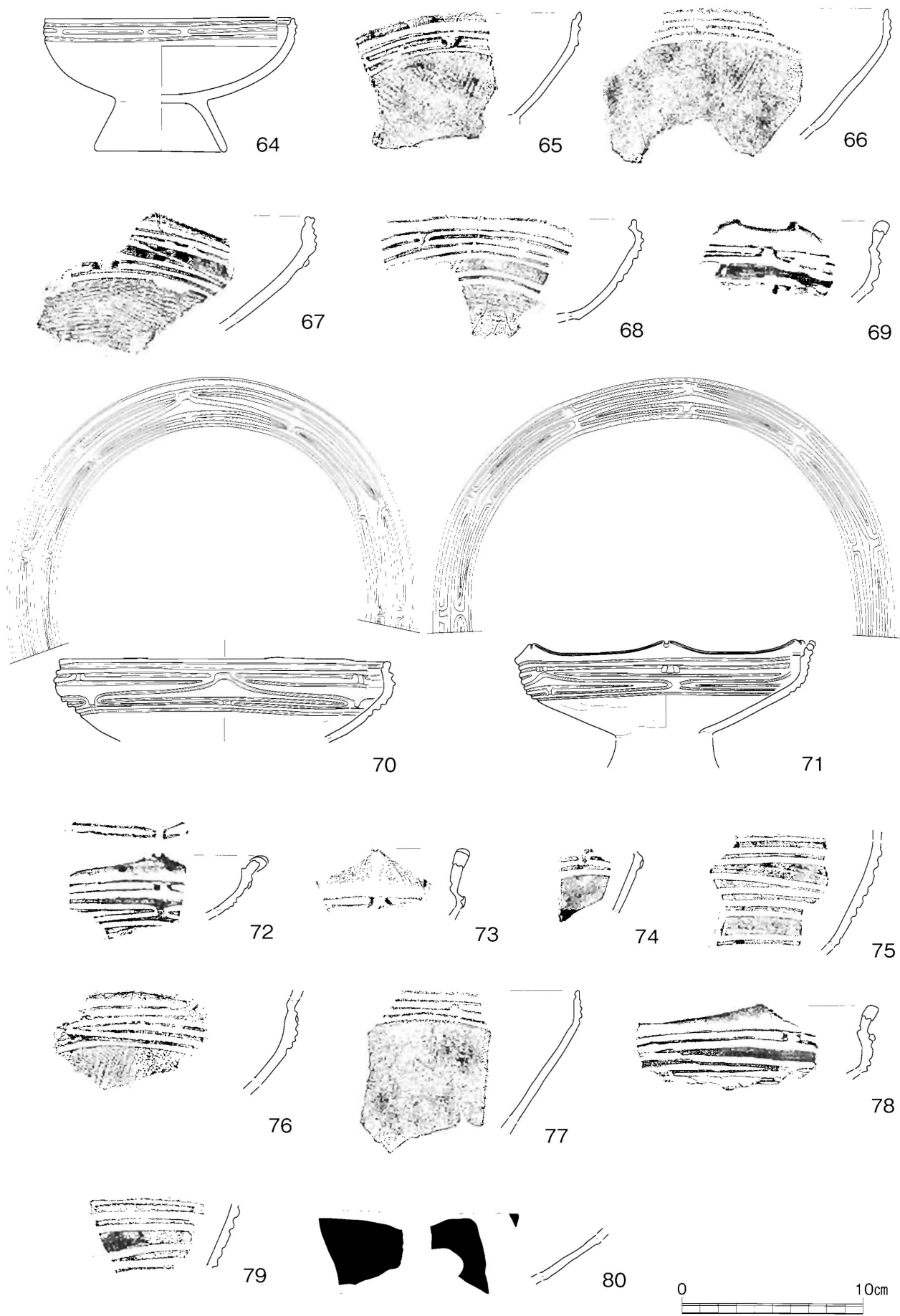


第79図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (49)

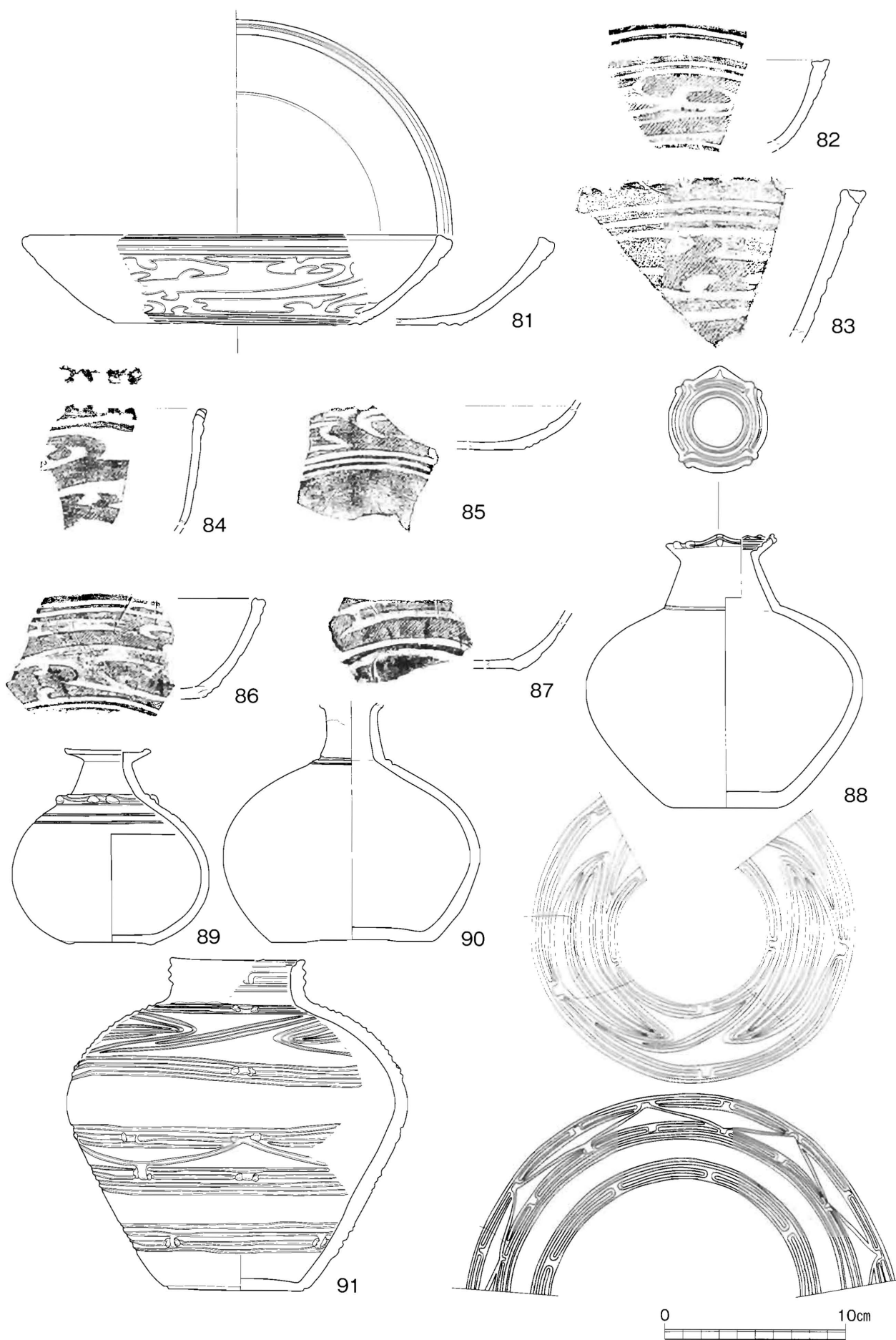




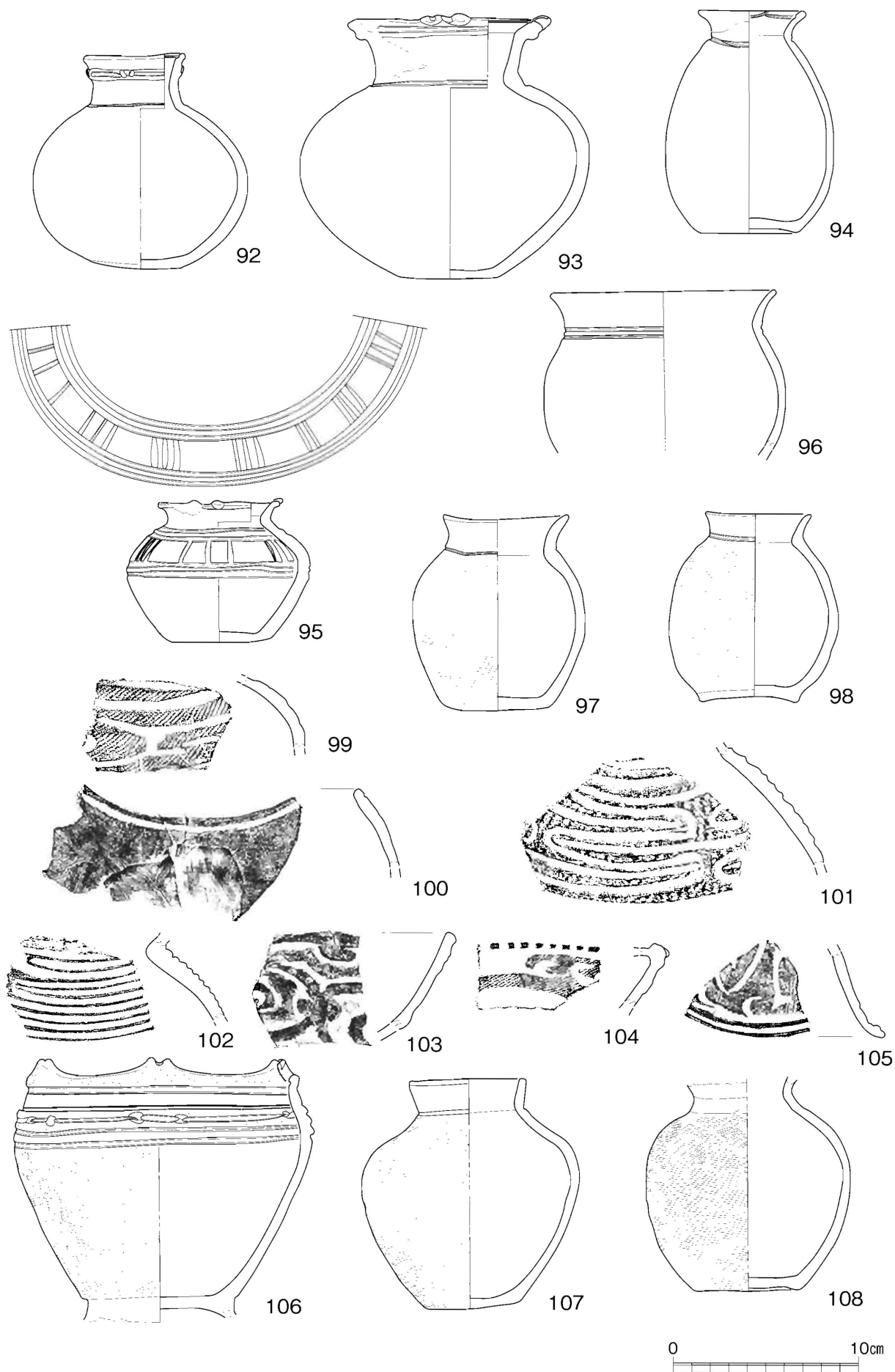
第80図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (50~63)



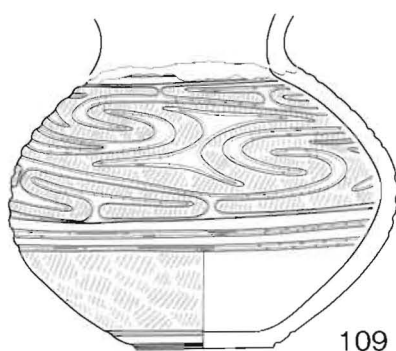
第81図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (64~80)



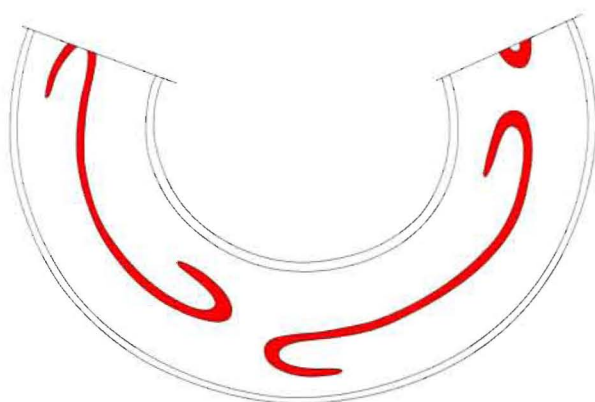
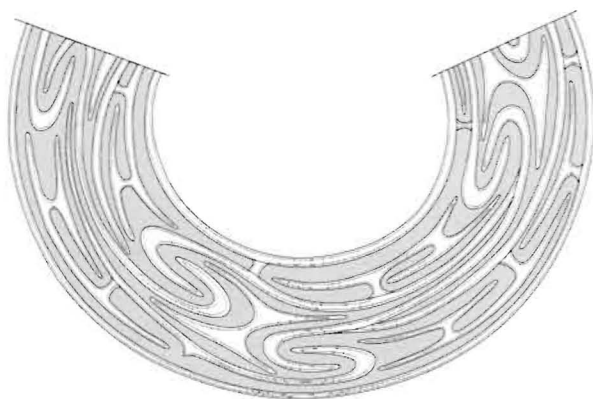
第82図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (81~91)



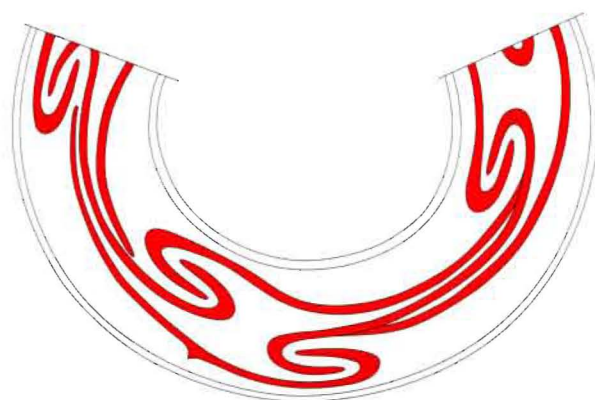
第83図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (92~108)



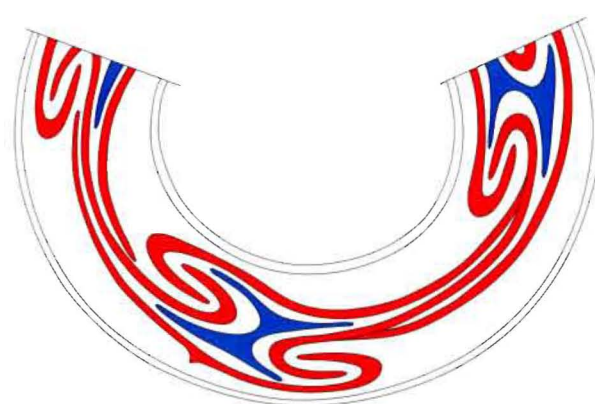
0 10cm



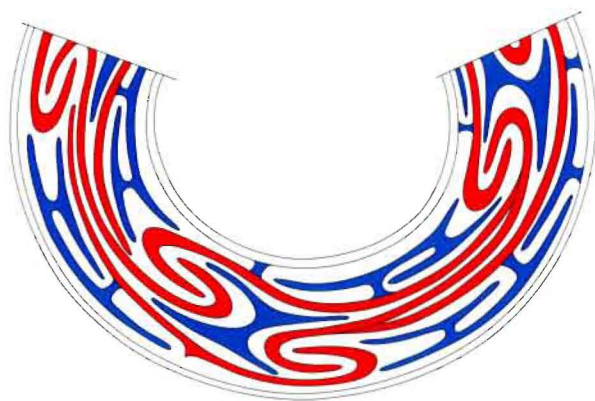
①横S字の配置文を2単位配置する。



②横S字にかみ合う文様を配置する。



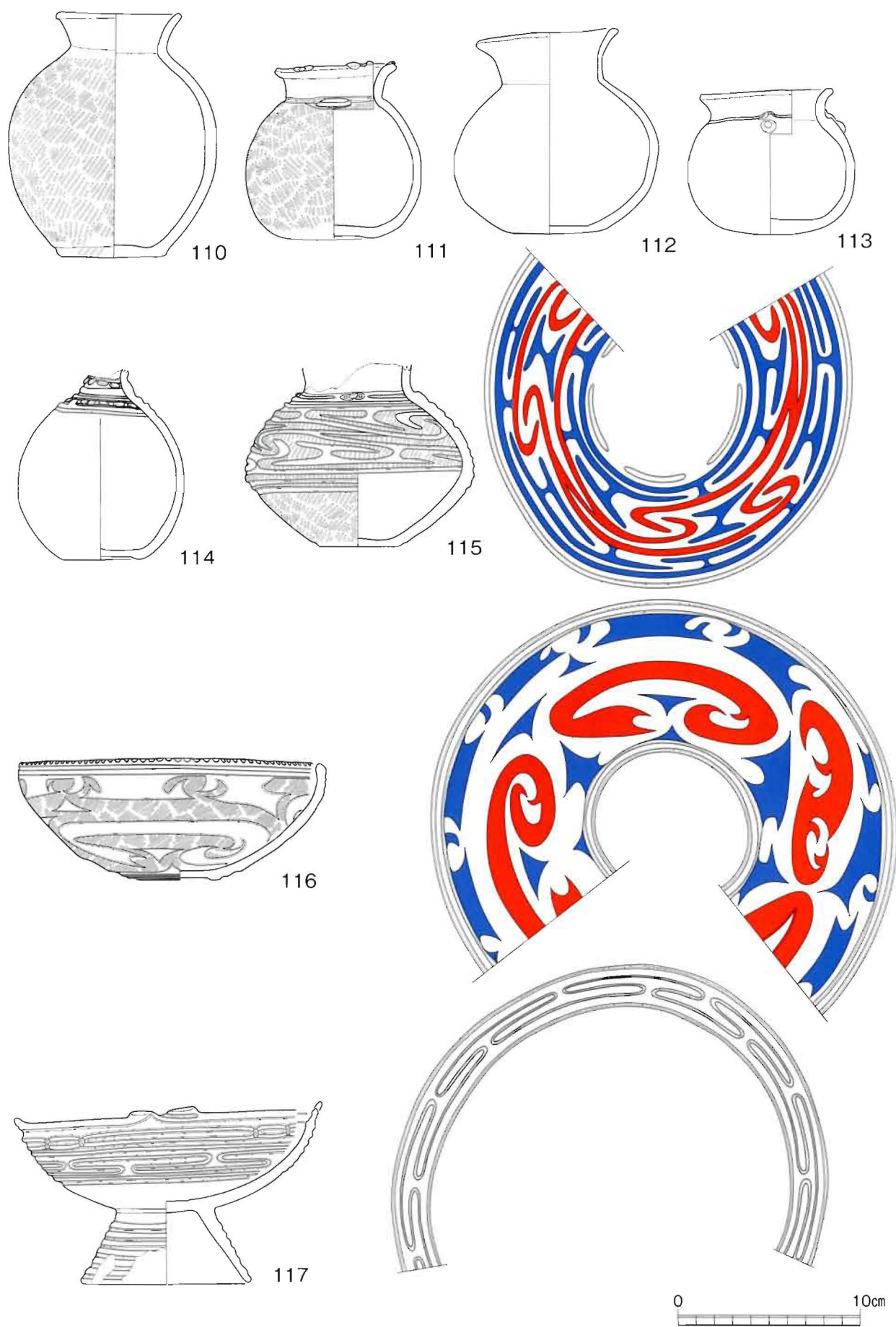
③横S字の間に工の字の充填文を配置する。



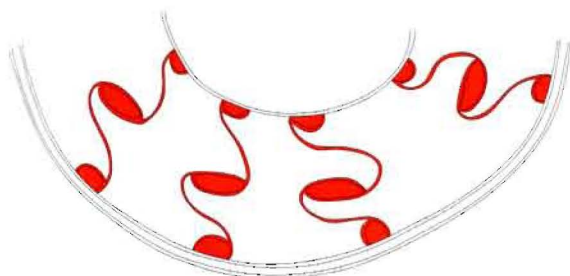
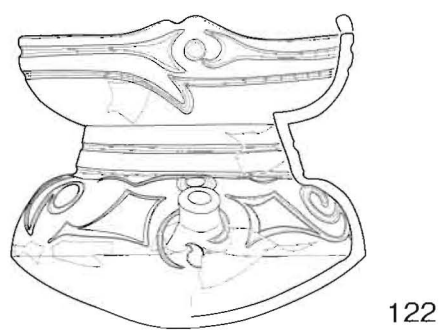
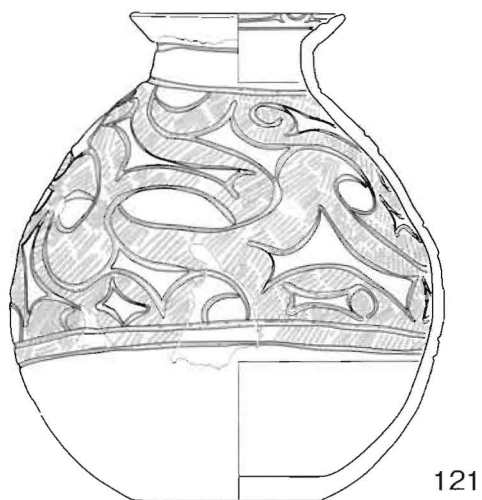
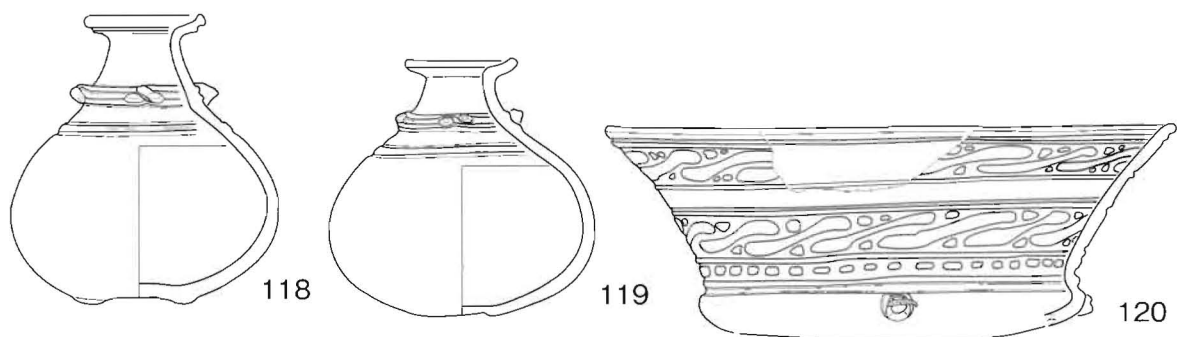
④隙間を鍋蓋状の充填文で埋めて完成。

第84図 亀ヶ岡遺跡出土土器 (109)





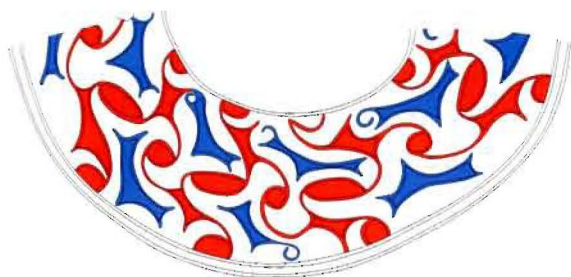
第85図 亀ヶ岡遺跡出土土器（110～115・117） 出土地不明（116）



①区画文を入れる。



②第二区画文を入れる。



③大型の充填文を入れる。



④小型の充填文を入れる。



第86図 出土地不明 (118・119) 八幡崎遺跡 (120・122) 土井I号 (121)

番号	器 種	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
1	深鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線、外面に5条の平行沈線。炭化物が付着。口径の1/2残存。	縄文LR	—	24.5
2	深鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。外面の3条目の沈線の間に眼鏡状の装飾。炭化物が付着。	条痕	—	—
3	深鉢	Ⅶ	口縁外面に3条の平行沈線。	条痕	—	—
4	深鉢	VID	口唇部に2個1対の山形突起が1単位残存。口縁内面に1条の沈線。外面の体部上端の沈線に眼鏡状の装飾。	縄文LR	—	—
5	深鉢	Ⅶ	口縁外面に8条の沈線があり、体部上端の沈線の間に眼鏡状の装飾。内面に炭化物が付着。	縄文LR	—	—
6	深鉢	I	体部破片。厚みがある。	条痕	—	—
7	鉢	Ⅶ	口唇部に突起が1単位残存。口縁内面に1条の沈線。外面の1条目の沈線に眼鏡状の装飾。	縄文LR	—	—
8	鉢	Ⅶ	口唇部に刻みがある。口縁外面に4条の平行沈線。	縄文LR	—	—
9	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。全体的に粗雑な調整である。	無	—	—
10	鉢	VIB	口唇部にA突起が1単位。頸部に無文帯。口縁部と頸部に穿孔。	縄文LR	8.0	10.5
11	鉢	VE	口縁部に8条の平行沈線。3条目の沈線に眼鏡状の装飾が11単位（うち9単位残存）。	縄文LR	9.6	10.3
12	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。粘土の継ぎ目が見える。	縄文LR	—	—
13	鉢	VD	口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
14	鉢	VID	口縁内面に1条の沈線。頸部に無文帯。	縄文LR	—	—
15	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線、外面に3条の平行沈線。内面に炭化物が付着。	縄文LR	—	—
16	鉢	Ⅶ	表面に黒い付着物が見られる。炭化物が漆かは判断できず。	条痕	—	—
17	鉢	Ⅶ	口縁外面に3条の平行沈線。内面に炭化物が付着。	縄文LR	—	—
18	鉢	Ⅶ	口縁外面に3条の平行沈線。	条痕	—	—
19	鉢	Ⅶ	口縁外面に5条の沈線があり、3条目の沈線に眼鏡状の装飾。炭化物が付着。	縄文LR	—	—
20	鉢	VE	口縁外面に7条の沈線があり、2条目の沈線に眼鏡状の装飾。赤漆が塗られている。	無	—	—
21	鉢	VD	口縁外面の1条目の沈線に眼鏡状の装飾。赤彩されている。厚さが薄い。	無	—	—
22	鉢	Ⅶ	口唇部にB突起が2単位残存。口縁内面に1条の沈線。頸部無文帯の直下に4条の平行沈線。口径の約1/2残存。	縄文LR	—	11.0
23	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線と、補修孔のような穴がある。但し貫通はしていない。	縄文LR	—	—
24	鉢	Ⅶ	口唇部に山形突起が1単位残存。口縁内面に1条の沈線。体部上端の1条目の沈線に眼鏡状の装飾。頸部に無文帯あり。	縄文LR	—	—
25	鉢	Ⅶ	口唇部に突起が1単位残存。口縁内面に1条の沈線、外面の4条目の沈線に眼鏡状の装飾。	無	—	—
26	台付鉢	Ⅶ	口唇部に2個1対の山形突起が6単位（うち3単位残存）。口縁部に5条の平行沈線、3条目の沈線に眼鏡状の装飾。	縄文LR	13.3	15.0
27	台付鉢	IV	口唇部に2個1対の山形突起が6単位（うち5単位残存）。平行沈線の3条目に眼鏡状の装飾。	縄文LR	—	15.5
28	台付鉢	IV	口唇部に2個1対の山形突起が6単位（うち3単位残存）、その間にB突起が6単位（うち2単位残存）。口縁部にB突起が6単位（うち3単位残存）、肩部にB突起が6単位（うち3単位残存）。口径の1/2残存。	縄文LR	—	16.2
29	台付鉢	Ⅱ	口唇部にB突起と3個1対の突起が見られる。外面全体に黒漆が塗られている。口径の1/6残存。	縄文LR	—	17.8
30	鉢	Ⅶ	口唇部が小波状になっている。口縁部に3条の平行沈線があり、3条目に2個1対の突起が6単位。口縁内面に1条の沈線。底部に2個1対の突起が4単位。	縄文RL	8.8	11.5

亀ヶ岡遺跡出土土器観察表（1）

番号	器 種	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
31	鉢	Ⅶ	口唇部に突起が1単位残存。口縁内面に1条の沈線。炭化物が付着。	縄文LR	—	—
32	鉢	I	口唇部に2個1対の突起が1単位残存。口縁内面に1条の沈線。内外面ともに赤漆が塗られ表面に光沢がある。	無	—	—
33	鉢	VD	口縁内面に1条の沈線。外面の3条目の沈線に眼鏡状の装飾。内面に炭化物が付着。	無	—	—
34	鉢	VA	口縁内面に1条の沈線。炭化物が付着。	縄文LR	—	—
35	鉢	VE	口縁内面に1条の沈線。炭化物が付着。沈線が浅い。	縄文LR	—	—
36	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
37	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。外面に2条の平行沈線。	縄文LR	—	—
38	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。外面の2条目の沈線に眼鏡状の装飾。	縄文LR	—	—
39	鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。外面に2条の平行沈線。	縄文LR	—	—
40	浅鉢	Ⅲ	口縁部に1条の平行沈線と細かい刻み目。外面に黒漆がところどころ付着。口径の約1/4残存。	縄文LR	—	19.2
41	浅鉢	Ⅶ	口縁部に3条の平行沈線。内外面に赤漆が塗られている。	無	—	—
42	浅鉢	Ⅶ	口縁外面に3条の平行沈線。内面に1条の沈線。	無	—	12.7
43	浅鉢	I	内外面ともに赤漆が塗られている。	無	—	—
44	浅鉢	Ⅲ	口縁部に刻みが施されている。内外面ともに黒漆が塗られている。	縄文LR	—	—
45	浅鉢	VC	口縁内面に1条の沈線、外面に2条の平行沈線。	無	4.9	9.2
46	台付浅鉢	VC	口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
47	台付浅鉢	VIA	口唇部と口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
48	台付浅鉢	VC	口縁内面に1条の沈線。表面がよく磨かれている。	縄文LR	—	—
49	浅鉢	Ⅲ	口縁外面に細かい刺突。刺突の下に1条の沈線。内外面ともに赤漆が塗られている。	縄文LR	5.3	16.4
50	台付浅鉢	VC	口縁内面に1条の沈線。内外面ともによく磨かれ光沢がある。	縄文LR	—	—
51	台付浅鉢	VB	表面がよく磨かれ光沢がある。外面の1条目の沈線に突起が1単位残存。	無	—	—
52	台付浅鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。外面の2条目の沈線に眼鏡状の装飾あり。	無	—	—
53	台付浅鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。外面の2条目の沈線に眼鏡状の装飾あり。	無	—	—
54	台付浅鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。外面に2条の平行沈線。	無	—	—
55	台付浅鉢	VIB	口唇部に1条の沈線。口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
56	台付浅鉢	VIA	口唇部に波状突起と1条の沈線。ところどころに朱が残っている。	無	—	—
57	台付浅鉢	VA	口縁内面に1条の沈線。外面に赤い付着物が見られる。	縄文RL	—	—
58	台付浅鉢	VA	口唇直下に短沈線（一部のみ）、その下に6条の平行沈線。3条目の沈線内に2個1対の突起が4単位。青森県立郷土館所蔵。	無	10.0	13.5
59	台付浅鉢	VB	外面に7条の平行沈線があり、2条目の沈線に2個1対の突起が4単位。台部に3条の平行沈線。	無	10.4	17.7
60	台付浅鉢	VIA	口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
61	台付浅鉢	VID	口唇部に1条の沈線。口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
62	台付浅鉢	VC	口縁内面に1条の沈線。表面がよく磨かれ、光沢がある。	無	—	—
63	台付浅鉢	VIA	口唇部に波状突起が2単位残存、1条の沈線。口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
64	台付浅鉢	Ⅶ	口縁内面に1条の沈線。	無	7.3	14.0
65	台付浅鉢	VA	口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
66	台付浅鉢	VA	口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
67	台付浅鉢	VIA	口唇部に1条の沈線。口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
68	台付浅鉢	VC	口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
69	台付浅鉢	VID	口唇部に波状突起が2単位残存。口唇部と口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
70	台付浅鉢	VIA	口縁内面に1条の沈線。口径の約1/3残存。	無	—	19.0

亀ヶ岡遺跡出土土器観察表（2）

番号	器 種	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
71	台付浅鉢	VIA	口唇部に山形突起が6単位。口縁外面の2条目の沈線に2個1対の突起が6単位。口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	13.0
72	台付浅鉢	VIA	口唇部に波状突起が1単位残存、1条の沈線。口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
73	台付浅鉢	VID	口唇部に波状突起が1単位残存。口唇部と口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
74	浅鉢	VC	表面がよく磨かれている。	無	—	—
75	浅鉢	VID	表面がよく磨かれている。	無	—	—
76	台付浅鉢	VIA	口縁内面に1条の沈線。口縁部から突起周辺にかけて赤彩の跡。	縄文LR	—	—
77	浅鉢	VA	口縁内面に1条の沈線。	無	—	—
78	台付浅鉢	VID	口唇部に波状突起が1単位残存。口唇と口縁内面に1条の沈線。口唇部と口縁部に赤彩が残っている。	無	—	—
79	浅鉢	VID	表面がよく磨かれている。	無	—	—
80	浅鉢	VIII	黒漆と赤漆の彩文。	無	—	—
81	皿	III	口唇部と口縁部に1条の沈線。底部に1条の沈線。黒漆が付着。口径の約1/4残存。	縄文LR	5.0	24.0
82	皿	III	口唇部と口縁内面に1条の沈線。	縄文LR	—	—
83	皿	III	口唇部に三角形の彫り込み。口縁内面に1条の沈線。黒漆が付着している。	縄文LR	—	—
84	皿	III	口唇部に三角形の彫り込み。内外面とも黒漆が塗られている。	縄文LR	—	—
85	皿	III	体部と底部の境目に3条の平行沈線。内外面に赤漆が塗られているが剥げ落ちている部分がある。	縄文LR	—	—
86	皿	III	口唇部に1条の沈線。内外面に赤漆が塗られている。	縄文LR	—	—
87	皿	III	底部に1条の沈線。内外面に赤漆が塗られている。	縄文LR	—	—
88	壺	I	口唇部に山形状の突起が1単位、2個1対の突起が4単位。口唇内面に沈線による装飾あり。口唇部に突起を作り出すための沈線が1条。頸部と体部の境目に1条の沈線。	無	15.2	15.7
89	壺	I	体部上端に隆帯が2本あり、その間に2個1対の突起が4単位。体部に2条の沈線。底部は脚付きになっている。表面全体に赤漆が塗られている。	無	10.8	11.0
90	壺	I	頸部と体部の境目に1条の隆帯。	無	—	14.3
91	壺	VIA・VIC	口縁内面に1条の沈線。口縁外面に3条の平行沈線があり、2条目の沈線内に2個1対の突起が4単位。文様帯が3段になっている。	無	18.7	18.9
92	壺	I	口縁部に2本の隆帯があり、間に2個1対の突起が4単位。口縁内面に1条の沈線。	無	11.6	11.6
93	壺	I	口唇部に2個1対の突起が4単位。口縁部に1条の沈線。頸部と体部の境目に1条の沈線。	無	14.2	15.8
94	壺	I	頸部と体部の境目に1条の沈線。口縁内面に1条の沈線。	無	12.1	9.1
95	壺	VIII	口唇部に2個1対の突起が2単位。体部の平行沈線間に縦の短沈線が施される。	縄文RL	7.6	10.0
96	壺	I	頸部と体部の境目に2条の平行沈線。表面に黒漆が塗られている。	無	—	13.1
97	壺	I	頸部と体部の境目に1条の沈線。	縄文RL	10.6	9.2
98	壺	I	頸部と体部の境目に1条の沈線。	縄文LR	10.2	9.2
99	壺	IV	全体的に白っぽい色調。	縄文LR	—	—
100	壺	I	口縁外面に1条の沈線。内外面とも赤漆が塗られている。無頸壺か。	無	—	—
101	壺	VC	肩から上の破片。破片の大きさや厚さから大型の壺と予測される。	縄文LR	—	—
102	壺	VID	肩から上の破片。厚みがある。	無	—	—
103	注口	III	内外面ともに赤漆が塗られている。	無	—	—
104	注口	III	外面に黒漆が塗られる。肩の部分に装飾がある。	縄文LR	—	—
105	台部	VIII	台部破片。内外面ともに黒漆が塗られる。透かし見られる。	無	—	—

亀ヶ岡遺跡出土土器観察表（3）

番号	器 種	文 様	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
106	鉢	Ⅶ	口唇部に山形突起が6単位。口縁部に無文帯、その下に3条の平行沈線があり、1条目の沈線に2個1対の突起が6単位。外面に少量、内面に多量の炭化物が付着。	縄文LR	－	16.2
107	壺	I	頸部と体部の境目に1条の沈線。	縄文LR	12.6	11.8
108	壺	I	底部は上げ底である。	縄文RL	－	11.1
109	壺	Ⅳ	頸部に1条の沈線。文様帯の下、及び底部に2条の沈線。	縄文LR	－	15.3
110	壺	I	文様・装飾ともに無し。	縄文LR	13.4	11.3
111	壺	I	口唇部に突起が2単位。口縁部に1条の沈線（1部2本）と突起1単位。	縄文RL	9.9	9.7
112	壺	I	わずかに赤彩が残る。黒斑あり。	無	11.3	11.3
113	壺	I	頸部と体部の境目に1条の沈線（沈線の間に盛り上げによる突起とその下に貼り付けによる突起がある）。	無	8.0	9.3
114	壺	I	口唇部が欠損しており、その直下と思われる部分に列点が1列。頸部と体部の境目に列点が1列。表面全体に赤漆が塗られている。	無	－	9.2
115	壺	Ⅳ	頸部と体部の境目に1条の沈線と突起4単位。文様帯の下に2条の平行沈線。底部に段による作り出し。	縄文LR	－	12.6
116	浅鉢	Ⅲ	口唇部に刻み目。口縁部に1条の沈線。底部に段による作り出し。磨滅が激しいが、漆が塗ってあったと思われる。出土地不明。	縄文LR	6.8	15.7
117	台付浅鉢	V A	口唇部に2個1対の突起が4単位（うち2単位欠損）。体部に8条の平行沈線があり、2条目の沈線に眼鏡状の装飾。台部に6条の平行沈線。	無	9.5	16.1
118	壺	I	体部上端に2個1対の突起が4単位。体部上半に1条の隆帯があり、縄文が施されている。底部は脚付きになっている。内外面とも赤漆と黒漆が塗られている。出土地不明。	無	10.4	10.6
119	壺	I	体部上端に2個1対の突起が4単位（うち1単位欠損）。体部上半に1条の隆帯がある。表面全体に赤漆が塗られている。出土地不明。	無	10.2	10.6
120	浅鉢	Ⅱ	底部付近中央に突起がある。文様帯が2段になっている。八幡崎遺跡出土。	無	11.6	22.7
121	壺	菱形文	口縁内面に沈線による装飾。口縁部と頸部の境目、及び頸部と体部の境目に1条の沈線。文様帯の下に2条の平行沈線。五角形文が充填される。赤彩されている。土井I号遺跡出土。	縄文LR	19.6	17.3
122	注口	三叉文	口縁部に3つの連なった山形突起。高師小僧が付着。八幡崎遺跡出土。	無	12.6	14.1

亀ヶ岡遺跡出土土器観察表（4）



## VI. 主な参考文献

- 1928年 杉山寿栄男『日本原始工芸』、工芸美術研究会
- 1928年 杉山寿栄男『日本原始工芸概説』、工芸美術研究会
- 1930年 山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1-3、東京考古学会
- 1935年 中谷治宇二郎『日本先史学序史』、岩波書店
- 1939年 山内清男『日本遠古之文化』、先史考古学会
- 1954年 清野謙次『日本考古学・人類学史』、岩波書店
- 1960年 芹沢長介『石器時代の日本』、築地書館
- 1964年 山内清男「日本先史時代概説」『日本原始美術』1、講談社
- 1968年 村越潔ほか編『岩木山』、岩木山刊行会
- 1972年 保坂三郎編『是川遺跡出土遺物報告書』、八戸市教育委員会
- 1975・1984～1992年 新谷雄蔵『観音林遺跡―第一～十次発掘調査報告書』、五所川原市教育委員会
- 1979年 吉崎昌一ほか編『聖山』、北海道大学教養部人類学研究室
- 1979年 芹沢長介編『峠下聖山遺跡』、東北大学文学部考古学研究会
- 1981年 藤沼邦彦「縄文晩期の土器―東北地方―」『縄文土器大成』4、講談社
- 1981年 林謙作「縄文晩期の土器―北海道―」『縄文土器大成』4、講談社
- 1981年 飯島義雄「仮称「連繫入組文」と「横位連続工字文」について」『考古風土記』6
- 1981年 高橋龍三郎「亀ヶ岡式土器の研究―青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について」『北奥古代文化』12、北奥古代文化研究会
- 1983年 村越潔『亀ヶ岡式土器』考古学ライブラリー18、ニュー・サイエンス社
- 1983年 新谷雄蔵・川村真一『五月女菰遺跡』、市浦村教育委員会
- 1984年 村越潔『亀ヶ岡式遺跡』考古学ライブラリー19、ニュー・サイエンス社
- 1984年 十和田市教育委員会編『明戸遺跡発掘調査報告書』
- 1985年 野村崇『北海道縄文時代終末期の研究』、みやま書房
- 1989年 藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器の文様の描き方―雲形文を中心に―」『考古学論叢』Ⅱ
- 1989年 飯島義雄「体部文様からみた聖山式土器」『考古学論叢』Ⅱ
- 1989年 藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観』4、小学館
- 1990年 青森県埋蔵文化財調査センター編『北の誇り・亀ヶ岡文化』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③、青森県教育委員会
- 1993年 高橋龍三郎「大洞 C2式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』4、先史学研究会
- 1993年 工藤泰博『土井Ⅰ号遺跡』、板柳町教育委員会
- 1994年 藤沼邦彦「文様の描き方―亀ヶ岡式土器の雲形文の場合―」『縄文文化の研究』5、雄山閣
- 1995年 葛西勲編『宇鉄遺跡発掘調査報告書』、三厩村教育委員会
- 1995年 高田和徳・中村明央『山井遺跡』一戸町文化財調査報告書第36集
- 1995年 笹森一郎・齋藤岳『千刈（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第174集、青森県教育委員会
- 1995年 鈴木克彦「亀ヶ岡式土器の器形・器形組成から見た地域性」『北海道考古学』31
- 1996年 葛西勲・高橋潤・児玉大成編『宇鉄遺跡発掘調査報告書』、三厩村教育委員会
- 1996年 福田正宏「聖山式土器再考のための諸問題」『史鏡』33、歴史人類学会
- 1998年 須藤隆『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究―縄文から弥生へ―』、纂修堂

- 1998年 シンポジウム「聖山以後の渡島半島」実行委員会編『シンポジウム「聖山以後の渡島半島」資料集』、同実行委員会
- 1998年 福田正宏「亀ヶ岡式土器における入組文のゆくえ」『物質文化』63、物質文化研究会
- 1998年 青森県教育委員会編『青森県遺跡地図』
- 2000年 福田正宏「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』108、早稲田大学考古学会
- 2000年 秋田県教育委員会『戸平川遺跡』秋田県文化財調査報告書第294集
- 2001年 橘善光・奈良正義編『二枚橋（2）遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財報告書12集
- 2001年 国立歴史民俗博物館編『落合計策縄文時代遺物コレクション』国立歴史民俗博物館資料図録1
- 2002年 宇部則保ほか編『是川中居遺跡－長田沢地区』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第2集
- 2002年 工藤竹久「縄文後期・晩期の煮炊き用小型土器」『海と考古学とロマン』、同刊行会事務局
- 2003年 小林圭一「東北北半における縄文晩期前葉の注口土器」『研究紀要 創刊号』、財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 2004年 秋田県教育委員会『向様田 A 遺跡 遺物編』秋田県文化財調査報告書第370集
- 2004年 藤沼邦彦・蔦川貴祥・小向良・向出博之編『亀ヶ岡文化遺物実測図集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告1
- 2005年 秋田県教育委員会編『向様田 D 遺跡』秋田県文化財調査報告書第392集
- 2005年 藤沼邦彦・関根達人・蔦川貴祥・小向良・向出博之・深見嶺・横山寛剛・秋山真吾編『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告2
- 2006年 藤沼邦彦・小川忠博編『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』（弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3）、亀ヶ岡文化研究センター

## 亀ヶ岡文化遺物実測図集（2）

（弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4）

2006年3月31日発行

編集 藤沼邦彦・横山寛剛・秋山真吾

発行 弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

（弘前大学人文学部日本考古学研究室）

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番

電話 0172-36-2111（代表）

印刷 川口印刷工業（株） 青森営業所

〒030-0963 青森県青森市中佃2-21-4

TEL 017-744-0003